創立四十周年記念誌

東雲燦々

千葉県立千葉東高等学校

シャロンの花(写真家・善養寺康之氏がシャロンの地で撮影)

われはシャロンの野花、谷の百合花なり。女子等の中にわが佳偶のあるは荊棘の中に百合花のあるがごとし。わが愛する者の男子等の中にあるは林の樹の中に林檎のあるがごとし。我ふかく喜びてその蔭にすわれり。その実はわが口に甘かりき。(旧約聖書　雅歌　第2章の1～3)

〈シャロンはイスラエル西部の比較的肥沃な平野部の地名〉

歴代校長

2代　楠原　信一
（昭和20年～22年）

初代　瀧　熊之助
（昭和16年～20年）

5代　石毛　貞雄
（昭和34年～40年）

4代　諸川　芳雄
（昭和24年～34年）

3代　親泊　朝晋
（昭和22年～24年）

8代　村田泰次郎
（昭和44年～47年）

7代　澤田　繁二
（昭和42年～44年）

6代　内藤　貴一
（昭和40年～42年）

11代　須田　義男
（昭和56年～現在）

10代　相川　勝衛
（昭和53年～56年）

9代　畠山　一郎
（昭和47年～53年）

正門・通学路・椿並木・テニスコート
（昭和56年）

通学路・植込み
（昭和56年）

装いも新たに

校舎施設整備5ヶ年計画

通信教育棟
（昭和55年）
県木（槙）・校木（月桂樹）
（昭和56年）

狭い校地を有効に

グランド拡張整備
（昭和56年）

バックネット改築
防球ネット新設
（昭和56年）

テニスコート新設
（昭和56年）

西　中　庭
（昭和56年）
正確な八方位と多目的舞台
に夢がある

運動部室棟
（昭和54年）

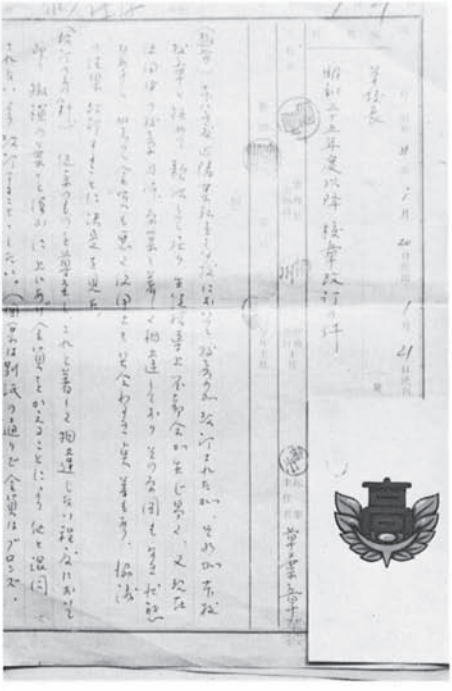
プール全景
（昭和43年）

昭和25年頃の本校全景

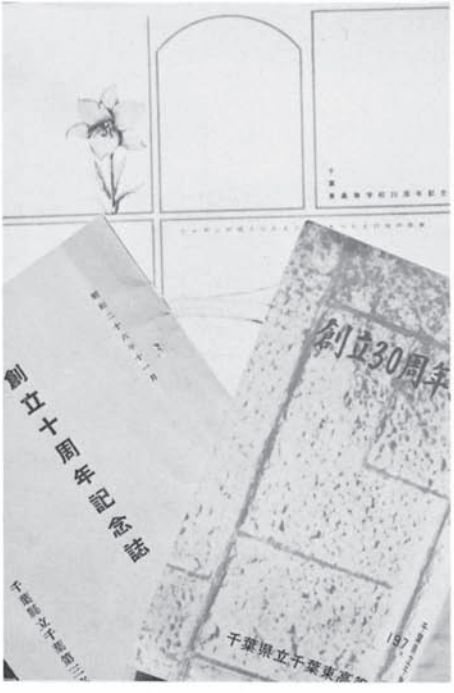
正面旧通学路(上；昭和48年頃　右；53年頃)

往時の東高

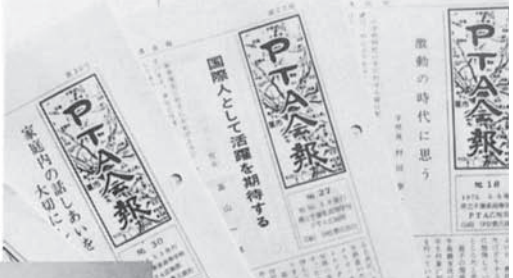
黄昏時の旧正門



校章改訂(昭和35年)

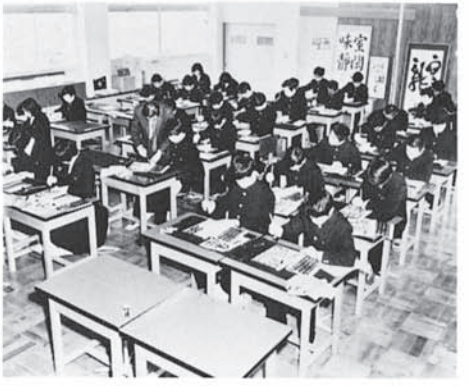


ふしぶしの10年



父母と手を携えて

学園点描

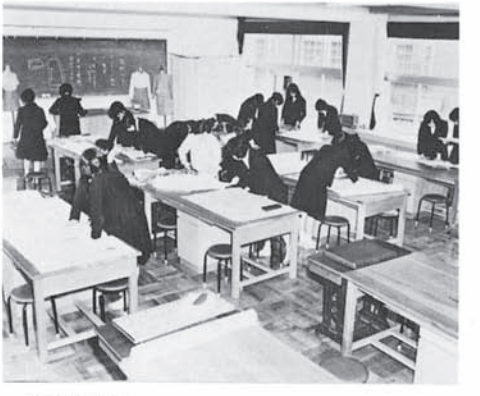


書　　道

体育館授業

化学実験

美　　術



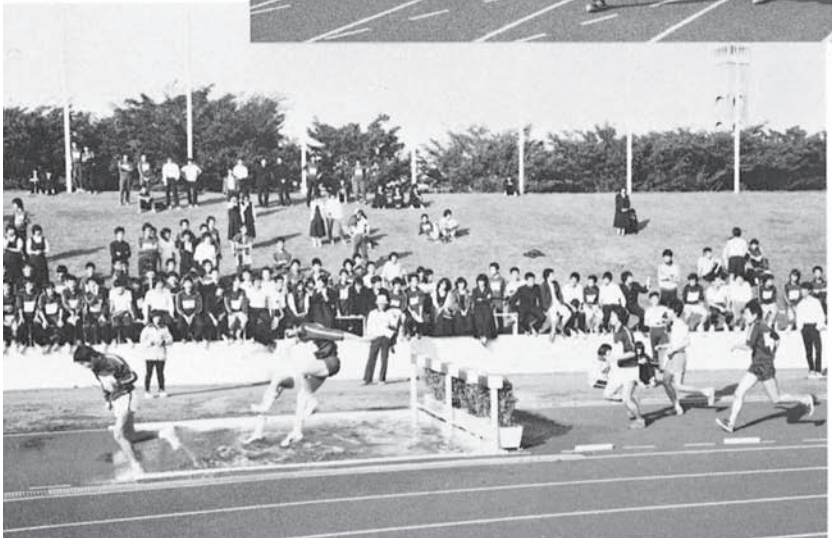
家庭科被服

看護実習

物　　理

生　　物

▲◀ 陸上競技大会
（天台スポーツセンター）



創立四十周年記念式典

（昭和五十六年十一月四日）

沼田県知事祝辞

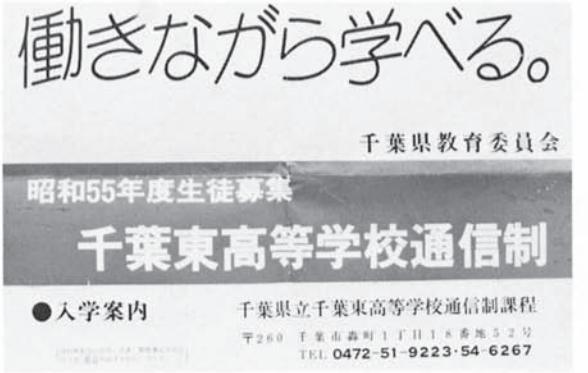
須田校長式辞

記念学園歌「太陽の光の中で」発表

来賓の方々

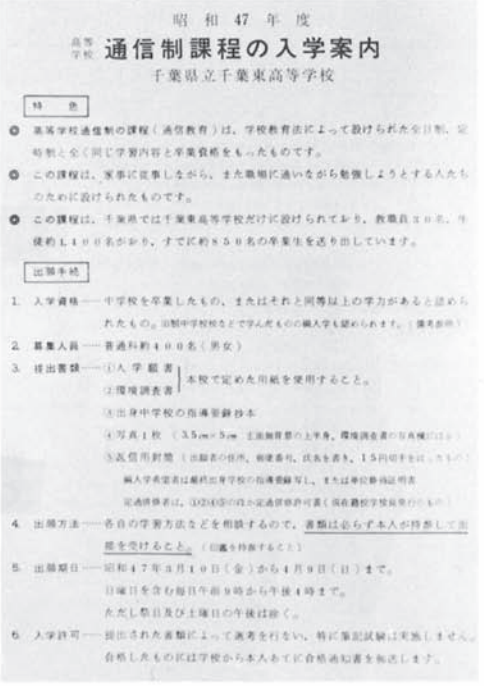
記念祝宴

かつてのポスター



入学案内ポスター

通　信　制



昭和47年度

高等学校 **通信制課程の入学案内**

千葉県立千葉東高等学校

特　色

- 高等学校通信制の課程（通信教育）は、学校教育法によって設けられた全日制、定時制と全く同じ学習内容と卒業資格をもったものです。
- この課程は、家事に従事しながら、また職場に通いながら勉強しようとする人たちのために設けられたものです。
- この課程は、千葉県では千葉東高等学校だけに設けられており、教職員30名、生徒約1,400名があり、すでに約850名の卒業生を送り出しています。

出願手続

1. 入学資格――中学校を卒業したもの、またはそれと同等以上の学力があると認められたもの。出願中学校校などで学んだものの編入学も認められます。（備考参照）
2. 募集人員――普通科約400名（男女）
3. 提出書類――①入学願書 ②環境調査書 ｝本校で定めた用紙を使用すること。
   ③出身中学校の指導要録抄本
   ④写真1枚（3.5cm×5cm 主面側背景の上半身、環境調査書の写真欄には）
   ⑤返信用封筒（出願者の住所、郵便番号、氏名を書き、15円切手を貼ったもの）
   編入学希望者は最終出身学校の指導要録写し、または単位修得証明書
   定通併修者は、①②④⑤のほか定通併修許可書（現在籍校学校長発行のもの）
4. 出願方法――各自の学習方法などを相談するので、書類は必らず本人が持参して出願を受けること。（印鑑を持参すること）
5. 出願期日――昭和47年3月10日（金）から4月9日（日）まで。
   日曜日を含む毎日午前9時から午後4時まで。
   ただし祭日及び土曜日の午後は除く。
6. 入学許可――提出された書類によって選考を行ない、特に筆記試験は実施しません。
   合格したものには学校から本人あてに合格通知書を郵送します。

10年前の入学案内

昭和56年度

通信制課程入学案内

千葉県立千葉東高等学校

特　色

- 高等学校の通信制の課程は、全日制や定時制と全く同じ卒業資格をもち、職場や家事などの都合で毎日通学できない人たちのために設けられた課程です。
- 卒業は4年間でできますが、仕事や家庭等の事情によりそれ以上の年数をかけて学習計画を立てながら修学することもできます。
- 県内の公立高校では本校だけに設けられており、教職員30名、生徒は15歳の若者から一般社会人にいたるまで1,138名が在学しています。そしてすでに2,772名もの卒業生を送り出しています。

入学案内

現在の「東高通信」はかつて「連絡通信」と称した

現在の「雑草」はかつて「東高通信」と称した

御殿場合宿の富士登山

合宿研修

職員。後方かつての玄関

スクーリング風景

船橋学習会

体育祭　仮装

卒業生を送る会

昭和47年度通信制職員（現在まで在職は１人）

通信制現職員

東雲無窮

——創立四十周年記念誌刊行によせて——

校長　須田　義男

本校が地域社会の要望をにない、千葉市立千葉高等女学校として、港町の寒川小学校跡地の仮校舎に産声をあげたのは昭和十六年でありました。この年は太平洋戦争突入の年であり、それは同時に、以後本校がたどってきた苦難の歩みと試練の運命を予告していたとも言えます。校舎の建築も思うにまかせない中での授業は、まさに想像を絶するものがあったと思います。

敗戦後の混乱が続く中で、学制改革により千葉市立女子高等学校と名称が変わり、現在の地、旧軍隊の建物に移転し、昭和二十五年県立移管により、男女共学の千葉県立千葉第三高等学校となったのですが、この年はいわば本校の第二の誕生の年と申してよいかと思います。その後昭和三十六年には千葉県立千葉東高等学校と改称され、すでに昭和二十九年に併置されていた通信制課程に加え、昭和四十一年には衛生看護科の設置をみて、ここに現在みる本校の全容が整ったと言えます。

以来、先輩各位、地域社会の深いご理解とご尽力によって、年々隆盛発展の道を歩み、名実ともに県下に誇る千葉東高校となったのであります。

さて、十年前の昭和四十六年十一月二日、本校は創立三十周年を迎え、現校舎の新築落成とあわせて記念式典

を挙行しました。その際記念行事の一環として、「創立三十周年記念誌」が刊行され、創立以来三十年間の足跡が余すところなく集録され、多くの関係者に供覧されました。その中で私たちは、先輩各位が時代の荒波の中で営々として築きあげ伝えてこられた輝やかしい伝統と、数々の栄光と功績を詳細にわたって読みとることができます。

今回、昭和五十六年十一月四日を期して創立四十周年記念式典を挙行するにあたり、その記念事業として、学校施設内容の総合整備、記念学園歌の選定などと並んで、三十周年以降十年間の変遷をたどり、本校沿革の諸資料を収集して、「創立四十周年記念誌」の刊行が計画されました。創立十周年、二十周年、三十周年と、本校の歴史のふしぶしに刊行されてきました記念誌刊行に、もう一つの区切りを持ちたいという意図からでありました。ただちに原稿執筆に着手し、年を越してどうにか脱稿となりました。執筆、編集に多大の労力を提供いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

私たちは、今後も更にひたむきな努力と協力と工夫によって、受け継いだ栄光と伝統に一層豊かな肉づけをする覚悟であることをお誓いし、四十周年記念誌刊行の言葉とします。

深思・意志・自負・自立

――創立四十周年を祝う――

千葉県教育委員会

県立千葉東高等学校創立四十周年の記念すべきときに当たり、千葉県教育委員会のお祝いの言葉をお贈りします。

この世に生きとし生けるもの、この地に存在しているもの、それらのすべてに歴史があります。人に歴史があり、地域にも郷土にも歴史があります。そして、もちろん、学校にも歴史があります。学校の歴史はさまざまで、それぞれが独自の生い立ちを持ち、大ぜいの人たちとの多くの出会いを繰り返しながら成長発展していきます。人はこれを伝統と呼び、校風と言い伝えています。

千葉東高校は本年四十歳になりました。まだまだ若い学校ですが、貫禄は十分です。人生に譬えればまさに不惑の年です。自らの伝統に自信を持ち、独自の校風に確固とした信念を持って堂々と前進すべき学校です。

さて、では、本校の伝統、校風とは、一言で言って何でしょうか。答を探す手がかりとして少し歴史を遡ってみましょう。本校の歴史は決して単調ではありませんでした。幾多の苦難と試練と遍歴を経て現在に至りました。しかも、県下高校の中でもその成長と発展がひときわ著しく、その躍進と充実ぶりが特に目立っている学校です。これはもちろん、地の利に恵まれていることもありますが、何よりも、歴代校長先生をはじめ諸先生方の不断のご教導と、先輩諸君をはじめとする生徒たちの飽くことなき向上心と自己鍛練、それを支えてくれた地域

の人々の協力と父母の熱意、これらが一体となって、名門千葉東高校を築き上げてきたわけであります。この歴史そのものが、本校の伝統であり校風であります。本校の校歌に則して言えば、まず第一に「深きまなび」、じっと考える力、つまり、深い思い、「深思」であります。第二に、高い理想を内に抱き、それに向かって「強きこころ」で立ち向かう積極性、つまり、「意志」であり、第三には、いつも「清きほこり」を胸に、自信と誇りを失わない「自負」であり、第四に、毎日の勉強に運動に自分の心と身体を徹底的に鍛えぬき、「はげしきわざ」を積む「自立」であります。深思・意志・自負・自立こそ、千葉東高校が天下に誇る校風でありましょう。

この四十年の土台の上に、みなさんは一層の努力と精進を重ねて下さい。千葉東高校生としての自負と意欲をもって、師弟一如、敬愛と信頼の心を失わず、若者らしい正義感と純粋さ、未来を見るみずみずしい眼を大切にして、自らの無限の可能性を信じて自分を鍛えていって下さい。小成に安んぜず、周囲に甘えることなく、受身の気持ちをはね返して、自分を試して生きていってほしいと思います。

都市部の中央にあってやや手狭な校地で若干の不便もあるでしょうが、整った校舎や校地のたたずまい、清潔感にあふれる教育環境は、みごとです。これも一朝一夕でできたものではありません。みなさんは、ここに学ぶ幸せをかみしめ、謙虚さと感謝を忘れず、自らの魂と肉体を磨きぬかれることを祈ってやみません。

終わりに、長い年月にわたって本校の充実発展に多大のご尽力をいただいた千葉市をはじめ地域の方々、数多くの教職員、ＰＴＡ、期成会、同窓会、振興会、その他関係各位に対し、心から感謝申し上げて、県教育委員会のご挨拶といたします。

（創立四十周年記念式典挨拶）

創立四十周年を祝う

ＰＴＡ会長　坂井　進一郎

日本の文化と文明を支えているのは、日本の伝統と教育であることは言を待ちません。本校が創立四十年を迎えたということは、多数の卒業生を世に送り日本の社会に大いに貢献してきたと自負できます。四十年の歴史の中に多くの先生方の御努力の成果が実りつつあるものと思い、御同慶の至りであります。

さて、四十年間という年月は、その間に生を共にした年代の者にとっては誠に長い期間であります。急速な国の発展が首都中心に行われてきたため、東京都に隣接する千葉県、特に千葉市は、この二十年間に激変したと言えると思います。人口の増加に伴う、義務教育学校並びに、それにつれての県立、市立高校の増設など、千葉県民として目を見張るものがあります。国立の千葉大学も、いわゆるタコ足大学から、その大半の学部が西千葉地区に集中統合されるまでになりました。この様に、日本の発展とともに、千葉における教育の場も整備され、ほぼ西欧の水準に達してまいりました。しかしその中身はまだ完全とは言えません。なにぶん、日本の教育界が明治の初期にできてから百年余りしかたっておりません。西欧の歴史と比較して見劣りするのは仕方ないかもしれません。これからは、過去の歴史と経験を踏まえ、将来へ向かって、教育の内容の充実を急ぐことが大きな努力目標になることでしょう。

今年は日本の化学界から初めて福井謙一京大教授がノーベル化学賞を受けられました。私も同じ文部省の研究班員であり、専門が近い者として喜んで居ります。先生の受賞業績は化学反応のニューフロンティア理論ですが、三十歳代の初めのお仕事です。若い人々が一つの志を立て、目的に向かって大いに挑戦することは大切なことです。やがてそれが本人の実力となり、また熟成されて、社会、人類の福祉に役立ってゆくことでしょう。高校生にとっては、現に今が、その出発点であることを肝に銘じるべきであると思います。

本来、家庭教育を担当すべき両親は、ともすると、すべての教育を学校に預けたような気持になりがちですが、これは正常の姿ではありません。常に反省しつつ、ＰＴＡとして学校に協力し、少しでもお役に立てれば幸いと存じます。

これからも毎年、心身ともに満たされた卒業生が世に出てゆくことでしょう。そして本校の発展が、一歩一歩、止まることなく前進してゆくことを信じ、心から創立四十周年をお祝い申し上げます。

二十一世紀に向かって伸びよ

施設整備期成会会長
四十周年記念事業実行委員長　柴田孝明

昭和五十六年十一月四日、県立千葉東高等学校は、栄ある創立四十周年を祝って、内容豊かな式典を挙行いたしました。私は、四十周年記念事業実行委員長として、畏友千葉県知事沼田武氏をはじめ多くの来賓諸氏、教職員及び全日制・通信制生徒諸君、それにご父兄の代表の方々を前に、喜びの挨拶を申し上げましたが、長年東高の発展に微力ながら尽力してきた感慨もあって、思いひとしおのものがありました。

千葉東高校の歴史は、ひとことで言って、幾多の苦難と試練に不断の努力で打克って、遂に揺ぎない栄光を勝ちとった道程と申せましょう。県下百数十校の中にあって、本校の充実発展ぶりはまことに目ざましいものがありますが、それはすべて、千葉県、千葉市の関係者はもとより、歴代の校長先生はじめ諸先生、ＰＴＡ、期成会の父母のみなさま、同窓の諸先輩及び生徒のみなさん、そして通信教育振興会の方々、こうした方々の並々ならぬご努力とご支援を受けながら、本校が血みどろ汗みどろになって問題と取り組み課題を解決した結果であります。

私自身、本校関係者の一人として、創立四十周年を目安として、この五年間にわたりいくつかの記念事業を計画し、実行してまいりました。住宅密集地にあって比較的狭少な校地ですから、その施設整備に関しては多少の

工夫が必要でした。そこで年度を追って、校舎周辺の整備を手はじめに、老朽校舎の撤去、部室棟の新築、グランド、通学路、学校園等の能率的な再配置、通信棟の新築移転等を五十五年度までに次々と完成し、五十六年度は中庭の西半分の整備を終えました。五十七年度以降の新武道館（又は第二体育館）の新築を残して、本校の施設整備の充実に関しては一応終了のめどがついたわけです。

さて、環境整備の後に残されたものは教育内容の充実向上です。幸い、激動する時代の、しかも流動する都市部にありながら、本校は、優秀な教師陣と意欲に溢れ才能に満ちた生徒諸君を得て、的確に時代の流れをとらえ、師弟一如、自らの力量を高めています。県下高校教育界にあって名門千葉東高校としての存在を誇りうる今日、現状に驕ることなく、厳しい反省と自律を重ね、来るべき二十一世紀の新時代に向かって更に力強い前進と飛躍を遂げられますように心から願うものです。

四十周年記念誌発行に当たり所感の一端を述べてご挨拶とします。

母校四十周年を祝う

同窓会長　小西　一三

創立四十周年を迎え、心からお祝い申し上げます。

今年は校舎、中庭の新設、大きくは校庭の整備、各種スポーツ設備の改修、正門の移設等、さまざまな環境改善が、当初の計画どおり完遂され、二重、三重の喜びで、まことに意義深い、記念すべき年であり、非常に感激している次第でございます。これも校長先生をはじめ諸先生方の、教育への情熱、父兄、同窓生並びに在校生のみなさんの、あらゆる面にわたるご尽力の結晶と確信しております。

思えば、私が入学した当時は、戦後における経済界の混乱動揺のさなかで、物資もとぼしく、校舎は細長い平屋の旧兵舎で、窓ガラスは盗難よけに一枚一枚校名が書きこまれ、廊下はあちこちに穴があき、隙間風が自由に通りぬけ、校庭は草だらけで、でこぼこなため、放課後は毎日ローラー引きの勤労奉仕で、いささか苦痛でした。

こんな悪条件時代の東高生活に反して、三十年たった今日の夢のような環境で育ちゆく在校生の皆さんは非常に幸せものだと、少々羨ましい気さえします。

ところで、このすばらしい環境に平行してかんじんの勉学の方はどうかと、聞いておどろきました。ここ数年

来の本校への高い入学志望率、一流大学への進学率の高いこと、遠く海外への留学制度の導入と国際色が豊かであること、また体力もスポーツ競技により強くたくましく養成されていること、男女共学問題も模範校であること、ほんとうに理想の学園であると思います。これは、とりもなおさず、諸先生方の心あたたまるご指導の成果でありますが、加えて世間一般が本校の真価を認め、高く評価してくれていることも、みのがせない事実かと思います。私も本校卒業生として力強く受けとめさせていただいております。

どうかこの躍進の四十周年を礎として、ますますご発展され、よき伝統が継承されていくことを切望し祝辞といたします。

（高校第六回、昭和二十八年度卒）

新たなる決意で

昭和五十六年度前期生徒会長　田　村　隆

本校が創立四十周年を迎えました。私たち生徒一同にとって、大きな喜びです。

顧みれば四十年の歳月、それは誠にはるかな、そして激動の道でありました。

四十年前、それは、日本の、また世界の歴史に重大な意味を持つ、太平洋戦争開戦の年であります。そのために、当時の先輩たちは工場などに動員され、二部授業や分散授業の実施のほか、戦災による校舎焼失等、苦難の時を過ごして来られました。それらの御苦労は、私たちの想像の及ぶところではありません。

また、戦後の、しかもすべてが失われた中からの再建、そして新しい学校づくりは、多くの人々の並々ならぬ御努力によって行われました。

私たちの自主的活動の組織である生徒会が発足したのも、この時期でした。生徒会発足当時は、規約づくりに始まり、諸行事の開催一つにしても先例となるものはなく、先輩の皆様の御苦労は大変なものであったと思われます。今でこそ当然のように思われる部活動も、生徒会ができてから発足したとのことです。

こうして次第に活発になった生徒会活動も、常に平坦な道を歩んでいたわけではありません。昭和四十年ごろから目立ち始めた生徒会への無関心の風潮は、生徒会組織の存続に重大な危機をもたらしたこともあります。昭和四十四年には、生徒心得に関する問題をきっかけに、様々な討論が繰り返されました。

そうした時、私たちの先輩は、多くの知恵を結集して、問題点を克服してこられました。そうして今、私たちは多くの先生方や先輩たちの残して下さった伝統の力に支えられて、自主的な活動を展開しております。

こうして本校の歴史をふり返るとき、創立四十周年を機会に、多くの先人の歩んでこられた道をもう一度見つめ直し、私たちの陥りがちな一面的な思考をさらに幅広いものとし、母校の飛躍発展に尽くして参りたいと思います。

ここに在校生一同に代わり、所信の一端を述べて御挨拶といたします。

総目次

口　絵
東雲無窮――創立四十周年記念誌刊行によせて――　校長　須田　義男
深思・意志・自負・自立――創立四十周年を祝う――　千葉県教育委員会
創立四十周年を祝う　PTA会長　坂井　進一郎
二十一世紀に向かって伸びよ　施設整備期成会会長　四十周年記念事業実行委員長　柴田　孝明
母校四十周年を祝う　同窓会長　小西　一三
新たなる決意で　昭和五十六年度前期生徒会長　田村　隆
第一章　戦いの日々から黄金の日々へ
――三十周年まで――……一
沿革年表（その一）　東高断片①②③
思い出

東高不惑

天地自然が時を刻んでいきます。万物流転の法の中で、昨日は今日へ、今日は明日へと人に歴史が流れ、世が移ろい変じていきますが、根毛の先の細胞が刻々と生長の原液を吸収し続けるように、人も世も新しい生命を求めて伸びさかっていきます。

千葉県立千葉東高校の歴史も、若木が育って大樹になる時のように、多くの試練と風雪の時代がありました。それを耐えぬいていま、大きく成長して、逞ましい根幹を見せて、轟の丘の上にひときわ高く聳えています。

千葉東高等学校は、昭和五十六年に創立四十年を迎えました。聖賢の古知にならえば不惑の年です。遠い道のりのような気もします。まわり道もありました。試行錯誤をくりかえしながら迷い続けたこともありましたが、もう逡巡する時ではありません。強く張った根と、太く育った幹と、深く繁った枝葉のひとつ一つが、輝く日の光と大地に満てる栄養を存分に吸い取って、もうすでに風雪に耐えうる底力を持ちました。残された仕事は、東雲の彼方に思いをはせて、堂々と気高く、自らの使命と目標に向かってひたすら進むだけです。

私たちは、いま、この記念すべき時に当たり、校史の一端を繙いたり綴ったりしながら、明日に生きる知恵を探し出そうと決意しています。

第二章　限りなき前進――この十年――……一九
沿革年表（その二）　回想　教育課程の変遷
東雲祭小史　校外行事の歩み　進路この十年
東高断片④　静読十年―図書館の歩み―　国際青春―海外交流教育小史―　四十周年記念学園歌　東雲に歌声よ轟け―創立四十周年記念式典寸描―
第三章　青春の絆――部活動この十年――……二三
第四章　東雲多彩――回顧と追憶――……一九七
第五章　明日に向けて――各教科の現状と展望――……二五一
第六章　衛生看護科十五年史
――模索から充実へ――……二七七
第七章　通信教育この十年――生涯教育の実践――……三二
資　料　職員表ほか
編集後記

題字　安塚正明
カット　平松生夫

この記念誌の基本的構成について附言します。

昭和四十六年に本校は創立三十周年を迎えました。その記念事業の一つとして、「創立三十周年記念誌」が刊行されました。先輩各位の大変なご熱意とご努力により、A5判二四六ページの同誌は、昭和十六年四月創立以来の三十年の歴史を詳細に語って余すところがありません。開校時代の苦心、敗戦直後の苦難、学制改革による改組、膨脹躍進する地域を包みこんだ桑海の急変などが、一字一句、一行一行に活描されていて本校の歴史を眼前に再現してくれています。このあとを受けての「四十周年誌」は、実のところ、大変気の重い仕事でした。重複を避けながらも主脈は見逃さずに、という課題は、正直、重荷でした。あげくの焦点は、「それからの十年」ということになりました。昭和四十七年から五十六年までの十年間をできる限りの史料で辿りました。躓きながらもこの作業をすることで各史料の散逸を最低に防ぎとめるという役目が果せたなら、せめてもの幸せです。なお別に刊行された生徒会誌「黎明」（創刊号）との重複を避けるため、在校生徒の記事の大部分は「黎明」に掲げました。併せてご一読いただきたいと思います。

第一章　戦いの日々から黄金の日々へ

――三十周年まで――

沿革年表（その一）……三
＊東高断片①　―創立余話―……三
＊東高断片②　―学園歌余話―……七
夢中で過ごした黄金の日々……旧職員（社会科）木島与左衛門……一一
思　い　出……旧職員（生　物）吉田　さゆり……一三
想　い　出……旧職員（教　頭）鬼島　正雄……一五
＊東高断片③　―一つの学位記―……一七

沿革年表（その一）

――創立三〇周年まで――

昭16・1・15　**千葉市立千葉高等女学校**（四年制）設立認可。一学年四学級（定員二〇〇名）。所在地、千葉市港町一九番地

2・24　県視学瀧熊之助本校校長に補せられる。

昭18・4・7　教室不足のため二部授業開始

11・1　新校舎一部落成。所在地、千葉市葛城町二一二番地

三年生移転

昭19・4・7　生徒の一部葛城町第二校舎及び第三校舎（元葛城アパート）に移転三か所分散授業

昭20・3・20　第一回卒業式

7・7　港町第一校舎戦災

9　新校舎建築中止。教室不足のため隔日授業開始

8・8　校長瀧熊之助県立千葉高等女学校長に転任。県立木更津高等女学校楠原信一本校校長に補せられる。

10・1　県立千葉中学校の校舎の一部を借用しての分散授業

昭21・4・1　五年制高等女学校となる。教室不足のため生徒の一部を千葉中、及び収納庫に収容して隔日授業解消

昭22・4・1　六、三制発足のため生徒募集中止

11・25　校長楠原信一千葉市教育民生部長に転任、教頭親泊朝晋、本校校長事務取扱に補せられる。

東高断片①　――創立余話――

校史の資料の山の中から一枚のコピーが見つかりました。第十代校長相川勝衛先生が苦心の探索の末入手され、本記念誌の史料の一つとして残されたものでした。次の写真がそれです。コピーの原本は、昭和十六年一月十七日（金）付官報第四二〇七号の一ページですが、同紙の「文部省告示第十三号」に次の記事が読みとれます。

「高等女学校令ニ依リ左記高等女学校ヲ設置シ昭和十六年四月ヨリ開校ノ件昭和十六年一月十五日認可セリ　昭和十六年一月十七日　文部大臣　橋田邦彦。

名称　千葉市立千葉高等女学校。

位置　千葉県千葉市。設立者　千葉県千葉市。修業年限四年。」

官報第4207号（昭16.1.17）

本校の誕生証明書とも言うべきこの一枚の官報の簡潔な告示文の中に

28　借用の県立千葉中学校の校舎一部焼失
29　教室不足のため第四・五学年は週一日、第二・三学年は週二日休校

昭23・2・29　校長事務取扱親泊朝晋本校校長に補せられる。
3・31　学制改革により千葉市立女子高等学校として認可される。
4・1　**千葉市立女子高等学校**と校名変更
17　新校舎に移転。所在地、千葉市蘰町三番地。旧校地校舎を千葉市立第三中学校に委譲
5・15　千葉市立女子高等学校開校式（開校記念日）

昭24・2・17　県立千葉女子高等学校に第三棟貸与
3・31　校長親泊朝晋県教委事務局管理課高校係長に転任
4・6　東京都立城北高等学校教頭諸川芳雄本校校長に補せられる。
12　建築中の第二棟大風のため倒壊（二四・一一・一一復旧）
26　新校章制定
27　生徒会発足
9・1　庭球コートを校舎裏に新設
26　千葉市立第五中学校に三教室貸与
10・27　第三学年昇仙峡、修善寺方面に研究旅行（第一回目の修学旅行）
11・22～29　職員・生徒・父兄・卒業生四者共同で県立移管問題について陳情

も、昭和史の一端が顔を出しているのが印象的です。ここに名前の見える橋田邦彦文部大臣は、我が国の実験生理学の祖で、東大教授時代、生物電気の発生に関する緻密な実験を数多く行い多大の業績をあげる一方、多くの俊秀を一流の生理学者に育て上げた人。旧制第一高等学校長を経て、昭和十五年、当時の近衛文麿首相に請われて文部大臣に就任、芸術院の創設、文化勲章の制定（昭和十二年）に当たり、また、「行と科学の一致」「科学する心」などを提唱して、第二次世界大戦中の我が国の教育行政、科学行政に独自の理念を展開した人です。敗戦直後、戦犯の容疑を受けて連合軍に出頭を命ぜられ、昭和二十年九月二十四日、自殺しています。この悲劇の橋田文部大臣の就任間もないころの仕事の一つが（ほんのささやかな認可告示ですが）本校の誕生に係っていたのです。

同日付で設立や名称変更を認可されている学校に、松本市立中学校（現長野県立美須々丘高）、奈良市立奈良高等女学校（現奈良県立奈良高ほか）、藤沢市立藤沢高等女学校（現神奈川県立藤沢高）がありますが、共に幾多の変遷と改組を経て今も逞ましく息づいています。日本が結局は敗れていくあの大戦争が始まる年初に、しかも、やがては悲劇的な運命の中に自らを消していく文部大臣の名前で、それぞれの校史の誕生が告示されている時代の背景に、ことさらに深い感銘を覚えます。

さて、この設立認可に先立つこと四か月ほど前、昭和十五年九月十六日、千葉市長永井準一郎より千葉市議会へ、議案

昭25・4・1　県立移管により**千葉県立千葉第三高等学校**と校名変更。一学級増加（以後一学年六学級）。この年よりはじめて男子入学

5・1　男子帽章制定

7・13　本館建築促進運動を起こし、県教委、市教委に陳情

10・25～29　第三学年関西方面研究旅行初めて実施（四泊五日）

11・10～11　第一回文化祭（展覧会、バザー、音楽、演劇、研究発表会）

昭26・1・19　第一回耐寒マラソン

7・26～9・18　校庭整地作業（二〇〇mトラック、野球場、庭球、排球コート）

1　本館新築落成、（小講堂、校長室、事務室、教務室、小使室、会議室、便所）

11・2～6　**創立一〇周年**記念式典挙行、校歌、応援歌制定、県下小中高校席書大会、音楽会、図画コンクール、生徒研究発表会、演劇鑑賞会、展覧会、バザー

昭27・5・30　女子制服制定

昭28・3・20　理科教室新築落成（物理教室、化学教室、地学教室、生物教室）

4・1　本年度入学生から第一学年七学級となる。

昭29・4・1　**通信教育部**設置（県立千葉第一高等学校及び県立千葉第二高等学校通信教育部を統合）

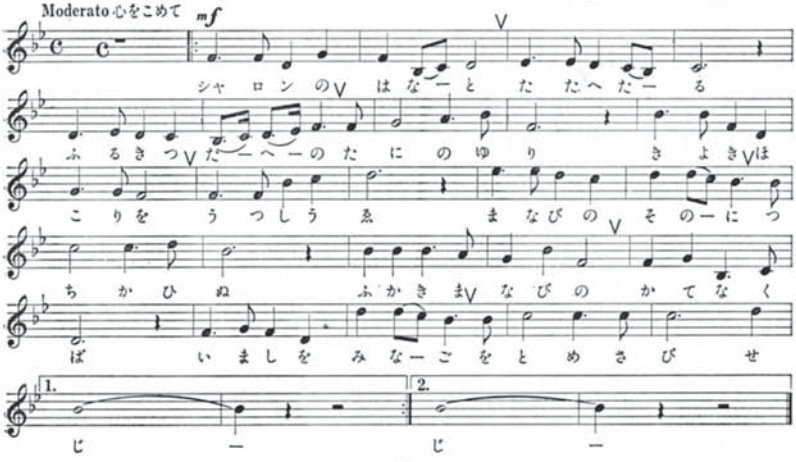
6・7　家庭科教室、普通教室新築落成、仮湯呑場を分解、第五十九号として、「市立高等女学校設置ノ件」が上提され、校舎は旧市立工業（寒川町にあった）を仮用、定員一学年三学級百五十人、授業料月額四円五十銭（市外生は一円増）、十六年四月一日開校、という原案がそのまま可決されています。直ちに文部省に申請され、翌年一月、前記の告示となって、本校の開校は正式認可となったわけです。巷には、「誰か故郷を思わざる」と、年が明けては「蘇州夜曲」の共に物憂いメロディーがはやっていましたが、引続く暗く厳しい時代と敗戦への道すじを予想している人は余りいませんでした。

創立期の校長は、千葉県視学から転補された漢学者の誉れ高い瀧熊之助先生でした。明朗、真剣、錬磨をモットーに、礼儀作法を根幹とした教育を徹底されました。「瀧校長の教育方針や考え方は、末端まで徹底して、立派な考え方を持った人としてその名は県下にひびき、信仰的なまでに尊敬されていた。瀧校長がえらいから、市立高女に入れて教育してもらうんだという気持で、子供を入学させていた」と三十周年誌はのべています。この校長のもとへ、林勢司（教頭・理科）市原初雄（英語）、小川恒雄（美術）、大関たか（体育）、塚本弥六（国語）、吉田さゆり（理科）、外山（真田）富美代（家庭）、安塚正一（書道）、金子よね（家庭）、山越チエノ（家庭）、森俊雄（国語）、鈴木利枝（家庭）、石井恒之（事務長）の諸先生がはせ参じたのでした。

（細野）

校　歌

作詞　澤田繁二
作曲　石黒脩三

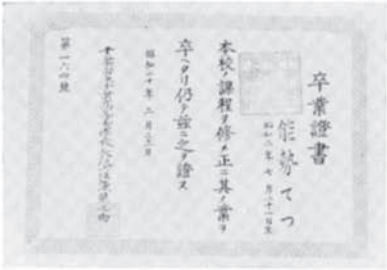


一
シャロンの花と　たたへたる
古きつたへの　谷の百合
清きほこりを　移し植ゑ
学びの園に　つちかひぬ
深きまなびの　かてなくば
汝をみなご　をとめさびせじ

二
アルプの山の　こごしきを
ふみやぶりたる　ますらをの
強きこころを　打ち樹てて
学びの庭に　はぐくみぬ
はげしきわざを　つまざれば
汝をのこら　をとこさびせじ

注　シャロンの花　純潔の象徴
（旧約聖書から）

創立30周年記念式典（昭和46.11.2）



第一回卒業式（昭和20年）

旧正門の標札（文字は安塚正一先生）

体育器具置場として移築

昭30・4・8　第一棟改築落成（普通教室、通信教育部室、更衣室）

7・20～9・5　校庭整地工事（グランド拡張）

10・10　通信教育部文部省実験学校に指名される。

昭32・3・1　通信教育部第一回卒業生三名

4・1　本年度入学生から第一学年定員三五〇名

8・31　体育館兼講堂新築落成

昭34・2・20　第二棟改築落成（普通教室、図書室）

3・31　校長諸川芳雄県立千葉商業高等学校長に転任

4・1　県立銚子商業高等学校長、石毛貞雄本校校長に補せられる。

昭35・4・1　努力目標設定、校内諸規程改訂

5・31　通信教育部校舎落成

11・19　第三棟改築落成（第二体育館、芸術科各教室、生徒会室）

昭36・4・1　千葉県立千葉東高等学校と校名変更

8・22　第三棟普通教室四を焼失（被害総額八、四九九、一〇〇円）

9・1　創立二〇周年記念誌刊行

昭37・4・1　本年度入学生から第一学年定員四〇〇名（八学級）

3　第二棟二階校舎新築（火災焼失による復旧）

昭38・2・26　校長室、教務室、事務室、保健室拡張工事、小講堂模様替、宿直室、放送室移転工事

4・1　本年度入学生から第一学年定員四五〇名（九学級）

東高断片②　――学園歌余話――

昭和二十年日本敗戦の年、本校も歴史の荒波に木の葉のように漂流しました。港町校舎、葛城に新築した第二校舎、それに元葛城アパートを改造した第三校舎、の三か所での分散授業に加え、学徒勤労動員で授業も途絶えがちの日が続きました。第一回の卒業式が千葉中学（現県立千葉高）の校舎を借りて済んだと思ったら、七月七日に港町校舎が戦災で全焼してしまいました。八月八日には初代校長瀧先生が県立千葉高等女学校長に転出され、第二代校長に楠原信一先生が就任されました。新校長が着任して一週間目、戦いは敗れて終わりました。市内随所に焼土が露見し、その上を虚脱が覆っていました。しかし、襤

創立10周年記念発表会（昭26.11.4）

29　日本放送協会学園高等学校（通信制の課程）の協力校となり第一回入学式挙行

7・8　通信制の課程、読売教育賞受賞（第一回）

昭39・3・16　急増対策新校舎竣工（二階建六教室、便所、更衣室等）

昭40・7・20　校長石毛貞雄県立東葛飾高等学校長に転任

21　県立国府台高等学校長内藤貫一本校校長に補せられる。

昭41・4・1　衛生看護科（定員四〇名）設置（第一学年発足）

12・28　校門、玄関前の舗装工事完了

昭42・1・25　新校舎建築第一期工事着工（四二・一〇・一三竣工総工費一四、二〇〇万円）鉄筋コンクリート四階建延面積四、六五九㎡

3・10　校長内藤貫一退職

11　教頭鬼島正雄校長職務代理に補せられる。

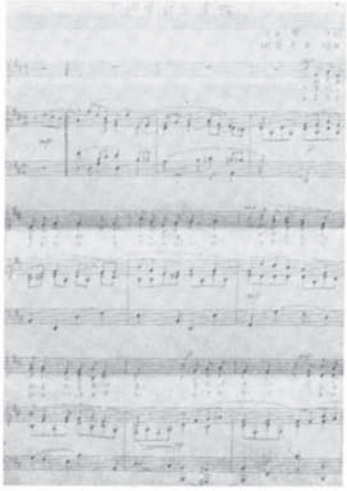
4・1　千葉県教育委員会教育次長沢田繁二本校校長に補せられる。今年度より普通科一学級減八学級となる。

10・13　第一期工事新校舎完成（普通教室、家庭科教室、書道、美術、社会科教室等）

12・5　プール建設用地の校舎取りこわし

昭43・1・17　プール建設工事開始（二五m七コース四三・七・二六竣工工費一、五三四万円）

4・1　本年度入学生から第一学年定員四三二名（普通科一学級四九名）



10周年記念祭歌譜
（旧職員勅使川原安芸子先生の手もとにたった一枚保存されていた）

褸の若者たちの心には復興と不屈の火が燃えさかっていました。小屋同然の学舎の中で、海綿が水を吸うようにみんなが学問をむさぼりました。昭和二十三年四月、もと帝国陸軍兵器補給廠跡の藤の現在地が「ついの栖家」に定まりました。バラック校舎三棟（うち一棟は建築中に台風で倒壊という悲運のおまけまで襲いました）と、草っ原とさつま諸畑の運動場でしたが、この丘で青春は明るくたぎりました。何度もの父兄を挙げての陳情の末、昭和二十五年四月には県立移管を果たし、千葉三高と改称し、男女共学となって東高の原型は完全にでき上がりました。

昭和二十六年錦秋の佳き日、燃えあがる意気と目ざましい躍進に思いをこめて、創立十周年を祝いました。校歌も応援歌も記念祭歌もできました。「学校の心」が一気にでき上がりました。

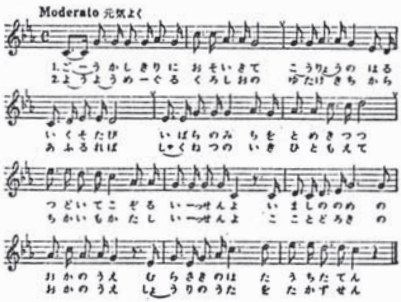
昭和二十六年十一月四日に行われた創立十周年記念音楽祭

7・26　プール完成
昭44・3・10　衛生看護科第一回卒業生三一名
10　新校舎建築第二期工事着工（四五・三・二〇竣工、総工費一八、七〇〇万円）
31　校長沢田繁二県立千葉工業高等学校長に転任
4・1　県立佐倉東高等学校長村田泰次郎本校校長に補せられる。
1　本年度入学生から一学年定員四二四名（普通科一学級四八名）
4・19　いわゆる「生徒心得第九条問題」起こる。
9・30　学園封鎖事件起こる。
昭45・3・20　第二期工事新校舎完成（理科教室、視聴覚教室、音楽教室、図書室、教務室、事務室、校長室等）
4・1　本年度入学生から一学年定員四一六名（普通科一学級四七名）
9・2　新体育館工事着工（四六・三・三一竣工、総工費七八三〇万円）
昭46・3・30　新体育館完成
4・1　本年度入学生から一学年定員四〇八名（普通科一学級四六名）
11・2　**創立三〇周年**並びに新校舎落成記念式典挙行

は目もくらむ豪華さでした。卒業生の川口絹代先生、塚本紀子さん（高校三回）が絶妙のソプラノを歌い上げれば、友情出演の大賀典雄氏（芸大出、現ソニー副社長）がこれに応じ、新進の天才バイオリニストの鈴木秀太郎氏の名演奏に続いて井内澄子さん（芸大出）のピアノが満堂を魅了しました。かくて創立十周年は、また本校音楽教育史の劇的な一コマだったのです。

十周年記念祭歌のエピソードをもう一つ。昭和二十六年の初秋のころ、沢田先生と勅使川原先生が西登戸の川口絹代さん宅を訪れました。自宅裏の家庭菜園で茄子をもいでいた川口さんは、表の人声で振り向いた拍子に指を鋏んでしまいました。敗戦後の食糧難時代です。どの家の庭も畑になっていました。男は復員服姿がごく普通だった当時ですから、きちんと背広を着た沢田先生の印象と、指の痛さは今でも鮮明ですと三十年前のエピソードを電話の向うで話してくれた川口先生――あだ名は「グッちゃん」――のお声は、国立音楽大学声学教授というご職業柄か、大変若々しくはずんでいました。さて、両先生訪問の趣旨は記念祭歌の作曲依頼でした。「グッちゃん」先生はそれを音楽学校の友人や後輩の東京芸大生の間に持ちこみました。上野の学校の近くに「ニュー・キャスル」という喫茶食堂があって、音楽学生の溜り場でした。「作曲料は一五〇〇円」という川口さんの勧誘にのって「ニュー・キャスル」に居あわせた芸大生のうち、田中信昭諸井誠、間宮芳生さんなどの手が挙り、結局間宮さんが引受けてくれました。「すだく虫の音　うつろう星の」の記念祭

応援歌（一）

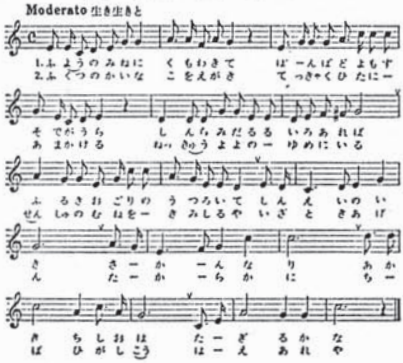


一　劫火しきりに襲い来て
荒涼の春　幾そ度
茨の道を　とめ来つつ
集いて挙る　壱千余
今　東雲の丘の上
紫の旗　打ち立てん

二　洋々めぐる　黒汐の
豊けき力溢るれば
灼熱の意気火と燃えて
誓いも固し　壱千余
ここ轟の　丘の上
勝利の歌を高踊せん

注　曲は旧制第七高等学校寮歌「北嶺斜めに」を使用

応援歌（二）



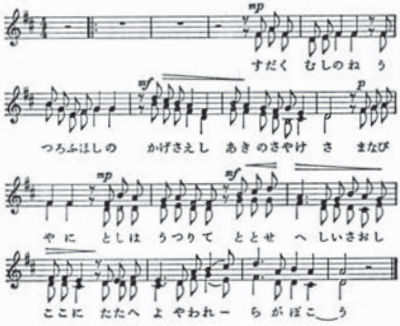
一　芙蓉の峰に雲湧きて
万波どよもす袖ケ浦
森羅乱るる色あれば
古き驕りの移ろいて
新鋭の意気旺なり
あかき血汐はたぎるかな

二　不屈の孤を画き
鉄脚ひたに天朔ける
熱球夜々の夢に入る
選手の胸を君知るや
いざ闘あけん高らかに
千葉東高　栄あれや

注　曲は旧名古屋陸軍幼年学校行進曲を使用

10周年記念祭歌

作詞　澤田繁二
作曲　間宮芳生



一　すだく虫の音　うつろふ星の
影冴えし　秋のさやけさ
まなびやに　年は移りて
十年経し　いさおしここに
たたへよや　われらが母校

二　よするさざなみ　袖が浦わの
夢遠く　思はるけし
この丘に　集ひて立てば
轟くは　松風のみか
ことほがん　われらが母校

歌はこんな経過で作曲されました。田中さんは現芸大講師で東京混成合唱団の常任指揮者、諸井さんも間宮さんも大作曲家です。こうした人たちの青春の一時期が本校の学園歌の一つに係わりがあったことに今更ながら不思議な感慨を覚えます。

（細野）

夢中で過した黄金の日々

旧職員（社会科）　木島与左衛門

千葉東高が創立四十周年を迎えられたことを先ずお祝い申しあげるとともに、進学名門校として声価が定まった今日、より一層の充実発展をお祈りいたします。

記念誌編集委員会より寄稿を求められ、いささか考え込んだ次第です。「二十周年誌」・「三十周年誌」で既に先輩各位の貴重な回想が語られておりますし、アルバムを繰りながら感傷が先立ち、思いが千々に乱れる始末。これではならじと自己中心の実践をまとめることにいたしました。

こんな教師がいて、なる程そんなこともあったなと昔時を懐しむよすがになれば幸いです。

私が前任の県立東金高校から着任したのは昭和二十七年のこと、二十五歳の時でした。「発展躍進途上の三高」を口癖にされ精力的に教育推進にあたられた諸川校長先生の下に、優れた先輩、有能な同僚仲間、そして活気に満ちた生徒諸君らに囲まれ、支えられて、半可通の青年教師は夢中で教育実践に努めたのち、離任は四十一年でした。

購売部の売れ残ったコロッケを肴に、冷酒を茶碗に汲んでの教育論、境のベニヤ板は穴だらけで隣りの教室とは筒抜け状態でありましたから、良い意味でHR担任同志が意地を張合ったものです。教育環境は殺風景そのものでしたが創意工夫の余地は十分すぎるくらい、野生味と未完成の逞しさに満ちておりました。

一年入学時から三年卒業まで持上った七・十・十三回の諸君らと夢中で過した黄金の日々は、今顧りみると冷汗三斗の思いです。社会科の各科目を担当しました。体育祭・文化祭で代表される学校行事、修学旅行等の中で、過誤を繰返しながら貴重な経験を積上げさせていただきました。御迷惑をかけた学年主任、山崎・池内先生には紙上をお借りして厚く感謝申しあげます。

昭和二十七年という時、川崎製鉄の一号高炉に火が入りました。出州海岸の潮干狩場が埋立てられました。東高前の幅広い砂利道に循環バスが開通したのもこの年度です。弁天池方向から続く水田の谷頭にあたる現市川クリーニング店辺りには稲架があったり、十六号線と出合う丁字路付近には乳牛が日向ぼっこしていたものです。

周辺の開発が進行していくとともに生徒諸君の変容もあるはず。パーソナリティの素地を分析した小論を「二十周

年誌」に投稿しました。昭和三十年代に進行した五井・八幡地先の臨海工業地帯の造成は、就職係の分掌をもった私にとって印象強いものがあります。とにかく地理担当教師として資料を集め、授業に活用し、将来への論考に役立てさせていただきました。これも黄金の日々であったと思います。

昭和三十年に結婚いたしました早々、当時松村文相のお声がかりで教育キャンプが奨励されました。文部省の主催する野外活動の指導者講習、ユースホステルのリーダー講習に参加して、素人の私が突然官製山男に変身させられました。全校から有志のキャンプ団を組織しての夏季施設、一年生全員参加の宿泊研修（箱根）への発展と、私にとってはやや辛いながらも充実した実践を経験いたしました。

昭和三十六・七年度には図書部に所属しました。ここでは畠山教頭先生に社会教育に関しての啓発を受けたと思います。生徒諸君の学習の利便を図って日曜日にも開館、池を掘り、樹木を集めて教材植物園づくり、ホクシン十六ミリ映写機を駆使しての授業展開など思い切った企画の実現は先生の支持のお蔭と存じています。余談になりますが、このころ職員の間で自動車運転免許の取得が盛んであり、車を利用して機動的指導に役立てよう（家庭訪問やパトロール等）と意図されたのも畠山先生であったと思います。

昭和三十八年度、社会要請を背景に一学級定員を五十五名、しかも九学級の大人数となりました。この学年主任を命ぜられたのが私でありました。前記の教材植物園（花壇づくり）は学年からの奉仕作業で成ったわけ。これは勤労体験学習に通じていたと思います。四街道にあった聖書学園訪問の徒歩遠足も軌を一にするものです。志望別コース編制、クラス分けして国立大合格者を二桁に乗せたのもこの学年でありました。

存分な学年運営を支えてくださったのは石毛校長先生でありました。先生は赴任当初からＪＲＣを導入され、環境美化、親切奉仕をスローガンにされていたものです。千高教研の生徒指導部会長の任に在り、自律節制を説かれてヒューマニズムの具体的推進に努力されたことに深い感銘を覚えています。校舎焼失、始めての木造二階建校舎ができた時「転禍為福」を説かれたものでした。

「梅一輪、さしてはぐくめよき校風」これは石毛先生の句であります。また先生は「夢」という言葉がお好きで玄関に額を飾っておられました。私どもは理想を抱きその実現を焦っておりますが一人では何もできません。しかし一

人から、しかも小さいことから始めなければ夢の実現は図れないと思います。身の程知らずの私が、皆さんの御支持、御指導により夢中で過してきた黄金の日々、東高発展の捨石と御理解くだされば幸いです。

（市立銚子高等学校長）

思い出

旧職員（生物）吉田さゆり

私は千葉東高の草分け時代、昭和十六年四月の創立から三年間勤務し戦争の空気の重苦しくなってきた昭和十九年三月家庭の事情で退職しました。創立、しかも戦時下というただならぬ時代でしたので、千葉東高を思うとき、このころの印象が一番強いのですが、創立三十周年記念誌に書かせていただきましたので省略します。

その後、縁あって昭和二十三年十二月末の発令で再びお世話になることになりました。以来、昭和四十二年三月、千葉東高を最後に公立高校を退職するまで十八年三か月、前後合わせて二十一年三か月勤めさせていただきました。このながい間には思い出もいろいろありますが、特に心に深く残っている一、二について記したいと思います。

＜再びかえってきて＞

千葉市立高女を去って四年二学期でしたが、その間、国も学校も私個人も大きな変化に見舞われました。国は熾烈な戦争から敗戦、学校は港町の校舎が焼け、蘆町の陸軍兵器廠跡へ移転、制度は市立女学校から市立女子高等学校へ、私個人は夫の戦死（昭和二十年三月硫黄島で）と想像もしなかった変わりようでした。しかし、再び帰ってきた古巣の学校では、親泊校長先生、有田先生、山崎先生をはじめ、諸先生方が肉親にもまさるあたたかさで迎えてくだされ、なお、住宅不足の折とて校庭の一隅に建てた職員住宅の一室が用意されてあり、有難く涙の出るほどでした。どんな境遇に置かれても、これからが私の再出発と明るい気持で六畳一間の住宅で少しばかりの荷を解きました。

＜クラブ活動＞　新制高校を全人教育の場とするため、新しい教育制度では、特別教育活動の一環としてクラブ活動が新設され、昭和二十三年は一年間準備期間でした。私が再びまいりましたときは、生物クラブ員数名が、割り当てられた教室（生物室などはなかった）の隅で僅かの標本の整理などしていました。本格的な実施は二十四年からでしたが、部屋も十分には使えず、実験器具などもほとんどなく

研究はあまりできない状態でした。当時千葉大の沼田教授指導のもとに千葉県生物学会という組織があり、日曜日が例会でしたので、野外研究、室内研究などにクラブの生徒をよく連れていきました。昭和二十五年の秋の第一回文化祭には、夏休みに観察研究した「月見草の花の開き方」など発表して生物クラブもある程度の成果をおさめました。

昭和二十八年には理科棟も建ち、やっと生物教室もできましたので、クラブ活動も次第に軌道にのってきました。

昭和三十三年の春休み、部長の楠原二郎さんと副部長の貞方忠夫さんが、友人より蜜蜂を一箱譲り受け、これからクラブ全員で研究すると大張り切りでした。生徒も顧問の私も飼育方法は素人でしたが、早速関係図書を求めたり、飼育箱その他必要な器具類を東京まで買いに行ったりして飼育研究のスタートを切りました。このときのクラブ員は一三名だったと思います。その後次第に増して三十名ぐらいになったときもあります。蜜蜂の世話をするとき、頭から防具の網をかぶり、手袋もするのですが新入生は刺されて顔がはれることもありましたが、上級生が親切に指導するので間もなくなれるといった状態でした。分封といって巣分かれする春は、旧い女王蜂が働き蜂数千匹を引き連れて空中を三十分ほど乱舞しますが、この間に女王蜂を新しい巣箱に収容しなければ群全体がどこかへ飛んで行ってしまいますので、時によっては授業中でも、ベテランのクラブ員の一人か二人はこの作業をしなければなりませんでした。研究の主題は、年々少しづつ変わりましたが、蜜源植物や、蜜を集めるための蜜蜂の行動範囲や蜜の在り場所を自分の巣の友蜂に教えるダンスの仕方、それによって方向と距離を測定することなどが主なものでした。研究を始めて四年目の昭和三十六年、県学生科学賞（読売）に入賞し、翌五年目の三十七年に同県最優秀賞を受賞しました。年々クラブ員は新陳代謝していっても、次々と後輩が研究を引き継ぎ、また、卒業して大学などにいっても先輩は時々きて後輩の研究を見守ったり指導するといったほほ笑ましい状況も見られました。長い間には、時に研究についてのトラブルもありましたが、一つの目標にむかって前進的な考えで常に生徒は進んでいったと思います。これらの研究を通して人間形成にも非常に役立ったと私は信じています。このころの生徒は、お互い同志、また、顧問とのつながりも今でも強いことを痛感しております。

昭和三十六年、野村典平先生（生物）がおいでになってからは、夏休み、二、三泊で高原や高山へキャンプによる野外観察研究をするようになりました。清澄、霧が峰、浅

間山、蓼科、奥日光、光徳牧場……など。天幕その他重い荷物の運搬、重労働は男子の係、炊事は女子の係で男女共学のよさをしみじみ感じました。

現在の千葉東高は名実ともに素晴しい学校に発展しつつあり喜びにたえませんが、その影に四十年間の多くの人々の尊い血と汗が秘められていることを思いつつペンを擱きます。

想い出

旧職員（教頭）　鬼島　正雄

漁場の町夷隅高等学校（現勝浦高等学校）の教頭より、ネオンの輝く千葉市の名門校として、飛躍一路を辿っていた千葉東高等学校の教頭に命ぜられたのは、昭和四十年四月のことでした。もとより浅学非力の身である私ごときが果たして勤まるか内心不安で一杯でありましたが、ともあれ赴任を命ぜられたからには、全職員の協力と過去のつたない経験をもとにして、最善の努力をする決意で着任いたしました。

当時の千葉東高校は、校舎そのものが終戦直後の建築で老朽化がひどく、昼なお暗い長い廊下、そして雨の日など校舎のあちこちが雨漏りする、見るからに貧弱な校舎でありましたので、石毛校長先生は校舎の全面改築を目指して、日夜東奔西走されたように思います。

そのころ、県下の高等学校も新旧交替の人事が騒がれている時であり、石毛校長さんと私は僅か四か月足らずの期間で別れることになり、石毛校長さんは東葛飾高等学校にご栄転になり、その後任として国府台高等学校より内藤先生が就任されることになりました。

内藤校長さんは、身体の不自由にもめげず、校舎の新築に意欲的に行動され、着任早々にして新校舎の第一期工事に着手されました。その間、職員も生徒も新任校長教頭にも拘らず常によく協力され、クラブ活動に学習指導に活気がみなぎっておりました。

さて、校舎の新築でありますが、私にとってははじめてのこと。教務室、教室の配置がえ、移動等で毎日が繁忙そのものでありました。特に、長さ二十数メートルのコンクリート製の杭打ちのたびに周囲の民家からの苦情があり、藤野事務長と私はその対策に日夜苦心したものです。

第一期工事中に、建設会社の倒産等もありましたが、どうやら工事の方も順調に進み、完成間近の昭和四十二年三

月十一日附で、内藤先生は、かねがね希望していた、市川市より県議に立候補するために退職することになり、私が残る四月までの残任期間、校長職務代理を命ぜられ、職員人事等々五里霧中の中で過ごしたことを想い出します。

新学期早々教育次長であった沢田先生が着任され、前任者の残された第二期工事と、内藤先生の時代に新設された衛生看護科の施設の整備、そしてプールの建設等々大いに努力され、漸く校内に明るいきざしが見えはじめたころ、急激な経済の成長のひずみとも言われた非社会的な学生運動が各大学で盛んになり、その余波が高等学校にも波及してまいりました。そのためか、東高校の生徒も生徒会規則や校則等の問題について、生徒会の代表が何度か対校長交渉を要求するようになりました。そのため学校長を先頭にしてその対策に苦心したものです。

生徒集会がしばしば開かれるようになった昭和四十四年の四月、沢田校長さんは千葉工業高等学校にご転任になり、その後任として佐倉東高等学校より村田校長さんが就任することになりました。そのころは、第二期の校舎の新築も完成間近く、その落成を生徒職員一同で鶴首しておりましたが、生徒の学生運動は日に日に盛りあがりをみせるようになり、その嵐の中に着任された村田校長さんの心労ははかりしれないものがあったと思います。

東大紛争、日大紛争等々、日本の各地で学生運動が起こり、社会全体に衝撃をあたえたものです。そのような時千葉東高も県下の高校のトップを切って生徒による学校封鎖に遭い、その鎮静化に深夜に及ぶ職員会議、そして全職員交代による宿泊警備等々、教育以外の問題で頭を悩ましたものです。西千葉駅や校門前のビラまき、また生徒の下駄箱のビラ、それはそれは話にならない程のビラ攻めに遭いました。朝まだ暗い午前五時出勤して、生徒の登校前に、下駄箱の中にあるビラの回収、無断で貼られたポスター収集にあけくれた学園生活の毎日は、いまも、私の胸中に忘れ得ぬ思い出となって残っております。

その他、卒業式の答辞送辞の問題からはじまり、入学式、始業式の警備等々で、千葉東高校の職員が生徒に振り廻わされた時代であったでしょう。そのようなできごとも、時と共に、当局の努力もあって、大学紛争も下火となり、高校もそれにつれ鎮火して参りました。

昭和四十五年の四月大多喜女子高等学校に転勤することになりましたが、千葉東高等学校の教頭としての五か年間は私の教員生活の中でも最も苦しい時代であり、それだけにいろいろな意味で精神的向上があったように思います。

いま、目前に千葉東高等学校の偉容を見るとき感慨無量なものがあります。「時がすべてを解決する」と先人が言っておられますが、まさに名言と思わざるを得ません。私の千葉東高校での五か年の生活は、二十一世紀の教育は如何にあるべきか、そしてこれからの教師のあるべき姿の一端を教えられたような気がしてなりません。

終わりに、千葉東高等学校の永久の弥栄を祈念して私の想い出の記といたします。

（県立東金高等学校長）

東高断片③ ――一つの学位記――

昭和五十六年三月、卒業式も終わって新年度の準備に忙殺されていたある日、嬉しい手紙が届きました。卒業生の野口実さんからです。野口さんは昭和四十四年三月の三月卒（高校第二十一回生）で、県立流山東高校の社会科の教員です。短かい文面ですから、そのまま収録させていただきます。

「拝啓　御元気に御活躍のことと拝察申し上げます。

小学生の頃から歴史にだけは執着を持ち続けてまいりました私ですが、その甲斐あってか、このたび拙論『坂東八ケ国における武士団の成立と発展』に対して青山学院大学大学院より文学博士の学位を授与されました。青山学院大学の史学科に入学したのはつい最近のことのように想い起こされますが、それから早くも十二年の歳月が流れました。この間私は日本古代末・中世初期の政治史を専攻して指導教授貫達人先生から公私共に親しく御指導をいただくことができ、この学位受領も全くその賜物といわざるを得ません。また而立の年を迎えたこの機会に、幼年の頃より私を支えて下さった多くの方々に対し、感謝の微意を表させていただければ幸いに存ずる次第です。

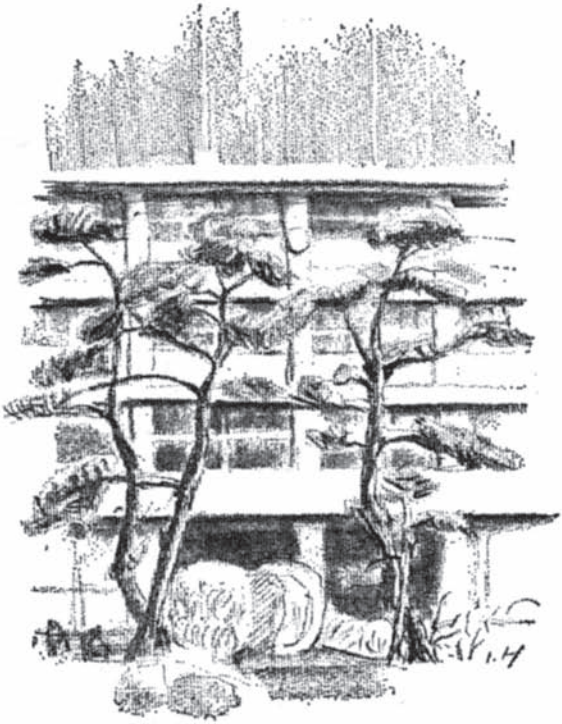
目下、遠方の新設高校に勤務のため、研究の進行は容易ではありませんが、私の如き浅学菲才な者が学位を得たことで学問の権威が失墜したとの誹謗をうけることのないように、今後とも精進してまいりたいと存じます。何卒、今後ともより一層御指導・御鞭撻を賜わります様お願い申し上げます。

敬具」

なお、野口実さんのお住いは、千葉市長洲二の十六の五です。四月に姉崎高に転任。

（細野）

第二章　限りなき前進――この十年――



沿革年表（その二）……二
回　想……第八代校長　村田　泰次郎……七
教育内容充実の時代……第九代校長　畠山　一郎……九
千葉東高四十年の顔を求めて……第十代校長　相川　勝衛……一一
1　教育課程の変遷……吉野　博……一五
2　東雲祭小史……桜井　久温……一六
3　校外行事の歩み　千葉東高の修学旅行　キャンプについて……平安　隆雄……一七
4　進路この十年……南部　博昭……一九
※東高断片④　――総合選択制――……朝日　伊豆雄……二三
5　静読十年　――図書館の歩み――……星野　志朗……二四
6　国際青春　――海外交流教育小史――……鈴木　健生……二一
海外交流思いつくままに……（旧職員）曽根　正之……二五
アナタハ、ハッピーな教師……亀山　仁寿……二七
My Life at Chiba Higashi……Marna Fletcher……二八
日本印象記……リン・ドネラン……二九
留学生に聞く……二一
AFS生としての一年間……井上　裕雄……二二
交換留学を終えて思う事……青山　和美……二三
アメリカへの短期留学……島田　幸子……二三
アメリカでの交換留学を振り返って……青山　ミェ……二五
7　四十周年記念学園歌のできるまで……井辻　紀一……二八
8　東雲に歌声よ轟け　――創立四十周年記念式典寸描――　教頭　細野　直……二四

沿革年表（その二）

〔昭和46年度〕

46年

4・6　新任式、始業式

7　入学式

26　一年生宿泊研修会（第一団一、二、三、四、九組）（～二七日）

27　二年生スポーツ大会、三年生遠足

28　一年生宿泊研修会（第二団五、六、七、八組）（～二九日）

6・5　就職模試（この年で終わる）

9　教育課程編成会議（六・二四、七・八、九・二一、一一・二二）

10　三〇周年記念誌編集委員会

14　H・R経営研修会

17　衛看二年生戴帽式、生徒会役員選挙

18　校内体育大会球技の部（校内・スポーツセンター）

21　衛看二年生実習開始（～七・一七）

24　学年別個人指導事例研修会

25　実力テスト（一・二年）、校長協会模試（三年）

28　H・R経営研修会

7・20　終業式

9・1　始業式、ノースバンクーバー派遣生徒報告会

4　衛看三年生実習開始（～一一・一一）

6　献血

22　実力テスト

29　三〇周年記念式典準備委員会（一〇・一四、一〇・一八）

11・2　創立三〇周年、新校舎落成記念式典、東雲祭第一日

3　東雲祭第二日

10　校内体育大会陸上競技の部（スポーツセンター）

14　第二学年修学旅行（～一八日、奈良、京都）

12・20　校内体育大会球技の部（校内）

24　終業式

47年

1・8　始業式

18　実力テスト

2・7　雪のため短縮四五分午前中授業

15　断郊競技大会（東大検見川グラウンド）

3・10　卒業式

24　終業式

6月　ソユーズ11号の三飛行士死亡

7月　東亜国内航空ばんだい号、全日空B七二七墜落

10月　天皇訪欧。日米繊維協定。英国ECに加盟

11月　中国、国連復帰

12月　印パ戦争。史上最大のホテル火事（韓国大然閣ホテル）

1月　横井庄一氏生還
2月　札幌オリンピック　七〇m級ジャンプで日本メダルを独占
　連合赤軍事件（浅間山荘）。ニクソン訪中
3月　高松塚古墳発掘

この年は四四年の学校封鎖の影響もあり、H・R経営の研修会が比較的多く開かれた。更に創立三〇周年記念式典が新校舎落成記念と兼ねて行われた。東雲祭の初日に挙行されたので盛大な式典であった。昭和四六年一月一日より昭和四六年六月三〇日まで生徒会不成立。

〔昭和47年度〕

47年
4・6　新任式（校長　村田泰次郎氏より畠山一郎氏へ）
　始業式
7　入学式
22　新入生歓迎会
26　学年遠足（一年マザー牧場、二年多摩動物園、三年上野公園）
27　交通ストのため臨時休校
5・19　必修クラブ活動指導委員会（六・一二、六・二六、九・一三、一一・一三）
5・23　H・R経営研修会
24　PTA期成会総会（第五限公開授業）
6・2　校内体育大会球技の部（スポーツセンター）
5　教育実習（〜一七日）
15　衛看二年戴帽式（今年度でとりやめ、昭四二〜昭四七）
20　実力テスト
21　衛看二年実習（〜七・一七）
7・10　第一学年キャンプ（日光中禅寺湖畔）
18　カナダ、ノースバンクーバー市より親善学生来校
20　終業式
9・1　始業式
4　衛看三年実習（〜一一・七）
27　実力テスト
10・2　教育相談事例研修会
14　第二学年修学旅行（〜一八日、高松、鳴門、京都、奈良）
26　千葉テレビ看護科取材
11・2　校内体育大会陸上競技の部（スポーツセンター）
12・6　生徒総会
8　教育相談事例研修会
19　校内体育大会球技の部（〜二一日、校内）
23　終業式
48年
1・8　始業式

1・29　生徒会立合演説会（選挙は三一日）
2・8　断郊競技大会（東大検見川グラウンド）
13　ロータリー留学生リン・ポールトンさん来校（一年間滞在）
14　実力テスト
3・10　卒業式
24　終業式

4月　川端康成氏自殺
5月　大阪千日ビル火災（死者一一八名）。沖縄復帰。テルアビブ空港テロ発生
7月　長沙漢墓発掘（二一〇〇年前の女性の遺体発掘）
9月　ミュンヘンオリンピックテロ発生
3月　水俣病判決

海外交流はこの年より本格化した。オーストラリヤ、カナダ等から留学生や親善使節が来校し多彩であった。また活動を停止していた生徒会が新規約のもとで再建された（四七・一・一〜四七・一二・三一まで生徒会不成立、四八・一・一より再建）。また書道部の活躍も目立った（三年連続書初展全国優勝）。第一学年日光キャンプはじまる。東雲祭実施せず。

〔昭和48年度〕

48年
4・6　新任式、始業式
7　入学式
17　交通ストにより一限目自習、五、六限目カット
21　新入生歓迎会
27　交通ストで臨時休校
5・2　学年遠足（一年マザー牧場、二年多摩動物園、三年鎌倉他）
22　衛看三年実習（〜七・一〇）
30　防災訓練
6・1　教育相談事例研修会
5　生徒会立合演説会
6　校内体育大会球技の部（スポーツセンター）
7　生徒会役員選挙、生徒総会
18　PTA期成会総会
19　AFS生レベッカ・メアリーヒートンさん来校（〜七・二〇）
7・5　光化学スモッグ注意報
16　カナダ、ノースバンクーバー市より親善使節来校
18　演劇鑑賞会「GOOD LUCK」＜青春の選択＞青年劇場
19　交通安全指導
20　終業式

7・24　第一学年キャンプ（日光中禅寺湖畔）
9・1　始業式、離新任式
3　衛看二年実習（～一〇・六）
6　献血
21　教育相談研修会
29　東雲祭（～三〇日）
10・4　実力テスト
11・2　第二学年修学旅行（～八日、岡山、四国、鳥取、奈良、京都）
15　校内体育大会陸上競技の部（スポーツセンター）
28　教育相談事例研修会
29　生徒会立合演説会、生徒総会（選挙一二・一）
12・20　校内体育大会球技の部（放課後、校内）（～二二日）
23　終業式

49年

1・8　始業式
25　実力テスト
30　H・R運営研修会
31　ロータリー留学生、リン・ウィリアムズさん来校（一年間）
2・6　校内体育大会マラソンの部降雪の為延期
16　全国書初展　総理大臣賞受賞
校内体育大会マラソンの部（スポーツセンター）
3・1　交通ストにより休校
11　卒業式
3・15　日米高校生交流プログラム派遣団出発（～四・一〇）
（団長　松本正子先生）
20　講演会　千葉大教授　四ノ宮　晟氏「能率的な学習方法について」
23　終業式

4月　国鉄赤羽駅で放火騒ぎ（三〇〇〇人騒ぐ）
7月　ハイジャック事件続発（三七・一一、一二月）
8月　金大中氏事件
10月　第四次中東戦争おこる。（石油生産削減）
11月　大洋デパート火災（一〇三名死亡）。物価高騰（卸売物価前年比二二・三％上昇）
12月　江崎玲於奈博士ノーベル物理学賞受賞
2月　小野田寛郎氏生存を確認。パレスチナゲリラ、クエートの日本大使館占領
3月　エアバス墜落（トルコ航空）死者三四四名

今年度より日米高校生交流プログラムスタート（姉妹高米国カリフォルニア州サンタクララ市〝ブクサー高校〟）。総務委員会「全国高校放送コンテスト研究論文部門」で全国高校長協会賞受賞（第三位）。そして東雲祭の復活、新教育課程の実施（一年生）。AFSで坂巻政明君の米国留学、第一学年の夏休み日光キャンプと話題の多い年であった。

〔昭和49年度〕

49年

4・6　始業式、新任式
8　入学式
11　交通ストのため臨時休業（～一三日）
20　新入生歓迎会
24　学年遠足（一年行川アイランド、二年養老渓谷、子供の国、鋸山、三年鴨川シーワールド）

5・7　必修クラブ準備委員会（七・三、一二・三、一・一七、三・一一も開く）
8　生徒会立会演説会
10　生徒会役員選挙
17　教育相談研修会、三年衛看実習（～六・一八）
18　光化学スモッグ注意報（六・七、九・五）
30　防災訓練

6・3　村越通信制主事死亡（主事室八：四五）
12　校内体育大会球技の部（スポーツセンター）
米国高校生来校（カリフォルニア、サンタクララ市ブクサー高校～七・三）
13　PTA期成会総会（公開授業）
15　米国高校生歓迎会
18　実力テスト

6・19　AFSサマープログラムによりマリアナさん来校
20　性教育についての研修会
27　生徒総会、貧血検査（～二八日）
29　米国高校生歓迎会

7・1　県高校生海外派遣プログラム（三―六岩崎君）
5　交通安全講習会
18　二・三年男子格技大会。女子創作ダンス発表会
20　終業式
25　第一学年キャンプ（～二九日、日光菅沼）

9・2　始業式
4　衛看二年実習（～九・二五）
28　東雲祭（～二九日）

10・2　実力テスト
17　総合選抜制度検討委員会

11・1　校内体育大会陸上競技の部（スポーツセンター）
7　生徒会立会演説会、選挙
17　第二学年修学旅行（～二一日、京都、奈良）
19　交通ストのため臨時休業
27　交通ストのため臨時休業

12・11　PTA研修会「脳のはたらきと健康」千葉大教授　萩原弥四郎氏
19　校内体育大会球技の部（サッカー、バスケット）（～二〇日）
21　音楽鑑賞会（立川清登氏、体育館）

12・23　防災訓練
24　終業式

50年
1・8　始業式
24　実力テスト
2・6　校内体育大会マラソンの部（スポーツセンター）
3・10　卒業式。日米交流プログラム米国派遣団出発（団長　曽根正之教諭～四・一）
20　講演会「高校生の男女交際のあり方」筑波大教授　相川高雄氏
24　終業式

4月　ブラント西独首相辞任（八日）。国連資源特別総会開催（九日）
7月　糸山英太郎参議院議員、居直り登院（二四日）
8月　ニクソン米大統領辞任（七日）（ウォーターゲート事件）
　朴大統領狙撃事件（文世光事件）。陸英修夫人死亡（一五日）
　三菱重工ビル爆弾事件、多数の死傷者（三〇日）
10月　ミスター巨人、長島引退（一四日）。モハメド・アリ奇跡のカムバック（三〇日）
11月　アラファト議長、国連総会へ正式招持（一三日）
　三木内閣誕生

〔金脈問題で倒れた田中内閣にかわって清潔を看板に〕
〔スタート（一三日）〕
1月　青木湖にスキーバス転落・二四人死亡（一日）

日米高校生交流プログラム（国際教育交換協議会主催）により、はじめて米国カリフォルニア州サンタクララ市、ブクサー高校より生徒一一名、引率教師二名（スミス夫妻）来校。

〔昭和50年度〕

50年
4・7　始業式、新任式
8　入学式
19　新入生歓迎会
24　生徒総会
25　渡米生徒・保護者懇談会、必修クラブ運営委員会
5・2　学年遠足（一年昭和の森等、二年上野公園等、三年鎌倉）
8　交通ストのため臨時休業（～一〇日）
14　生徒会立会演説会
15　生徒会役員選挙、防災施設説明会
28　防災訓練
30　校内体育大会球技の部（スポーツセンター）

5・31　衛看三年実習開始（〜七・一一まで）
6・12　教育相談事例研修会
16　ＰＴＡ総会
18　フィリピン少女世界一周親善大使学校見学
19　実力テスト
24　ブクサー高校生来校、歓迎会（〜七・一九まで）
7・15　交通安全講習会
19　終業式
9・1　始業式
3　衛看二年実習開始
10　光化学スモッグ注意報（〜一二日まで連続）
27　東雲祭　〜二八日まで
10・2　教育課程検討委員会（一一・一七、一二・二五）
7　実力テスト
30　第二学年修学旅行（〜一一・三、関西、四国、山陰方面、二班に分離）
11・13　生徒会立会演説会、教育相談指導事例研修会
14　生徒会役員選挙
20　校内体育大会陸上競技の部（スポーツセンター）
21　ＰＴＡ研修会
26　交通ストのため臨時休業（〜一二・三まで）
12・24　防災指導〔講演と映画〕千葉北消防署長他
25　終業式

51年
1・8　始業式
29　実力テスト
2・6　校内体育大会マラソンの部（スポーツセンター）
3・10　卒業式
12　日米交流プログラム派遣団出発（団長　原口与一教諭）
18　能楽教室（文化会館）
24　終業式

5月　英女王来日（九日）。企業爆破犯逮捕（二〇日）
6月　スエズ運河再開（五日）
7月　宇宙船内で歴史的な握手を米ソ船長かわす（一七日）。ヘルシンキで欧州安保・協力首脳会議開催（三〇日）
8月　日本赤軍、クアラルンプール事件（六日）
10月　天皇ご訪米（八日）。アンドレ・サハロフ博士、ノーベル平和賞を受ける（九日）。広島カープ、初優勝（一五日）
12月　米中交歓（鄧小平副首相とフォード大統領）（四日）。三億円時効（一〇日）
3月　北海道庁爆破。二人死亡、多数の重軽傷者（二日）

総合選抜制による学力検査がはじめて実施された。光化学スモッグ注意報がよく出されるようになった。国際交流プログラムがすっかり定着した。交通ストによる臨時休業

が随分あった。

〔昭和51年度〕

51年

4・6　始業式、新任式

7　入学式

14　交通ストのため臨時休業（二〇・二一日も）

15　米国派遣団帰国

17　新入生歓迎会

5・4　三年遠足（鎌倉）一・二年降雨中止

13　教育課程検討委員会（六・一一）

20　生徒会立会演説会、選挙

6・1　衛看三年実習（～七・二）

7　防災訓練

14　ＰＴＡ期成会総会（公開授業）

16　校内体育大会球技の部（スポーツセンター）

24　実力テスト

7・15　進学懇談会

20　終業式

9・1　始業式

3　衛看二年実習（～二九日）

13　教育相談研修会、木村薫先生「問題を持った生徒とその予防」

9・25　東雲祭（～二六日）

10・5　実力テスト

8　第二学年修学旅行（～一二日、奈良、京都、石山、二班に分離）

19　校内体育大会陸上競技の部（スポーツセンター）

11・8　ＰＴＡ研修会「未来社会と青年の進路選択」日本経済新聞編集論説委員　黒羽亮一氏

10　午前中授業（天皇御在位五〇年記念）

18　生徒会立会演説会、選挙

25　大学受験手続説明会

12・22　演劇鑑賞会、東京芸術座、ゴーゴリー作「検察官」（文化会館）

23　防災訓練、生徒総会

24　終業式

52年

1・8　始業式

2・3　実力テスト

17　朝鮮民主主義人民共和国教育文化職業同盟代表団来校

18　校内体育大会マラソンの部（スポーツセンター）

3・10　卒業式

22　映画教室「かけがえのない地球、黄色いリボン」（市民会館）

24　終業式

5月　五つ子誕生（四日）。イタリア共産党（ベルリンゲル書記長）躍進（一六日）
7月　コマネチ選手（ルーマニア）華麗な演技（一八日）。田中角栄、ロッキード事件で逮捕（二七日）
8月　桜美林高校優勝、東京に深紅の大優勝旗（二二日）
9月　バイキング一号、二号、火星へ軟着陸（四日）。ミグ二五戦闘機、函館空港に着陸（一二日）。毛主席死去（一七日）
10月　王、ベーブルースに並び七一四号（一〇日）。酒田市（秋田）で大火（三〇日）
11月　カーター勝利、新大統領に（三日）。ニセ電話事件、鬼頭史郎判事補証人喚問（一二日）
12月　南北ベトナム統一（四日）。福田内閣誕生（二四日）
1月　毒入りコーラ殺人事件（港区公衆電話ボックス）（四日）。カーター米大統領就任（二〇日）
3月　ガンジー政権倒れる（二二日）

総務委員会、全国高校放送コンテストで文部大臣賞（一位）を受賞。

〔昭和52年度〕

52年
4・6　始業式、新任式
7　入学式
16　新入生歓迎会
20　交通ストのため臨時休業
28　生徒総会
5・6　光化学スモッグ注意報
11　学年遠足（一年養老渓谷等、二年昭和の森等、三年勝浦海岸）
19　生徒会立合演説会
6・1　校内体育大会球技の部（スポーツセンター）
3　衛看三年実習開始（～七・二）
6　PTA期成会総会（公開授業）
8　防災訓練
11　進学懇談会
13　生徒指導研修会　向後正氏
20　ブクサー高校生来校（～七・一五）
23　実力テスト
7・18　交通安全講習会
20　終業式
9・1　始業式
24　東雲祭（～二五日）
10・6　実力テスト

10・12 校内体育大会陸上競技の部（スポーツセンター）
31 AFS短期留学生二名来校（～一一・一五）
11・11 第二学年修学旅行（～一五日、京都、奈良）
17 生徒会立合演説会、選挙
24 PTA研修会「共通一次テストについて」（山川教諭）
12・1 第一学年合唱コンクール
22 防災講話
23 音楽鑑賞会（文化会館）
24 終業式

53年
1・9 始業式
2・3 実力テスト
17 校内体育大会マラソンの部（スポーツセンター）
3・10 卒業式
11 日米高校生交流プログラム派遣団出発（団長　鈴木健生教諭）
24 終業式

8日 有珠山噴火（七日）。鄧小平氏、副首席として復活（一八日）。東洋大姫路高校、夏の高校野球で初優勝（二〇日）
9月 三億円（愛知医大付属高校の預金等）強奪（一四日）
10月 日航機乗っ取り、犯人の要求で釈放犯グッカへ（一日）
ルフトハンザ機乗っ取り、西独政府、強行策（一七日）
11月 ソ連、革命六〇周年（七日）
サダト・エジプト大統領、イスラエルを訪問、ベギン首相と歴史的握手（一九日）
12月 飛鳥田氏、社会党新委員長に（一三日）
3月 過激派、成田空港を奇襲攻撃、管制室に乱入（二六日）

今年度の派遣で、米国カリフォルニア州ブクサー高校との姉妹校の関係は打ち切り、明年度より、ペンシルベニア州チャールズボエム、ミドルベア高校との関係が成立。総選一期生の卒業で本県の受験界の地図、大幅に変化する。

〔昭和53年度〕

53年
4・6 新任式（校長、畠山一郎氏より相川勝衛氏へ）、始業式
7 入学式
15 新入生歓迎会
20 三年進路説明会
25 交通ストのため臨時休業
27 生徒総会
5・4 学年遠足（一年東京・上野公園、二年鎌倉・勝浦、三年勝浦）
16 光化学スモッグ注意報（六・五、六・三〇、七・四、七・七）
18 生徒会立合演説会、選挙

5・31　ＰＴＡ期成会総会
6・9　校内体育大会球技の部（スポーツセンター）
10　衛看三年実習（～七・一二）
12　校内職員研修会　千葉大教授・坂本氏「学校教育の使命」
19　五段階評価の基準検討（九・二〇も）
22　実力テスト
7・17　交通安全講習会
20　終業式
9・1　始業式
4　衛看二年実習（～二二日）
7　共通一次テスト出願手続き説明会
16　東雲祭（～一七日）
10・5　実力テスト　六日（社）、九日（理）
12　校内体育大会陸上競技の部（スポーツセンター）
16　修学旅行検討委員会（三泊四日原案）
11・2　評価基準検討委員会
13　ＡＦＳ短期留学生（二名）来校（～一八日）
16　生徒会立合演説会、選挙
25　修学旅行（～二九日）
12・2　ＰＴＡ研修会　千葉大教授　四宮晟氏「高校生の心理と人間関係」
21　能楽鑑賞会（文化会館）
23　終業式

54年
1・8　始業式
2・10　校内体育大会マラソンの部（スポーツセンター）
3・10　卒業式
11　日米交流プログラム派遣団出発（団長　亀忠夫教諭）
24　終業式

4月　大韓航空機、ソ連領空を侵犯、強制着陸
6月　宮城沖地震（M七・四）
7月　世界初の試験管ベビー誕生（イギリス）
8月　スモン訴訟、原告側が勝訴。王貞治八〇〇号本塁打達成
11月　コレラ騒動（池之端文化センター）。「人民寺院」事件（ガイアナ）。中東和平会談（キャンプデービット）
12月　大平内閣誕生。イランで反政府運動。米中国交樹立
1月　イラン革命（パーレビ国王、出国）
3月　ダグラス・グラマン疑惑。エジプト、イスラエル平和条約（サダト、ベギン、カーター）

共通一次テスト実施さる（本校国公立大合格者数は躍進した）。ペンシルベニア州チャールズボエム、ミドルベア両高校に生徒派遣。書道部、全国高校書き初め展で全国優勝（四九年度～五三年度まで五年連続）。

〔昭和54年度〕

54年

4・6　新任式、始業式
7　入学式
16　新入生歓迎会
24　サラ・サンドフォード嬢（日本の高校を研究のため）来校（～五・二）
25　交通ストのため臨時休業
5・1　生徒総会
2　光化学スモッグ注意報（五・二二、七・六）
4　学年遠足（一・二年白里・片貝海岸、三年上野公園）
16　生徒会立合演説会、選挙
19　PTA期成会総会（公開授業）
29　衛看三年実習（～七・三）、二年進路適性検査
6・1　校内体育大会球技の部（スポーツセンター）
9　マレーシアより学校視察（二名）
16　進学懇談会
21　実力テスト、施設整備計画検討委員会（九・一〇、一〇・一）
25　生徒指導研修会
7・10　日米交流プログラム検討会
19　防災訓練
20　終業式
9・1　始業式
3　教育実習生オリエンテーション
4　衛看二年実習（～二八日）
10　共通一次テスト出願手続き説明会
14　東雲祭（～一五日）
10・4　実力テスト（五日社、八日理）
18　修学旅行（～二二日、奈良・京都）。野村典平先生AVE自作教育コンクール全国最優秀賞
25　校内体育大会陸上競技の部（スポーツセンター）
29　AFS短期留学生サラ・ボイル嬢来校（～一一・二）
11・15　生徒会立会演説会、選挙
27　国際交流米国派遣、今年度中止を決定
12・3　教育相談研修会
8　PTA研修会「欧米の教育と新教育課程のねらい」相川校長
20　演劇鑑賞会「野麦峠」（文化会館）
22　防災訓練
24　終業式

55年

1・8　始業式
12　共通一次テスト会場に校舎貸与のため休業
2・1　実力テスト
16　学内体育大会マラソンの部（スポーツセンター）
3・10　卒業式

3・24　終業式

4月　米スリーマイル島で原発事故
5月　英国で初の女性首相（サッチャー）
6月　SALTⅡ調印（カーター、ブレジネフ）。東京サミット開催
7月　東名日本坂トンネル内で火災事故
9月　ランラン死す
11月　朴大統領射殺。KDD事件発覚。東京国際女子マラソン
1月　アフガニスタンにソ連軍事介入

新館（通信棟等）落成。日米交流プログラムは一年間を検討期間とするため今年度は派遣中止。

〔昭和55年度〕

55年
4・7　新任式、始業式
8　入学式
12　新入生歓迎会
16　交通ストのため臨時休業
26　旧通信課程教室、部室等の解体作業開始
5・1　生徒総会
5・2　学年遠足（一年白里・片貝海岸、二年鋸山、三年勝浦海岸）
6　三年進路説明会
7　グランド整備工事開始
8　教育課程検討委員会（六・二六、一〇・二九、一一・二〇、一二・五）
13　生徒会立合演説会、選挙
17　PTA期成会総会（公開授業）
30　校内体育大会球技の部（スポーツセンター）
31　衛看三年実習（〜七・一二）
6・5　光化学スモッグ注意報（六・一四、六・一六、六・二五）
6　施設整備検討委員会
18　実力テスト
19　AFS短期留学生レーサージュリアさん来校（〜七・一九）
24　教育相談研修会
26　新教育課程検討委員会
7・10　教育実習希望者面接
12　進学懇談会
19　終業式
9・1　始業式、避難訓練
2　教育実習オリエンテーション
3　衛看二年実習（〜一〇・一一）
9・9　共通一次テスト出願手続き説明会

二年合同ＬＨＲ（三年コース選択）
13　東雲祭（～一四日）
24　教育実習開始（～一〇・七）
29　校内体育大会陸上競技の部（スポーツセンター）
10・3　実力テスト（理・社一〇・三一）
11・7　グラウンド土盛り工事開始
11　衛看一～三年合同ＬＨＲ、講師　国立千葉病院　西川医長
12　同和教育委員会設置
13　生徒会立合演説会、選挙
17　同和教育研修会、県教委同和教育室・吉野幸久氏来校
18　大学受験手続き説明会、教育相談研修会
　ＩＥＡ（国際数学教育調査）テスト
25　修学旅行（～二八日、奈良・京都）
12・4　ＰＴＡ研修会、読売新聞社・多田実氏「生きがいの今昔」
19　音楽鑑賞会、東京混声合唱団（県文化会館）
23　防災訓練
24　終業式

56年
1・8　始業式
10　共通一次テスト会場に校舎貸与のため休業
2・2　実力テスト
10　校内体育大会マラソンの部（スポーツセンター）
2・21　ＰＴＡ幹事会、期成会理事会
　・創立四〇周年記念事業について
　・中庭整備計画について
3・10　卒業式
　日米交流プログラム派遣団出発（団長　亀山仁寿教諭）
24　終業式

5月　一億円拾得事件
6月　大平首相急死
7月　モスクワ五輪
8月　金大中氏裁判。富士山で落石事故。静岡地下街で大爆発。新宿バス放火事件
10月　イラン・イラク戦争勃発。富士見産婦人科乱療事件
11月　ボイジャー一号、土星へ接近。米大統領にレーガン氏。林彪・四人組裁判。イタリア大地震
1月　米レーガン政権発足
3月　韓国金斗煥大統領が就任。レーガン狙撃

国公立大合格者飛躍的に増加（総合選抜制度廃止後の初めての卒業生）。日米高校生交流プログラム再開（ペンシルベニア州チャールズボエム、ミドルベア両高校へ）。グラウンド整備終了（正門現在の姿となる）。創立四〇周年記念式典の準備、新教育課程の決定などが行われた。同和教育始まる。ＮＨＫ学園協力校、本校より愛国学園（四街道）に移管。

〔昭和56年度〕

56年

4・6　新任式（校長、相川勝衛氏より須田義男氏へ）、始業式
7　入学式
11　新入生歓迎会
21　三年進路説明会
30　生徒総会
5・2　学年遠足（一年九十九里浜、二年勝浦・昭和の森、三年上野公園）
14　生徒会立合演説会、選挙
16　ＰＴＡ期成会総会
6・1　校内体育大会球技の部（スポーツセンター）
衛看三年病院実習（～七・一三）
18　三年実力テスト
23　教育相談研修会
7・17　防災訓練
20　終業式
9・1　始業式
2　教育実習オリエンテーション
4　衛看二年病院実習（～九・三〇）
8　共通一次出願手続き説明会
19　東雲祭（～二〇日）
24　教育実習開始（～一〇・七）
10・9　実力テスト（一〇・三一、理・社）
10・14　校内体育大会陸上競技の部（スポーツセンター）
11・2　校内合唱コンクール
4　創立四〇周年記念式典
12　生徒会立合演説会、選挙
17　教育相談研修会
大学受験手続き説明会
23　修学旅行（～二八日、奈良・京都）
28　ＰＴＡ研修会　自治医科大教授　藤本博氏「親の立場、子の立場」
12・19　芸術（能・狂言）鑑賞会（県文化会館）
24　終業式

57年

1・8　始業式
16　共通一次テスト会場に校舎貸与のため休業
2・1　一・二年実力テスト
10　校内体育大会マラソンの部（スポーツセンター）
3・10　卒業式
24　終業式

4月　スペースシャトル帰還
5月　仏大統領にミッテラン氏、左翼政権誕生
6月　中国の新主席に胡耀邦氏
7月　第二臨調が一次答申、行革法成立（一一月）
10月　サダト・エジプト大統領暗殺。ロッキード事件で榎本前

夫人が爆弾証言。北炭夕張新炭鉱でガス突出事故。福井京大教授にノーベル化学賞

11月　ロッキード事件で小佐野実刑

12月　ポーランドに戒厳令、軍政下に（一二月）

四〇周年記念事業として、中庭の整備が完了。記念学園歌を生徒から公募、一一月に校内合唱コンクール、記念式典が行われた。校舎の一部機械警備化が始まる。

事務室職員

回想

第八代校長　村田　泰次郎

昭和四十四年着任した直後の四月十九日、千葉市内で高校生の集団デモが初めて行われ、そのなかに本校の生徒が参加していることを知らされて、衝撃を受けたことを想い出しています。

生徒心得第九条『集会および掲示は、事前にホームルーム担任または顧問教師をへて、校長の許可をうける。』について、生徒の一部より撤廃又は改正を主張する動きがこのころから表面に出るようになって、校内は次第に落ち着かない雰囲気になって行ったようであります。生徒総会等で生徒の質問に対して話した要旨は、次のようなことでありました。

「生徒心得は、本校教育の目的を達成するためにつくられた学校生活のルールであるから、本校の生徒として入学をして来た者は、進んで従うべきものであります。

学校における集会並びに掲示の意義は、教育上の効果をねらった一つの教育方法であるので、当然学校の教育活動の一環であり、いかなる場合も校長は責任を負わねばなりません。したがって学校が教育的責任から、その目的に基づいて検討することは当然のことであります。もし第九条を撤廃又は改正した場合、生徒諸君一人一人にどれだけプラスがあるか。恐らく本校が教育の場であることを放棄するのと同じ結果になってしまい、学校にとってはマイナスになることだと判断されます。教師や親も入れないような排他的な集会や行動に高校生が参加し、学校の指導の手が届かない所で独善的な行動をとることは、やってはならないことであります。このような集会や行動の責任者や組織の実態は、不明確であったり、責任者自体に問題がある場合が多いので、参加する者の心身に危害が及ぶ恐れもあります。事態を冷静に判断して動揺することなく、高校生らしい健全な道を進んでほしいのであります。」

先ず、ホームルームでよく話しあい、学年集会から生徒総会と時間をかけて全校の生徒諸君によく考えてもらい、学校の正常化のために理解と協力が生徒諸君のなかから出てくるように祈りながら先生方と努力を重ねてきましたが、校内の雰囲気は平静な状態に戻ることがなかなかできなかったようであります。

生徒会本部役員の任期が同年六月三十日までであったので、七月には新役員の誕生をみたのでありますが、その後、次のようなことが発生しました。

九月一日の始業式に、他校生約十名が始業式粉砕を叫んで正門から侵入して来ました。当日は校庭で始業式をすることを予告していたのですが、朝から焼けつくような暑さであったので、急遽変更して体育館に全校が集合し始業式を行いました。指導部長の先生を中心に数名の先生方が体育館の外で校庭を警戒していたので、侵入して来た時は始業式の最中でありましたが、生徒諸君の知らぬ間に侵入者を校外へ押し出すことができました。この時の揉み合いで、侵入者の落していったものは、手榴弾のようなものであることが後で分りました。校庭で始業式の最中にこれを投げ込まれたら、けが人が出たことは必至であったでしょう。

九月三十日早朝、新校舎西側四階の教室を侵入者によって封鎖されるという突発事件が発生しました。この突然の騒ぎで始業時から授業は開始することができず、校庭に全校が集合して事態の推移を見守ることになったのですが、誰も居ないところで何やらわめき叫んでいた侵入者が、私たちの気付かないうちに、お昼前こっそり逃走してしまったのであります。全校の先生方の結集された力によって、幸いに生徒諸君にけが人も無く、施設設備も破損されないで、不祥事が短時間に終息をみることができたことは、有難いことでした。しかしながら、侵入者によって学校の一部が封鎖され、その日の授業ができなかったということは、校長としてまことに申訳ないことでありました。忘れることのできない痛恨事であります。

十月五日文化祭第二日。一部の生徒が校庭で集会を要求して騒ぎ出し、当日文化祭に来ていた他校生のなかにも同調者が出て、集会を持とうとする事態が発生。関係の先生方が直ちに校庭に飛び出して、集会は認められない、速やかに校外に退去するように繰り返し呼びかけ、集会を持たせなかったのであります。この時、人込みの中で、文化祭の客とは思われない人相風体の良くない二人の男を目撃しました。恐らくこの人たちが一部生徒を背後で指導していたのではないかと、印象に

残っています。

その七月から生徒会本部役員になった諸君は、生徒会顧問の先生の御苦労を思い、『集会、掲示の自由』問題に正面から取り組み、連続して発生する事件にもひるむことなく、学校の正常化のために勇気ある努力を継続していってくれましたので、その年の暮れに近いころには、ようやく落ち着いた静かな状態に向かうことができるようになったのであります。苦しいことも多かったと思われるのに、努力された生徒会本部役員諸君に感謝を捧げます。

教育内容充実の時代

第九代校長　畠山　一郎

新装なった千葉東高校に赴任し、身のひきしまるのを覚え、多年の先輩各位の御努力の跡をさらに高めるため、全力をふるって学校経営にあたることを固く心に誓いました。

古い友人たちがたくさん玄関に出迎えて激励してくださったことも忘れることのできないありがたいことであります。故石毛校長先生のもとで、御指導をいただいたこと、砂ほこりにまみれた旧校舎のこと、放火事件にあってこまったこと等が次から次へと回想されてきて、懐しさがこみあげてくるのをどうすることもできませんでした。今や千葉東高校は私にとって「ああ我が母校」であります。憧れの母校に心許す友人である剣持教頭さんと共に勤務できましたことは、まことにありがたいご縁であり、共に教育内容の充実をはかることを固く誓いあったのであります。

〈立替金等のこと〉　新校舎建設にかかる経費を期成会組織をつくり、一時立て替えるしくみがとられており、着任の年の昭和四十七年から三か年にわたり、一八九八万、一〇九二万、一〇〇〇万と立て替えをしてきました。さらに校舎建設に伴う設備費関係は後援団体の負担であり、昭和四十七年から五十三年まで二四七三万を年次計画で返すようにしてまいりました。在職中の六か年間はこれらの支出がほとんどで、新たな施設設備はできませんでした。旧校舎時代を体験しているも

のにとっては、少々の不便は何も苦にならず、感謝をして活用させていただきました。旧体育館を格技専用にして、授業やクラブ活動の能率をあげるようにもいたしました。

＜教育内容充実をめざして＞　教職員が心を一つにして授業方法の工夫改善をはかり、どうすれば生徒の実力をつけるかということをめざして努力いたしました。教職員の皆さんは個性ゆたかな研究的態度の方が多く、個人研究に取り組んでいる方も多くおられました。千葉市の人口増に伴い高校進学率もたかまり、年ごとに優秀な生徒が入学してまいりました。

授業熱心な先生が優秀な生徒を指導するのでありますから、飛躍的に生徒の実力がたかまっていったことは申すまでもありません。一人一人の生徒が自己の能力適性をよく自覚し、それぞれの目標の人生選択を喜んでしていくことをみて、私共の努力のかいがあったものと信じております。とくに進路指導部で作製した進学の手引が充分活用されるようになったことも実力向上のあらわれと存じます。

クラブ活動の面でも、先生方の御指導で、まことに熱心に活動しておりました。クラブ活動と学業成績の向上とが、両立していることも特筆してよろしいと思います。汗を流して共に練習をした剣道クラブやバスケットクラブの皆さんのこと等心に残る思い出であります。

＜看護科のこと＞　看護婦養成の重要性ということで、故高木良雄教育委員さん等の熱心な提案で本校に設けられたものであります。医師講師のことで千葉大学や国立病院にたびたびお願いにあがったことなど、千葉東高ならではの思い出であります。永井先生にはそのつどいろいろと案内をしてもらい感謝しております。全国の看護学校の校長会等で、この道の重要性の認識を深め、在職中看護科の古典の授業を担当して生徒を激励してまいりました。男女共学校の中で女子だけのクラスでありましたが、生徒会やクラブ活動ではめざましい活躍をしたものもおりました。

千葉大学医学部の綿貫重雄先生には医師講師のことでたいへんおせわになりましたことを特記してお礼といたします。先生が学校にお見えになり、医師講師のことは心配なくするから、少年剣道に格技場を提供してほしいというお話があり、今日の東雲剣友会に発展しているのであります。

＜通信制課程のこと＞　植草学園に加えて、市川の不二学園に併設課程を設け、年ごとに定員を増加し、堅実に発展してま

いりました。加えていわゆる一般生徒も増加し、働きながら学ぶ体制を確立してまいりました。NHK学園が本校に併設されて以来、主に全日制課程の職員の皆さんにとくにおせわになりましたことを感謝いたします。

通信制に教頭として赴任してまもない昭和四十九年六月三日、私と対談中に急逝された故村越林太郎教頭さんのことは、まことに悲しいできごとであり、同先生のご冥福をお祈りいたします。

さて定年退職のきまった三学期のさいごの授業に、普通科、看護科の双方の教室で、とつぜん花束や記念品をいただき、思わず涙ぐみ、お礼のあいさつも満足にできなかったことは感激のひとこまとしていつまでも忘れることはありません。

剣持、石母田、小島、高蝶、通信制の中野、村越、鵜沢の各教頭先生、田中、石渡、薄木の事務長さんはじめ、多くの親切な教職員の皆さんにささえられ、充実した毎日を過させていただいたこと、ただ感謝あるのみでございます。千葉東高校、栄えあれ。

（愛国短大教授）

千葉東高四十年の顔を求めて

第十代校長　相川　勝衛

＜千葉三高の思い出＞　昭和五十三年四月に千葉東高に着任しましたが、私の思い出は千葉三高時代に遡ります。二十五年四月、いわゆる高等学校再編成によって県立の男女共学校となり、今日の発展への基礎が確立したわけですが、千葉市は当時の財政事情のもとで、千葉商高とともに二つの高校を持ちあぐんでいました。市立高女は、戦災にあい現在地の荒れはてた旧陸軍施設を使用していたため、外観はお粗末ですが、元気一杯の若い諸川校長が大きな希望を懐いて学校経営に挺身されていました。前任校長親泊先生の下で、高校再編成や教職員人事に関係した私たちは、新生三高にはせめて人材投入をと考えて優秀な教員を配置したことが思い出されます。当時三高は千葉市内で唯一の規模拡張を続ける高校でしたのでまことに都合がよく、豪華な職員配置となり、これらの人たちが後に大学や高校などで活躍されたことは広く知られるとおりで

す。千葉三高の懐かしい思い出です。

二十九年四月通信教育実施校になったことも思い出の一つです。文部省の一県一校への政策転換により、定時制併置の千葉一高と栄養専門学院併設の千葉二高から身軽な千葉三高に分離統合案を考えたことも奇縁と言えそうです。

〈五十三年当初の千葉東高〉　昭和四十一年内藤校長のご尽力で始まった校舎の改築事業は、四十六年三月若潮国体練習会場としての新体育館の完成で一段落したわけですが、五十三年四月の木造老朽校舎の残存面積はなお二、五二三㎡に達し、その残存率は県都随一（改築を控えた女子高はそれなりに整備されていた）で、新校舎の西側と北側の校地はその都度の植樹が放置されたまま、生徒はこれらに違和感もなく、屈託なく廃屋同然の旧校舎などの部室を使用していました。したがって私の初仕事は改めてマスタープランを樹立することであり、校内組織もつくり八月一杯かけて施設整備三年計画をまとめたわけです。このとき轟町移転後三十年間気付かなかった新発見がありましたが、東高にとってはまことに好運です。校舎西側の藪の中の万年塀の外側にある防火水槽の学校側に出張った四・六m×六・七mが歴然とした県有地であることを、県の国有地払下げ書類をもとに千葉財務部で確認できたからです。僅か三〇㎡の土地でしたが、埋めて通路にすることによって、新しい通信教育棟の建設と校舎北側一二m×一三三mの広い休閑地の利用が構想できました。

ところでこれらのことを総合的に眺めて、千葉東高の特異性を、㋐校地は約一万坪であるが、全日制において、普通科のほかに衛生看護科（移管検討中）があり、生徒は二七学級一、二〇〇名を数え、更に通信制が併置されて、一、五四五名の面接授業が日曜日のほか月火の両日に行われ、日曜日には通信制生徒の通学用自動車が構内に充満し、保護幼児一八名の保育が応接室で行われている。㋑グラウンドは約五千坪に過ぎないが、通学路（八〇〇m）により二分されており、一方において野球、ラグビー、サッカー、陸上競技が、他方においてソフト、バレー、テニスが行われており、練習の競合に伴う事故の予防に苦慮している。㋒県の定通モデルスクールの検討及び衛生看護科の拡充策が多年の懸案とされてきたため、木造の暫定施設が老朽のまま放置されており、一方において、緊急時の生徒の避難対策が見落されている。㋓住宅地域にある本校のブラスバンド、マンドリンの両部は、その伝統を誇り、練習に励むあまり周辺住民からの騒音に対する苦情がたえない。と判断し、計画立案の方針を、Ⓐ校地の利用度を高め、遊休地を少なくする。Ⓑ木造危険校舎等を整理して、環境整備をは

かる。ⓒ防音施設を設けて、住民との摩擦をさける。Ⓓ緊急時の避難路、消防車等の進入路を新設する。と決めました。これによって具体的な三年計画を立て、教育庁のご理解をえて在職三年間の環境整備事業を行うことになったわけですが、予想以上の速度で進められたことに対していまさらながら関係者の厚意に感謝の念で一杯です。

＜クリーン作戦と施設整備＞　初年度は、住民から苦情のある新設焼却炉の移設、通路の舗装、駐車場設置による職員自動車の整理、卓球場曳家による避難路設置、次年度は旧二階建木造校舎・便所等の撤去、校舎北側の整備と駐輪場新設など、五十五年度は当初の旧通信教育棟・旧部室の撤去に続いて裏門・ブロック塀の改修などで、一応の区切りができました。これらの費用はしめて県費一、八〇九万円、ありがたいことです。老朽施設が消滅すると、東高独特の外来者の神出鬼没状態が自然に消え、静かな学園に変わっていることが分かり、かつての学園紛争の一つの要因がここにあったのかと思うこともありました。でも生徒の一部には住み馴れた老朽施設に愛着を感じるものも見られたから不思議なものです。

積極的な施設の拡充整備については、初年度のバス通り側に設けた防球ネットを始めとして、次年度は通信教育棟（一、一一一㎡）、部室一三室の建設、第三年度は懸案のグラウンドの総合整備、通路の舗装延長、構内の植樹緑化が完成しました。これらに要した経費は二億六四四万円（内団体費は植樹と暫定部室五室の九四五万円）、ご理解とご協力をいただいた人たちの面影は忘れられません。一連の事業の中で、正面通学路の移設についてはこれに馴染んだ人々の間に感慨も深く、雑音も時々聞こえましたが、校地の高度利用のためやむをえないことだと思います。

＜千葉東高の新しい道＞　東高卒業生の進路で新しい動きが見え始めたのは、昭和四十八年春ころからで、五十年度末から徐々に上向き傾向が現れ、五十三年春の総合選抜第一回生の進路状況で一応軌道に乗ったといえます。でも千葉市内のいわゆる新興の意気に燃える学校の台頭がめざましく、巷間の評はさまざまでした。旧制中学の伝統の中に生きる木更津高校から転任した私には考えさせられることが多々あり、職員に勘づかれないように配慮しながら男子校の長所を移入するように心がけました。細かく調べますと、生い立ちから考えて当然ともいえますが、女子高経験者の多いことに驚き、東高の生徒の実態を正視して対策をたてることの必要を感じ、学年経営の重要性やルーズな部活動の点検が課題になりました。都市部の高校に見られる生徒の変化に即応した対策こそ教育充実の原点ですが、言うは易く実行は諸条件によってむずかしいこ

ともあります。授業内容の充実が職員の共通意識にのぼり始めると一段と活気がつくものです。

進路指導体制の検討、生活指導の徹底が進むにつれて、単独選抜復活第一年次生への期待が持てるようになりました。教職員、生徒の意識が高まり、特に野村松三学年主任を中心とする関係教員の努力が生徒の発憤を促し、千葉東高にヌーベルバーグを将来しました。結果は卒業者三六〇名中国公立大一一一名合格、五十三年春の倍増ということで、名実ともに県内高校の範を示すことができ、地域社会の期待に応えられるものでした。今後はこれを契機に更に難関に挑戦する若者が増すことによって評価を高めると思います。

通信制課程は新校舎完成とともに発足当初の原点にかえって指導の強化がはかられていますので、安定した道程を辿ると思います。衛生看護科については、思わぬ所に暗礁がありましたが、五十六年四月からの千葉県新五か年計画に看護高校の独立が認められたことがせめてもの慰めです。

僅々三年の在職でさしたることもできずに終わりましたが、千葉東高の新しい足音が聞こえるようで、私にとって最後のご奉公の場として忘れがたい学校になりました。県内の高校ご三家に照準を合わせ、関係者の期待に応えてますますその名声を高められることを祈念しております。

（東邦中高校長）

1　教育課程の変遷

吉野　博

本校のこの十年間の教育課程をたどってみます。主な改訂は昭和四十八年度に行われましたが、他の年度においても生徒の進路とのかね合いで若干の改訂がありました。また、昭和五十七年度からの学習指導要領の改訂に伴う新教育課程についても、これを記録にとどめておきたいと思います。

＜昭和四十八年度＞（表Ⅰ）

学習指導要領の改訂に伴い従来の教育課程を検討しています。その編成に当たって特に配慮した点は次のとおりです。**普通科**では、

(一)　従来二年生から分けていた文理コースを三年生から分ける。

(二)　この年度よりクラブ活動が各学年一単位設けられたが、総履修単位（一〇二単位）は従来と同じとする。

衛生看護科では、クラブの増加分と専門教科を中心にして、普通教科の要望を加味して変更する。この結果総履修単位が従来の一〇三単位から一〇二単位に減ずる。

＜昭和五十年度＞（表Ⅱ）

衛生看護科は従来音楽が必修科目であったが、その必修科目を、音楽、美術、書道、の**三科目から選択**とする。

＜昭和五十五年度＞（表Ⅲ）

普通科の三年の選択科目が少ないので特定科目（数学）に集中する傾向が強いため、**選択科目に英語**を加えて選択者の調整をはかる。

＜昭和五十六年度＞（表Ⅳ）

三年生のコース分けにおいて、当初、A、B二つのコースを用意したが、大学進学とのかね合いで純粋のB（理系）を希望しているというよりは、数学の負担を多少軽減したコースの必要性を認め、Bコースの変形という形でCコースを設定する。

＜昭和五十七年度＞（表Ⅴ）

学習指導要領の改訂に伴い教育課程を改訂する。その編成に当たって、特に配慮した点は、**普通科**では、

(一)　第一学年及び第二学年においては共通科目の学習を主

とし、第三学年においては、文理の類型を設け、進路に応じた学習ができるようにした。

㈡ 「ゆとり」のあるカリキュラムという観点から総履修単位数を従来の一〇二単位から九九単位（各学年三三単位）に減ずる。

㈢ 第三学年に二単位の「自由研究」を設け、自学自習の態度を養成する。

衛生看護科においては、

㈠ 専門教科の履修単位を最低三九単位とし、普通教科とのバランスを保つ。総履習単位は従来と変わらず一〇二単位とする。

㈡ 保健は基礎医学、成人看護、母子看護で代替履修をする。

㈢ 家庭一単位を基礎医学、母子看護で代替履修する。

以上数次にわたる本校の教育課程改訂の流れを概観すると、その底流に、生徒の自主的学習態度育成への志向と、自主的で有効な進路選択の基礎的な眼を養う点に大きな特徴が見られます。総じて、比較的恵まれた教育環境や地域の雰囲気の中にあって、いわゆる理解力にはある程度の力量を持つものの、それはあくまで他人リード型、教師指導型のそれで、自らを厳しく鍛え、明確な目標を持って学習を続ける面に不足が見られる本校生徒の弱点の克服に力点が置かれているとも言えます。その意味で、昭和五十七年度以降の第三学年の「自由研究」の内容をどうしてゆくかは、教師にとっても生徒にとっても本校教育の行方を定める大切な仕事であると言えます。

一つの参考例として、五十六年度中に各教科から原案の提出のあった「自由研究」について、その概要を資料として掲げておきます。（表Ⅵ）

表Ⅰ　48年改訂教育課程

普　通　科

教科	科目	1年	2年	3年 A	3年 B	計 A		計 B	
国語	現代国語	3	2	2	2	7	16	7	12 ※2
	古典Ⅰ乙	2	3			5		5	
	古典Ⅱ			4	※2	4		※2	
社会	倫理社会		2			2	16	2	15
	政治経済			3	3	3		3	
	日本史			4	3	4		3	
	世界史		2	2	2	4		4	
	地理B	3				3		3	
数学	数学Ⅰ	6				6	14 ※2	6	17
	数学ⅡB		5			5		5	
	数学Ⅲ			3※2	6	3※2		6	
理科	物理Ⅰ		3			3	14	3	17
	化学Ⅰ		3			3		3	
	生物Ⅰ	3				3		3	
	地学Ⅰ	2				2		2	
	物理Ⅱ			3	3	3		3	
	化学Ⅱ				3				
	生物Ⅱ							3	
	地学Ⅱ								

保健体育	体育	男4 女2	男4 女2	3	3	男11 女7	男13	男11 女7	男13
	保健	1	1			2	女9	2	女9
芸術	音楽Ⅰ	2				2	4	2	4
	美術Ⅰ								
	書道Ⅰ								
	音楽Ⅱ		2			2		2	
	美術Ⅱ								
	書道Ⅱ								
	音楽Ⅲ			※2	※2	※2	※2	※2	※2
	美術Ⅲ								
	書道Ⅲ								
外国語	英語B	6	5	6	5	17		16	
家庭	家庭一般	女2	女2	※2	※2	4	※2	4	※2
各教科以外の教育活動	ホーム・ルーム	1	1	1	1	3	6	3	6
	クラブ	1	1	1	1	3		3	
合計		34	34	34	34	102		102	

注　※印は選択教科

衛生看護科

教科	科目	1年	2年	3年	計	
国語	現代国語	3	2	2	7	9
	古典Ⅰ甲	1	1		2	
社会	倫理社会		2		2	10
	政治経済			2	2	
	日本史		3		3	
	地理B	3			3	
数学	数学Ⅰ	3	2	2		7
理科	物理Ⅰ			2	2	8
	化学Ⅰ		3		3	
	生物Ⅰ	3			3	
保健体育	体育	2	2	3	7	8
	保健			1	1	
芸術	音楽Ⅰ	1		1		2
外国語	英語A	3	3	3		9
家庭	家庭一般	女2	女2			4
普通教科 計		21	20	16		57
看護	看護概説	2				2
	看護基礎医学	5				5
	成人看護		4	3		7
	母子看護		1	1		2
	看護実習	4	7	12		23
専門教科 計		11	12	16		39
各教科以外の教育活動	ホーム・ルーム	1	1	1	3	6
	クラブ	1	1	1	3	
合計		34	34	34		102

表Ⅱ　50年改訂教育課程

衛生看護科

教科	科目	1年	2年	3年	計	
国語	現代国語	3	2	2	7	9
	古典Ⅰ甲	1	1		2	
社会	倫理社会		2		2	10
	政治経済			2	2	
	日本史		3		3	
	地理B	3			3	
数学	数学Ⅰ	3	2	2		7
理科	物理Ⅰ			2	2	8
	化学Ⅰ		3		3	
	生物Ⅰ	3			3	
保健体育	体育	2	2	3	7	8
	保健			1	1	
芸術	音楽Ⅰ 美術Ⅰ 書道Ⅰ	2				2
外国語	英語A	3	3	3		9
家庭	家庭一般	2	2			4
普通教科計		22	20	15		57
看護	看護概説	2				2
	看護基礎医学	4		1		5
	成人看護		4	3		7
	母子看護		1	1		2
	看護実習	4	7	12		23
専門教科計		10	12	17		39
教科外	ホーム・ルーム	1	1	1	3	6
	クラブ	1	1	1	3	
合計		34	34	34		102

表Ⅲ　55年改訂教育課程

普通科

教科	科目	1年	2年	3年 A	3年 B	計 A		計 B	
国語	現代国語	3	2	2	2	7	16	7	12 ※2
	古典Ⅰ乙	2	3			5		5	
	古典Ⅱ			4	※2	4		※2	
社会	倫理社会		2			2	16	2	14
	政治経済			3	2	3		2	
	日本史			4	3	4		3	
	世界史		2	2	2	4		4	
	地理B	3				3		3	
数学	数学Ⅰ	6				6	14 ※2	6	17
	数学ⅡB		5			5		5	
	数学Ⅲ			3 ※2	6	3 ※2		6	
理科	物理Ⅰ		3			3	14	3	17
	化学Ⅰ		3			3		3	
	生物Ⅰ	3				3		3	
	地学Ⅰ	2				2		2	
	物理Ⅱ			3	3	3		3	
	化学Ⅱ				3			3	
	生物Ⅱ								
	地学Ⅱ								

保健体育	体育	男 4 女 2	男 4 女 2	3	3	男 11 女 7	男 13	男 11 女 7	男 13
	保健	1	1			2	女 9	2	女 9
芸術	音楽Ⅰ	2				2	4	2	4
	美術Ⅰ								
	書道Ⅰ								
	音楽Ⅱ		2			2		2	
	美術Ⅱ								
	書道Ⅱ								
	音楽Ⅲ			※2	※2	※2	※2	※2	※2
	美術Ⅲ								
	書道Ⅲ								
外国語	英語B	6	5	6 ※2	6 ※2	17 ※2		17 ※2	
家庭	家庭一般	女 2	女 2	※2	※2	4 ※2		4 ※2	
教科外活動	LHR	1	1	1	1	3	6	3	6
	クラブ	1	1	1	1	3		3	
合計		34	34	34	34	102		102	

注　※印は選択教科

表Ⅳ　56年改訂教育課程

普通科

教科	科目	1年	2年	3年 A	3年 B	3年 C	計 A		計 B		計 C	
国語	現代国語	3	2	2	2	2	7	16	7	12※2	7	12※2
	古典Ⅰ乙	2	3				5		5		5	
	古典Ⅱ			4	※2	※2	4		※2		※2	
社会	倫理社会		2				2	16	2	14	2	16
	政治経済			3	2	3	3		2		3	
	日本史			4	3	4	4		3		4	
	世界史		2	2	2	2	4		4		4	
	地理B	3					3		3		3	
数学	数学Ⅰ	6					6	14※2	6	17	6	15※2
	数学ⅡB		5				5		5		5	
	数学Ⅲ			3※2	6	4※2	3※2		6		4※2	
理科	物理Ⅰ		3				3	14	3	17	3	17
	化学Ⅰ		3				3		3		3	
	生物Ⅰ	3					3		3		3	
	地学Ⅰ	2					2		2		2	
	物理Ⅱ			3	3・3	3・3	3		3・3		3・3	
	化学Ⅱ											
	生物Ⅱ											
	地学Ⅱ											

保健体育	体育	男4 女2	男4 女2	3	3	3	男11 女 7	男13 女 9	男11 女 7	男13 女 9	男11 女 7	男13 女 9
	保健	1	1				2		2		2	
芸術	音楽 I	2					2	4 ※2	2	4 ※2	2	4 ※2
	美術 I											
	書道 I											
	音楽 II		2				2		2		2	
	美術 II											
	書道 II											
	音楽 III			※2	※2	※2	※2		※2		※2	
	美術 III											
	書道 III											
外国語	英語 B	6	5	6※2	6※2	6※2	17※2		17※2		17※2	
家庭	家庭一般	女2	女2				女4	女4 ※2	女4	女4 ※2	女4	女4 ※2
	食物 I			※2	※2	※2	※2		※2		※2	
教科外活動	LHR	1	1	1	1	1	3	6	3	6	3	6
	クラブ	1	1	1	1	1	3		3		3	
合計		34	34	34	34	34	102		102		102	

（注）　A・B・Cはコース名、※印は選択科目を示す。

表Ⅴ　57年改訂教育課程

普　通　科（文系）

教科	科目	標準単位数	1年	2年	3年	単位数合計 科目	単位数合計 教科	備考
国語	国語Ⅰ	4	5			5	16	
	国語Ⅱ	4						
	国語表現	2						
	現代文	3		3	3	6		
	古典	4		2	3	5		
社会	現代社会	4	4			4	16	3年の社会は、日本史・地理（各5単位）及び倫理・政経（各3単位）のうちから、それぞれ1科目ずつ選択。
	日本史	4			5＋3	5〜0		
	世界史	4		4		4		
	地理	4				5〜0		
	倫理	2				3〜0		
	政治・経済	2				3〜0		
数学	数学Ⅰ	4	5			5	14	3年の数学は、数Ⅱ・確率統計（各3単位）のうちから1科目選択。
	数学Ⅱ	3			3	3〜0		
	代数・幾何	3		3		3		
	基礎解析	3		3		3		
	微分・積分	3						
	確率・統計	3				3〜0		
理科	理科Ⅰ	4	4			4	11	3年の理科は、物理・化学・生物・地学（各3単位）のなかから1科目選択。
	理科Ⅱ	2						
	物理	4		2	3	5〜2		
	化学	4		2		5〜2		
	生物	4				3〜0		
	地学	4				3〜0		
保健体育	体育	7〜9	男4 女2	男4 女2	3	男11 女7	男13 女9	
	保健	2	1	1		2		
	音楽Ⅰ	2				2〜0		
	音楽Ⅱ	2				2〜0		

芸術	音楽Ⅲ	2	2	2	※2	2～0	4～6	
	美術Ⅰ	2				2～0		
	美術Ⅱ	2				2～0		
	美術Ⅲ	2				2～0		
	工芸Ⅰ	2						
	工芸Ⅱ	2						
	工芸Ⅲ	2						
	書道Ⅰ	2				2～0		
	書道Ⅱ	2				2～0		
	書道Ⅲ	2				2～0		
外国語	英語Ⅰ	4	6			6	17	
	英語Ⅱ	5		5		5		
	英語ⅡA	3						
	英語ⅡB	3			3	3		
	英語ⅡC	3			3	3		
家庭	家庭一般	4	女2	女2		女4	女4～6	
	食物	2			女※2	2～0		
(自由研究)	自由研究				※2	2～0	0～2	※印：5科目（各2単位）のうちから、1科目選択。
特別活動	ホーム ルーム		1	1	1	3		
	クラブ活動		1	1	1	3		
計			33	33	33	99		

注　※印は選択教科、自由研究については表Ⅵ参照。

普 通 科（理系）

教科	科目	標準単位数	1年	2年	3年	単位数合計 科目	単位数合計 教科	備考
国語	国語Ⅰ	4	5			5		
	国語Ⅱ	4						
	国語表現	2						
	現代文	3		3	2	5		
	古典	4		2	※2	2～4	12～14	
社会	現代社会	4	4			4		3年の社会は、日本史、地理、倫理・政経の各科目（群）のうちから一つ選択（4単位）。
	日本史	4			○	4～0		
	世界史	4		4	○	4		
	地理	4			○ 4	4～0		
	倫理	2			2	2～0		
	政治・経済	2			2	2～0	12	
数学	数学Ⅰ	4	5			5		
	数学Ⅱ	3						
	代数・幾何	3		3		3		
	基礎解析	3		3		3		
	微分・積分	3			3	3		
	確率・統計	3			3	3	17	
理科	理科Ⅰ	4	4			4		3年の理科は、物理・化学・生物・地学（各4単位）のうちから、2科目選択。
	理科Ⅱ	2						
	物理	4		2	○	6～2		
	化学	4		2	○ 4＋4	6～2		
	生物	4			○	4～0		
	地学	4			○	4～0	16	
保健体育	体育	7～9	男4女2	男4女2		男11女7	男13 女9	
	保健	2	1	1		2		
	音楽Ⅰ	2	○			2～0		
	音楽Ⅱ	2		○		2～0		
	音楽Ⅲ	2			○	2～0		
	美術Ⅰ	2	○ 2			2～0		
	美術Ⅱ	2		○ 2		2～0		

芸術	美術Ⅲ	2			○― ※2	2～0		
	工芸Ⅰ	2						
	工芸Ⅱ	2						
	工芸Ⅲ	2						
	書道Ⅰ	2	○―			2～0		
	書道Ⅱ	2		○―		2～0		
	書道Ⅲ	2			○―	2～0	4～6	
外国語	英語Ⅰ	4	6			6		
	英語Ⅱ	5		5		5		
	英語ⅡA	3						
	英語ⅡB	3			3	3		
	英語ⅡC	3			3	3	17	
家庭	家庭一般	4	女2	女2		女4	女	
	食物	2			女※2	2～0	4～6	※印：6科目（各2単位）のうから1科目選択。
(自由研究)	自由研究				※2	2～0	0～2	
特別活動	ホームルーム		1	1	1	3		
	クラブ活動		1	1	1	3		
計			33	33	33	99		

注　※印は選択教科、自由研究については表Ⅵ参照。

教科	科目	標準単位数	1年	2年	3年	単位数合計 科目	単位数合計 教科	備考
国語	国語Ⅰ	4	4			4		
	国語Ⅱ	4		3	2	5		
	国語表現	2						
	現代文	3						
	古典	4					9	
社会	現代社会	4	4			4		
	日本史	4		3		3		
	世界史	4						
	地理	4			3	3		
	倫理	2						
	政治・経済	2					10	
数学	数学Ⅰ	4	3	2		5		
	数学Ⅱ	3			2	2		
	代数・幾何	3						
	基礎解析	3						
	微分・積分	3						
	確率・統計	3					7	
理科	理科Ⅰ	4	2	2		4		
	理科Ⅱ	2						
	物理	4						
	化学	4			3	3		
	生物	4		2		2		
	地学	4					9	
保健体育	体育	7～9	2	3	2	7		
	保健	2					7	代替保健2
	音楽Ⅰ	2	○—			2～0		
	音楽Ⅱ	2						
	音楽Ⅲ	2						
	美術Ⅰ	2	○— 2			2～0		
	美術Ⅱ	2						

芸術	美術Ⅲ	2						
	工芸Ⅰ	2						
	工芸Ⅱ	2						
	工芸Ⅲ	2						
	書道Ⅰ	2	○			2～0		
	書道Ⅱ	2						
	書道Ⅲ	2					2	
外国語	英語Ⅰ	4	4			4		
	英語Ⅱ	5		3	3	6		
	英語ⅡA	3						
	英語ⅡB	3						
	英語ⅡC	3					10	
家庭	家庭一般	4		1	2	3	3	代替1
看護	看護基礎医学	5～6	5			5		
	基礎看護	8～10	6	2		8		
	成人看護	12～14		8	4	12		
	母子看護	4～5			4	4		
	看護臨床実習	10～15		3	7	10	39	
特別活動	ホームルーム		1	1	1		3	
	クラブ活動		1	1	1		3	
計			34	34	34		102	

表Ⅵ　59年度3年次自由選択科目「自由研究」（2単位）開講類例一覧

講座番号	科　目	講　座　名	定　員（概数）	学習内容・指導法など
301 302	国　語	古典講読Ⅰ 古典講読Ⅱ	40 40	日本の古典では、「源氏物語」等をじっくり読む。また、中国の古典では、「論語」「史記」唐詩等を精読する。
303	社　会	アメリカの政治制度	10～15	アメリカの高等学校で使用されている政治学のテキストを使う。リポーターはあらかじめ英文を訳し、授業中説明する。他の生徒は、質問があれば、リポーターに聞く。最後に教師がコメントを加える。なお、詳細な英語に関する事項よりは、アメリカ政治制度の概要を理解してもらう。小人数で自由な雰囲気でやりたい。
304	社　会	近代欧米史研究	15～20	成美堂出版「新大陸の黎明」"Dawn of the New World" を講読しながら近代欧米史を学習する。本書は、アメリカの高校社会科のテキスト。生徒は予め、本文を読んでおき、発表生徒が大意を説明する。指導者は、それに対し、史的なコメントを付する。
305	社　会	現代史研究	45	20世紀以降の歴史について、まず概括的な講義を行い、その後、各自で20世紀の歴史の中で適当なテーマを見つけ出して、自由研究を行う。その結果を最終的に原稿用紙10～20枚程度のレポートにまとめて卒業レポートとする。
306 307 308	理　科	物理研究Ⅰ 物理研究Ⅱ 物理研究Ⅲ	40 40 40	将来、自然科学を専攻しようとする人のための物理の基礎講座である。この講座は原則として、第3学年で物理を選択した生徒を対象としている。内容は、物理演習、物理実験、物理副読本

				の輪読等である。
309	理　科	有機化学	30	大学の理工系に進学したい生徒を対象に、化学Ⅱで学習する有機化学の事実と、理論を更に深く学び、演習を行い応用力を養う。
310	理　科	生物研究	20	通常の授業形態では、実施の困難な継続的実験調査を行う。当初は、研究法やテーマの決め方等についての一般的な学習をし、その後はグループないしは個人ごとにテーマを決め、計画・実施・まとめまでを年間を通して行う。
311	理　科	地学演習	40	1年で地学を習ったが、これを基礎として、さらに理解を深め、応用力を養うため、問題演習を中心として授業を行う。また、必要に応じて、実習、野外観察を行う。この講座では、受講者の自発的な学習が大事である。
312	英　語	英文講読	30	原書講読により、読解力を高め、読書の喜びを経験させたい。
313	英　語	英作文	30	まとまった長文を書く練習を通じて、発表能力を高める。

注　1　「自由研究」は、音楽Ⅲ、美術Ⅲ、書道Ⅲ、古典（理科類型）及び食物（女子）各科目とともに普通科3年の自由選択科目の1つで、生徒はこれら各講座の中から、任意の1科目（2単位）を選択履習することになつている。

2　59年度にこのとおり開講されるというのではなく、その予定又は、類例を示したものである。

2　東雲祭小史

桜井　久温

東　雲　祭

東雲祭
そのとき小さな箱のふたが
開かれる
自由を求める鳩のように
胸をふくらませて飛び出す
私たちの祭典がある

大事にしまわれ
かくされていた
小さな箱から
大きな力となって
あらわれる
東雲祭の力
この日のために
みがきあげた美しさ

東雲祭
人があつまる
友ができる
拍手がおこる
みんなの満足げな
笑みがおこる
私たちの力で作り上げた
私たちの
東雲祭

（東高文学部・第七回東雲祭）

東雲祭は今年度（昭和五十六年度）で十八回を数えます。東雲（しののめ）祭という呼称が、いつ、どのような事情で生まれてきたのか審らかにしませんが、第七回東雲祭（昭和四十四年度）について生徒会本部の反省のなかに、次のような説明がみられます。

「伸び行く東高の意気を、高らかになびかす東雲になぞらえ、数年前から文化祭・体育祭を合わせて東雲祭と呼ぶようになり、今年からは文化祭だけになりました。今年で七回を数えることになり、理想を目ざし伸展の途にあります。まだまだ理想には程遠いのでありますが、東雲祭と銘うって一年間の生徒会活動の成果を校内外に発表し、今後の発展向上を期したいと思います。」（第七回東雲祭総括）

東雲祭に寄せる当時の生徒の夢と期待と意気込みが、どんなに大きかったかを感じさせるのに十分ですが、これを手がかりに計算しますと、第一回東雲祭は昭和三十八年度ということになります。けれども、それを確認できる資料はなく、記録によるかぎり、東雲祭という呼称が本校文化祭の呼称として正式に承認されたのは、昭和三十九年九月二十四日のことです（昭和三十九年度教務日誌）。東雲祭と称するようになった経緯もはっきりしていませんが、ただ、昭和三十六年度から、それまでの千葉第三高等学校から現在の千葉東高等学校へと校名が変更されており、千葉東高校として新しく出発したことに伴う生徒諸君の清新の気が、いつしか、この呼称を生み出すことになったのかも知れません。

フォークとともに

素通りはダメよ

本校に生徒会が誕生したのは、昭和二十四年四月二十七日で千葉市立女子高等学校の時代です。翌二十五年度には、県立移管によって千葉県立千葉第三高等学校となりましたが、この年十一月十日、十一日の二日間にわたって第一回文化祭が開催されています。したがって、この時から通算しますと今年度は第三十六回文化祭ということになります。第一回文化祭の模様については、次のように記録されています。

各クラブ（現在の部・同好会）、委員会等が文化祭の名に

おいて、今日行なわれているような音楽演劇等の発表会、書道美術等の展覧会、その他の文化系クラブの研究成果や労作の展示発表会、バザー等が初めて行なわれたわけである。従来は学芸会あるいは学芸発表会などといわれて小規模に行なわれたこともあったが、戦後の日本を軍国主義国家から文化国家に生れ変らせるということで、文化という言葉がもてはやされ、文化祭と呼ばれるようになり、生徒会の育成に力をそそいでいた当時、生徒の自主的な活動の場として極めて重要視されたのである。(創立三十周年記念誌)

おそらく文化祭の原点にあった理念はこうしたものだったと思われます。この理念は、その後も文化祭の基本理念として持続され、第七回東雲祭においても、文化祭を一年間の生徒会活動のなかで最大の行事であり、かつ最も楽しい行事であるとした上で、

一人一人が平素から自分自身の研究に努めるとともに、発表力を養い、これをクラブ、同好会に結集し、更に生徒会という組織の中でまとめて行くことによって、はじめて成り立つ行事です。……(文化祭を通じて養われる)相互の理解の上に立った親睦と協調、それは民主主義の理想であり、その意味で文化祭という行事は、民主的生活を実践する学習の場でもあります。(第七回東雲祭総括)

というふうに文化祭の意義づけがなされています。昭和二十八年度からは、文化祭と体育祭(運動会)が三日間にわたって同時に実施されるようになり、初日と二日目は文化祭に、最終日が体育祭にあてられています。この形態は三十年代を通じて持続されていて、ほとんど十月上旬に実施されています。内容からいっても、発足当初の研究発表といった傾向がそのまま継承されており、しばしば文化祭の一環として、教育会館において講演会が開催されています。

社会や時代の風潮は東雲祭にも鋭く反映しているようです。昭和三十六年度は既述のように千葉東高校として新しく出発した年ですが、このころから生徒の気質や行動にも何がしか変化の兆が見えはじめます。大学のキャンパスから角帽と黒サージの詰衿服が姿を消し、これに代わって現れた背広姿もほどなく崩れて、くたくたのジーパンにズック靴、ボサボサ髪が登場してきます。この傾向は高校生にも当然影響してきます。「東高になってから、この線(外出時は常に制服)がしだいに崩れてきた。帰宅後は、どこに行くにも制服を着ないで私服で行く」ようになり「昭和四十年代になると制服制帽廃止論を持ち出す高校生も出て来たわけである。」(創立三十周年記念誌)

ここには、漸く軌道にのりはじめた日本経済の高度成長と、それに伴う時代風潮の移り変わりが反映しているようです。東雲祭に喫茶店やエレキ演奏などが登場しはじめる

のもこのころのことです。

「生徒会の活動でも随分と無鉄砲な所があった。多くの先生方の反対を強引に押し切って喫茶店やエレキ演奏を、文化祭や予餞会のプログラムの中に初めて入れたり、また反面では、多くの生徒の反対をよそに、生徒総会の定足数を半分に減らしたりもした。」（昭和三十八年度生徒会長　須田朗氏（現弘前大助教授）創立三十周年記念誌）

金魚すくい

昭和四十四年度、四十五年度あたりが東雲祭にとって一つの転機にあたっているようです。このころから、それまでの研究発表といった傾向がその比重を弱め、現在みられるような「文化」と「祭」を折衷したような形態へと移っていくように見受けられます。周知のように昭和四十二年ごろから吹きはじめた大学紛争の嵐は、昭和四十三年以降、高校をも巻き込むようになりました。本校においても昭和四十四年度には、生徒心得などをめぐって激しい討論がくりかえされたようです。この年、九月三十日には実情はよく分かりませんが半日にわたる学校封鎖もありました。それにもかかわらず東雲祭は封鎖直後の十月四日、五日に予定通り実施されました。この年、東雲祭にあたって生徒会本部からいくつかの要望が提出されています。討論会・フォークソング・将棋・フォークダンス・靴みがき等の実施、クラス企画・個人企画の参加、図書委員会の古本市開催などの承認を求める要望で、これについては運営委員会及び職員会議でかなり白熱した論議検討が重ねられたようです。最終的には東雲祭直前の職員会議で、討論会を除いてほとんどが許可あるいは条件つきで許可されていますが、このことに関して当時の東雲祭企画委員長・小沢清男氏（現千葉市教育委員会）のコメントを引用しましょう。

文化祭―模擬店祭（？）

なかでも著しい進歩はクラス企画や個人企画が出てきたということです。今年のテーマの『全員参加』に大きくつながっています。しかし企画委員会を通ったものの、職員会議ではなかなか許可されず問題になりました。しかし文化祭の三日前の職員会議で五つのうち四つが通りました。私達は全部の個人・クラス企画を許可してほしかったが我々と学校との文化祭の主旨の大きな違いにより、こんなにも文化祭の準備が遅れてしまいました。私達は文化祭のためにもこの主旨を明らかにしていかねばならないと思います。今年の文化祭が私達になげかけてくれた大きな課題です。（第七回東雲祭総括）

討論会が許可されなかったのは、当時の「政治の季節」を考慮して慎重を期したものと思われます。テーマとしては沖縄問題、高校生活の矛盾などといったことが予定されていたようです。

ところですぐお分かりのように、ここにみられるクラス企画・個人企画の参加や趣味・娯楽といった色彩の強い内容、金銭の取り扱いを伴う企画などは、すべて現在の東雲祭がその要素の一つとして含んでいるものです。なお、これと関連して東雲祭の企画については、年度当初できるだけ早くから検討することが要請されており、また、東雲祭のような生徒会関係の行事は生徒会と相談してほしい、という要望が生徒から出されていることは注意しておいていいでしょう。

こうした傾向は翌四十五年度以降、一段と強くなっていきます。昭和四十五年度は役員立候補者がなかなか出揃わず生徒会本部は九月十四日になって漸く発足しましたが、東雲祭は「生徒の手による文化祭」をテーマに十月三日、四日に実施されました。それとともに「本校生徒会の文化系クラブ・委員会等の研究発表を行なうと共に、ホームルーム及び個人の参加により、文化的情操を高め、創意ある健全な自治的精神を養うことを目的とする」という東雲祭実施目的が改めて提示され、東雲祭の基本的性格について共通理解の徹底が要請されています。ここには発足当初の文化祭の理念がなお生き生きと搏動していますが、それと同時に前年度要望されたクラス・個人企画の参加が定着しつつあることを物語っているともいえるでしょう。この方針を受けて翌四十六年度の第九回東雲祭では、その参加基準のなかで飲食物及び物品の販売をきびしく規制するとともに、娯楽本位の企画を原則的に排除しつつも「教育的に問題がなく」「会場に余裕があるかぎり」認めざるを得ないとしてある程度弾力性のある方向が打ち出されているのが注意を惹きます。このころの東雲祭の内容を見ますと、「安保と経済」「三里塚」などといった時代の動きを反映した討

論会や発表が行われている反面で、「占い」「よろず市」「レクリエーション・コーナー」それに「エレキ演奏」それから「お化け屋敷」がはじめて登場しています。これらもまた当時の世相を一面で反映したものといえましょう。それと同時に、クラス参加、有志の参加が増えていることが目立ちます(四十五、四十六年度)。

この点について第八回東雲祭(昭和四十五年度)の実施にあたった当時の生徒会長和田哲郎氏(現第一広告社)は、文化祭における「生徒の主体性」を強調しクラス参加が大幅に増加したことを心から喜びながらも「確かにクラス参加により今年の文化祭はにぎわい、華やいだが、どうしても質的な低下は防げなかったようである。『今年の東高の文化祭は面白い』とか『よかった』等の声が外来者から聞かれたが、それをそのまま受けとって喜ぶのはちょっと単純ではないかと思う。なぜならば、どういう観点から見ているのかということを考えるとやはり悲観的にとるしかないのである」として、クラス参加の影響でクラブ・委員会の発表、特に理系クラブの展示発表に人の集りが少なかったことを挙げ、質的な向上の必要性を訴えています(第八回東雲祭総括)。

ここには「質的向上」と「全員参加」という二つの課題をどのようにして両立させるかという、現在にまで引き継がれている問題がすでに提示されています。このようにみてきますと、現在の形態の東雲祭は、その直接の原点を、昭和四十四年度、四十五年度あたりに持っているとみることができるのではないでしょうか。

学園紛争が鎮静化し「政治の季節」が去るとともに、代わって高校生の三無主義といったことが人々の話題にのぼるようになり、生徒会への関心も急速に消極化していきます。昭和四十五年度前期の生徒会本部は既述のように九月になって辛うじて成立しましたが、同年度後期の生徒会本部は立候補者不在のため、とうとう成立しませんでした。それでも、翌四十六年度前期は役員全部がそろわなかったものの、生徒会本部は六月二十一日に成立し、そのもとで第九回東雲祭を実施することができましたが、翌四十七年は一年間にわたって生徒会本部の成立をみることができませんでした。これは生徒会発足以来初めての現象であり、そのため昭和二十五年度以降毎年実施されてきた文化祭も、この年だけは中断の止むなきにいたったようです。それと同時に、本部不成立を契機として生徒会の機構改革委員会が組織され、昭和二十八年以来の生徒会則、生徒会機構に全面的、根本的な検討が加えられることになりまし

た。幾多の討論と労苦を経て、漸く昭和四十七年十二月六日の生徒総会において、新しい生徒会則、生徒会機構が承認され、ここに新しい生徒会の発足をみるにいたったわけです。これが現在の生徒会の原型になっています。

新しい会則に基づいて成立した生徒会のもとで、第十回東雲祭（昭和四十八年度）が二年半ぶりに実施されました。一年間のブランクを前にして東雲祭ととりくんだ当時の生徒会長木口清英氏（現市川南高教諭）の率直な感想を掲げたいと思います。

去年、どこの学校でも行なわれていた文化祭が東高で行なわれなかった。そのことがどんなにか残念であったろう。『生徒会がない』という理由で開かれなかった文化祭。しかし、今年は本部会もできて生徒会活動も活発になってきている。そんな中での第十回東雲祭。去年一年のブランクのため、実行委員会にも本部会にも当然各部にも、経験者はゼロに等しい。それだけにどんな文化祭ができ上がるのか、成功を祈りたい。（第十回東雲祭パンフレット）

東雲祭中断による生徒のやるせない気持と、それだけに東雲祭に寄せる意気込みの強さをいいつくしています。それと同時に、東雲祭がその運営、内容ともに年ごとの積み重ねの上に実施されていくものであり、主体的な生徒会活動の一環としてのみ、はじめて十全の意味を持ちうることを銘記すべきではないでしょうか。

「文化」か「祭」かという問いを内に包み、「質的向上」と「全員参加」という二つの課題の両立を追いながら、東雲祭がしだいに「祭」への傾斜を強めていったことは否めないでしょう。それはおそらく多くの高校文化祭に共通した現象でもあります。現在の参加基準の原型が確定し、現在みられる構成と共通した構成をもつ色刷りのパンフレットが作られるようになり、喫茶店が増加し、8ミリ映画の自主制作が登場します（五十、五十一年度）。一方で、「生徒の手による文化祭」という方向は、自主的運営に必要な諸条件が年ごとに整備され、実績を積み重ねることによって着実に定着していきます。昭和五十二年度、更に五十三年度の東雲祭はこうした「生徒の手による文化祭」の一つの典型とみて差し支えないでしょう。東雲祭の伝統的特色の一つとして、たいていの年に経過と反省を記録した「総括」が作成されていますが、五十三年度のそれは七〇ページにもおよぶ厖大なもので、参加基準の検討にはじまり、日程、備品、会計業務等、更に反省と次年度への指針にいたるまで、わずか二日間の東雲祭を成功させようとその運営に一年間の大半をついやした生徒の熱と力と、そして悩みが記録されています。

それとともに「文化」か「祭」かという問いへの対応にも変化が現れてきます。すでに第十二回東雲祭（昭和五十年度）において次のような発想がみられます。

「文化系の部の発表というものの比率が下がり、逆に有志による映画や喫茶店がふえている。我々はそれをうれえたりする気は毛頭ない。その参加する者が、精神的充実を以て作品を発表するならば、それは素晴らしいことであり、東高生の東雲祭に成り得るから。」（第十二回東雲祭総括）

こうした発想の転換は第十五回東雲祭（昭和五十三年度）になると一層明確なものになってきます。この年、東雲祭にあたって当時の生徒会長島崎文彦氏（現在アメリカ留学中）は次のように挨拶しています。

何事にも無関心、無気力であるという僕達の世代、感動もなく、平穏を求め、すべてに「醒めている」という――本当にそうだろうか？　僕達だって若ものだもの、そんな幽霊みたいな存在じゃない。色々考えもするし感動だってするんです。……「東雲祭」は僕達の一年間の総結集です。最近、文化祭がお祭りだ、いやそうじゃない、などと言われていますが、そんなことに気にせずに、「ぼくたちの東雲祭」を心ゆくまで楽しんで下さい。（第十五回東雲祭パンフレット）

また、東雲祭の新しい意義づけも試みられるようになります。

文化祭は個人や団体の発表場だけではない。それらのすべてが組み合わさって、ひとつの大きな『東高』というものを形成する。――それが文化祭なのである。もはやそこには、文化か、お祭りかなどというささいな問題は存在しない。それよりも、われわれの『東高』をどう表現するかが問題となろう。そして目的を定め、めざすものに向かって高校生活を創造する――それが文化祭の意義といえよう。（第十五回東雲祭総括）

ここには、たとえ娯楽的な内容の企画であっても、それが安易な思いつきではなく、それをやることが自分たちにとって本当に必要であるのなら、それが東雲祭の本当の目的にかなっているのなら、その本当の目的を把握した上で参加しているのなら、それはそれですばらしいことではないかといった意識がみられます。それとともに、「文化」か「祭」かといった二者択一的な発想を転換して、「東高の、東高生の文化祭」としての東雲祭の実現こそ今後追求すべき課題ではないか、という新しい問題提起をも読みとることができるでしょう。

ここで、現在までの東雲祭のテーマと標語（四十四年度までではテーマのほかに標語が募集されています）をわかっているかぎりあげておきましょう。

「質的向上　内容充実」（第五回　四十二年度）

明かるく伸びよう東雲の丘に
東雲の丘に轟く我らの意気が
「生徒全員の参加」（第六回　四十三年度）
東雲祭やる人見る人心は一つ
秋空に若さ伸びゆく東雲祭
東雲祭まばゆい光は我らが丘に
「生徒全員の参加」（第七回　四十四年度）
東雲祭で成功させよう友と友の微笑・友情
真心で実をならそう我々の東雲祭
見て聞いて知識を深める東雲祭
見てくれ我らの東雲祭
「生徒の手による文化祭」（第八回　四十五年度）
（第九回はテーマがなく第十回、十一回は不明です）
「脱・どんぞこ」（第十二回　五十年度）
「みんなお友だち」（第十三回　五十一年度）
「われら青春まっさい中」（第十四回　五十二年度）
「刻もう青春の一ページ」（第十五回　五十三年度）
「ふれあい」（第十六回　五十四年度）
「流れ」（第十七回　五十五年度）
「自由落下」（第十八回　五十六年度）

必ずしもテーマに即した内容の東雲祭が行われたわけではありません。むしろテーマと内容との懸隔に対する批判が多いのが常ですが、それにしてもここに列挙したテーマは、その時点における生徒の意識の奥底にあるものを何がしか反映したものだともみられましょう。テーマの背景に潜在する生徒の意識にどのような変遷を読みとったらいいのでしょうか。

まえにも一度触れましたが、東雲祭も社会や時代の動きと全く無関係であることはできません。広く世界や国内の情勢から千葉県及び千葉市における急速な工業化と人口の社会的増加、それに伴う社会構成や家庭環境の変化は、生徒の生い立ちや生活意識にも大きな変容をもたらさずにはおりません。同時に、地域社会における東高そのものの位置づけも変わってきます。こうした基盤の変化は当然のことながら東雲祭の運営と内容にも、幾多の変容をもたらすことをまぬがれないでしょう。

第十五回東雲祭で提起された問題をふまえながら、東雲祭は新しい模索の時を迎えます。第十六回東雲祭（昭和五十四年度）はそうした模索へのスタートといえましょう。そこには、「東高の、東高生の文化祭」とはどうあるべきなのかという問題意識のもとに、三つのことが試みられているようです。第一に、それまで潜在的に持続されてきた「文化」か「祭」かという問いをあえて顕在化することによって、東雲祭の内容をもう一度根本から検討しなおそう

としたことです。簡単に結論のでる問題ではありません。けれども、この問いを素通りしては東雲祭の内容が安易で主観的なものに陥りやすいことを恐れるからです。第二に、それまでどうしても少数の生徒に集中しがちだった東雲祭の運営に、できるだけ多数の生徒が実質的に参加するように工夫し、同時に、個々の生徒の負担を軽減したいとしたことです。そのために、従来必ずしも明確ではなかった東雲祭実行委員会を、仕事の内容に対応させて明確に組織化することが試みられています。個人を基盤に組織の力を十全に発揮することは時代の趨勢ですが、そのための工夫がここでも行われていたようです。第三に、参加基準のみでなく具体的で詳細な運営方針も含めて、東雲祭実施要領をできるだけ早く作成し、それを周知徹底することによって、東雲祭の全体像をみんなに知ってもらおうとした試みです。そこには、そうすることが生徒個々の責任感と生徒全員の東雲祭への参加意欲を高めることにつながるのではないかという願いが見受けられます。こうした試みを重ねることによって、「東高の、東高生の文化祭」としての東雲祭のあるべき姿を探り、その実現を期していきたい、それがこの新しい模索の目的になっているようです。この試みはさまざまな困難と悩みを伴っています。新しい東雲祭のイメージは、今年度の東雲祭においても必ずしも発見されているわけではありません。しかしながら、過去の伝統と蓄積をふまえながら、より新しい、より本来的なものをみつめて模索しつづける情熱こそ、東雲祭を生命に溢れたものへと成長させ、ひいては明日の東高への道を切り開く原動力ではないでしょうか。

東雲祭の歩みをたどりながら、その背後にあると思われる生徒の意識の流れを追ってきたつもりですが、最後に、昭和五十二年度前期生徒会副会長として、東雲祭の運営にたずさわった足立暁子氏（現千葉大学薬学部四年）に当時をふりかえってもらいました。

第十四回東雲祭の思い出

足立　暁子

このとき、ちょうど私は二年生で副会長でした。東雲祭の企画、実行は文化委員会が中心になって活動していたので本部会はそれに協力するという形をとっていました。以前は、本部会中心だったのですが、仕事の量や内容の点から文化委員会に任せることになったのだと記憶しています。

全校生徒一二〇〇人をうまくまとめて行く苦労は、味わった人でなければわからないものです。その苦労は、参加

後夜祭風景
男女交互にとはなかなかいきません

基準の設定からはやくも始まりました。どこの高校でも同じでしょうが、喫茶店などの食品を扱う団体をどうするかが焦点でした。衛生や金銭、火災の問題もある上、文化祭の主旨に反するのではという意見が多く、文化祭そのものの意義が問われました。結果的には、数団体の喫茶店を認めたわけですが、希望が多くしぼるのに苦心してしまいました。

準備は数か月前から始め、予算や部屋割、共同購入など会議や書類提出が続きました。集合時間に遅れたり、欠席が多かったり、呼び出して催促したり……一度で済むはずのことが何日もかかり仕事が停滞することもしばしば。

参加者に、自分たちぐらいという甘えがみられ、腹を立てた委員と対立することもありました。また、委員としての立場からの発言のために誤解されてつらい思いをする人もいたようです。このような苦労は、毎年のことだと思います。この年、とくに力を入れたのは後夜祭です。例年は校庭でフォークダンスと歌だけで参加者も少なく寂しいものでした。今回はなんとか大勢の人に参加してもらおうと人集めのために二つのことを試みたのです。一つは、キャンプファイアー。火災予防や学校周辺の家への配慮など難点もあったのですが、条件付で実施できました。この裏には、文化委員がリヤカーをひいて薪を集めてまわったというエピソードもありました。

もう一つは、カップリングカード。これは、フォークダンスのカップルがなかなかできないので同じ番号札をもつ人同志が組むシステムで終了後にジュースが当たる抽選付。この企画がよかったのか参加者も増え好評でした。

今、思い出すのは、なぜか苦労したことばかりですが、だからといって暗い思い出かというとそうでもありません。多くの委員と楽しんで仕事をしていたという感じです。残念ながら、生徒全体がのってきてくれる生徒会活動は、唯一、東雲祭だけだからという点は否定できませんが……。（昭和五十三年度卒）

本稿では、生徒会そのものの歴史については触れる余裕がありませんでした。生徒会の歴史、現況については、今春発行が予定されている生徒会誌をご覧頂きたいと思います。生徒会誌は、昭和四十一年度から四十六年度にわたって、「轟」という名称のもとに第六号まで発行されていますが、既述の生徒会本部が成立しなかった昭和四十七年度以降発行されておりません。今回、創立四十周年を契機に、「黎明」という名称のもとに新しく発行することになりました。事情が許すかぎり長く続けてほしいと念願しています。先輩諸兄姉、在校生諸君、ならびに大方の諸賢のあたたかいご賛助、ご協力をお願いするしだいです。

（一九八二・一・五記）

3　校外行事の歩み

平安　隆雄

千葉東高の修学旅行

激化する日中戦争のまっただ中に創立した市立千葉高女は、苛酷な社会情勢のゆえ、修学旅行はとうてい許されませんでした。三十周年誌をひもとくと、第一回の修学旅行が行われたのは、学制改革により千葉市立女子高等学校となった昭和二十三年の秋、伊豆・韮山方面への芋を背負っての一泊旅行であったということがわかります。戦時中の食糧増産や勤労動員などで抑圧されていた暗い青春が、漸く息吹きをかえしはじめたのでした。この旅行は、終戦後間もなく、父兄、生徒の間から湧きあがり、アンケートをとってみたところ、父兄の大多数が実施に賛成し、職員も同様な意見であったので実施されました。不賛成も勿論ありました。不賛成者の中には生活苦を切々と訴える人もおり、スムーズな実施はなかなか困難でした。

翌二十四年十月には第三学年が甲府昇仙峡・伊豆修善寺方面にかけて二泊三日、引率職員諸川校長以下五名、参加生徒一一六名（全員参加でなかったことに注意）で行われま

した。交通事情も悪く往復夜行列車でした。食糧難を反映し、生徒各自米八合を持参してというものでした。また服装も衣料難から、統一されたものではなく色とりどりの自由なものであったといいます。

昭和三十年代に入ると旅行も制度として定着し、やがて東京・京都間は修学旅行専用列車（ひのでの号、わかくさ号）を利用し、車中一泊するという形となりました。

昭和四十二年からは新幹線を利用するようになり、関西方面での見学時間は大幅に増え、年によっては京都・奈良以外にも伊勢などにも立ち寄っています。

昭和四十年代後半から現在までの約十年のあいだ、修学旅行の形式・内容は基本的には大きな変化はありません。

飛鳥の石舞台

ただ年度により特徴的なものが見受けられるので各項目ごとに列挙してみます。

＜旅行の目的地＞

46年　奈良・京都・琵琶湖・比叡山方面

47年　岡山から高松・淡路島・奈良・京都。

この年は新幹線が岡山まで延びたので四国にまで足をのばすことができました。が、この四国旅行は修学旅行として得られるものが少ないという事で否定的に総括されました。即ち距離が長く、時間がかかる。病人も出たわりには見学場所が少ないということでした。

48年　三集団に分かれ、倉敷・小豆島・鳥取から、奈良・京都。このうち二集団は途中、姫路を見学。

49年　京都・奈良。この年は、全クラス同一行動は千葉・京都間の往復のみで、他は全てクラス別行動。この年で注目すべき点は飛鳥方面の見学が入ったことです。

（四十七年に奈良県明日香村で高松塚古墳が発見され、それ以降奈良では古墳ブームがまきおこされていました）五十一年以降の奈良見学では、飛鳥めぐりがコースに入る行動が極めて多くなっています。

50年　二集団に分かれ、一集団は姫路・岡山・高松・淡路島方面から京都。他の集団は天の橋立・鳥取・松江・岡山から京都。二集団共に見学場所も多く大旅行でした。

51年から54年まで。奈良一泊京都三泊。五十一年以降目的地は京都奈良に絞られています。

反戦平和の象徴ともいうべき広島へは、毎年声は出ているようですが、まだ実現されていません。

55年から現在まで。五十五年から旅行の日程が短縮され、三泊四日となりました。奈良一泊京都二泊。

＜事前学習について＞　例年秋期に旅行を実施していてるので、一学期に各クラスより二名の旅行委員を選出し、二学期に入ると本格的準備作業に入ります。旅行委員はクラス内で討論、学習を促し、クラス別、班別の行動計画を提出させ、業者と共にそれを検討し、それと同時に旅行のしおりの作成を行っています。こうしたこととは別に、関西方面についての映画鑑賞、京都奈良の史的説明、美術講演会などをほぼ毎年開催してます。このパターンはこの十年変わっていません。ただ生徒個人の事前学習は、旅行後行われているアンケート結果に毎年あらわれますが、それぞ熱心にはやられていません。

本校は図書室書架に修学旅行専用コーナーが十年ぐらい前から設けられており、充実した自発的学習が展開できるようになっています。

＜行動形態について＞　生徒の自主性を重んずるため、また行動範囲を広げるため、全クラスが全行程をそろって行動するという形は当然とっていません。

クラス討議をへてクラスのコースを決定し、しかる後に班別コースを決めます。この班別行動は生徒にとって旅行のハイライトであり、それだけに班員は時間をかけて下調べをしています。昭和四十九年には班別行動を二日間とっていました。しかしこれは生徒にとっても大変きついものであったらしく、以降行われていません、生徒たちが自分たちだけで二日間のコース立案するのが難かしく、また、それを消化するのも大変であったということからです。

とかく一般的には、この班別行動時において生徒たちは羽根をのばし問題をおこしがちなのですが、本校ではこの十年間とりたてて大きな事件はなく、班別行動は生徒職員から極めて高く評価されてます。

＜費用について＞　各年度、目的地も内容もそれぞれ異なるので、正確な費用を出して比較するのはあまり意味のないことですが、参考までに五年ごとの費用をあげておき

ます。

昭和四十一年　一二、〇〇〇円。
昭和四十五年　一七、二〇〇円。
昭和五十一年　三六、〇〇〇円。
昭和五十六年　四六、〇〇〇円。

キャンプについて

現在のような日光菅沼における学年キャンプが定着しはじめたのは、昭和四十九年の一年生の時からです。それ以前にも勿論様々な形態での学年キャンプは実行されていました。現在東高に在籍する古い職員の話によれば、例えば、昭和三十年の後半に箱根、富士五湖方面に出かけていたといいます。しかし、昭和四十二年ころから吹き荒れる世界的なスチューデントパワーのあおりをうけて、東高でも学園紛争が行われるようになると、教師、生徒間の関係が擬制にすぎないのではないかという問題意識が双方で生じ、そうした壁を突破し、崩壊しつつあるホーム・ルームを再び構築せねば、正常な教育活動ができないという危機意識が教職員の間で生まれてきました。そのためには職員も直接生徒集団の中に入り、たとえ数日でも寝食を共にすべきではないかという雰囲気が出てきました。

日光白根頂上附近

こうした情勢の中で、生徒の自主性を重んじたホーム・ルーム作りを目指す「宿泊研修会」が開かれていきました(キャンプではない)。はじめは東京代々木のオリンピック選手村で第一回目のそれが行われましたが、何も東京までも行かなくても千葉市内でも実施可能ではないかということから、翌年からは天台のスポーツセンター内の青少年会館でやることになりました。昭和四十五年のことです。

この研修会は、現在のキャンプのような形態のものでなく、新入生に対しての高校生活のオリエンテーション的性格のものでした。したがってその内容は、ラジオ体操からはじまって、生徒指導部長、学年主任の話、担任から学校生活のおくり方といった話が中心でした。実施時期は四月下旬でした。

しかしこの天台での宿泊研修会も、オリエンテーション

だけではもの足りないということや、施設の面でも食堂が狭く、一同に会することができないということもあり、また、四月では担任が生徒の名前を覚えることが難かしくて生徒を掌握しがたい、といった事情が積みかさなり、二年で中止となっています。それに代わるものとして以前あったキャンプが復活したのでした。

昭和四十七年からのキャンプは、そうした事情をふまえ、ホーム・ルーム作りやオリエンテーションを主たる目的として捉えず、自然の中で生活し、体を動かし、充実感あふれる何かを掴ませようという趣旨の下で行われるようになりました。そうした考えの中で到達したのが、自炊もでき、登山もできるという日光でのキャンプでした。

＜昭和四十七年、四十八年のキャンプ＞　キャンプ場は日光中禅寺湖湖畔。四十七年は菖蒲ケ浜と千手ケ浜の二班に分かれる。四十八年は千手ケ浜のみ。登山は白根山で日程は二泊三日でした。

四十八年に同行した職員の話では、キャンプ、登山の内容としてはおよそ次のようなものでした。

二日目の早朝五時ころ、キャンプ場を所有している会社の定期航路の船をチャーターして千手ケ浜を出発し、中禅寺湖を横断する。バスで登山口である菅沼まで行き登山開始。この年は全員が同じコースを登った。中腹にある弥陀ケ池で大休止し、いよいよ本格的な登山。途中、がれ場があり全員足を踏みはずさないよう、また、落石をさせないよう注意させ前進。ここはかなりの急勾配で、しかも足場が悪いので高所恐怖症気味の生徒などは青ざめるものが続出する。特に女子は、毎年のことだが山頂に近づくにしたがって喚声をあげる。山頂では多くのクラスが押し合いへしあいしながら記念写真をとる。下山路は危険度少なく、全員空腹であるのでピッチも早い。正午近くに五色沼に到着。湖畔で昼食。その後再び弥陀ケ池まで上がり下山。七月下旬の日光白根山においては雷が非常に多く発生し、落雷の危険性があるので、できるだけ早く下山を促がす。登山口から再びバスで竜頭滝へ。そこからキャンプ場までハイキング。約四十分、千手ケ浜キャンプ場に帰ってすぐキャンプファイヤーの用意。

といった具合のものであったといいます。全般的にきついものであったようです。

＜昭和四十九年から現在まで＞　中禅寺湖畔は登山口まで遠すぎ不便だという声が四十九年ごろからあらわれ（その不便さこそ大切という人もいましたが）、もっと良いキャンプ場をということで模索しているうちに、登山口の菅沼に

大変良いキャンプ場があるのを知り、早速四十九年からはそこを利用する運びとなりました。

菅沼になってから以降のキャンプ、登山内容と、前述した四十八年のそれとは大した違いはありません。年によって、体力の乏しい生徒たちが比較的歩きやすいコース（Bコースと称している）を設けてやったぐらいのものです。ただキャンプ場即登山口となりましたので、時間的余裕ができたのと、三日目の行動が多彩なものとなったということが少し異った所です。三日目は日光国立公園の一部で高山植物の保護地として名高い戦場ケ原を散策しながら、竜頭滝までハイキングできるという行動がとれるようになりました。

4　進路この十年

南部　博昭

今回、四十周年ということで、昭和四十六年度から昭和五十五年度までの過去十か年の進路の資料をまとめることになりました。

資料の収集については、主に「学校基本調査」及び「千葉東高校進路のしおり」を参考に、統計を出してあります。

昭和五十二年度入学生から昭和五十四年度入学生までの高校入試における総合選抜制度の実施、昭和五十三年度卒業生からの国公立大学の共通一次試験の実施に伴う一期校、二期校の廃止と、幾多の変化がありました。

統計表から、この十か年を回顧すると、徐々に千葉東高校は、大学への進学校としての道を歩み始めていることに気付きます。国公立大学への進学は、ほぼ年毎に増加をし、最近の生徒の現況をみても、大学への進学熱は衰える兆は見られません。また、進路の分野を眺めても、多方面にわたり、各界における今後の活躍が期待されるところです。

進路指導部は、昭和四十六年度から昭和四十七年度にか

けては高山孝教諭(現県立千葉高教頭)、昭和四十八年度から昭和五十三年度までの、進路関係における変化の最も激しい時期に強力な指導をした朝日伊豆雄教諭、昭和五十四年度からは、ますます増加する進学熱をしっかりと受けとめ、全生徒の進路の自己実現の成功に夢をかける桜井功造教諭、という大物の各進路指導主事の方々に率いられ、成長を続け、今日の姿になりました。

現在、進路指導部では、桜井進路指導主事のもとで、渉外、運営を担当する金子澄兄教諭、進路情報を担当する橋本正教諭、資料関係を担当する南部博昭(筆者)、渡辺陽教諭、進路相談、会計を担当する三塚隆昭、福田靖教諭、就職を担当する織原勝二郎教諭、衛生看護科担当の田村照子教諭の計九名が、連絡を密にし、日ごろ、教鞭を執る間も惜しみ、各方面で研鑽しております。

資料の読者には、(1)、(2)、(3)の表から、過去十か年間の千葉東高校の発展の状況と変化を、推察していただければ、幸いです。

終わりにあたり、今後の千葉東高校の発展、進路指導部の充実を祈るとともに、資料収集に大変な御手数をかけた進路指導部の先生方、また、過去の進路を担当された先生方、及び事務の方々に心から感謝いたします。

＜資料の見方＞

(1) 千葉東高校卒業生の進路状況(普通科)について

＜卒業年度＞ 例えば、昭和四十八年度とは、昭和四十九年三月に卒業式を迎えた生徒のこと。以下資料(2)(3)も同じ。

＜進学者＞ 当該年度における現役卒業生の中の実進学者

＜教育訓練機関等＞ 専修学校進学者等を含む。

＜就職者＞ 防衛大学校等への進学者を含む。

＜過年度卒業者の進学状況＞ 当該年度以前に卒業した生徒全体の当該年度における進学状況

なお、昭和四十七年度については、資料の一部が欠けているので、正確を期すため、割愛した。

（2）千葉東高校卒業生の進路状況（普通科～現役）について

○表中のデータは、各分野別の現役の大学、短大進学者数を示す。

○昭和四十七年度については（1）表と同様の理由により割愛した。

（3）千葉東高校卒業生の進学状況（普通科～合格者延人数）について

○表中のデータは、各大学別の現役、浪人別の合格者延数を表す。

○国公立大学、私立大学、短期大学別に表を作成してある。

教育訓練機関等		就職者		無業者（予備校等）		過年度卒業者の進学状況							
						国公立大（学部）		私立大（学部）		国公立短大（本科）		私立短大（本科）	
／	計	／	計	／	計	／	計	／	計	／	計	／	計
3	22	5	15	131	131	11	14	117	119				1
19		10				3		2				1	
1	5		6	163	189	22	26	83	90				3
4		6		26		4		7				3	
1	7	2	5	149	179	20	22	150	164			2	4
6		3		30		2		14				2	
1	7	6	8	156	183	33	41	134	157		1		
6		2		27		8		23		1			
2	4	2	3	140	188	27	30	60	67				1
2		1		48		3		7				1	
			1	140	178	28	41	63	75				4
		1		38		13		12				4	
	3	1	4	150	175	34	37	68	83				3
3		3		25		3		15				3	
1	2	1	1	162	205	31	39	91	107				4
1				43		8		16				4	
	5	4	4	116	149	54	65	81	96				3
5				33		11		15				3	
9	55	21	47	1307	1577	260	315	847	958		1	2	23
46		26		270		55		111		1		21	

(1) 千葉東高校卒業生の進路状況（普通科）

卒業年度	男女別	卒業者数	計	進学者 国公立大（学部）	計	私立大（学部）	計	国公立短大（本科）	計	私立短大（本科）	計	その他	計
46	男	295	385	12	20	141	166	3	3		27		1
	女	90		8		25				27		1	
47	男	（資料不足）											
	女												
48	男	261	363	16	22	77	114	1	4	3	23		
	女	102		6		37		3		20			
49	男	246	361	24	34	70	100		1		35		
	女	115		10		30		1		35			
50	男	257	362	29	43	64	104				16	1	1
	女	105		14		40				16			
51	男	232	360	24	44	64	103		1		17		
	女	128		20		39		1		17			
52	男	237	359	24	46	73	112		1		21		
	女	122		22		39		1		21			
53	男	250	359	46	74	53	80				23		
	女	109		28		27				23			
54	男	247	360	35	56	48	73		1		22		
	女	113		21		25		1		22			
55	男	236	360	68	95	48	90		4		13		
	女	124		27		42		4		13			
計	男	2261	3269	278	434	638	942	4	15	3	197	1	2
	女	1008		156		304		11		194		1	

医　歯	薬　学	保　健	家　政	教　育	芸　術	その他
2	2		1	13	4	18
			2	4	1	1
1	5		2	9	4	8
			6	2	2	4
3	5			11	2	17
			4	6	3	2
3	9		5	15	3	21
			2	2		
	7		3	15	3	5
			1			4
5	4	1	4	15	4	6
			3	2	1	1
1	4		4	25	1	2
			1	3		6
1	4		2	24	4	3
			5	3		
6	6	1	2	28	5	6
		3			2	
22	46	2	23	155	30	86
		3	24	22	9	18

(2) 千葉東高校卒業生の進路状況（普通科～現役）

卒業年度	大学・短大別	人文科学	社会科学	理学	工学	商船	農学（水産含む）
46	大	19	93	12	22		4
	短	17	2		3		
47	大	（資料不足）					
	短						
48	大	23	48	4	28		4
	短	7	2		4		
49	大	23	37	6	22	2	7
	短	19	1				1
50	大	22	26	12	26	1	5
	短	11	1		1		
51	大	31	31	11	32		9
	短	13					
52	大	25	49	15	26		4
	短	14	1				
53	大	29	40	9	36		3
	短	12	1				
54	大	19	39	13	16		4
	短	11	4				
55	大	28	43	12	44		4
	短	10	1		1		
計	大	219	406	94	252	3	44
	短	114	13		9		1

図書館情報	筑波	宇都宮	群馬	埼玉	千葉	東京	東京医歯	東京外国語	東京学芸	東京農工	東京芸術	東京工業	東京商船
				1	9				5				
		1		1	2				7		1		
		1			5				1	1			1
	2	2		1	3								1
				1	10			1	4	1			
			1	1	7			1	2	1			
		3	2	1	9			1	7			1	1
	1			3	8				3	1	1		
	1		2		19			1	6	3			
	1	1		2	11	1			5	2			
	1	2	1	2	15				5	3			
	2				8	1		2	3	1		1	
	1	2	1	2	21			2	3	3			
	3				17	1			4	1			
	3			3	47	1		2	2	3			
	1				6	1	1			1	1	2	
2	3	2		1	28			2	2	1	1		
					16	2		3		1			
1	4		2	2	50		1	2	5	1		2	
	4			1	26	3		1	2	2	1	2	
3	13	10	8	13	213	1	1	11	40	16	1	3	2
	14	4	1	9	104	9	1	7	26	10	4	5	1

(3) 千葉東高校卒業生の進学状況（普通科～合格者延人数）～国公立大学

卒業年度	現浪別＼大学	北海道	北海道教育	小樽商科	帯広畜産	弘前	岩手	東北	宮城教育	秋田	山形	福島	茨城
46	現				2								2
	浪												
47	現												
	浪	2						1			1		1
48	現							1					
	浪	1			1				1				1
49	現					1							1
	浪			1	1								1
50	現							1					3
	浪	2				2		2				1	1
51	現						1						4
	浪	1			1		1	2		1	1		1
52	現							2		1	1		1
	浪	1	1								2		4
53	現	3		1				1	1				2
	浪							2			1		
54	現	4						1				1	
	浪	1						1			1		
55	現							7			1		1
	浪				2			2			1	2	1
計	現	7		1	2	1	1	13	1	1	2	1	14
	浪	8	1	1	5	2	1	10	1	1	7	3	10

静岡	名古屋工業	豊橋技科	京都	京都教育	京都工繊	大阪	大阪外国語	大阪教育	神戸商船	島根	岡山	広島
			1									
1												
										1		
									1			
									1			
				1	1							
											1	
									1			
		1										1
2	1		1									
1			1			1						1
	1		1				1	1				
			1				1				1	
1			1				1					1
1			1									1
2	1	1	3				2	1	2	1	1	2
4	1		4	1	1	1	1		1		1	2

(3) 千葉東高校卒業生の進学状況（普通科～合格者延人数）～国公立大学

卒業年度	現浪別＼大学	東京水産	東京教育	お茶の水	電気通信	一橋	横浜国立	新潟	富山	富山医薬	金沢	山梨	信州
46	現												
	浪				1			1					
47	現	1			1	1							
	浪	1	2		1	1	1						
48	現	2											
	浪			1	2								1
49	現	2			1		1						1
	浪					1	1						
50	現			1	1				1				2
	浪				2		1						
51	現				2		2			1		2	1
	浪	2				1						1	
52	現				3	1	3					1	3
	浪	1			2		2	2			1		1
53	現	1		1	3	1					2		1
	浪				2	4	2	1			1	1	1
54	現	2				1	2					1	
	浪	3		1		1					1	1	
55	現				1	1	6	2				2	1
	浪	2		2	3	1	7	2					
計	現	8		2	12	5	14	2	1	1	2	6	9
	浪	9	2	4	13	9	14	6			3	3	3

高崎経済	東京都立	横浜市立	都留文科	静岡女子	京都府立医	大阪府立	北九州	防衛	防衛医科	航空大	海上保安大	水産大
			1	1			1	1				
1												
1			1									
	1	2	1									
1		1										
		1										
		1					1	2				
		1				1		2				
	2		2					1				
					1							
		1	1					1				
	2		1								1	
		1						1		1	1	
	3	1										
1	1	1										1
	4	3	1		1			3		1		
	3							1	1			
2	11	6	6	1	2		2	7		1	1	
2	5	7	2			1		5	1	1	1	1

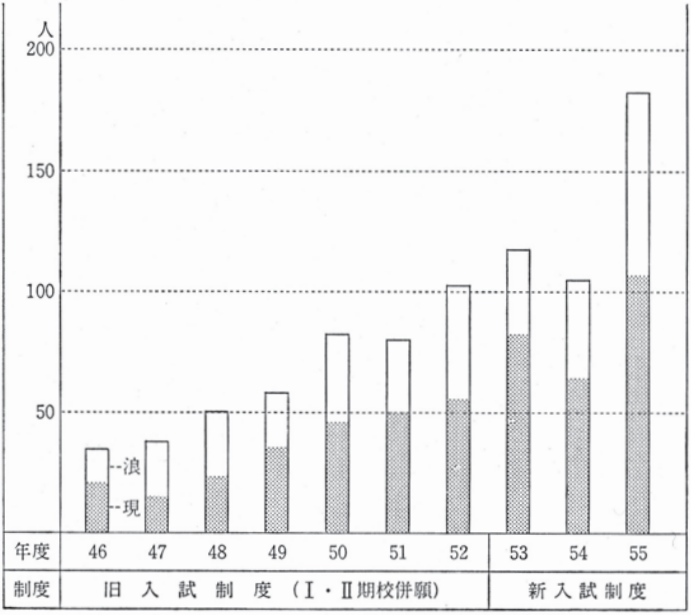
(3) 千葉東高校卒業生の進学状況（普通科～合格者延人数）～国公立大学

卒業年度	大学 ＼ 現浪別	山口	徳島	愛媛	高知	高知医科	九州	佐賀	長崎	鹿児島	琉球
46	現										
	浪										
47	現										
	浪				1			1			
48	現									1	
	浪										
49	現										
	浪										
50	現										
	浪							1			
51	現			2			1				
	浪										
52	現										
	浪							1			
53	現										
	浪			1					1	1	
54	現		1								1
	浪	1					1				
55	現				1		1				
	浪		1			1					1
計	現		1	2	1		2			1	1
	浪	1	1	1	1	1	1	3	1	1	1

最近10年間の卒業生進路状況の推移

設置者別＼年度	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55
国公立大	34	38	50	58	83	81	103	116	106	183
私立大	281	316	339	302	379	354	363	432	444	517
準大	0	1	0	0	4	1	1	4	1	6
国公立短大	4	0	2	1	1	1	2	0	3	5
私立短大	31	33	30	58	35	44	48	56	45	40
専修・各種学校	28	17	9	8	7	7	7	4	8	8
就職	12	16	6	5	8	3	1	3	1	1

国公立大学・合格者数の推移

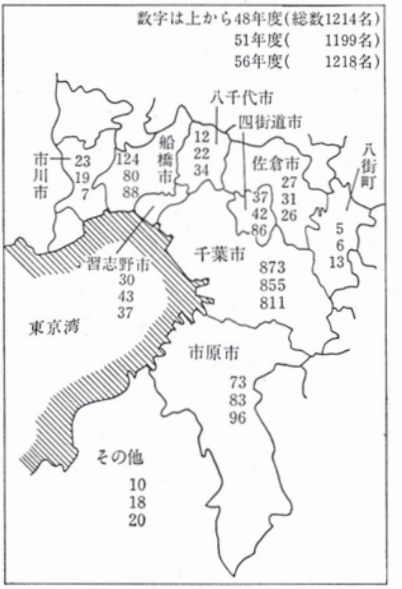


東高断片④——総合選抜制——

朝日　伊豆雄

昭和五十年度千葉県立高等学校第一学年入学者の選抜から、従来実施されて来た各高等学校ごとの選抜（単独選抜と呼称）が、高等学校の全日制課程普通科について、各学校を三つの学校群に編成し、各学校群ごとの入学選抜（総合選抜と呼称）へと変更して実施されました。この制度は結局は三年間継続されただけで解消されることになりましたが、本校はこの制度によって、結果的には大学進学の機運にはずみがついたような資料が数字になって残されています。本校の所属した学校群並びに全体の学校群を掲げます。

通学区域生徒数の変化
（全日制課程）



〈第一学校群〉　千葉高等学校　千葉女子高等学校　千葉東高等学校　千葉南高等学校　千葉市立高等学校

〈第二学校群〉　八千代高等学校　船橋高等学校　薬園台高等学校　船橋東高等学校　船橋市立高等学校　習志野高等学校

〈第三学校群〉　鎌ケ谷高等学校　国府台高等学校　国分高等学校

以上の学校群ごとに総合選抜委員会を設置し、願書は選抜事務担当校（第一群は千葉高）に第一希望校を記入して提出させました。総合選抜委員は、学校群を構成する各学校の校長、教頭、及び教諭若干名で組織され、入学許可候補者の各学校への配分を行いました。

その配分方法は、第一次配分により、各学校の第一希望者のうち、成績順位の上位の者から各校募集定員の二〇パーセントを優先的に各学校の入学許可候補者とし（二年目以降は三〇パーセントに変更）、第一次配分で所属の決まった者以外の者については、各学校の入学者の成績分布や男女比の均等、通学所要時間、本人の第一希望等を尊重して配分していきました。

以上の選抜方法で入学許可候補者が決まりましたが、希望校に入学できず落胆する者、希望しなかったが名門

校に入学できた者、希望校に入学できた者等、悲喜こもごものようでしたが、東高では入学後の不満はあまり耳にしませんでした。

この総合選抜制は、地域の中学校側からの強い要請で学校格差の是正をねらったもののようですが、その是非は別として入学選抜制度の歴史として後世に残るものと思います。

東高では入学を辞退するものはいませんでしたが、第一群中には入学辞退者が続出する学校があり、その欠員を選抜委員が繰上げ入学許可候補者を補充しても定員を割った学校があったように聞いています。また落第生が思わぬ拾いものをしたのもこの選抜制の面白い点でありました。最後にこの八年間の生徒の通学区域を図示しておきます。（朝日）

5　静読十年——図書館の歩み——

星野　志朗

図書館のきまり

1　図書館規則

一　目的　本校の図書館は、生徒および職員の学習、研究調査および教養の向上をはかるため必要な図書、その他の資料を収集整理保存し、その利用に供することによって学校の教育展開に寄与することを目的とする。

二　任務

①　資料の収集は校内の世論に基づき指導的な立場から図書館長がその方針を立てる。

②　資料の台帳・備品台帳および目録を備える。

③　原則として資料は館内に保管する。

三　運営

①　校務分掌表に従い読書指導、視聴覚指導、資料・庶務会計の係を置き担当職員を置く。

②　図書館長は運営の全般を総括し、校長の監督を受ける。

③　運営の円滑化のために生徒会に図書委員会を設ける。委員会規程は別に定める。

四　経理　図書館の運営には、公費をもってあてる。

五　開館

①　生徒登校日は始業前三〇分より下校時までとする。

② 長期休暇中は別に予定を定めて開館する。
③ 臨時開館についてはそのつどこれを告示する。

六 閲覧

① 資料の利用法は自由接架式とする。
② 館内での食事・着帽・談話など、他人の迷惑になる行為は禁ずる。
③ 館外貸出については別に手続規程を定める。

七 罰則

① 資料の棄損紛失などの場合は弁償させる。
② 館則に従わない者の利用を停止させることがある。

静粛第一

2 図書閲覧規程

一 閲覧後は正しくもとの位置にもどす。
二 貸出は一人二冊までとする。
三 貸出期間は貸出日を含めて八日とする。
四 貸出をうけようとするものは個人帯出カードとブックカードに学年・組・氏名・返却予定日を記載し身分証明書を示して委員の許可をうける。
五 貸出をうけた図書は返却予定日の始業前に委員に返却する。返却は直接本人がする。
六 図書は大切に取り扱い、もし破損または紛失したときは原則として弁償させる。

3 分類

図書資料は、日本十進分類法にもとづいて整理してあ科検索の参考に次に分類表を示す。

000 総記（図書館・百科事典・新聞）
100 哲学（哲学・心理学・倫理学・宗教）
200 歴史（歴史・伝記・地理・紀行）
300 社会科学（政治・法律・経済・統計・社会・教育・民族・軍事）
400 自然科学（数学・自然科学・医学）
500 工業（工学・工業・技術・家事）
600 産業（農林業・水産業・商業・交通）
700 芸術（美術・音楽・演劇・体育・諸芸・娯楽）
800 語学
900 文学

図書館の概況

1　蔵書数の推移（47年3月〜56年3月）下記

2　新　聞

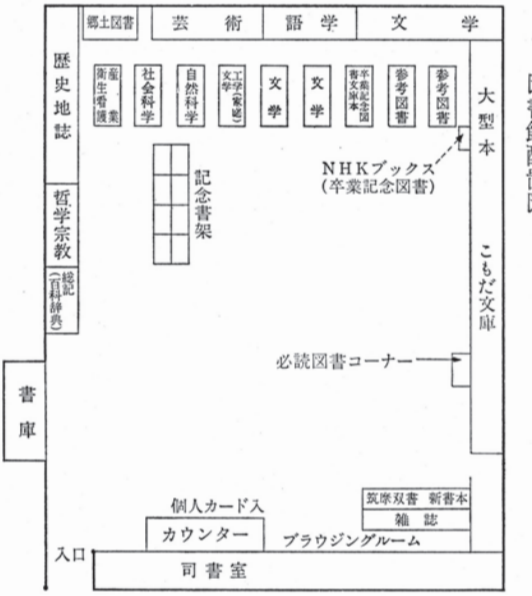
朝日新聞、朝日新聞縮刷版、毎日新聞、読売新聞、千葉日報、ステューデントタイムズ、サンケイ新聞、アサヒイブニングニュース、図書新聞

3　雑　誌

世界、中央公論、文芸春秋、螢雪時代、暮しの手帖、旅、太陽、山と溪谷、千葉教育、栄養と料理、科学朝日、アサヒカメラ、装苑、新聞月報、群像、図書、芸術新潮、音楽の友、高1・2・3コース、高校教育、国際問題、学校図書館、アニマ、その他官庁PR誌等

分　類	0総記	1哲学	2歴史	3社会科学	4自然科学	5工学	6産業	7芸術	8語学	9文学	計
S47.3 現在冊数	905	718	1,772	1,412	1,980	470	109	1,153	510	3,913	12,942
S48.3 〃	961	770	1,868	1,509	2,089	516	115	1,212	568	4,307	13,915
S49.3 〃	999	800	1,986	1,566	2,232	540	120	1,353	648	4,695	14,939
S50.3 〃	1,032	834	2,100	1,594	2,358	570	124	1,388	685	5,131	15,816
S51.3 〃	1,064	868	2,229	1,703	2,387	587	160	1,413	721	6,373	17,505
S52.3 〃	1,106	890	2,319	1,758	2,494	614	162	1,463	728	6,480	18,014
S53.3 〃	1,091	884	2,298	1,760	2,450	628	147	1,415	740	6,353	17,766
S54.3 〃	1,155	918	2,311	1,784	2,553	643	151	1,404	817	6,483	18,219
S55.3 〃	1,221	1,051	2,405	1,905	2,645	671	152	1,444	825	6,804	19,123
S56.3 〃	1,854	1,079	2,534	1,971	2,818	710	157	1,460	838	7,149	20,570

4　図書館配置図



図書館の利用のしかた

1　開館、閉館の時間

(1)　夏　季（四～一〇月）……午前八時より午後五時まで
　　冬　季（一一～三月）……午前八時より午後四時三〇分まで
　　土曜日……午前八時より午後一時まで

(2)　長期休暇中の開館は必要に応じて決定する。

(3)　臨時開館、閉館についてはそのつど決定し告示する。

2　貸出規定

(1)　取扱い時間……毎日昼休みおよび放課後

(2)　貸出冊数……一人二冊まで

(3)　貸出期間……一週間
　　（※引き続き借りたい場合は委員に申し出てカードに記入するだけでよい）

(4)　禁帯出図書および雑誌、新聞等の貸出しは原則として行わない。
　　（ただし、図書部長が必要と認めた場合には例外を許す）

(5)　図書を紛失した場合にはただちに申し出ること。
　　（原則として弁償のこと）

(6)　返却する場合はカウンターの上にある返却箱に本を入れておいてもよい。
　　その時必ず個人カードを一緒に添えること。

(7)　図書を借り出す時の他は個人カードは館内の指定の場所に入れておくこと。

3　貸出の手順

(1)　希望の本を書架から選びだしたら最後のとびらをひら

く。

(2) ブックカードが入っているので、クラス、氏名、貸出日、返却予定日を記入する。

(3) 自分の個人カードをケースからとりだし、請求番号、書名、返却日を記入する。

(4) 記入が終ったらブックカードと個人カードを委員に示し許可を得る。

※個人カードの書き方

1－1

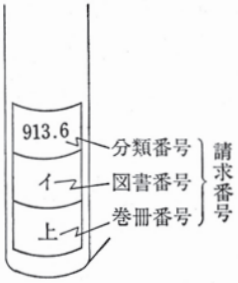
千 葉 一 郎

請求番号	書　　名	貸出日	返却予定日	返却日
913.6 イ上	青春の門　上巻	4.20	4.27	

(例)

五 木 寛 之著

「青春の門　上巻」



4　注意事項

(1) 館内では食事、談話等他人の迷惑になるようなことはしないこと。

(2) 書架から取り出した本は閲覧後は必ずもとの位置にもどすこと。

(3) 貸出しは貸出規定に従って行なうこと。

(4) 清掃中は館内に入らないこと。

(5) 自習時間は閲覧室を利用してよい。

◎正規の手続をしないで持ち出され、そのまま返却されない図書館の書籍がかなりの数になる。特に、全集など歯が抜けたようになって非常にこまる。絶対にやめること。

5　その他

(1) 新着図書は、司書室前およびカウンター前の展示ケースに展示する。

(2) 図書購入の希望は、館内の希望図書箱を利用する。

（※そのすべてを購入することはできないが、図書部長が適当と認めたものは購入する）

◇分類について

図書館では、利用者が自分の求める図書をすぐ探し出せるように、図書を分類してある。

(1) 分類番号

分類については古くからいろいろ考えられてきたが、日本には「日本十進分類法」NDC（NIPPON DECIMAL CLASSIFICATION）があり本校でもこれによって分類している。

図書のもつ主題を九つの類（ルイ）に分け、1 哲学宗教　2 歴史地誌　3 社会科学　4 自然科学　5 工学　6 産業　7 芸術　8 語学　9 文学 と分類し、はっきりと分類できないものをまとめて、0 総記 として1の前におく。つまり分類は0〜9の十区分になる。

「類」はさらに十の「綱（コウ）」に分け、綱はさらに「目（モク）」に分け、目はさらに「分（フン）」に分ける。

これらの分類項目は、いずれも算用数字を用いて表し、三桁目に小数点（ポイント）をつける。

読み方は913.6（きゅう　いち　さん　てん　ろく）と読む。

類　9　　文学

綱　91　　文学—日本

目　913　　文学—日本—小説

分　913.6　　文学—日本—小説—現代

図書館に入った本はこのＮＤＣによって分類され、分類番号が与えられる。

この方法は、どこの図書館でも同じなので、「類」ぐらいはおぼえておいた方が便利である。

（注）百科事典は、総記（０００）に分類してあるが、その他の辞典類は、参考図書として十進分類表とは別に分類して配架してある。

(2) 図書番号

同じ分類番号であらわされる本は数多くあるので、これらを区別するために図書記号をつける。

本校では著者の頭文字をカタカナで書き、それを図書記号とする。

(3) 巻冊番号

一つの本が、上巻、下巻、第一巻、第二巻というようにそろっている時にそれらを区別するために番号をつける。これを巻冊番号という。

図書館利用の実態

○図書の貸出し

一日平均三〇～四〇冊。ほとんど「文学」関係である。

図書館司書　佐瀬八重子先生

○閲覧室の利用

図書館の書物を読むためでなく、教科の自習のために利用する傾向にある。

刊行物

○図書館報

昭和三十八年創刊。五十七年三月で六十号となる。

Ｂ５四～六ページ。当初はガリ版印刷であったが今はタイプ印刷である。

○新刊紹介

以前は「図書館報」その他で紹介したが、昭和五十二年四月からＢ４一ページの形に定着した。年間約一〇回発行

図書委員会

○役員

委員長一名、副委員長一名、会計二名

○委員

各クラスから二名

○顧問教師　三名

○活動

・カウンター係（一日当たり二名）

図書の貸出し、返却の事務。新聞の整理。製本

・図書館報係　一二名

図書館報の編集。（書架整理）

・蔵書整理　全員

七月（期末考査終了後）に一週間

6　国際青春――海外交流教育小史――

鈴木健生

本校は教育目標に「国際的視野を持つ人物の育成」を挙げていますが、本校のこの一一年間は国際交流の幕明けとも云えるものでした。過去一一年間の交流の概要は表Ⅰ・Ⅱのようですが、現在本校が参加しているプログラムについて若干のコメントをしてみます。

〈ロータリークラブ留学生〉　本校がロータリークラブ留学生を受け入れたのは昭和四十七年度のリン・ポールトンさんがはじめてで、送り出したのは昭和四十九年度の則安さんからです。以来受け入れ一一名（米国、豪州）、送り出し八名（米国、豪州）を数え、共に一年間の滞在プログラムです。受入れの場合、部活動は圧倒的に剣道部が多く、初段を取って帰った女生徒もいました。また芸術は全員が書道を選択し、日本武道館主催の全国書初展にも参加したりしています。

〈ＡＦＳ留学生〉　財団法人ＡＦＳ協会主催のプログラムで受入れは、サマープログラム、国内短期留学プログラム（一年間日本に滞在中に、一週間位の予定で他校での生活を経験するプログラム）に参加の生徒が主です。昭和四十七年度より現在まで一四名来校しました。送り出しについてはＡＦＳの一年間留学プログラムのテストに合格した生徒五

いよいよホームステイ

名が昭和四十八年より米国、豪州で勉強しました。

＜日米高校生交流プログラム＞　今年度で一〇回を迎えるこのプログラムは、日米協会、国際教育交換協議会（一九四七年ニューヨーク州法に基づいて設立された民間の非営利団体で、本部ニューヨーク。国際交流活動を幅広く行っています）米国中学・高等学校長会の主催、在日米国大使館の後援で実施されています。日米双方の高校が姉妹校の関係を結び、原則として毎年、渡米は三、四月の一か月、来日は六、七月の一か月、それぞれ相手校を訪問するプログラムです。本校は第二回目より県の指導課の紹介もあり、匝瑳高校と共に参加し、現在にいたっています。途中相手校の都合で提携校を変えましたが今年度まで計七回生徒を派遣しています（毎回、引率教師一名、生徒一一～一〇名）。日本全国では

ぼくがオーストラリアに行った時はね……。

三十数校参加していますが、生徒の国際的視野を広め、英語に対する関心を持たせるには大変有意義なプログラムと言えます。

＜ノースバンクーバー市派遣＞　千葉市の姉妹都市であるカナダのノースバンクーバー市に、千葉市と千葉姉妹都市市民の会（事務局千葉市役所総務課内）が高校生四名を親善使節として夏休みの間、約一か月派遣するものですが、本校からは昭和四十六年度から現在まで八名の生徒が参加しています。カナダのすばらしい自然と人情味あふれる歓迎にすっかり魅了されて帰国し、大いに親善の実をあげているようです。

＜千葉県高等学校生徒海外派遣＞　千葉県が毎年海外に高校生を派遣するプログラムです。主として東南アジア方面に夏休みを利用して実施しています。昭和四十九年度よ

Ⅰ 派遣、留学の記録

年	度	ロータリー	A・F・S	日米高等学校交流プログラム	その他
昭和46	1971				カナダノースバンクーバー市に（市民代表として）2名派遣（森田、山田）（8月）
47	1972				同　上（菅原洋子）
48	1973		坂巻政明 (48.8～49.7)(米国)	米国エミール・ブクサー高校へ生徒派遣（3月～4月） （カリフォルニア州サンタクララ市） （団長松本正子教諭以下10名）	同　上（上野）
49	1974	則安ゆかり (49.4～50.3)(豪州) 木戸秋圭一 (49.9～50.8)(米国)		同　上 （団長曽根正之教諭以下10名）	千葉県高校生海外派遣（岩崎緑）（8月） ノースバンクーバー市派遣（金城昭一）（8月）
50	1975	柴田玲子 (50.4～51.3)(豪州)		同　上 （団長原口与一教諭以下11名）	
51	1976	寺島洋子 (51.4～52.3)(豪州)		同　上 （団長西郡厳教諭以下10名）	
52	1977			同　上 （団長鈴木健生教諭以下10名）	千葉県高校生海外派遣（工藤浩子）（8月）
53	1978	有賀裕子 (53.4～54.3)(豪州) 青山和美 (〃　〃)(〃) 佐々木薫 (53.8～54.7)(米国)	井上裕雄 (53.7～54.6)(米国)	米国チャールズ・ボエム、メディルベア高校へ生徒派遣（3～4月）（ペンシルベニア州） （団長亀忠夫教諭以下11名）	ノースバンクーバー市派遣（生田裕人）（8月）
54	1979	井上希代子 (54.9～55.8)(米国)	時澤俊也 (54.7～55.6)(米国)		同　上（平嶋篤美）（8月）
55	1980		佐藤千恵 (55.8～56.7)(米国)	米国チャールズ・ボエム、メディルベア高校へ生徒派遣（3～4月）（ペンシルベニア州） （団長亀山仁寿教諭以下11名）	
56	1981		津島緑 (57.1～58.12)(豪州)		ノースバンクーバー市派遣（大和田きみ子）（8月） 千葉県高校生海外派遣（浅賀裕子）（8月） ＹＦＵ留学生牧みさ子（56.9～57.8）（米国）

Ⅱ 受入れの記録　　（モットー　無理なく、自然に、息を永く。経費、待遇の面で特別の配慮をしない。）

年	度	ロータリー	A・F・S	日米高等学校交流プログラム	その他
46	1971				
47	1972	リン・ポールトン （48.1～49.1）（豪州）	フィリップ・シエルダン （11月）（米国）		ノースバンクーバー市より親善使節（7月）
48	1973	リン・ウィリアムズ （49.1～50.1）（豪州）	メアリー・ヒートン （6月～8月）（米国） ジェームズ・スンワルト （11月）（〃） ダイアナ・レイビイ （〃）（〃）		ノースバンクーバー市より親善使節（7月）
49	1974	ジュディ・ハウエル （50.1～51.1）（豪州） マーナ・フレッチャー （49.9～50.7）（米国）	マリアーナ （6月～8月）（米国）	米国高校生来校（6月～7月） （カリフォルニア州サンタクララ市ブクサー高校） （団長スミス先生）	
50	1975	キャサリン・レイナー （51.1～52.1）（豪州）		米国高校生来校（6月～7月） （カリフォルニア州サンタクララ市ブクサー高校） （団長スペンサー・ヒンクル先生）	フィリッピンより親善使節（6月）
51	1976	リン・ドネラン （52.1～53.1）（豪州）			
52	1977	デボラ・カーマイケル （53.1～54.1）（豪州） ジェニファー・ワッツ （〃　〃）（〃）	デニス・ベッカー （6月～8月）（米国） ルイース・エイムズ （11月）（〃） ブライアン・セシラー （〃）（〃）	米国高校生来校（6月～7月） （カリフォルニア州サンタクララ市ブクサー高校） （団長ジェイムズ・タルート先生）	
53	1978	メアリ・ディビッドソン （53.9～54.7）（米国）	マーク・スワンバーグ （6月～8月）（米国） ディビッド・ポッター （11月）（〃） パネロープ・ボイド （〃）（〃）		カリフォルニア大学生、サラ・サンドフォードさん日本の高校の研究の為来校（4月一杯）
54	1979	ミッシェル・ウエスト （55.1～56.1）（豪州）	サラ・ボイル （10月～11月）（米国）		マレーシアより教員2名来校（国際交流基金）
55	1980		ジュリー・レーサー （6月～8月）（米国）		
56	1981	ジョン・パターソン （57.1～58.1）（豪州）	ローリー・キング （6月～8月）（米国）		YFU留学生キャサリーン・ケント来校 （56.4～56.12）

り計三回、三名の生徒が参加しました。

〈YFUプログラム〉　YFU（ユース・フォー・アンダースタンデング）協会が主催するプログラムで現在まで一名受け入れ、一名派遣しました。一年間のプログラムです。

以上かいつまんで報告させていただきましたが、調査はすべて昭和四十六年度からのもので、それ以前のことにはふれていない点、数多い調査対象のなかからピックアップした点などもあり、誤記がありましたらご一報をいただければ幸いです。

海外交流思いつくままに

旧職員（社会科）　曽根　正之

羽田空港を飛び立って九時間、太平洋を一っ跳びでサンフランシスコへ。地球は大きいのか小さいのか、距離感喪失。地図を眺めて咸臨丸を思った。サンフランシスコからサンディエゴへ、眼下春三月、緑野のカリフォルニアは広く豊かだった。

昭和四十八年、県指導課佐々木輝雄先生からの紹介、校長畠山一郎先生の肝煎り、AFSその他を通じての国際交流の気運もあって、日米の相互理解と親善、教育情報の交換を目的とする国際教育交換協議会（本部ニューヨーク）の仲介で、本校とエミール・ブクサー高校との提携がなり、代表生徒十名と引率職員一名を相互に派遣しあうことになりました。

初回松本正子先生、次いで私、原口与一・西郡厳・鈴木健生の各先生、五十四年提携校がペンシルベニア州リトルベア高校、ボエム高校に替わって亀忠夫先生と亀山仁寿先生、前後七回、生徒数延べ七二名が派遣されました。なお米国側からは五十二年まで三回の来訪がありましたが、その後途絶えているのが残念に思われます。

ブクサー高校は、サンフランシスコ南東約七〇km、温和な地中海式気候、周辺には二次加工の近代工業が立地するとともに、果実（オレンジ・ぶどう）、野菜（レタス・トマト）を栽培する豊かな農業地域に囲まれた、人口一〇万余のサンタクララ市にあります。生徒数一四〇〇余の四年制（六・二・四、小学区全入制）の総合高校です。市民として必要な一般教育（general education）を中心に、職業技術の教育課程（vocational program……wood, metal, auto shop を含む）、進学のための教育課程（college preparatory or academic program）が設けられており、日本の大学と同じような完

全な単位修得制です。地方都市の高校のあり方としては理想的なシステムのように思われました。生徒たちは、何々大学へ進学をということでなく、自分が将来どのような職業分野に進むかを目標としているものが多いようで、高校生活を明るくのびのびとエンジョイしているようにみえました。施設面で目についたことは、観覧席付フットボール兼公認陸上競技場、温水プール・温水シャワー付更衣室、野球場は勿論他は推して知るべしです（体育は毎日一時間必修）。校舎は全部平屋で身障者に便利、物の運搬容易、直接庭に出られます（安全）。他には、図書館と隣りあわせの視聴覚教材センターが非常に良く整っていたこと、実験実習室には生徒用椅子が二八しか用意されていないことなどが目につきました。

私たちの交流プログラムは、一〇日間の見学旅行、三週間のホームステイによる通学及び地域見学からなっていました。見学旅行ではサンフランシスコ、サンディエゴ、ロスアンジェルス、サンタバーバラ、サリナスバレー、モンテレーと回り（日系三世UCLA女子学生の案内）、地域見学ではサンタクルツ、サンノゼなどを訪れ、大学、研究所、美術館、博物館、工場、レクリエーション施設、名所旧跡などの見学を行いました。百聞は一見に如かず、米国西海岸地域を知る上で大いに役立ったと思います。学校生活では、生徒たちは、必修の体育一時間を含めて、カウンセラーの先生と相談して学習しやすい科目を選んで時間割を作り、授業には積極的に参加しておりました。優秀な代表生徒なので、学校でも、地域見学でも、お世話になった家庭でも、物怖じせず、分からないところは身振り手振り筆談も交じえて意志疎通をはかり、明るく溶け込んでいたようです。全員の家庭訪問をしたのですが、良い子だ賢い子だと誉め言葉ばかりでした（家族は親日家で明るく親切、日本流のお世辞でなく、良いところを誇張していいます）。ブクサー高校の授業は、生徒の自学自習・問題発見・問題解決を教師が助けるという進め方が基本です。後方で怠けてお茶を濁している生徒もかなりいますが、熱心な生徒が教師を囲み、先生と生徒、生徒同志白熱した論議を展開していてどの教室も賑やかです。静まりかえって先生の講義を拝聴というのはありませんでした。何といっても一クラス三〇人を越えないというのは指導が行き届いてたいへん羨ましいことです。

翌年（五十一年）来訪のスペンサー・ヒンクル先生のホームステイを我が家で引受け、四週間余をともに暮しました。ブクサー高校では視聴覚センター主任、授業では社会学な

ども担当、何でも見てやろう経験してやろうという積極人間でたいへん感心しました。我が家のありのままの献立を希望し全てに挑戦。トイレ、風呂、台所、寝室などあらゆるところを写真に撮る。町内会の排水溝掃除まで手伝うといったぐあいです。家族旅行で富士山を見に河口湖にいったのですが、スバルラインで五合目まで登れたのに、天気が悪く行かずに裾野だけで帰って来たのが未だに心残りです。

このプログラムは参加生徒の国際的視野を広げ米国への理解を深めさせることは勿論、積極性と行動力を育てます。また学校全体の英会話への関心を高めてくれるでしょう。さらには庶民レベルの平和外交とも考えられます。

（県育英会館主事）

アナタハ、ハッピーな教師

英語科　亀山　仁寿（昭和五十六年度団長）

ペンシルベニア州ヤードレイにあるチャールズ・ベイム（ニューヨーカーはボァムと発音していた）とミドル・ベア両校が提携校となってから、今回（昭和五十六年三月）が二度目の訪問でした。独立戦争の時のワシントン・クロッスィングで有名なデラウェア川をはさんだ対岸に、ニュージャージイ州都トレントンがあります。森と芝草の中を縫って続く白い道筋に点在する住宅には伝統的英国様式を残しているものも相当あり、住民のいかにも質朴な精神と、建国のノスタルジアが色濃く漂うしょうしゃな町でした。

三月十二日ケネディ空港着、ニューヨークで二日、ワシントンは三日の研修ツアーからまず私たち一二名のアメリカ生活が滑り出し、やや疲労感はありましたが何となく自信めいたものを深めながら懐かしの日本語とも訣別、十七日から待望のホームステイに入りました。そのころセピアの林にひとしきり粉雪が舞っていました。風俗、習慣、言語、それに物の考え方にも違いのある人たちと起居を共にするのですから、チグハグなところがでて当然の筈なのですが、私たちに接する全ての人たちが、失敗や誤解の生じないようさりげない配慮をしてくれていることに気付かされました。数時間の授業担当、訪問などの外に私の為すべき仕事は、生徒たちが各自の目的を十分果せるよう条件整備をしてやることでしたが、献身的にお世話くださったヒッキイ、レーガン両先生には、アメリカ人学生と全く同じ生活をさせたいので、日本人学生の語学力を考慮しての特別なプログラムは不要であることを予め連絡してありました。というのは、力の及ぶ範囲で日本紹介に努めることは

My Life at Chiba Higashi

Marna Fletcher

My year here at Chiba Higashi High School may well be the most valuable year of my education. Although I cannot study standard subjects along with my classmates, I am still learning a great deal.

I dont understand much of my teachers' lectures, since they often talk very fast and use difficult words. So, usually I study my Japanese conversation textbook and practice writing hiragana, katakana and kanji during class time. I spend my free periods in the library, talking and studying with Judy Powell (a Rotary Club exchange student from Australia), or writing letters to my family and friends back in America.

I feel very fortunate to have Judy here with me at Chiba Higashi. Otherwise, I think I would forget much of my English! Judy and I often talk about our experiences as exchange students living in a foreign country. She has been here only about a month, so I am helping her adapt to Japanese customs and language. We also learn from each other about American and Australian ways of life.

When I first came to Japan, at the end of August last year, the only Japanese I knew was hai, Mrs. Ichijo gave me lessons in Japanese conversation, and I studied hiragana on my own. Now she is teaching Judy, and I am learning how to write kanji from Matsumoto sensei. Japanese is certainly difficult, but I am making progress. My understanding and speech improves little by little each day.

English class is where I try to make my contribution. I help by reading aloud and by coaching my classmates' pronunciation. I hope I am being of some service to Matsumoto sensei ; She has been wonderful about helping me learn Japanese.

Sone sensei is now teaching Judy and me about Japan's geography, climate, and industries. His lessons introduce much interesting information.

I belong to the Sadō Club that meets during school. I hope to know the tea ceremony ritual before l return to America. I enjoy it a lot, although standing up afterwards is very difficult!

Students at Chiba Higashi High School are great kids, they are friendly, and always full of energy. I like my classmates very much. I had an especially good time with them on our school trip in Kyoto.

I am not learning a lot about science and math and civics and such, but I am learning a lot about Japan's language and culture. Living and going to school here will probably be the most special experience of my life. I am getting an "all-around" education, where I learn from life rather than from books. Every person I meet is my teacher! I'll attend university when I return to America. and then I will have to study hard for assignments and tests. However, the knowledge I gain during my stay in Japan will always be remembered whereas facts memorized for college exams will not. This education I' m getting from Japanese home and school life is something I can share with my family and friends in America, which makes the education even more meaningful.

I am extremely grateful for the kindness of my host families and the people at Chiba Higashi High. Thanks to them, I'm having a wonderful time !

(昭和49年度ロータリー留学生・アメリカ)

勿論、彼我の間隔を如何に工夫してつめていくかがこの短期留学の最大の眼目だと私は思っていたからです。順応の速さ、言語反応の的確さ（日本の学校の教室では到底望めそうにない位に）、そして何よりも、それぞれの受入れ家庭で実の家族の一員として慈愛溢れる保護を受けたことなど、何物にもかえ難い貴重な体験を持ち得たと言えるでしょう。

若芽が一せいに吹き出し、泰山木の花盛りの道を行く車中で、教育委員会社会科指導主事のレバガン氏が次のような意味のことを私に言いました。

「アナタノ学生ノ優秀サニハ驚カサレマス。人物モ、英語モ本当ニ素晴ラシイ。私タチガアナタタチカラ学ブコトコソ多イト思イマス。コノプログラムハ大成功デス。アナタハ非常ニハッピーナ教師デス。」

多様な経験と鮮烈な印象に歓喜しながら春浅いペンシルベニアに涙の別れを告げ、生徒たちは一まわりも二まわりも大きく成長して、四月九日夕刻に帰国しました。リーダーの私だけが変わりばえもせずに……。

（昭和五十六年PTA会報第四六号より転載）

〝日本印象記〟

リン・ドネラン（ロータリー留学生、昭和五十二年一月より一年在学）

一九七七年一月二十二日私は日本をおとずれるために真夏のオーストラリアをたちました。私の名前はリン・ドネランです。十七才です。私の話せる日本ごは、今日は、だけでした。一月二十三日私が羽田についた時はとても寒くて、雪がふっていました。メルボルンの近くのフランクストンとゆう町から来ました。私の住んでいるところでは雪がぜんぜんふりません。だからとても寒くかんじました。

羽田からくるまで千葉のホストファミリのお宅に来ました。その日私は初めてカレーライスを食べましたがとてもからかったので食べられませんでした。でも今はカレーライスが大好きです。私の嫌いな食べ物は「なっとう」と「しおから」です。一番大好な食べ物は、「ゆどうふ」と「おみおつけ」です。

私が忘れることが出来ないのは日本のお風呂です。なぜならオーストラリアのお風呂とは、ずいぶんちがっていたからです。ホストファミリのお母さんが私にお風呂の入り方を親切に教えてくれました。日本のお風呂はすごく熱い

けれどもとてもゆっくりできて気持ちがいいです。

千葉に居る間に私は五つのホストファミリにお世話になりました。それぞれのホストファミリから、私は日本の生活についてたくさん勉強することが出来ました。皆とても親切で私を本当の娘のようにだいじにしてくれました。私はすぐ日本の生活になれました。そして今私はオーストラリアに帰っても家に入る前に靴をぬいだり、あくしゅのかわりにおじぎをしたりするかもしれません。私は日本の生活にあまりなれてしまったのでだれかが私を見て「外人だ外人だ」といってもじぶんのことだとはきがつかないで外人だれだろうとあたりを見回してしまいます。私が制服を着て電車に乗て居るとまわりの人たちが「アー外人だ」とかいろんなことをいっています。私はその日本ごが分かります

クラスの一員になりきって

ので時々「あらそうですか。」などと日本ごでいいかいしてびくりさせることがあります。

私は千葉東高での最初の日を忘れることが出来ません。私はとても神経質になっていました。でもじきにくつろぐことが出来ました。皆さんがとてもやさしく、親切にしてくれるからです。私は学校ですばらしいお友だちがたくさん出来ました。オーストラリアへ帰ってからも私はお友達のことを忘れません。私の学校で一番好な授業は書道と茶道です。でも足がしびれてとても困りました。

東高のお友達との修学旅行はとても楽しいものでした。私はたくさんの古いそして美しいお寺や神社を見ました。それらがそんなに古いとゆう事を実際に信じる事は私には、とても難しかった。なぜなら私がオーストラリアで見た最も古い建物は一七〇年しかたっていませんでしたから。それは千年以上も前に建てられた日本のお寺に比べるととても新しいからです。

日本の学校とオーストラリアの学校はずい分違います。オーストラリアで学校は大切な事ですけれども一生が決まってしまうわけではありません。でも日本では学校で一生が決まってしまう傾向にあるので、日本の親は自分の子どもに「勉強しなさい。勉強しなさい。」と言っています。そ

昭和55年12月1日　PTA会報　第44号

留学生に聞く

本校は国際交流を目指の二度々、毎年アメリカ等へ月、或は一年とは行ける者が好き、同時に海外からも招期・長期の留学生が来る。十一月の初旬、オーストラリアからの留学生ニール・リリー・クルスさんにいろいろ伺ってみた。会話は全て日本語で行われた。

M　日本語は大丈夫？

――はい、大体だいじょうぶです。

――そう、じゃ、まず授業のことから聞こうかな。どのくらいでてるの？

M　英語・数学・化学・体育・家庭・音楽（英語へ指を指ながら）それに世界史と、幅広もちよっぴり。

――わかる？

M　大体わかる。

――数学なんかどう？

M　むずかしい。でも何とかわかる。

――授業はオーストラリアと比べてどうかな？

M　全然違う。日本は先生がほとんど一人で話すでしょう。でもオーストラリアではみんなが話す。こちらは（指ながら）みんなはずしてしゃべる。みんなが行きたいとこでも行きたい。

――そうね、確かにこちらでは先生が話すことが多いね。

M　はい、大体だいじょうぶです。

――じゃ、学校のことから聞こうかな。どのくらいの人数で授業するの？

M　数も少ないんです。大体28人から30人ぐらいの。

――勉強はよくやる？

M　東高のようによく勉強する。

――宿題がいっぱいあるの？

M　こっちでは宿題はやらない？

――向こうでは小さい時からやるでしょう。でも、向こうでは高校へ入ってからやる。それに、私、去年五年生（向こうでは中高一緒で六年）だったけど、授業六つだけやった。それも自分の好きな選んで。

――そう、そのへんは違うね。そのほか、勉強以外のことはどうかな。例えば、今度修学旅行があるでしょう。とても楽しそうだ。行きたい。

――そう、確かにこちらでは先生が話すことが多いね。

M　ありません。去年は中部へ行った。（ニールの兄は南のメルボルン付近）、その前はオスマンアへ行きました。友達と一緒で楽しい。

――世界行くの？

M　いいね、家でお母さん達が行かなくていいと思えば行きます。

――いいね、家でお母さんが行かなくても、みんな行きたがる。

――じゃ、じゃ、今世界のことを聞こうかな？

M　こっちは女の子はなんでもかり仲よくしてる。でも、いつも別のことを話してる。

――そうね、ほんとは男子も女子ふたりで、じゃ、今世界のことを聞こうかな？

M　こっちは女の子はなんでもかり仲よくしてる。でも、いつも別のことを話してる。

――そうね、ほんとは男子も女子と話したいんだけどね。

――向こうではいつも男の子と女の子が一緒に勉強したり、土曜にパーティに行ったりしてます。

――それにゃ、こっちでもニールは日本の子と話してみたいすな考えを知りたい。

M　話してみたい。それでいいんだ。形を変えるんだ。どの日本と違う。全然違う？（違い調子）

M　いつもこうやって（ようひきつ、ぬずかしがりや。でもとってもやさしい。私が来てからみんなとても親切にしてくれた。

――それから？

M　いっぱいけんめいやる。部活も。それにお父さんは仕事。

――そう。ところでニールは日本に来て変った？

M　はい。少し日本人になった。

――具体的には？

M　恥ずかしくなっちゃった。でも日本に来てよかった。ほんとによかった。一年間、人で来ていろんな家にて、いろんな人と会えて、友達もいっぱいできた。そう、それはよかったね。じゃ、今日はどうもありがとう。

――ありがとうございました。

M　たしかニールの兄はメルボルン付近、その前はオスマンアへ行きました。友達と一緒で楽しい。

――世界行くの？

M　いいね、家でお母さん達が行かなくていいと思えば行きます。

――いいね、家でお母さんが行かなくても、みんな行きたがる。

――じゃ、じゃ、今世界のことを聞こうかな？

M　こっちは女の子はなんでもかり仲よくしてる。でも、いつも別のことを話してる。

――そうね、ほんとは男子も女子と話したいんだけどね。

――向こうではいつも男の子と女の子が一緒に勉強したり、土曜にパーティに行ったりしてます。

――それにゃ、こっちでもニールは日本の子と話してみたい。それでいいんだ。

――形を変えるんだ。どの日本と違う。全然違う？（違い調子）

M　いつもこうやって（ようひきつ、ぬずかしがりや。でもとってもやさしい。私が来てからみんなとても親切にしてくれた。

――それから？

M　いっぱいけんめいやる。部活も。それにお父さんは仕事。

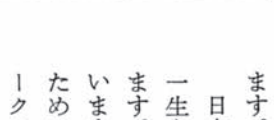
――そう。ところでニールは日本に来て変った？

M　はい。少し日本人になった。

――具体的には？

M　恥ずかしくなっちゃった。でも日本に来てよかった。ほんとによかった。一年間、人で来ていろんな家にて、いろんな人と会えて、友達もいっぱいできた。そう、それはよかったね。じゃ、今日はどうもありがとう。

――ありがとうございました。



してときどき、自分の子どもの仕事を決めてしまいます。そして、もしその子は、他の仕事、たとえば自えいたいに入りたい。親がときどき「ああ、その仕事はだめですよ。お医者さんになりなさい。お医者さんはもっとえらい人、そしてもっとお金もちだからなりなさい」日本でそういうことはとても大切だから。

大学が終わってからいつも日本人は、いい会社に入りたい。それができたから結こんしたい、そして一生同じことをくりかえします。オーストラリアでは、子どもは自分で仕事を決めて、もし一年ぐらいつとめて、そして自分にあわないと思ったら、他の仕事にかわります。でもオーストラリアは日本より仕事を見つけやすいと思います。

私はよく学校のお友だちに「大学に入ってからどんな勉強をしたいですか」と「大学がおわったからなにをやりたい」と聞きます。そしたらだいたいいつも「まだわかりません」と言います。オーストラリアで私と同じぐらいの年の人は、みんな学校が終わってから、どんな事をしたいか考えています。

日本人は世界のニュースにすごくびんかんです。だから外国の人よりもよく知っています。私はそれがいいと思います。

日本での私の一年は新しい経けんの連ぞくでした。私は一生を通じて一番わすれることができない経けんだと思います。いつも自分の貴重な財さんとして持っていたいと思います。オーストラリアに帰ってから一生けんめいお金をためていつか日本へもう一度来たいと思います。ロータリークラブの皆さんと、ホスト・ファミリーの皆さん本当にどうもありがとうございます。

（追、本人の文章をそのまま直さないでのせました。）

ＡＦＳ生としての一年間

三年五組　井上　裕雄（昭和五十三年度ＡＦＳ留学生・アメリカ）

オハイオ州クリーブランドから車で南へ二十分の所に一年間、ＡＦＳ生として滞在した小さな町がある。以前から全く心配はしてなかったが、あたたかい家族や地域の人に囲まれ、ホームシックにもかゝらず、自分として、楽しく充実した留学生活をおくったつもりである。慣習の違いにとまどった覚えはあまりないが、やはり最大の問題は言葉であった。しかし、お互いにわかりあおうという気持が未熟な僕の語学力を十分にカバーしてくれた。僕がわかるまで何度も繰り返したり、僕が言うことを理解しようと根気強く聞いてくれた友達。帰国も近い六月の卒業式の時、彼らの顔がフッと頭をよぎったのだった。

僕はごく中流の家庭に一年間受け入れてもらい、お客様としてでなく、家族の一員として扱われたわけである。時には、両親に厳しく叱られたこともあった。特にお母さんはドイツであるためか普通の人より厳しかったようである。学校では、留学生というので特別視されることもまああったが、それよりも普通の高校生として暮らしたかったのである。とにかく、広い米国のごく一部だけだったが、一年間じかに米国の生活、高校生に接することができたのは、僕にとってとても幸運であった。米国だけでなく世界中からのＡＦＳ生とも親しくなれ、最後の二週間のバス旅行で一諸に米国東部方面へ行けたのもよい思い出である。米国を知るために行ったはずが、自分自身の内面的な事や、日本のよい面を知ることも多かった。何故なら、別の環境に入っていって、別の角度から物事を考えることができたからだと思う。

（昭和五十四年ＰＴＡ会報第四十一号より転載）

交換留学を終えて思う事

三年四組　青山　和美（昭和五十三年度ロータリー留学生・オーストラリヤ）

交換留学の第一目的は、国際理解を深める事だ。私も小さな親善使節として豪州で一年間を過ごした。日本の二十六倍の国土に東京と同じ人口の人が住む国と聞いて、何人の人がその広さを想像できるだろうか。この広大な国で私が体験した事すべてをこゝに述べるのは不可能である。が、とにかく何でもやろうという意気で、乗馬、水上スキー、サファリ旅行等、日本ではなかなかできぬ事を沢山経

験した。豪州はとても魅力的な国だ。それは雄大な自然や、珍しい動物達だけでなく、明るく親しみやすい国柄のせいでもある。私が一年間、六家庭に滞在し、学校に通い、そして世界十四ケ国の交換学生との交流から学んだ一番重要なものは、机の上では学べぬ、しかし大切な事、人間愛そのものである。つらくて涙の溢れそうな時にそっと肩を抱いてくれたホストのお母さん、言葉のわからぬ私を助けてくれた多くの友だち。肌の色が違おうが、地球の反対側に住もうが、人間はみんな同じ。手を取り助け合い、愛し合わなければいけないのだ。地球は大きい。でもそれをとりまく人々の愛は、もっと大きいのだという事である。私が無事幸せに過ごせたのも、皆さんのおかげなのだ。あっという間に過ぎた一年だったが、私の人生で最も貴重な思い出深い年になったことは確かである。

（PTA会報第四十一号より転載）

アメリカへの短期留学

島田　幸子（昭和五十三年度日米交流プログラム）

アメリカで過ごした一か月。その環境の変わりよう、テンポの速さと言ったら、普段の私の一年分位のでき事とでも言える程、目まぐるしいものでした。毎日出会う新しい事に、興奮し通しで、あっという間に過ぎて行ってしまいました。

私が行ったのは、アメリカでも伝統ある東部でした。一か月のうち、一週間は旅行で、ニューヨーク、ワシントン、ウィリアムズバーグを訪れました。そして、残りの三週間は、一緒に留学した東高の仲間一〇人と、引率して下さった亀先生と、皆それぞれにホームステイをして、ペンシルバニア州のある公立高校に通いました。

私は、アメリカはもちろんのこと、海外へ行ったのもそのときが初めてでしたから、「外国」というものに何か特別な感情を抱いていました。けれど不思議なことに、三月

リンカーンメモーリアルにて

というのにまだ肌寒いニューヨークの空港に降り立ったとき、なぜだか少し拍子抜けしたのです。アメリカに着いたら、きっと周り中から「アメリカ!!」というようなものが波のように押し寄せて来るような気がしていたのが、確かに周りには、私と肌の色の違う人々が行き交っているのに、私は日本にいたときと同じようにそこに立っていて、「ああ、寒い」などと思いながら、どんよりと重く低い空を見ていたりしたわけなのです。市街地へ向かうバスの窓から、ゴミと落書きの裏街を見て、確かにここは旅行用パンフレットなどに載っている写真だけの街ではないなと思い知らされたような気がしました。けれど、たどたどしい英語で買物の後、ついでに店員さんに「なぜニューヨークのことを〝ビッグアップル〟って呼ぶのですか」って聞いて、それは「りんごを縦に切った断面がマンハッタンの形に似ているから」と教えてもらったりすると、とても嬉しくなったりもしました。個人的に違いはあるけれど、アメリカ人は総じて陽気で開放的、冗談の大好きな人たちです。初めのころ私は、冗談とまじめの区別がどうもつかなくて、相手が言うことにいちいちむきになると、ニコッと笑って「ただの冗談」って軽く肩透しを食わされてばかりでした。私がホームステイをしたヒューストン一家も、優しいお母さん、お父さんと、三人姉妹の楽しい家族でした。日曜日の教会、ガールスカウト、乗馬、初めて見る大西洋、パジャマパーティー……、ホームステイは、旅行中以上にわくわくする驚きの連続でした。学校の様子も、日本とは大分違っていて、殊に授業中の雰囲気に初めはびっくりしてしまいました。ガムを噛みながら、友達に話しかけるのと同じ調子で先生と言葉を交しているのです。私のホストのキャシーは、ある先生のことを、「彼は私の友達よ」と言いました。こんな様子ですから、次々に友達が増えて行きました。そしてまた、キャシーに限らず、同年代の子たちの学校以外での活動範囲の大きさにも驚かされました。しかし、ある意味で一番印象的だったのは、東高の皆と小学校を訪問したときのことです。実は、日本舞踊を見せるというので着物を着て行ったのですが、踊り終わった後、二年生の子供たちと話をする機会がありました。先生が「この人たちはどこから来たのでしょう」と言ったとき、中国とか韓国といった答が返って来たのです。中には、ハワイからという子もいて私たちは大笑いをしましたが、さすがに「日本では毎日そういう着物を着ているんでしょう」と質問されたときには、やはり、日本の生活のことはよく知られていないんだなと感じました。実際外国の

教科書には「日本人は木と紙でできた家に住んでいて……云々」というような記述が今でもあると聞きました。

これは私がアメリカにいる間中つくづく感じていたことなのですが、私自身ですらも、日本のことを知っているようで本当のところよく知ってはいないのです。日本についての質問に、自信を持って適確に答えられたことがあまり多いとは言えません。日本のこと――つまり現在、私を取り巻く社会の日常的なことも、古い伝統文化も含めて、何気なく見過していることの多さに改めて気づかされました。

一か月の滞在を終えて帰って来たとき、アメリカという土地が結局は日本と同じ土地なんだと、ニューヨークで感じたように、アメリカ人も日本人も根本的には同じ人間なんだと確信しながらも、何かしら「違い」を感じたのは、やはり、「文化」の違いなのだと思います。「国際交流」などという大きな問題にぶつかったとき、まだまだ未熟な我が身を省みて立ち竦んでしまうのですが、個人的レベルで感じ考えてきたことの類似性が、もっと別のレベルの問題にも見い出されるのではないかと、短期留学から帰り三年半たった今思われるのです。

アメリカでの交換留学を振り返って

三年一組　青山　ミエ

誰でも一度は行ってみたいと思うのがアメリカである。今回の交換留学の話があったとき、この機会に生の英語の世界に単身どっぷりつかろうと思い高額の出費ながらも行くことにした。三週間という極めて短い期間ではあったが、生まれて初めてのホームステイは短いなりに収穫が多かった。私が滞在した家庭は産婦人科医の父、家具のセールスマンでスポーツや美術に熱中している母、大学の寮に入っている18歳の長男、写真が好きな高校生16歳の次男、そして私のホストスチューデント14歳のナンシーの五人である。いちばん話し好きなのがお母さんで、よく二人で話し込んだりもした。

この家族はユダヤ教徒なので毎週金曜日にはキャンドルに燈をともし、普段より豪華な食卓になる。特別のパンをちぎりながら全員に回し、ワインをあげて祈る。またナンシーが土曜日の午前中行っているユダヤ教の学校では、宗教や歴史、政治について講義があり、生徒が作ってきたお菓子を売って学校への寄付金にする。さまよえるユダヤ人も自分たちの信仰を誇りに思い、祖先から受け継がれてき

＜資料１＞　受入れ留学生身分証明書例

CHIBA HIGASHI HIGH SCHOOL
This is to certify that
Jennifer Watts
is a visiting student to
CHIBA HIGASHI HIGH SCHOOL.
This identification card
is valid from Jan. 23'78
to Jan. 31'79.
Jan. 23'78
DATE ISSUED
CERTIFYING
SIGNATURE

身分証明書
所属　千葉県立千葉東高等学校
住所　千葉市御町1丁目18番52号
TEL 0472-51-9221
身分　ロータリークラブによる本校留学生
期間　自昭和53年1月23日
至昭和54年1月31日
氏名　ジェニイファ・ワットッ
1960年5月10日生
発行日　昭和53年1月23日
証明者　千葉県立千葉東高等学校
畠山一

た伝統や長い意味深長な歴史を大切にしていることがうかがえた。

学校生活は常に明朗活発で自由だった。質問が飛び交い、教師は生徒が納得のいくまで説明を繰り返すという気長な授業だった。

アメリカ人と接することによって日本を別の角度から見ることができたのも収穫のひとつである。男の子は日本といえばまず車を売る国と思っているようだ。日本の位置も知らず、デパートやスーパーマーケットはあるか、牛乳をたくさん飲むかと聞く者もあった。受けた質問の中にライセンスに関する事柄があって、アメリカでは16歳から許可されるので皆16歳になる日を楽しみに待っている。というのも、スケールの大きいアメリカでの生活は車なくしては考えられないからである。現に次男のノアも16歳なので私がホームステイに入っている間にライセンスをとってきて、

＜資料２＞　受入れ留学生時間割例

2年2組

Debbie　　S.53.4.10（月）

	1	2	3	4	5	6
月	英　語	（日本語）	体　育	／	／	／
火	／	／	美　術	美　術	英　語	政・経 3－7
水	／	／	体　育 2－7	／	書　道 2－7	書　道 2－7
木	（日本語）	家　庭 2－7	体　育	／	H・R	クラブ 茶　道
金	／	／	化　学 2－7	英　語	（日本語）	家　庭 2－7
土	／	（日本語）	化　学	家　庭		

※（日本語）は図書室で
※／は自由時間

一度買物の帰りに彼の運転する車に乗せてもらった。しかし助手席からはお父さんの厳しい注意の声が聞こえてきたが。

言葉のギャップは限りなくあり、しばしば自己嫌悪に陥ったが、家族愛、友情の輪は無意識のうちに私たちの間に育っていて別離の日には皆、目を真っ赤に泣きはらして固く抱き合ったのだった。

私はこれらの貴重な経験を惰性になりがちな日常生活の潤滑油にし、もっと英語を学んでから再び米国の土を踏もうと決心した。(昭和五十六年PTA会報第四十六号より転載)

〈資料3〉 日米高等学校交流プログラムによる派遣生募集要項

55・11・10

一 主催団体

国際教育交換協議会

・本部 ニューヨーク市国際連合プラザ七七七

・東京事務所 東京都千代田区永田町二―一四―二 山王グランドビル二〇五号室

米国中学高等学校校長会

社団法人 日米協会

※ 後援 米国大使館

二 派遣先

米国 ペンシルベニア州 チャールズ・ボエム高校 ミドル・ベア高校

三 日程

昭和56年3月12日〜昭和56年4月9日 約四週間

派遣プログラムは一週間の研修旅行と三週間の姉妹校での活動と家庭滞在(ホームステイ)から成り立っている。

四 引率

指導のため、本校教諭一名が同行します。

五 費用

参加費 四三万七八〇〇円(小遣・渡航手続費用は除く)

※参加費は米国内での食費、宿泊費、交通費、航空運賃、保険料その他

六 派遣生徒

人数 一〇名

対象 本校一・二年生で交流プログラムへの参加を希望するもの

七 選考基準

(一) 学業成績が良好で、日常英会話があるていどできる生徒

(二) 健康で、外国での長期滞在、及び長距離の飛行機・バスの旅行に耐えられる生徒

㈢ 千葉東高校の代表としてふさわしい良識をそなえ、進取、明朗、協調的で意志の強固な生徒

㈣ スポーツ・芸能などについて、趣味・特技をもっていることがのぞましい。

八 選考方法

書類選考、語学力テスト、面接等により、選考委員会がおこなう。

九 申込

別紙志願書により、11月　日（　）～11月　日（　）の期間にホームルーム担任を通じて、係に申し込む。

以上

7 四十周年記念学園歌のできるまで

井辻 紀一

応募してみようかな

前校長相川先生の発案で記念学園歌を作ろうという考えは、四十周年記念式典を昭和五十六年十一月四日に行うという事とほぼ同時に出てきました。具体的にどうやるかは、前例がないだけに、起案するまでかなりの準備が必要でした。

昭和五十六年五月二十七日の職員会議に提案するため、あらかじめ案の案を関係部所に配布し、それを基に次の様な本案を職員会議に提出し、承認を得て本格的な作業に入りました。

創立四十周年記念学園歌募集および発表（案）

一　学園歌募集

① 対　象　千葉東高校生および卒業生

② 内　容　千葉東高校生徒として誇りを持って気安く歌えるもの応援歌でも可

③ 当選歌　伴奏付合唱曲に補作し式典音楽会の課題曲として使用

④ 募　集

㈦ 歌詩　審査・補作は国語科を中心としたスタッフで

決定。

(イ) 作曲

。(ア)の当選歌詩に旋律をつける（斉唱・合唱・伴奏付も可）

。上位当選歌三曲をしかるべき委員会で選考、候補曲とし音楽部の生徒により録音放送する。それを全校生徒職員が聞き投票で第一席を決定。

。右記第一席の曲を補作、合唱曲に編曲（式典の十日前を目安に作業）

⑤ 表彰 式典の中で作詩・作曲入選者に各々賞状、記念品を贈り感謝の気持とする。

二 発表 式典当日当選歌を課題曲とするクラス別合唱コンクールを行なう。

目的 コンクールを通して創立四十周年という記念の年に生徒としてめぐりあった事の意義を前向きに考え、共に心をあわせ歌うことにより友情を養う。

期日 11月4日（水） 記念式典の一環として。

場所 式典会場

方法 (ア) クラス別に課題曲（当選学園歌）と自由曲を発表、審査する。

(イ) 時間の関係で式典当日はあらかじめ選ばれた各学年二〜三クラス、計六〜九クラスによるコンクールとする。

(ウ) 課題曲は不公平のないよう一週間前に発表

(エ) 練習は部活動との関係もあり四時十五分迄とする。

(オ) 練習に使用する場所、楽器（ピアノ、オルガン）は数に限りがあるので、ローテーションを組む。

(カ) 各家庭にある使用していないオルガンの寄付を願う。

審査 (ア) 校長、教頭、学年に所属していない職員等

(イ) 学年各一、二、三位および総合一位を決め表彰

(ウ) 総合一位クラスの自由曲発表、又、そのクラスの指揮、伴奏者により学園歌を全校で歌う。

三 日程

6月1日(月) 作詩募集要項発表
（6月2日LHR生徒会行事の時間に説明予定）

7月2日(木) 作詩募集締切

7月20日(月) 当選詩発表（補作されたもの）
作曲募集要項発表

10月1日(木) 作曲締切

10月13日(火) LHR時候補曲（三曲）を放送を通じて発表、ただちに全校生徒により投票し入選曲を決める。

10月16日(金)　課題曲決定（二部合唱ピアノ伴奏付に補作）
10月23日(金)～10月27日(火)　中間テスト
10月28日(水)～10月31日（四日間）練習開始
11月2日(月)　第一次予選各学年代表クラス二～三クラス選考
11月4日(水)　四十周年記念式典
各学年二、三クラス、計六～九クラスで決勝大会を行なう
優勝したクラスの指揮者、伴奏者により全校生徒で学園歌を発表

予定どおり六月二日に左記の様な記念学園歌歌詩募集のチラシを全校生徒に配布すると同時に、卒業生によびかけるため朝日新聞の「ひろば」にも同じ内容のものを掲載してもらいました。

創立四十周年記念学園歌歌詩募集

一　対　象　千葉東高等学校生徒、職員および卒業生
二　形　式　自由形式
三　内　容　・千葉東高校生として誇りを持って、楽しく歌える内容の詩
・応援歌的なものでも可
四　締　切　56年7月2日（木）
五　提出先　千葉東高等学校記念生徒歌選定委員会（井辻先生）

なお、当選歌詩には後日同じ要領にて作曲を募集し、11月4日の記念式典に全校生徒により発表披露する。

当初、どれだけ集まるか非常に不安でしたが、大沢先生の協力を得て三年生は授業の中で取り組んでいただき、予想以上の作品が集まりました。作品はおよそ一六〇点。担当職員（教頭、大沢、福田、井辻）の慎重な選考により第一次候補作品九編を選びました。

＜三年＞　三科政枝さん、杉直美さん、小林紀子さん、鹿島知子さん、浮田理恵子さん、丸山清美さん、岩松正治君

＜二年＞　喜多かおりさん、それに職員の一編。その中より生徒歌選定委員（各クラス一名）の投票により、入選詩三編を選びました。ただちに、これにより次の要領で作曲募集の作業に入りました。

創立四十周年学園歌作曲募集

一　対　象　千葉東高等学校生徒、職員および卒業生。
二　形　式　下記入選作品A、B、C、三編の中より各自一編を選択、歌詩つき旋律のみ五線紙に書き（コードネームも入れてよし）提出。
三　締　切　56年9月10日（木）
四　提出先　千葉県立千葉東高等学校記念生徒歌選定委員会（在校生は各クラスの選定委員の人に提出）

五　選　考　9月29日（火）ＬＨＲで候補曲三～五曲を全校に放送。ただちに全生徒の投票により、当選曲、入選曲を決定。当選曲をクラス別合唱コンクールの課題曲とする。

六　入選歌詩

Ⓐ **やさしい光ふる窓の外**

作詩　喜多かおり（二年五組）

一　やさしい光ふる窓の外
なつかしい風はそよぐ
振り向けばいつも友がいて
立ち止まるひとときを
分かちあう
その瞳が映し出すもの
青ざめた心のきらめき

二　あふれくる不安の中で
何よりも大切なもの
それだけを追いつづけて
いま言葉も飾りも
欲しくはないから
このまま流されていくよりは
ここに生きている証を
ああせつなさに涙する日々は
駆け抜けてゆく季節のままに
自分に何ができるだろう
遙かな望みを信じて

Ⓑ **青春の心への贈りもの**

作詩　杉　真美（三年二組）

一　風にゆられて緑に抱かれて
花の香りを漂わせて
夢のような毎日の
手にとる一つ一つのでき事が
青春の心への贈りもの

二　風にゆられて緑に抱かれて
りりしい若木を仰ぎ見て
苦しみを感じたその時に
手をとり合った友人が
青春の心への贈りもの

三　風にゆられて緑に抱かれて
さわやかな木もれ日がふりそそぎ
涙を流した瞬間の
あふれる若さのエナジーが
青春の心への贈りもの

Ⓒ **太陽のひかりの中で**

作詩　岩松正治（三年八組）

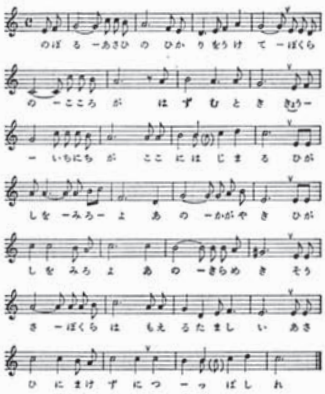
一　昇る朝日の光を受けて
僕らの心がはずむ時
今日一日がここに始まる
東を見ろよ　あの輝き

東を見ろよ　あのきらめき
そうさ僕らは燃える魂
朝日に負けずにつっ走れ!!

二

沈む夕日の光を浴びて
僕らの心がなごむ時
今日一日の終りを迎える
西を見ろよ　あのやさしさ
西を見ろよ　あのぬくもり
くよくよするな明日になれば
燃える朝日が東に昇る
燃える朝日が東に昇る

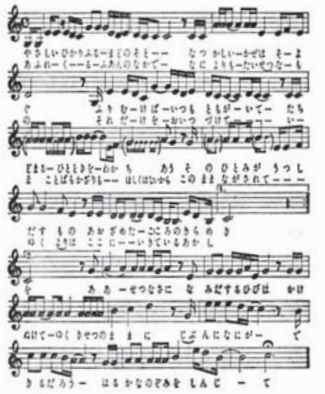
（入選曲１）最優秀曲40周年記念学園歌
太陽のひかりの中で
（作詞・作曲　岩松正治　３年８組）



九月十日の作曲締切に応募した作品は一五編、その中より候補曲、五曲を選び出しました。作曲者は〈三年〉笹島栄治君、城田功君、岩松正治君　〈二年〉吉田基君、遠藤慎一君。ただちに九月二十九日のＬＨＲに音楽部の歌唱により全校放送。全生徒、職員の投票により岩松正治君の作品が入選と決定しました。これをそのまま使用するにはもの足りないので、二年生の原沢健太君の大変な苦労により混声三部合唱、ピアノ伴奏付という立派な作品に仕上げられました。

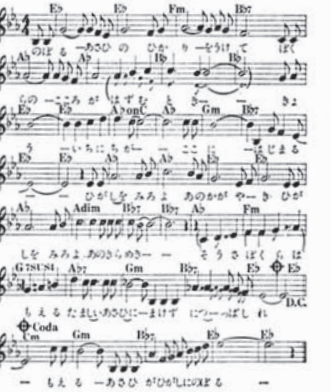
入選作曲の三曲は以下の通りです。

（入選曲２）やさしい光ふる窓の外
（作詩・喜多かおり　作曲・城田功　３年７組）



（入選曲３）　太陽のひかりの中で

（作詩・岩松正治，作曲・遠藤慎一・２年１組）



作詩・作曲入選

岩松　正治

作詩入選

喜多　かおり

作曲入選

遠藤　慎一

杉　真美

城田　功

学園歌の編曲を振り返って

二年七組　原沢　健太

学園歌を編曲するにあたってまず最初に考えたのは、高校生らしい曲の感じにすることだった。学園歌は校歌のように形式ばってもいけないし、かといって羽目をはずしてもいけない。ピアノや声域にしても難かし過ぎるとたいへんだし、やさし過ぎると中学生や小学生っぽくなってしまう。全体的に中庸を心がけて編曲した。出来は流暢な感じに仕上がって自分としては割合にうまく行ったように思う。

この学園歌がこれからも歌われる機会があるとしたら、校歌のようにただ歌うのではなく、歌うことに喜びを見出せるようなそんな歌になってくれたらいいと思っている。

8　東雲に歌声よ轟け

――創立四十周年記念式典寸描――

教頭　細野　直

千葉東高等学校創立四十周年記念式典は、昭和五十六年十一月四日、本校体育館を式場として行われました。中秋の佳日は、絵に描いたような好天に恵まれ、関係者一同を喜ばせてくれました。来賓、市内各高等学校長、旧職員、地域代表、学校関係業者、同窓会役員、ＰＴＡ役員及び父母代表など、この日を祝ってご臨席の方々約一三〇名、全日制通信制職員約一〇〇名、全日制生徒一二〇〇余名、通信制生徒代表一〇余名、合計一四〇〇余名が整然と着席して待つうちに、正十時、開式されました。

東高不感

式典は一般的形式とは少しく異った形式で進行しました。厳粛な中にも生徒中心の色彩が濃くでていました。教師や大人が外側から式典を押しつけていく感じをなるべく排して、生徒一人ひとりが心の底から喜びを持って参加しよう、自分たちの母校の発展を自分たちで祝福しよう、という意気ごみと工夫が随所に見えました。

式はまず「式典序曲」で始まりました。緞帳が降りたまの正面ひだり下から、コーラスがひびきました。本校校

広川美恵子さん

歌の混声四部合唱です。コーラス部員が全身で歌いました。ふだん聞きなれた校歌ですが、新曲のような感じさえします。コーラスがハミングに変わるころ、緞帳があがりました。正面壇上の左右に主賓が着席されています。舞台うしろ上方の「創立四十周年」の金文字が横に一列みごとに浮き出ています。平松先生のご指導で美術部の生徒の労作です。

式典はすべて生徒のナレーションで進行しました。この大役を三年四組の加藤木貴子さんと三年六組の広川美恵子さんが引き受けてくれました。広川美恵子さんのナレーションが静寂な場内に流れ出しました。

千葉県立千葉東高等学校が、今年、創立四十周年を迎えました。創立は昭和十六年で、日本があの大きな戦争の最後の段階に突入していった年の春でした。以来四十年、戦災火災に会うこと二度、校地を移すこと三度、校名を変更すること四度と、激しく動く現代史を経験しながら、私たちの学校は、着実に校風を育くみ、伝統を築いて、今日に至りました。いま、私たちは、多くの方々の暖かいご援助と、諸先生諸先輩の絶え間ない精進に支えられて、県都にあって、その存在の揺ぎない県立千葉東高等学校として、毅然として、ここ轟の丘の上にあります。

私たちは、きょう、自ら襟を正して、限りない未来に向かって一層の躍進をお誓いしようと、ここに集まりました。本日の式典は、みなさまのご期待に答えるためにも、できる限り私たち生徒の手で運営進行していきたいと思います。不手際があるかもしれませんがお許し下さい。では開会します。最初に開会のことばをお願いします。

以下、ナレーションの指示に従って、開会のことば、校長式辞、柴田孝明実行委員長挨拶、伊藤英雄千葉県教育委員会代表挨拶と進行し、さらに来賓を代表して、沼田武千葉県知事、山本鉄男千葉県議会議員、長谷川喜三郎千葉市教育長、楠原信一本校第二代校長の祝辞が続きました。こ

40周年記念式典次第

式典序曲
1. 開式の辞
1. 校長式辞
1. 40周年記念事業実行委員長挨拶
1. 県教育委員会挨拶
1. 来賓祝辞
1. 来賓紹介祝電披露
1. 感謝状贈呈
1. 代表謝辞
1. 記念歌・学園歌披露及び表彰
（10周年記念祭歌、応援歌、40周年記念歌）
1. 生徒代表挨拶
1. 40周年記念歌斉唱
1. 校歌斉唱
1. 閉式の辞

のあたりはごく一般的な形でしたが、後半は場面が急転します。が、その前に間奏のような形で、来賓紹介、祝電披露、感謝状贈呈がありました。

後半は趣好をがらりと変えて、記念合唱祭となりました。曲のほとんどは本校の学園歌で、いわば東高学園歌披露合唱祭とも言うべきものになりました。それぞれの学園歌の成立の歴史などを織りまぜて、今度は加藤木貴子さんのナレーションが流れます。

加藤木貴子さん

さて、これから、本日の式典を祝って、本校の学園歌をご披露したいと思います。

最初に、本校合唱部により、創立十周年記念祭歌をお送りします。この歌ができましたのは今から三十年前、昭和二十六年の秋でした。戦は終わっても、戦後の復興はまだまだでした。そんな時、本校は創立十周年を迎え、これを機に一気に校歌、応援歌、十周年記念祭歌を作ったわけです。作詞はすべて当時の教頭先生で、後に本校第七代校長になられた沢田繁二先生です。そして十周年記念祭歌の作曲は間宮芳生さんでした。間宮芳生さんと言えば、現在では日本を代表する作曲家の一人で、特に日本の伝統音楽に深く根ざして、その上に西洋音楽の手法を駆使するという楽風で、ひろく海外にも知られ、数多くの音楽賞を受賞されている人です。この間宮さんが、弱冠二十二歳の時、本校の記念歌を作曲してくれています。仲立ちをされたのは、当時東京音楽学校研究科に在学しながら、本校の時間講師をされていた川口絹代先生です。川口先生は、本校第四回の卒業生でしたので、母校の十周年に際して、すでに東京芸術大学と改称され、そこで勉強中の後輩の間宮さんに作曲を依頼したという訳です。その間宮さんが時代を背負う大作曲家で、川口先生もまた、現在国立音楽大学教授としてご活躍中です。この歌は、今まで、学校の古い文書の中に完全に埋れていましたが、四十周年の記念に、不思議な経過で日の目を見ることになりました。この間、川口先生はもちろん旧職員の勅使川原先生にも大変なご協力をいただきました。私たちはこうしたご縁を大切に、歴史の重みと豊かさをかみしめていきたいと思います。では十周年記念祭歌をお聞き下さい。

ステージの合唱部の演奏はみごとでした。

伴奏曲譜が勅使川原先生のお宅にたった一枚残っていたので歌えました。三十年前がよみがえったのです。

次は本校応援歌の披露です。生徒手帳にのっていますし、応援委員会などでは歌われていますが、全校生徒が折につけ事によせて歌うまでには至っていません。旧制第七高等学校寮歌のメロディを借りた応援歌一（劫火しきりに襲い来て）と、名古屋陸軍幼年学校行進曲を借りた応援歌二（芙蓉の峰に雲湧きて）が、今日は堂々と力強い二部合唱で耳を喜ばせてくれます。

学園歌の最後は新曲の発表ですが、校内合唱コンクールの決勝戦の形で披露されました。加藤木さんのナレーションが選定の経過をたどって流れます。

次に、本日の佳き日を祝って創作された記念学園歌の披露に移ります。四十周年記念に関しましては、前校長相川勝衛先生が、ご在職中から、よく、現代の若者は特に音楽の素養が豊かなので、せめて学園歌ぐらいは生徒自身の手で作詞作曲したらどうか、という構想をお持ちで、折につけて私たちに訴えておられました。そこで、今回の記念式典を機に、在校生及び卒業生にも広く呼びかけ募集したところ、かなりの作品が寄せられました。音楽担当の井辻紀一先生のご指導で校内の選定作業を行い、作詞の入選作は、喜多かおりさん（二年五組）の「やさしい光ふる窓の外」、杉真美さん（三年二組）の「青春の心への送りもの」岩松正治君（三年八組）の「太陽の光の中で」と決まり、作曲の入選者は、遠藤慎一君（二年一組）、城田功君（三年七組）、岩松正治君（三年八組）と決まり、全校投票の結果四十周年記念学園歌に当選した作品は、岩松正治君の作詞作曲の「太陽の光の中で」でした。引続き原沢健太君（二年七組）が編曲及び伴奏作曲をしてくれました。生徒だけの手で、作詞作曲及び編曲をしたことに若干の誇りと不安を感じますが、ともかくでき上がりました。これから校内合唱コンクール決戦会の形でご披露いたします。

東雲に歌満ちて

記念歌を課題曲とし、それに思い思いの自由曲をつけて、一年二組、二年五組、二年六組の諸君が団結と調和の美を競い、自由曲「河口」（丸山豊作詞・団伊玖磨作曲）をひっさげて登場した二年五組が最優秀賞を獲得しました。ご参会の来賓、父母を臨時審査員にお願

40周年記念事業概要

1　施設整備（第Ⅰ期・53年度）校舎裏側整備、駐車場・自転車置場新設

（第Ⅱ期・54年度）通信棟移転新築、部室棟新築、老朽校舎撤去

（第Ⅲ期・55年度）校門・通学路移転新設、グランド総合整備、前庭及び学校園整備

（第Ⅳ期・56年度）中庭（西半分）整備

（第Ⅴ期）新武道館（第２体育館）新築　57年度以降

2　40周年記念誌発行　昭和57年春発行

3　記念学園歌の選定

4　記念式典

40周年記念式典関係特別会計

収　入		
施設整備期成会より	1,500,000	
ＰＴＡ活動費より	350,000	
同窓会より	300,000	
通信教育振興会より	500,000	
安田教育財団より	200,000	
元ＰＴＡ会長男網様より	200,000	
祝　　儀	584,000	
ＰＴＡ幹事会費	105,000	
計	3,739,000	
支　出		
式典関係費	797,240	（記念品、装飾、接待、写真）
学園歌発表関係費	297,200	（オルガン、賞品、花束）
祝　宴　費	748,160	（宴会）
印　刷　費	252,700	（しおり、大封筒、参加名簿）
消耗品費	28,560	（賞状、文具、消耗品）
連　絡　費	20,000	（案内状、原稿依頼）
生徒会誌補助	350,000	
40周年記念誌補助	840,000	
記念書棚	156,000	（図書館へ寄贈）
その他雑費	249,140	（施設修繕）
計	3,739,000	

いして、厳正な審査の結果でした。こんなにもコーラスとは美しいものか、力強いものか、心をゆさぶるものか、という感じの名演奏でした。

すぐに入選作品の表彰、入賞クラスの表彰が行われ、賞状に添えて記念トロフィや花束が贈呈されました。生徒会長田村隆君のしめくくりの挨拶のあった後で、全員で校歌と記念歌を歌いました。「シャロンの花」も「昇る朝日の光を受けて」も、混声四部の大合唱となって、広い体育館にひびき渡りました。東高に学ぶ喜び、現代に生きる意義、青春の高揚と混沌を、腹の底から歌いました。参会のご父母や本校の現旧職員の中には感激の余り涙を禁じえなかった、と後でひそかに話してくれた方もありました。

若者よ、良い歌をありがとう

私たちはこれを期にまた一つ前進したいと思います。東雲の彼方の理想に思いをはせて、二十一世紀に生きる知恵と意志と身体を鍛えていこうと思います。昭和五十六年十一月四日の千葉東高等学校創立四十周年記念式典は、この轟の丘に集う二千数百余の若者たちがじっと自分を見つめ、自らを信じて、自らにしっかりと人生の目標を課した誓いの時でもありました。

第三章　青春の絆

―部活動この十年―

《文化系》

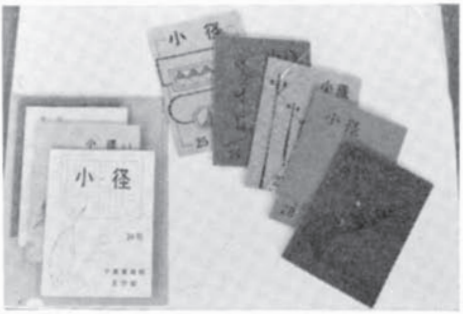
文学部……一三三
社会科学研究部……一三五
物理部……一三六
化学部……一三七
生物部……一三九
地学部……一四一
音楽部……一四二
美術部……一四三
書道部……一四五
マンドリン楽部……一四七
吹奏楽部……一四九
手芸部……一四九
ＥＳＳ……一五〇
演劇部……一五二
弁論部……一五四
話術研究部……一五六
写真部……一五八
食物部……一五九
茶華道部……一六一
歴史同好会……一六三
聖書研究同好会……一六五
ＪＲＣ同好会……一六七
漫画研究同好会……一六九
鉄道研究同好会……一七〇

《運動系》

陸上競技部……一七二
剣道部……一七四
柔道部……一七五
サッカー部……一七六
卓球部……一七八
テニス部……一八〇
男子バスケットボール部……一八三
女子バスケットボール部……一八五
バレーボール部……一八六
野球部……一八七
ラグビー部……一八八
水泳部……一九〇
山岳部……一九二
ソフトボール部……一九四

文化系

文学部



小径もいつか大道に

顧問　橋本　正

本年四月に本校に赴任した私にとって、文学部顧問は少々「荷が重い」という感じがしました。それは、二〇年に近い教職経験の中にあっても、「文学部」（多くの学校では「文芸部」と言っているのではないかと思いますが、この「文学部」の名称がより一層気分を重くしているのかも知れません。）顧問などは、只の一度も拝命（というのでしょうか）したことはないのですから。前任者、山泉先生より、「名前だけ貸しているようなものです。これといってやることはありません。よろしく。」と言われた身では辞退することはできません。しかし、こんな繰り言をいくら続けても何もなりません。標題に即した話に入ることにしましょう。

我が文学部では「小径」という機関誌を発行しております。今年度で三十号となりました。保存されて手許にある「小径」を通して、文学部の歩みをみることにしましょう。

十六号（四十年九月）・十八号（四十二年九月）は、共に一六名の部員が、ほぼ本名をもって執筆しており、文学部が活発に活動していたことを物語っております。内容も、創作・詩・俳句・童話・随筆・評論と多くのジャンルにわたっており、作品それぞれに執筆者の真摯な態度が行間に滲み出ております。殊に十六号の評論「ゴーゴリの『外套』を読んで」は、名作を読み味わい、文学における自己の力を充実させて行こうという、文学部員にとって心掛けなければならない点を教えていると思います。

十六号・十七号当時の部員の情熱は、その「編集後記」に端的に表れております。

予想に反して例年よりはるかに創作が多いのは、とても嬉しいことです。現代の高校生は長い文章を書くのを嫌い、ま

た苦手としていると言われますが、全てがそうではないことを語っていると思われます。そして理性的思考力を必要とされる評論等もあったことは、私達のそれが決して片寄ったものではないことを示しているのではないでしょうか。(後略)
(十六号・編集後記)

高校における文学活動の衰退が、あらゆる学校で叫ばれています。今日の予備校化した高校では、文学に真険(ママ)に取り組む〃場〃がなかなか見い出せないし、〃文学〃を軸として、生徒達が連帯することも困難です。

でも、こういう状況の中で、少数ではありますが、文学と真険(ママ)に取りくんでいる人がいるということも確かなのです。僕達の作品が、ともかくこういうかたちで出版できたのも、その少数の連帯の力に、ほかならないと思います。(十八号・編集後記)

読んでおわかりになると思いますが、十六号では率直に隆盛の様を喜んでおりますが、十八号では何か心に引っ掛かるものがあります。それは、これだけ短い編集後記の中に「連帯」という言葉が二度も使われているからです。そこに「学園紛争」へと歩み出す前兆を感じないではいられません。

また、この時期、四十年の三月に文学部では、「壁嶺」の第六号を上梓しております。その編集後記に「私達文学クラブ在校生は先輩に安心して卒業していただくため、又、その記念にと『壁嶺』第六号をこのように作り上げました。」との部分があります。この「壁嶺」が何号まで続いたのかは、残念なことにこの一冊しか保存されておりませんのでわかりませんが、現在の部の状況ではとても作り上げることはできないと思います。

どうも四十年代はじめに固執してしまったようですが、「小径」二十号(四十四年十月)より、執筆者が仮面をつけて登場するようになりました。ペンネームにての執筆となると、やや「作品」に対する真摯さが欠けてくるように感じます。また、作品も、「詩」が多くなり、気軽に書こうという気持が前面に出てきているようです。三年間の空白を経ての、二十三号では二人の作品の掲載にとどまっております。文学部の存亡を問われた苦難の時期ではないかと思います。五十年代に入り、部員数も増加し、内容も充実したかに見えますが、二、三年の周期をもって、栄枯盛衰を繰り返して今日に至っております。

長くなりました。文学部の現状を記して筆を擱くことにしましょう。

「東雲祭」をもって終了した三年生六名、二年生三名、一年生一名が本年度の部員数です。「小径」の発行を、最

大の部員活動としておりますが、その発行に関してのエネルギーは決して他の部にまけるものではありません。また「東雲祭」における発表テーマに向けての部員の活動も、なかなか意欲的であります。現在の部の悩みは、部員数が少ないことにあります。現部員はほとんどが他との兼部です。部員の増加を祈念しつつ幕とします。

社会科学研究部

顧問　宮部　浩次

若者は考える

小史と言っても、私の手元にある資料は、四月以来の「社研ジャーナル」六号分、現在の部員名簿、部員が調べてくれた六十九年以降の文化祭の発表テーマ、七十年前後のビラ若干（「性―SEX―人間」「沖縄返還紛砕に向けて」「反戦ジャーナル」）そして、六十七、六十八年の生徒会誌だけです。この脈絡のない資料では小史どころではありませんが、六十九年以降の文化祭の発表テーマからはこの一〇年前後の社研の歩みがうかがわれますので、そのまま書き記しておきます。

＜文化祭の発表テーマ＞

六十九年……安保条約
七十一年……沖縄返還、核問題、三里塚第一次強制代執行の記録映画上映
七十二年……日本解放戦線―成田空港拒否への視点、教育問題・性
七十五年……（不参加）
七十六年……恋愛、友情、政治意識、生徒会
七十七年……具体例なし。個人の研究発表
七十八年……アンケート中心
七十九年……東高問題、ベトナム戦争、弁論部との提携による討論会
八十年……統一教会、選挙ポスター展示
八十一年……右翼問題、校内暴力（船橋方面の中学の調査）信号無視の実態調査、8ミリ映画等

なお以上については「社研の活動は七十四年を境に大きく二つに分けられる。それ以前は当時の流行であった学生

運動に傾いていたが、以後は身辺のことを中心とし、必ずしも一つのテーマを持たずに、個人研究を行ってきた」という現部員の証言を付記しておきます。

〈現在の活動〉　現在の社研の活動は、機関誌『社研ジャーナル』の発行、文化祭に向けての取り組み、他校の社研との交流会（佐倉高校社研との交流会を既に開催しました）が主なものです。中でも『社研ジャーナル』の発行は主要な活動方針となっているものです。これは更紙二枚裏表に印刷したミニコミ誌ですが、部員外にも原稿募集をしながら、教育問題、社会問題、生徒会問題などを幅広く掲載しており、現代高校生の思考や感覚を多方面から語っています。現在（五十七年二月）の時点で八号が発行されていますが、社研部員にとってはこの発行活動が、苦心の種でありながらも最も充実した活動の一つとなっています。因みに「社研ジャーナル六号」から主な記事を紹介しますと、「五輪問題を考える」（名古屋誘致への反対論）、「ほんに日本はよい国じゃ!!」（反ソデーを見学しての右翼の実態報告）、「プリンプリン物語」（現代における〝笑い〟の構造論）「現代の英雄」（受験論）……など、話題には事欠かないようです。

最後に現有勢力を記しておきます。三年―五人、二年―六人、一年―五人、部長渡辺晴之（二―五）。

物理部

顧問　能條正敏

物理部の活動は、対外的な競技や業績を追求する性格のものではありません。したがってその歴史といってもとりたてて記すべきことも見あたりません。ここでは、歴代部長名や予算等を列記するかわりに、活動の現状と指導方針を述べてこれにかえます。部活動は教育課程外の活動ですが、その教育的な効果はきわめて高いものです。それは、今日の学校教育が知識や技術の体系としての教科に重点が置かれるようになり、教育基本法第一条に示されている「人格の完成」という目標が見失われがちだからです。高等学校における部活動は、その内容や性格からいってこの目標を目指す理想的な教育の場といえるでしょう。

さて、物理部は、学年、学級を離れた生徒一人一人が、共通の興味、関心を追求し、趣味や特技を育てる場ですが、その過程で自主的、実践的な態度や能力を養うことを第一の目標としています。以下、部を指導していくうえで特に配慮している点をいくつか列挙してみます。

一　物理部の活動で育てられた知識・技能・意欲・態度・興味・関心が教科や他の教育活動にも転移して、それら

の教育活動に対しても自主的・意欲的に活動するよう指導する。

二　教師と生徒、及び生徒相互の人間関係を育てる。

三　活動の方向が現実の逃避、活動への耽溺、行動への放逸など、自己中心的、非社会的な態度へ向かわないよう指導する。

四　活動を通して集団の規律の必要性、共同生活の価値等を認識させ、社会生活において広く考え、公正に判断し、誠実に実践する態度を育てる。

五　活動により、生活の大部分を学校で過ごす生徒たちに精神的な充実感を与え、ややもすると陥りがちな教科による欲求不満等を解消させ、学校生活が生徒にとって魅力あるものとなるよう指導する。

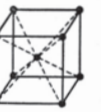
以上、気のついた点だけを述べましたが、学年、学級から離れて自主的につくりあげた自分たちの集団の中で受ける多くの経験は、学校と社会の接点をなす教育活動として、大きな成果をあげています。

化学部

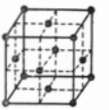
顧問　半谷　貞辰

現在、次の世代の化学への関心はかならずしも十分でないという声が少なくありませんし、無味乾燥の受験用の現行化学教育罪悪論もありますが、それはさておき、本校生の化学への興味関心はかなり高いものがあります。

六方最密格子



体心立方格子



面心立方格子

三十年代、本校化学部は再三「読売科学賞」に入賞の輝かしい実績をもっております。多くの先輩諸君の活躍のあとを土台に、この十年間も、同好の生徒が週に二、三度化学実験室に思い思いに集まり、実験に、読書に、談笑に、部活動を続けてきました。

大学進学への厳しい日々の学習の中で、長期にわたる継続的研究がほとんど見られないのは、いたしかたのない現実と思っております。もっぱら東雲祭の発表展示が中心と

なっての活動の十年でした。

十年間の化学部の構成は次のようです。

年度	部員数	部長	顧問
46	17	(前)三橋 尚武(三年) (後)高丸 健(二年)	青山・庄司 鈴木
47	20	御園生正樹(二年)	庄司・鈴木
48	25	伊藤 秀晴(二年)	長谷部・鈴木
49	21	小池 達郎(二年)	長谷部・鈴木
50	18	青木 伸江(二年)	長谷部・緑川
51	17	入江 慎二(二年)	長谷部・緑川
52	24	入江 慎二(三年)	半谷・緑川・加山
53	14	三木 久人(二年)	半谷・高梨
54	18	植木 勝(二年)	半谷・八木
55	14	菊間 毅(二年)	半谷・米野井
56	21	木村鳶太郎(二年)	半谷・米野井

東雲祭での発表内容は、ビスコースレーション・銅アンモニアレーション・ナイロン・螢光体・太陽電池・防虫剤・硫黄の転移点・黒色火薬・中和滴定曲線・鉄道輸送の有害有毒物質・クロマトグラフィー・葉脈・石けん・電気泳動・電池の起電力・松根油・鏡・合金・クエン酸・水質検査・クレヨン・食品添加物・アミノ酸醤油・エステル・アルコール・ケミカルガーデン・金属の防錆などの研究・製造実験と、化学マジックの公開など、基本的研究から応用面へと幅広く発表してきました。昨年から今年と続けている都川の水質検査は更に続け、環境汚染問題への関心が一層高まることを期待しております。

前顧問の青山先生、長谷部先生(現千葉女子高)、鈴木正躬先生(現千葉高)に当時の様子をご教示いただきました。

また幕張西高の秦先生はじめ、三橋・御園生・伊藤・小池・青木・入江の化学部部長として活躍した先輩諸君には忙しい中を電話でそれぞれの年度の活動状況を知らせていただきました。紙面の都合でその全容を記すことができないのが残念です。紙面をかりて厚く御礼申し上げます。

化学部の今後の着実な歩みと発展を念願して筆をおきます。

生物部

前顧問　錦織　保夫（県教育センター）
顧　問　中安　均

昭和三十年代は、吉田さゆり先生（現昭和学院）、野村典平先生（現君津農林高）、が指導されました。この時代は特に研究熱心で、特に「ミツバチの研究」では次のような輝かしい記録を残しております。

昭和三十五年　千葉県生物研究発表大会　入賞
昭和三十六年　第五回読売科学賞「優秀賞」受賞
昭和三十七年　第六回読売科学賞「最優秀賞」受賞

また、昭和四十三年五月には、短い期間でしたが顧問であられた、故山口道夫先生が他界されました。その後を受けて、昭和四十三年七月から野村典平先生と錦織が昭和五十六年三月まで顧問を続けました。

この時代は研究中心の部活動から、野外に出て自然と接し自然と親しむ、と同時に、部員相互の親睦の方に活動の比重が移って行ったように思います。

昭和四十三年　仙丈岳で夏期合宿。「蝶類の飼育」

昭和四十四年　部員六〇名　浅間山で夏期合宿。現在では、とても考えられませんが、この時は、夜行で小諸駅に午前三時四十二分着、約三〇キロの荷物を背負って、浅間山荘まで歩いて登りました。今でも忘れられません。この年は伝統的な「ミツバチ」・「ネズミ」・「シダ」のほかに、新たに「カエル」・「グッピー」・「腐敗菌」の研究が始まりました。

昭和四十五年五月、新入生歓迎会を兼ねて高尾山へ。七月二十五日～二十九日、浅間山で夏期合宿。

昭和四十七年五月に洲崎。八月に手賀沼と寺山で観察会。七月二十日～二十四日、霧ケ峰、八島ケ原湿原で合宿。雨に降られてほとんどバンガローの中で過ごしました。

昭和四十七年二月上旬、アカガエルの産卵を観察するため徹夜をしたことがありました。合宿は広河原で。この年は、カエル・鳥・ネズミ・プラナリア・グッピー・淡水プランクトン・酵母等が研究対象でした。十一月に笠森自然林を見に行きました。

昭和四十八年、部員二六名。四月、養老渓谷と東寺山。五月に洲崎。六月に高宕山。十一月に三石山と、野外観察会が多く持てた年です。合宿は八月三日～七日、木曽駒ケ岳、一九名参加。観光地化した場所での合宿はすべきでないとの教訓を得ました。ロープウェーの下を喘ぎながら登

った記憶があります。

昭和四十九年、四月に寺山。五月は銚子の犬吠埼で観察会。今までもそうでしたが、館山の洲崎も銚子も、海へ行くときは、主にコウボウムギ・コウボウシバ・ハマエンドウ・ハマボウフウ・ラセイタソウ・ハマハタザオ・ハマボッス・タイトゴメなどの海浜植物の生態観察や、ワカメ・ヒジキ・アオサ・オオハネモなどの海藻類の観察、またカイメン・イソギンチャク・ヒトデ・ウニなど磯の小動物の観察が目的でした。

昭和五十年、部員一三名に減少。観察会は寺山、銚子、鋸山。合宿は湯の丸高原。湯の丸山をはじめ、烏帽子岳、コマクサのある三方ケ峯まで。

昭和五十一年から五十三年まで、合宿は湯の丸高原でした。

昭和五十二年、観察会は殿山、銚子。

昭和五十四年、久し振りに合宿は浅間山にしました。山麓から湯の平までの植生の変化は観察できましたが、頂上への登山は禁止。

昭和五十五年の合宿は再び湯の丸にしました。

こうしてメモ程度に生物部の歴史を振り返ってみても、部全体も、部内の各班も、栄枯盛衰を繰り返して来たようです。その中でただ一つ、「ミツバチ」だけは伝統的に飼育が続けられてきました。また、この十年間は賞を得るような研究はできませんでしたが、年に数回の野外観察会と、夏休みを利用した亜高山帯から高山帯での合宿を通して、自然を愛し生物を愛する多くの部員たちが育っていきました。彼らは卒業後一、二年は合宿のときに応援に来ることが慣例になっているようです。

都市化が進む中で育ち、より厳しい受験戦争の中にいる生徒たちを健全に育てるために、部活動の果たす役割は非常に大きいことは言うまでもありません。これまでとは資質的にも異なり、興味や関心を持つ対象も異なる部員たちが集まる生物部も、変革の時期に来ているように思われます。生物部の発展を祈念しつつ。（錦織）

昭和五十六年度からは野村・錦織両先生のあとを受けて中安が顧問となりました。部員も久々に二桁台（一三名）となり、毎日和気藹々と活動しています。春には三石山で観察会、夏の合宿では戸隠高原の素晴しい自然の中で互いの親睦を深め合うことができました。

今後もこれまでの良き伝統を生かしながら、活動内容をより充実させてゆきたいと考えています。（中安）

地学部

顧問　辻川　正昭

十年間の歩みは、佐野先生が顧問をされた四年間と私が顧問である六年間に分けられます。

佐野先生の時代、主に地質分野の活動が盛んであったと聞きます。夏休み中は二泊三日の校外合宿又は日帰りによる地質の調査、見学を行いました。主なものに、秩父の古生層・変成岩・第三紀層の見学と、県内の養老川流域の堆積物の調査があります。その他、日帰りで銚子や三島湖周辺の地質見学、いちょうの葉の古生物学的調査をしました。天文では流れ星の観測、天体の写真撮影等を行いました。

赤城山北麓，根利川での岩石採集

私が来てからの主な活動内容を順を追ってのべてみます。佐野先生の時代と同じように、二泊から三泊の校外合宿や日帰りによる地質の調査、見学をしてきました。教育センターの田附先生に文献をお聞きして、木下周辺、印旛高校近くの露頭から、成田層・常総層・関東ローム層の地質柱状図を作成し、二枚貝の化石を多量に採集しました。当時の部長の高橋君は地質に熱意をもち、京都大学に進学しました。

嶺岡山から鴨川海岸にいたる地域で、保田層群・嶺岡層群・枕状溶岩等の見学と岩石採集。嶺岡山系を縦走するとき、夏のことで皮膚が真赤に焼けたことが印象に残ります。

県外では、学芸大学の木村達明先生にも御指導いただいたが、赤城火山北麓の岩室中生層・時代未詳の古生層・輝緑凝灰岩・流紋岩・安山岩等の見学をしました。安山岩以外は火山噴出以前の基盤の岩石であり、狭い区域に種々様々な岩石が露出する、箱庭的な所です。また、筑波山の岩石・鉱物の採集に行ったことがあり、ここは深成岩、ペグマタイトの見学地として手ごろでしょう。今夏、日光火山群の一つである蛍塚山に登り、丸沼・大尻沼周辺の火山岩を調べ、岩石を採集しました。今年、部員は岩石薄片の作成に、トレーニングを通じて自信を持つようになっていま

す。

気象では、熱心な生徒がいて、新しい百葉箱を設置し、観測成果を東雲祭に発表しています。天気図は引き続き毎日かいています。天文では、天体観測で校内合宿をしたことがありますが、公園球場の照明に邪魔されることが多いのです。その他、校外（例えば他校、山梨県小淵沢等）で観測を行いました。今年の東雲祭でプラネタリウムを製作し、好評を得て、もっとよいものをつくろうとしています。

ある卒業生が、部活動の経験が大学で役に立ったと話してくれました。これからも、何に役に立つかわからないけれども、謙虚な心で、活発にやることが望ましいと思います。

音楽部

顧問　井辻　紀一

音楽部にとってこの十年間というのは、ちょうど、前顧問の故西山先生が赴任されたころからと思う。慈愛にみちた西山先生のもとに、すくすく育っていました。私は常々、部活動は生徒自身のものであるから、自分たちで悩み、苦しみ、その中からより良き人間関係を生み出すこと。また、集団の中で自分はどうしたらよいのかを模索するのが本来の姿である、という指導方針のもと、自主運営をしてきた。そのためか部員同志、非常に仲がよかったようである。部を愛するという気持は人一倍強いと思う。その点では顧問の目的とするところは充分達せられたように思う。生徒の指揮、伴奏でNHK合唱コンクールに出場した年もあるが、総体的に見て活動の主なる場を校内に置いている関係か、音楽を通じての厳しさに少し欠けるところがある。やはり今思えば、もっと目を校外に向け、他校の良い所をどんどん吸収し、部発展の糧にすればよかったと思っている。しかしそれはそれで結構充実した毎日を送り満足している。三年程前から、その反省に立ち、県合唱連盟主催の千葉県合唱

優　秀　校

昭和56年度ＮＨＫ全国学校音楽コンクール千葉県大会

81.8.26～28　於　千葉文化会館・千葉市民会館

祭、NHK合唱コンクール千葉県大会、朝日新聞社主催の合唱コンクール、県高校芸術祭連合音楽会、千葉地区高校音楽会、それに夏の技術強化合宿等、できるかぎりの活動をやってきた。その成果と思うが、五十四年度はNHKコンクール県大会で優良校に入賞、四十周年記念の今年は、同じくNHKコンクールで優秀校に入る。また、朝日新聞社主催のコンクールでは銀賞に輝やき、関東大会出場に今一歩の所までのし上り、県内でもようやく、その活動が認められるところとなった。更に五十七年二月七日には全千葉合唱連盟主催の特別演奏会を市民会館において、県内一般の合唱団、四団体と共に各々一ステージ演奏する。これには、かって当音楽部に所属し、その土台をしっかり作ってくれた先輩諸氏と共に同じ舞台に立つことになっており今から楽しみにしている。まだまだ技術的にはこれからという所だが、更に技術向上を求め、部発展のため大いに努力しようと思っている。これも今まで部歴史を作る上に着実な歩みをしてくれた先輩の方々のおかげと、常日ごろ感謝しているしだいである。

美術部

創立四十周年に至る十年間のうち七年を田野英夫先生に、後三年を秋吉匠先生に、それぞれ美術部の歴史をたどっていただきました。

（平松生夫）

元顧問　田野　英夫

昭和三十九年に草葉先生の後を継ぎました。木造建の一ばん奥に家庭科室と音楽、書道、美術室があり、準備室の隣りが武道場でしたが、かなり静かな所でした。美術部の生徒は旧千葉村の住人で、人なつこい気持のよい者ばかり。東雲祭前などは学校に内緒で泊り込んで制作するという状態でした。四十四年には管理棟ができ、美術室の方は前年こわされ旧化学室で授業をしました。新美術室は国府台高校を見学し、その美術室工芸室の欠点をなおして造ることにしました。二つの部屋と準備室を持ち、県下でも二室を持っているのは二校だけではないかと思います。この二つの部屋は大きくて、天窓のある方を美術部の部屋として使い、入口の部屋を授業に当てました。部活動が活発なのでその方に力を入れた結果です。天窓からの光をすりガラスの天井をつけることによってやわらげ、保温の役目もさせて良い環境でした。

夏休みには五〇号に人物を等身で描き、風景写生にはテントキャンプに行きました。県内は鵜原・富浦・一宮はもちろん、栃木の御前山・富士山のたぬき湖にもでかけました。それらは秋の東雲祭のためでもあったし、五時起床、七時から十二時まで暑い中で描くという極限での精神集中の訓練でもありました。東雲祭の展示は、五教室を使う盛大なものでしたが作業も大変でした。新館では校舎に釘が打てないのでパネルをたくさん作りました。学園紛争が起きるころから東雲祭の内容は喫茶店や縁日になり、美術部は六月展と二月展を含めて年三回の展示に方向を変えました。六月展は一年生の紹介、二月展は三年生への送りの言葉としました。部員が使う費用が大変でした。私も毎年莫大な予算をいただいてやってきました。沢田校長の時は特別予算をいただき、その結果県下でも誇れる施設・設備になりました。進学でも芸大・日大・多摩美大・武蔵美大と女子美大に毎年多数入りましたが、日大は附属高校ができてからは全くだめになりました。女子美も附属高ができましたがこの方は毎年入ることができました。また千葉大へも良く入るようになりました。教生も多勢見えました。大学を卒業しても茨の道を歩んでいるのが現状でしょうが、絵で食えるはずがないことは十分承知の上の十字架です。その苦しみも一つの生き甲斐かもしれません。

（県立生浜高校）

前顧問　秋　吉　匠

短い三年間でしたが、授業では、美術作品のよしあしは時代、材料、大小ではなく、いいか悪いかであり、深く心に訴えて飽きのこない絵が本物。親のスネをかじっている身には小品でたくさんだ、と言いきかせました。時代、建築にこだわらずに美しさを主張できる小品主義をとり、したがって教材費は県内高校で最低だと、自負していました。美術部では、夏の全日本学生油絵コンクール（一〇〇～八〇号）、冬の全日本学生美術展（六〇～四〇号）を目指して大作主義でした。ただし油絵具、キャンバス（ベニヤ材で代用）代は部費から捻出（個人負担は出品料のみ）、その代わり学校の壁面を大いに生かし、千葉東高美術館にするよう、部員は夏冬合宿して頑張りました。

版画家で芥川賞作家池田満寿夫氏が「入賞したので画家志望の決意をした」と述懐させた夏の全日本に入賞二名、冬の全日本に県教育長から表彰をうけるなど、大変嬉しく思っています。受賞・入選者名を記念として列記しておき

ます。

わく内数字は学年を示します。

第二十八回全日本学生油絵コンクール展（昭五十三年）

＜入賞＞ ②稲子みどり ＜賞候補＞ ②大沢真由美 ②大溝佳子 ②永井洋子 ＜入選＞ ②生田裕人 ②長谷川裕一 ①畑中佳子

第二十四回全日本学生美術展（昭五十四年）

＜推奨＞ ②大溝佳子 ①斉藤明子 ①畑中佳子 ＜特選＞ ②稲子みどり ①中村美果 ＜佳作＞ ②大沢真由美 ①柴山哲也 ＜入選＞ ②生田裕人 ②岡崎誠 ②長谷川裕一 ②永井洋子 ①砂沢均 ①佐藤純子

第二十九回全日本学生油絵コンクール展（昭五十四年）

＜賞候補＞ ②佐藤千恵 ②柴山哲也 ②中村美果 ②畑中佳子 ①原久美子 ①小松浩美 ①滝田節子 ＜入選＞ ②斉藤明子 ②砂沢均 ②田中由起子 ①石川千春 ①米沢緑

第二十五回全日本学生美術展（昭五十五年）

＜佳作＞ ②柴山哲也 ②中村美果 ②深山記三子 ＜入選＞ 斉藤明子 ②砂沢均 ②田中由起子 ②佐藤千恵 ①石川千春 ①川上奈緒 ①小松浩美 ①滝田節子 ①原久美子 ①米沢緑

第三十回全日本学生油絵コンクール展（昭五十五年）

＜入賞＞ ①大林美菜 ＜賞候補＞ ②植草直美 ②米沢緑 ①松井安規子 ①中沢健 ②滝田節子 ＜入選＞ ②石川千春 ②原久美子 ②川上奈緒 ②布谷裕子 ②大山千恵子 ①俵恵子 ①林博子

第二十六回全日本学生美術展（昭五十六年）

＜推奨＞② 滝田節子 ①中沢健 ＜特選＞ ②米沢緑 ＜佳作＞ ②原久美子 ＜入選＞ ②石川千春 ②植草直美 ②大山千恵子 ②川上奈緒 ①大林美菜 ①俵恵子 ①林博子 ①松井安規子 ①米本直子

（敬愛短大）

書道部

顧問 安塚正明

書道部の過去十年間を振り返ると大きく三つの時期に分けられます。

昭和四十七・八年ごろは部の中心的な活動をする生徒が少なく兼部が多かったために、東雲祭、高芸祭への出品は手造りのパネル作品が少なく表具師に依頼する作品がほとんどでした。そのなかでも西野光文（現九十九里高教諭）、高川恵子（現柏井高教諭）などの先輩に続いて田中香（現君津商

合宿風景

業高教諭)、野球部と兼部の高橋敏行(現四街道高教諭)らが頑張り、嶋田嘉明は全国展にて内閣総理大臣賞を受賞しました。

その後昭和四十九年から昭和五十四年までは、日本武道館主催の全日本書きぞめ大展覧会団体の部で五年連続八度目の全国第一位となり、千葉県議会・千葉県教育長より表彰されました。このころは黄金時代と言えるほど活発で、特に林律夫(現大東文化大三年)部長のころは男子部員が十数名を数え、四〇名の部員が積極的に活躍し、八月の合宿は軽井沢まで出かけ毎晩徹夜をして書作に励む部員で熱気に満ちていました。また九月の東雲祭は三教室を使用し、一〇〇点以上の作品を陳列しました。パネル作り、裏打ち、台紙張りのすべてを部員の手により行い、全員が細字の全臨をし、現在でもこのころの伝統は後輩たちに受け継がれています。また兼部生徒は野球・卓球・剣道・陸上・テニス・ソフトボールなど運動部員が数多く、書道科の大学へ進学する部員も大勢いました。十月から一月にかけての全国展は、放課後急いで書道室へ行かないと硯や下敷はもちろんのこと、書く場所がなくなるほどの盛況ぶりで、一般生徒も数多く参加しました。全国展が終わり全国第一位になったときは部員全員で餅つきをし親睦を深めました。その後共通一次試験がはじまるころより三年生部員の沈滞ムードから一・二年生も盛りあがりに欠け、男子部員の減少により部員数が大分少なくなりました。これは東高だけではなく交通事情の良い進学校は皆部員不足に悩む時代のようです。

現在は二年生二名、一年生六名ですが第三期黄金時代の幕あけを告げるべく一年生部員の頑張りが目立ち、明日の書道部の活躍が期待できそうです。最後に全国展特別賞受賞者を記しておきます。

○昭和四十八年度

田中香　嶋田嘉明　高橋敏行　吉川美弥子

○昭和四十九年度

藤田和己　田辺淑子　山本豊子　和田のり子

○昭和五十年度

大木正人　藤田和己　田辺淑子　金田真澄

○昭和五十一年度

田辺淑子　山本豊子　武田和弘　三宅るみ　落合幸雄

北島恵美子

○昭和五十二年度

高木淳子　白井美幸　長谷部順子　中島奈津美

○昭和五十三年度

長谷部順子　新保幸男　花島里香

○昭和五十四年度

長谷部順子　鹿野美彦　久米真琴　花島里香

○昭和五十五年度

花島里香　榎原一恵　丸山清美　鶴岡照美

○昭和五十六年度

榎原一恵　橋本佳奈子　石井千里　菅愛香　安田広美

マンドリン楽部

顧問　織原　勝二郎

東高マンドリン楽部の特徴は、楽器の種類が多いことです。マンドリン、マンドラ、マンドセロ、ギター、コントラバス、フルート、マリンバ、ビブラホン、グロッケン、アコーデオン、オルガン、ピアノ、ドラムその他のパーカッション、エレキギター、エレキベース等ですが、この様に楽器も部員も増えてきますと、扱う曲も幅が広くなり、静かな曲から激しいものまで、メロデックなものからリズミカルな曲まで、クラシックから歌謡曲までなんでもレパートリーに入れてしまいます。練習方法は、まず楽器の種別ごとに集まり、各リーダー（トップ）を中心に練習します（パー練）。次に全員が集まっての合同練習ですが、曲がよくまとまるかどうかは、指揮者の腕と全員のチームワーク次第です。

部員が最も力を入れ、若さと情熱を傾むけるのは、毎年六月に行われる定期演奏会です。三年生はこの演奏会を最後に部から引退するからです。第十四回以前は教育会館や県文化会館などで行いましたが、第十五回から今年の第十九回まで千葉市民会館を会場にしました。市民会館は一八〇日前から会場の予約ができるのですが、一八〇日前の日に一番乗りするために、二週間以上も、毎日、朝から夕方まで並ばなければなりません。もちろん、生徒は授業があるため三時半前は並べないので、部員の家族に並んでもらうのです。そのころ、生徒は演奏する曲を決定して、楽器の編成に合わせた編曲を依頼しなければなりません。かなりの音楽技量の持主でないとできない仕事ですが、二〇近

くの曲の大部分をOBが引受けてくれます。会場の予約や編曲、さらに経済的なものまで、学校の内外からの援助があって初めて、あのような演奏会ができるのだと感謝しております。初めは下校時刻もまもり練習していますが、定演の日が間近に迫ってくると、熱が入り、少しでも上達しようと下校が遅くなってきます。顧問も、やる時は心残りがないように充分やるのが良いという考えで、熱意に水を差さないように、ある限度までつき合うことになります。一年生は受付や飾りつけなど舞台裏の仕事を受け持ち、舞台に上るのは、二・三年生ですが、アンコールの曲も終わり、満席からの拍手と共に幕が下りると、三年生は感激で目が涙で光ります。舞台で拍手を受けた人でないとわからない喜びですが、このような姿を見ると、部活動のすばらしさを感じます。

第19回定期演奏会　千葉東高等学校・マンドリン楽部
1981.6.14

最近のマンドリン楽部で変わったことと言えば、部室と合宿があります。部室は中庭にあった木造校舎から、現在の新館四階にある多目的ホールに移ったのです。古くて床や廊下がガタガタの木造校舎は、冬になると隙間風が入り、寒さでかじかんだ指で弦を弾かなければならいようなところでした。窓も完全でなかったので、音がかなり外へ漏れて騒音になり、近所の民家へ菓子折を持って謝りに行ったこともありました。でも部員にとって、放課後友人と部活ですごすこの部室は、居心地は良かったようです。新館の多目的ホールは防音設備付きで、外へ音の迷惑はかからなくなり、また清潔で格段に環境は良くなりました。多目的ホールの名の示すとおり、通信の授業等で、部が使用できないこともありますが。

夏の合宿は、毎年恒例のように岩井海岸の音楽団体用設備のある民宿でやっておりました。海岸の近くですが、泳ぐ時間もとらず熱心に練習するのです。楽器の種類が多いので何人も指導者が必要ですが、OB、OGが差入れ持参ではるばるやって来て、後輩の面倒をみるという風景が見られたものです。現在では、合宿は学校で行われるように

なり、部室も新館に移ってから、幾分、部の雰囲気も変わりつつあるようです。常に学校という組織の中の部として、活動し発展しようとしているマンドリン楽部の今日このごろです。

〝東吹会〟（東高吹奏楽部）

昭和三十九年、まだ受験戦争と関わりあいのない東高生がたくさんにいたころに、借りもの楽器と、ラッパ好きの寄せ集まり部員とで、吹奏楽部は始まりました。

第23回千葉県吹奏楽コンクール
銀賞
81.8.9～12&17～21 於 千葉文化会館

昭和四十五年、千葉県吹奏楽コンクール第二部で初めての入賞（三位）を果たし、翌四十六年、特別優賞を受賞。またこの年、旧体育館で第一回定期演奏会を開き、少しずつ部員や楽器や部室がそろっていきました。

そして昭和四十九年、創部十周年を記念して、念願だった第二回定期演奏会を千葉県教育会館において開催。OB指揮者を先頭に、OBも現役も共に頑張りました。この時の入場料は九十九円でした。

翌五十年からは場所を千葉市民会館に移して第三回。しかし以後回を重ねるに伴い、はじめ大学生だった指揮者やお手伝いのOBも、次第にそれぞれの生活が忙しくなり、定演は現役の部員たちによる演奏会へと変わっていきました。このころ、OBだけの「小さな小さな大音楽会」が二度開かれています。

昭和五十三年、千葉吹奏楽コンクール第三部に初出場。そして、今年五十七年は定演も第十回を迎えました。コンクールも文化祭も精一杯の演奏活動で頑張っています。

（文責　山口）

手芸部

顧問　田中　久子

手芸部の起源は余り定かではありませんが、昭和二十六年の指導要領の改訂に伴い、教科外の特別教育活動の一端として設置されたもののようです。その当時はクラブと呼

ばれ、その種類も少なく、いきおい、手芸クラブに所属する部員の数は多かったと聞いておりますが、手元に残されている手芸用具から、その当時流行していた手芸が、また、その活動が推測されます。

ここ十年程の手芸部の活動について言えば、部員数は大体一二、三名。少数ですが、年間の活動計画に従って、週二回着実な活動を続けています。左の計画表は、ここ数年、ほぼ固定し、先輩から後輩へと受け継がれているものです。

年　間　活　動

4月	○新入部員勧誘
	○3年生引退
	○東雲祭用ペーパーフラワー製作（バラ・シャクナゲなど約20種）
5月 6月 7月	↓
8月	○夏休み期間中の5日間 2日　編物講習会（機械編、ベスト） 3日　ペーパーフラワー製作
9月	○東雲祭参加 ・ペーパーフラワー、マスコット即売 ・ペーパーフラワー無料講習 ・作品の展示（ベスト・ほか）
10月 11月 12月	○翌年の東雲祭用マスコット製作 ↓
1月	○卒業する先輩へのプレゼント製作（人形、縫いぐるみ）
2月 3月	○自由製作　↓

八月の編物は編機メーカーから講師を招いての無料講習。二日間で、模様編み、編み込み模様、引きあげ編み、と思い思いの技法でベストを仕上げます。以前には、上野美術館で行われる全国家庭科の手工芸展への出品など、大作も手がけたと聞きましたが、コツコツと地道に作品を作っていく根気と、綺麗なもの、愛らしいものを愛でる心が、この部を支えて今日に至っているものと思います。願わくば、東雲祭中心の製作から眼を転じ、未知の手芸にも挑戦し、女性の持つ細やかな感性を育てて、身の回りをゆたかに彩る生き方を学び得て欲しいものです。

なごやかな新入部員の歓迎会、後輩の合作によるほのぼのとした抱き人形や縫いぐるみを贈っての送別会、こんな魅力に惹かれ、部員数が増し、今後活発な活動の展開されますことを願っております。

ＥＳＳ

顧問　石井　栄

過去十年程の間には、活動面でも、部員数でも、浮き沈みがあったようです。

昭和五十二年度新入生の中で、ＥＳＳ入部を希望していた数人は、実は部員ゼロで形骸化していることを知りまし

若草物語

た。しかし彼女らの熱意は変わらず、すぐにその再建へと動き始めました。級友たちに働きかけ、集まった同好の士は当初一年生のみ七人。この七人が、ＥＳＳ復興の核となっていきます。

すべて無からの出発でした。当然苦労が伴いましたが、その苦労も、創造の過程に生ずる喜びで十分報われました。望むように部を形作るなかに充実感を味わいました。因みに、彼女らが三年になったときの後輩たちの姿勢に、やや積極さに欠けるものを感じたと述べています。

教室での活動が始まりました。テープを使った会話の練習、読書、フリー・トーキングなどが日々の主たる活動でしたが、ＥＳＳの場合には、例えば運動部の試合に相当するような明確な目標がないので、具体的な形を求めて常に模索を続けました。この目標の設定と、ＥＳＳを広く知らしめんとの願いが合体して、文化祭での英語劇上演を決定しました。

この年の出し物は「ハイジ」と「ヘンゼルとグレーテル」。自らの手で脚色することにより活動の幅も広がりました。普通教室での上演であったため、舞台作りには部員以外の男生徒も動員することになりました。観客の入りはかなりのものでした。実際、今、体育館に英語劇を見に来る人は少ない。その点では、廊下を通る人が入り易い普通教室での上演の方が良いのかも知れません。上演時間以外には展示を見てもらうこともできました。ともかく、その後、文化祭と新入生歓迎会での英語劇は、ＥＳＳ活動の主目的ではなくとも、大きな目標、そして柱となっていきました。

この間、会話練習といったより地道な活動も当然続いていました。部員は五十三年度には二五人を数え、ピークでした。その後減少傾向に転じ、今年度は九人。いささか寂しい状況ではあります。部員の熱意は衰えてはいませんが。

最後に、上演した劇を挙げておきます。各々、新入生歓迎会と文化祭です。

五十三年度　「足長おじさん」「ベニスの商人」
五十四年度　「白雪姫」「かぐや姫」
五十五年度　「青い鳥」「若草物語」

五十六年度　「森の少女」（創作）「賢者の贈り物」
五十七年度新入生歓迎会　「額田王」

演劇部

顧問　亀山　仁寿

千葉県文化祭第一回演劇コンクールが行われたのは昭和二十三年秋で、参加校はわずか四校、そしてその翌年の第二回コンクールに、当時市立千葉女子高校として村山知義作「初恋」を上演したのが校外における演劇発表の最初で、いわば千葉県高校演劇史上の草分け的存在と言っても過言ではありません。

「戦　争」の舞台

高校演劇連盟が正式に結成された昭和二十五年に本校も千葉三高と改称、以後千葉東高となって現在に至るまでのコンクール上演作品を次に掲げて、部の足跡と成果の一端をのぞいて見ることにします。○は県大会出場作品です。

	（年）	（作品名）	（作者名）	（順位）
○	昭和二十五年	夜学生の四季	荒川高校	4
○	〃　二十六年	女の家族	堀江史朗	3
○	〃　二十七年	祝い日	内木文英	2
〃	二十八年	子ら	小倉　衛	
○	〃　二十九年	死神から生命をもらった話	長谷川行勇	3
○	〃　三十年	山小屋にて	長谷川行勇	1
○	〃　三十一年	花妖	榊原政常	4
○	〃　三十二年	ロング・グッドバイ	T・ウィリアムズ	3
○	〃　三十三年	夕鶴	木下順二	
○	〃　三十四年	悪夢の夜	原　千代海	3
○	〃　三十五年	罪人	小幡欣治	1
○	〃　三十六年	おーい、助けてくれ	W・サローヤン	2
○	〃　三十七年	月の光	キンテーロ兄弟	5
○	〃　三十八年	毒	木下博民	3
○	〃　三十九年	国道の幽霊	南　勝彦	1
○	〃　四十年	部屋	谷川俊太郎	2
○	〃　四十一年	砂の城	伊奈坂良弘	4
〃	四十二年	オレステース伝説	生徒創作	
○	〃　四十四年	ロング・グッドバイ	T・ウィリアムズ	3

関東大会出場
全国大会出場

○昭和四十五年　俺のかわいい小鳥たち　木谷茂生　奨
〃　四十六年　！　伊藤暢彦
〃　四十七年　芝居　S・ベケット
○〃　四十八年　おーい、助けてくれ　W・サローヤン　3
〃　五十年　濫記　阿坂卯一郎
○〃　五十一年　死体のある風景　別役実　3
〃　五十二年　長い長い橋の上で　内木文英
〃　五十三年　市場　堀内茂男
○〃　五十四年　戦争　J・C・Vイタリー5
〃　五十五年　アペリチーフ　徳丸勝博
〃　五十六年　イエス、たぶん　M・デュラス

東高演劇部の風雪はまさに県連盟、県演劇部会の苦難の歴史と同居しています。その部会も近年加盟校は百校を越える大世帯となりました。そのため県内九地区で行われる予選も極めて熾烈の度を加え、専門的にもかなりの評価を得なければ、もはや県中央発表会出場も果たせない状況になってきています。こうした中で演劇の新しい方向を模索する社会派的な、あるいはアバンギャルドな作品にも果敢に挑戦して知的探求を楽しむといった一面が芽生えつつあり、毎年東高の実験的舞台に対しては一部の関心と期待がひそかにむけられていることも事実です。

抜群の演技力をもった役者がたまたま出現するということも、本校演劇部が伝統的にもっている風土のせいかも知れません。青春の情熱を演劇という一過性の芸術にたぎらせた後は、急速に沈静化の方向をたどるのが通例なのに、中には感動をいつまでも持続させて醒めない者もいます。三十七年卒業の山本紀彦君は現在一線級の俳優に成長、NHK連続テレビドラマ「本日も晴天なり」のレギュラーとして、またその他単発ドラマにも出演、したたかな演技で人気を博しつつあります。緒形拳（本名彰信）君も一年在学して転校しましたが、彼の場合直接部とのかかわりはなかったものの、芝居経験はサイドで結構重ねていたようです。

芝居をやる者はすべて同じ仲間であるという意識が常にあります。共に汗して涙と喜びにひたることもあった歴代顧問もここに記しておくことにします。

（期　間）	（顧問氏名）	（現　況）
昭和二十三年～二十八年	佐倉俊二	防衛庁へ転勤・退職
〃　二十九年一月～三月	千田恭一	市立千葉高校長
〃　二十九年～三十二年	白銀彦太郎 宮本文彦	千葉北高校長退職
〃　三十二年～四十二年	白銀彦太郎	津田沼高校長退職
〃　四十二年～五十年	石井久治郎	行徳高
〃　五十年～	亀山仁寿	

白銀彦太郎先生は県高校演劇を今日の隆盛に導いた最大の功労者で、四十七年から五十六年までの九年間演劇部会及び連盟の会長を務め、勇退された後も名誉会長ばかりでなく、全国高校演劇協議会顧問にも推挙され、相変わらず卓抜した指導力を発揮されています。

五十四年の学校整備計画で古き由緒ある部室も解体の運命にあい、今は肩身の狭い仮り住いといったところですが、良好な条件が揃わなければ素晴らしい演劇空間を創造できないというものでもなく、むしろ悪条件なればこその苦闘が結果的には感動を呼ぶ舞台を現出せしめるものだと思うのです。そして、いたずらに現状に不平をかこっことなく、これを克服しようとする忍耐の喜びを知るくらいの広い度量がなければ、豊かな活動の意義すらないのだということも明確にわきまえています。とに角、演劇部は文化の先端で息づいているのだという自負をもった若い集団であると言えるでしょう。

弁論部

顧問　桜井　功造

マスコミの普及と共に〝話すこと〟は私たちにとって一層身近なものになり、誰とも気楽に話し合えるようになりました。反面、改まった弁論口調は次第に遠ざけられ、部としての活動も先細りの状態です。だが、これから社会の中核として活躍が期待される高校生には、大勢の前で筋道立てて自分の意見が述べられる器量もまた必要でしょう。いろいろな考えを持つ人々を前に、論理的に組み立てられた内容を、正しい話し方で、いかにして強く訴え、相手の共感を得るか、その技術を学び、練習の場をふんでいくのが弁論部です。

弁論部の歩みを辿ってみると、創立四十年の本校の歴史の中でも、さん然と光を放つのが、昭和五十年の県下高校弁論大会における優勝です。以下は優勝した江沢博水君の「弁論観」です。

私の弁論観

昭和五十年度卒　江沢　博水

私が東高に入学したのは昭和四十八年のことです。学園紛争も下火となり、天下太平の中、生徒会活動、課外クラブ等の活動も盛んに行われて、自主性を重んじる校風とうまく融合し、自由な気風を感じる学校生活を送れたように記憶しております。反面、経済成長、オイルショックと、揺れ動く世相を反映してか、自由であるということを錯覚

していて、非常にアンバランスな学校生活であったようにも感じられます。

そんな中で私が参加したクラブ活動というのが弁論部でした。入部したのが二年生の時で、当初は地味で目立たない部ということもあり、部員は私一人という状態でした。私自身それ程熱心に活動をしていたという訳ではなかったのですが、それでも高校三年生の時に、県下高等学校弁論大会に出場し、最優秀賞をいただいた時のことは今現在でもはっきり記憶しておりますし、また誇りとも思っております。

現在弁論部は桜井・南部の両先生に御指導をいただいているということですが、当時は大木先生のもとで弁論のイロハというものを御指導いただきました。そんな中で私が感じた弁論について少し述べさせていただきたいと思います。

弁論と申しますと何か非常に堅苦しいものを想像しがちかと思いますが、実際はそんなことはありません。もちろん、そこにはある一定のルールがあり、そのルールに従い弁論を行います。定められた時間の中で、声の大きさ、抑揚、速さを微妙に加減しながら、吟味し尽した内容を訴えかける——ルールは、これだけです。

このルールに従い、聴衆をいかに説得できるか、満足させられるかという、非常に柔軟な〝ゲーム〟が、弁論なのだと思います。演台に立ち、聴衆に、あらゆるテクニックを使い、自分の思っていることを表現できる弁論というものは、私にとって自己を表現する一つの機会であると同時に、私自身を俳優として看做すことのできる場でもあったのです。つまり、弁士は、既製の概念にとらわれることなく、自由に、しかもルールに従いつつ、自分の個性を聴衆に訴えかければよかったのです。私は、ここに、弁論の持つ深い味わいがあると思うのです。

そう言った意味では、昨今の、そして私たちが日常使用している「ことば」には、伝達能力こそあるものの、「ことば」が、本来持っていたであろう味わいとか趣きとか気品と言ったような、熱意や迫力は消えてしまったかのような気がします。

話は、前後しますが、私が弁論大会で優勝した時、私はベストコンディションではありませんでした。熱は、三八度をこえ、咳、鼻水、くしゃみと最悪の状態だったのです。しかし、そんな体調の中で私が審査員全員から満点を勝ち得たのは、何よりも大木先生の日ごろの熱心なご指導があったからですが、それと共に、私自身について言え

ば、あの時の気迫が審査員の心を動かしたのではないかと自負しています。「これだけは訴えたい。ここは絶対わかって欲しい」と思う気持ちが伝わったのだと思います。

今日のように価値観が多様化した社会では、自分の思っていることを素直に述べるのは難しいことだと思います。しかし、そんな社会だから、熱意と迫力を持って自分の考えを述べれば、ただ単なる情報伝達に堕しがちな「ことば」が人間の中に生きてくるのではないでしょうか。そして、私は、この生きた「ことば」を使えるようになるためにも、弁論が大切な要素を含んでいる気がします。

話術研究部

顧問　須賀　賢悟郎

学校の部活動の略称で、「バスケ」「社研」などと言ってもすぐそれとわかりますが、「話研」と言ってもすぐピンときません。放送か演劇の発声練習でもするのかと思います。どうして世間一般で言う「落研」、つまり落語研究部としないのか、といつか生徒に聞いたことがあります。Y子は口をとんがらして言いました。「だってね、落語ばっかりが芸じゃないでしょ。漫才だってあるでしょ、講談だってあるでしょ、浪曲だってあるわ。わたしたちはもっと次元が高いのよ」

これには参りました。しかし私が顧問になってからここ四、五年間に、落語以外にやったのは文化祭での漫才がたった一回だけでした。

いつごろ「話研」が生まれ、どんな活動をしてきたかは記録もなく、詳しいことは知るよしもありません。初代顧問の大木先生（千葉女子高）の話によると、「昭和三十九年か四十年ごろ、同好会の話術研究会として発足。一、二年後に部に昇格。生徒に担ぎ出されて顧問になったが、集まった生徒は、意外にも、生徒会長の川上君をはじめ、まじめで優秀な生徒が多く、ちょっと驚きました。勉強する時の態度と高座に上った時のとぼけた態度との切りかえが彼らは実に上手だった。ある時、体育館で同窓会があったとき、会のあとで余興に出演を頼まれた。ところが壇上と客席との間が離れすぎ、同窓生は

東雲寄席　大喜利

飲み食いや話に夢中で落語を聞いてくれず、部員はガックリ。もうあんな広いところでやるのは止そう。本当に落語に興味のある者を集め、中程度の部屋、教室とか家庭科講義室などで家庭的な雰囲気のもとでやろうということになった」ということでした。

話研の活動はすべて校内に限られていますが、一度、五十三年の夏、千葉市の南部青少年センターで「落語を聞く集い」があり、主催者（千葉市教育委員会だったと思うが）の要請により前座として出演しました。桂小南師匠が来るまで、彼らは青少年を前に熱演しました。この時、大木先生も千葉女子高の落研の部員を連れて見学に来ておられました。

恒例の「東雲寄席」は、たいてい年に三回で、新学年が始まって間もなくの六月、九月の文化祭、翌年の一月に高座がかかります。高座のびょうぶや道具一式はすべて手作り、自主的に運営しています。「寄席の終了後は後片づけをきちんとやり、マナーがいいので、家庭科の先生は東雲寄席に家庭科講義室を二つ返事で喜んで使わせてくれました」と大木先生の弁ですが、これは今も話研の伝統になっています。

出し物はほとんどが古典落語で、たまに新作や自作の落語もやりますが、どうもぎこちないようです。みんな芸名があり、入部すると、人柄や特徴に応じて話し合いで決めます。代々受け継がれる芸名に「柳蔵」というのがありましたが、九代目まではわかってますが、いつごろからか消えてしまっています。

たまたま話研の写真帳を見ていましたら、四十八年の東雲寄席のプログラムが見つかりましたので、五十六年のものと比べてみましょう。

48年		56年	
長短	東家 杜仁夫	千早振る	珍
不精床	東家 色夫	うどん屋	耕造
代脈	東家 双六	時そば	小豆
堀の内	東家 小豆	粗忽の釘	星斜
大工調べ	東家 四角	大喜利	
仲入り			
転宅	東家四代目 ひな菊	泣き塩	い安
黄金の大黒	東家 番台	もと犬	十八番
よかちょう	東家二代目 与之助	水道のゴム屋	きな子
真景累ケ淵	東家七代目 柳蔵	三方一両損	八酔
		牛ほめ	小舟

この芸名をどう呼んだか、四十八年のものは不明ですが、五十六年のものは、チン（珍）、コウゾウ（耕造）、オマメ（小豆）、スターシャ（星斜）、いヤス（い安）、ヤヨイ（八酔）、

コフネ（小舟）です。

話研は初代顧問の大木先生から中台正先生へ、そして現在へと、約十五、六年の歴史があります。どういうわけか女子が多く、利口で気さくで、感じがよろしい。引く手あまたの所以でしょう。話研の日誌などもその発想が奇抜で勝手にのびのびと書いています。「映倫、という字に魅力を感じる。さわってみたい」、「みんな来ない。退屈だ。居眠りでもしよう」。五十三年は小雀（当時三年生の女子部員の芸名）が下級生にも人気があり、いたるところに書いてあります。たとえば、「小雀様の目は太陽のように明るく、小雀様の髪はつやつやと輝き、もう、くらくらです。小雀様、私を見捨てないで下さい」。

オーストラリヤのタスマニアに、ロータリークラブの交換留学生として行っていたY・Nさんは、便りをよこしてこう言いました。「二、三年生は一年生にていねいにいろんなことを教えていきましょう。そして東高の文化祭は話研で始まり、話研で終るようにしましょうネ、、、」

一見おだやかでのんびりしたような中にもファイトは充分。話研はどこか千葉東高校の体質を思わせるところがあります。今後の健闘を祈って止みません。

写真部

顧問　三塚　隆昭　　勝　輝夫

写真部は地味ながら着実な活動を続けています。部の性質上東雲祭に出品する作品の制作が中心になります。できるだけその年度のテーマに沿ったものを作ることを目標にして、部員たちはカメラを携えて歩き回ります。

過去十年間の東雲祭のしおりを見ると、簡単な部の紹介程度ではありますが、その中に部員一人一人の意欲がうかがえます。高校生の眼からみた世界、明るく清く、絵画では表現できない世界を描きたいといった難しい課題に挑戦しています。作品は会議室や社会科教室に展示され、最近では普通教室を二つほど使用して作品の発表を行っています。写真の大きさは半切から全紙が多いようです。そのくらいにすると迫力が出てきます。かつては引伸しの実演をやったこともあります。厖大な数にのぼるということはないのですが、作品の飾り付けには毎年相当の時間と労力とを費やしております。

素人の作品ですので欠点だらけの物ばかりです。しかしいずれも苦心作なのです。各自の表現しようと思った対象を素直にファインダーの中に映しながら撮影をくり返すの

です。フィルムは自分で現像し、気に入った部分を大きく引伸して一つの作品に仕上げます。最初から最後まで、すなわち撮影から一枚のパネルにするまで自分の責任で作り上げるのですから作品に対して愛着が湧くようです。極端なことを言えば、作品の良し悪しが問題ではなく、もちろん良いものを展示するのが当然なのですが、作り出すまでの過程が大切なのだと思います。

昨年の夏休みには東雲祭に出品する作品制作のため、河口湖までかけました。部の合宿であります。二泊し、テーマ「流」に沿って各自思い思いに撮影をしてきました。部員が同じ場所に泊り、同じように行動し、お互いにいろいろと検討し合いながら瞬間のシャッターチャンスを狙うということでとても良い刺激になったものと思います。

また一方では、個人個人で、好みに応じた場所でいろいろな対象物を相手にして悪戦苦闘するのも良い写真を撮るためには必要なことなのであります。本年は部としての合宿は行いませんでした。

重い望遠レンズをつけたカメラを扱ったり、現像液や定着液を作ったりする作業があるためでしょうか例年男子の部員が圧倒的に多いようです。いずれも真面目でかつ世の中の情勢などあまり気にしないような人たちの集まりなのであります。放課後になると暗室にもぐって何やら作業をやっております。少しでも良い作品ができるよう今日もまた頑張っているのです。

食物部

顧問　坂本　あい子

放課後の四時半過ぎになると、二棟一階の廊下にプーンとおいしい匂いがただよってくるのです。その匂いにつられて足をすすめていくと、調理室で食物部の生徒がつくっている調理が、もう少しでき上るという場面が目に入ります。

食物部の歴史は古く、終戦後クラブ活動が実施されると、直ちにグループがつくられ、活動が開始されたときます。

食物部の最近のあゆみをさかのぼってみると、部員数や、男女別、作る料理にも変化が見られます。食物部ですから、さぞかし女生徒だけがひっそりと活動しているのではないかと思われますが、男子生徒の入部が多く、男子が部長をしていた時代もありました（現在大学工学部在学中で、将来は建築家志望なのです）。部員数も多い時代もありましたが、最近は大変に少なくなってしまい、東雲祭の食堂はど

うしたらいいのかしらと思案にくれたときもありました。

部活動ですので、あくまでも生徒が主体的に活動していますが、作る料理の名称を一つとっても、いろいろな変化が見られます。十年くらい前によくつくって食べたり、東雲祭で販売していた「東雲ドッグ」（アメリカンドッグを、生徒はそのようにいっていました）がありますが、最近の生徒が「しののめドッグ」とよんでいるのは、パンにツナサラダや、卵サラダなどをはさんだものに変化してしまっているのです。調理技術の上での変化も多く、数年前までは東雲祭のケーキをつくるために、大量のバターの撹拌や、卵白の泡立てをして、腕がいたくなってしまったという、生徒が出たこともありましたが、最近では、電気器具を使って、さっとやりとげてしまうようなことも大きな変化です。作る料理は、その時代の社会的影響がよく反映して、御飯ものをつくったり、スパゲティの料理を数多くつくった時代もありました。

ケーキにいどむ

近ごろは家庭でもお菓子づくりがさかんに行われています。その関係かどうか、最近の活動はもっぱらお菓子づくりに熱中していて、今週はチーズケーキをつくって舌つづみをうち、来週はシュークリームをつくって試食をする、というような次第です。肥満を気にしながらも、おいしいお菓子の魅力には負けてしまうようです。

若い生徒たちですので、その技術的な進歩はめざましく、一年に入学した当初は、ただ上級生の作業をみていたり、お皿やスプーンを揃えたりしているうちに、めきめき上達して二年生くらいになると、味も外見もなかなかのものがつくれるようになっています。このように一年間練習をして東雲祭をむかえるのです。

なんといっても東雲祭は、部活動の一年間の総まとめとなっています。六月ごろからメニューを考え、試作したり、原価計算をしたりして、やがて九月になり。東雲祭までは細かな日程をくみ準備をします。九月の残暑がきびしく気温が三〇度近くもあるようなとき、お菓子を焼くために何台ものオーブンに火をつけると、調理室の中は、それはそれは暑くひどいものです、衛生上も細心の注意をしな

がら計画に従って作業を進めています。ケーキ類は何種類か作っていますが、まず保存のきくものから作りはじめて虫の被害にも心をくばり、作りだめをしています。前もって作っておくことのできないご飯ものやサンドウィッチなどは、下準備をしておいて、当日の朝早く出校して調理をし、先生方や生徒の皆さん、外部のお客さんに販売して食べていただいています。

当日は、山のようにつくった、しののめドッグ、ダンボール箱につみ重ね保管してあった幾箱ものケーキ、何十キロと炊いたご飯類も、アッ、という、わずかの時間で売りきれてしまいます。食堂や調理室のあと片附けも終わり、疲れた、疲れた、と口ではいいながらも、力いっぱい働いた生徒たちの顔には、満足した様子がみられます。

このように大きな仕事が、日ごろ家庭ではあまり家事労働をしていない生徒たちの手によってなされているのです。

茶華道部

顧問　田村　照子

この広間は二九畳、客の生徒たちは正座しています。そこへ、半東が菓子を運び、入口を閉めて水屋へ去りました。制服の亭主は静かに広間の入口の戸を開け、外から一礼をしました。これから、お茶会が始まります。

広間の一角に、風炉先びょうぶと呼ぶ、小さなびょうぶが立てられ、そこに風炉をすえ、釜がのっています。亭主はこの畳一畳の前で、客に茶をたてます。亭主は、お点前に必要な、水さし・なつめ・茶碗・健水などを運びますが一畳を六歩で歩くとき、静かななかに畳をすべる音が聞えます。風炉の前に座し、ふくさを扱い、茶筅とおしをして、茶碗を暖め茶布で拭きます。それから、茶杓で、みどりの抹茶を茶碗に移し柄杓で湯をそそぎ、茶筅をとって心をこめて茶をたてます。アシスタント役の半東は、たてた茶を正客へとりつぎます。

これまでの、亭主の動作をみていると、膝の前の限られたスペースで、非常に合理的に茶をたてます。足のしびれを気にしないですむようになると、この合理性に感心し、美しい動作に心をうばわれます。

菓子やお茶をいただく側にまわっても、はしの扱いは、日常に生きてますし、となりへ挨拶する心くばりも、最初は窮屈な感じですが、しばらくすると慣れて、自然な動作となります。

全員に茶を出し終わると、亭主は道具を、半東は菓子

部員の作品

器・茶碗を水屋へ運び、入口が閉められます。水屋では、係の生徒数名が、会の進行に合わせて、準備をしてくれます。再び、戸が開いて亭主と半東が現れ、総礼をして終了します。

平常の練習は、週二回、月曜日と木曜日に三島千枝子（表千家　三島宗枝）先生の指導で、すわり方・歩き方・ふすまのあけ方・用具の扱い方・茶のたて方などの基本を練習しています。

いっぽう、いけばなは、宮内美智子（華道家元池坊華道教授　宮内香風）先生の指導で、盛花・自由花・生花正風体・生花新風体を、週一回水曜日に、練習を積んでいます。

いけばなの歴史を、ここでたどってみると、飛鳥時代にさかのぼります。日常、仏に花を供えることが、仏教の隆盛とともに発展しました。また、人には花を愛する心がありますから、明治になってからは、女子教育のなかにとり入れられて、生花となり、戦後は、花材・生け方も自由なものが生活に親しまれるようになりました。

いけばなは、自然に従うことが基本です、それは日常生活をとおして、太陽に向かって伸びる枝の様子、季節による花のつき方、水辺を好む草など、それぞれの性質や特徴を、理解することからはじまり、自然に和合するように生けます。

茶華道部の部員は、毎年二〇名位ですが、女子が多く、男子は、ここ十年で一〇名に満たない状況です。部では夏休みに校内において親睦と技術の向上のために合宿をして練習を積んでいます。

生徒に「なぜ、お茶やいけばなをするのか」と問えば、ある生徒は「これから先、したいことがたくさんあるから、まずここから手をつけた。」と、意欲的です。

茶華道部について、簡単にふれましたが、心得のある方は、親しみとなつかしさを持たれましたでしょうか。触れずに過ぎた方は、これから興味をお持ちくだされば、幸い

に思います。

歴史同好会

前顧問　土屋　賢泰（県立千葉高校）
顧　問　斎藤　健司

昭和四十七年十一月地方史研究協議会が千葉市で全国大会をひらき、地方史研究の新しい刺戟があたえられ、県内でもその動きがたかまりつつあったのですが、我が東高にはそのころ歴史系のクラブはありませんでした。

縄文式土器を自分たちの手で

誰か結成するものがひとりくらい出てもいいものなのに、と思うことがたびたびありましたが、なかなか生まれでませんでした。

昭和五十年になって、外山・岡・稲垣（五十二年卒）、近藤（五十三年卒）の諸君などの手によって歴史同好会の結成がもたらされたのでした。そして、花井・桜井・藍原などの諸君（五十五年卒）もあとから参加してきました。

いずれも調査で歩いたり、本をよんだりするのが好きなひとばかりで、各人がそれぞれ自由なテーマをもっていろいろとやっていて集まっては討論しあったものでした。また、文化祭になると地味ではありましたが参加して発表していました。

そのころの発表を思いだして記してみますと、原始・古代・中世の歴史を地域にそくして調査した「縄文時代の生活」「都川流域の古代・中世」とか、安房の出身で法華宗の開祖となった日蓮について「日蓮と法華経」、会津藩士桜井家の記録をもとにした「会津藩士の記録」、聖書研究をもとにした「バイブルランド・メソポタミア」といったものがうかんできます。

とくに「会津藩士の記録」は発表としてめだつものではありませんが、桜井君の家に伝わる会津戦争を中心とする記録であって、彼の母上をわずらわして会員数だけコピーしていただいたものでありました。それをもとに勉強したことや、またこのころ会津若松を訪れる機会もあったりしたものですから、いまも感慨ふかいものがあります。

こうやって歴史同好会のことを思いうかべてみると、どうも楽しかったことばかりが心にうかんできます。

ゆきとどいた多年にわたる調査の結果に感心したり、熱心さに動かされたり、自由にいろんなことを討論しあったり、将来についてきいたりしたことなどです。

こんど小文をかくにあたって近況をたずねましたが、社会に出られたひと、卒論の製作にあたっているひと、志望の大学に合格をはたしたひとなど、さまざまに元気でやっているなあという感想をもったことでした。

五十四年度の文化祭では、「イスラム世界」・「第二次世界大戦の戦場」（宮崎君、二年）、「南北戦争」（遠藤・小高君、一年）、「坂本龍馬論」（宇津江君、一年）などを得て多士済々、各分野入り乱れて、まことに華やかな印象を与えました。

また、生徒の受けとめた主題のなかには、時流やマスコミの動向を反映したものも少なくありませんでしたが、これを自分自身の耳目と足で検証することによって歴史の真実に迫ろうという、歴史研究に対する真摯な姿勢が底流に認められるのもありました。前年度のＮＨＫの大河ドラマ「花神」（司馬遼太郎原作）に触発されて取り組んだ楫君（一年）の大村益次郎に関する人物史的研究は、夏休みに益次郎の出生地の山口県吉敷郡鋳銭司村や、活動の一舞台であった京都を訪れ、現地の生の材料を駆使して考究をすすめ、益次郎の新発見に努めたもので、東高歴研の水準を示した秀作といえましょう。

これまで歴研では、各人が自由な研究課題に取り組みながらも、一方では共同研究の意義と必要性が度重ねて議論されてきましたが、この方は必ずしも十分に実を結ぶには至りませんでした。しかし五十五年度に、前年度の文化祭で小高君と遠藤君（ともに一年）が発表した縄文式土器の製作を、終始全部員による共同作業のなかで発展的に追求できたことは、会の活動史上画期的なことでありました。それは、県立図書館での文献による勉強会から始まり、「縄文式土器をつくる会」の活動や加曽利貝塚の見学、館員からの製作技術上の説明と諸注意、夏休み中の粘土採取・計量・配合・練土・成型（会の活動記録より）というように、研究実践上の手続きをきちんとおさえた上での達成でした。文化祭では各自思い思いに型どった土器を発表、展示しましたが、ことに田村君（一年）の手になる火焔土器は、その緻密な造型で観覧者の目を見張らせました。この年度ではそのほか、労作「新撰組」（楫君、二年）や「祇園祭」（竹内君、二年）も忘れられません。

五十六年度は、中心部員の多くが他の部活などとかけ持ちであったこともあって、必ずしも歴研としての有効な活動ができず、不振の一年でした。早晩部員自らの手でもとの姿に戻すことが期待されています。

草創期の会史をごく簡単に素描しましたが、いちいち名前はあげませんでしたけれど、この他にも多くの部員が登場し、研究の成果を競い合いました。いま私たちは、そのときどきの部員の活動に学んで蓄積したものを少しずつまとめ、授業その他で発表できる幸せをしみじみとかみしめております。

聖書研究同好会

顧問　永井　弘子

聖書を研究する小数のグループが同好会として認められたのは、昭和三十九年でした。

その発足は、二人の女生徒の提案と坂本あい子先生の助言によるもので、以来一七年、文系同好会として少数ながら熱心な活動が続けられてきました。

宗教を中心とする西洋史の流れを自分なりにたどったり、ヨーロッパ思想を基盤とした文学、美術、建築、音楽などの文化にキリスト教の影響を見てか、二人の同好会設立の動機は不明ですが、地味な活動の継続が今に至っていることはすばらしいと思います。

今年の東雲祭のため会員が用意したテキストに、「聖書は二千年もの昔から世界の人々に読み継がれてきたロングセラーで、しかも毎年二億八千万冊も売られています。また聖書は千五百五十五の国語に翻訳されています。あなたのお宅にも一冊はあるのではないでしょうか」とありました。

先輩から後輩へと受継がれてきたこの同好会では、おそらく聖書には何が書いてあるのか、聖書はどういうふうに書かれたのか、誰が書いたのか、キリストはどんな人物であり、その人は実在したのか、十字架の意味は、復活とは、処女懐妊とは、奇跡とは、と多くの疑問にかられ討論がなされ

一粒の麦もし死なずば

たり、地道なしらべがされてきたのだと思います。

校内で活動するだけでなく、キリストの思想を実践する目的で、昭和四十二年ごろから夏のワークキャンプが持たれました。一四、五名の生徒と顧問の坂本先生・加藤千鶴子先生は、長生村のベテスダホーム（身体障害者福祉施設）や、望みの門（婦人更生施設、老人ホーム）に二泊三日のキャンプを行い、入所者と寝食を共にしてその生活の援助（特に身障者の入浴介助）をし、大変よろこばれたとのことです。稲刈りや、やぶ蚊に刺されながらの整地作業などに、都会っ子の生徒たちがよく取り組んだものだと思います。この奉仕は昭和五十年ごろまで続けられましたが、資料が散逸して詳細不明なのは残念なことです。

年一回の発表の場である東雲祭には、会員のアイディアと努力で年々工夫がこらされ、手づくりの紙芝居、人形芝居を初め、スライドや映画の上映、キリスト教発生の地パレスチナ周辺の地図などの展示が行われました。

また無料の新約聖書配布（ギデオン協会よりの贈呈）もいたしました。

もう一つの活動に三校合同聖書研究会があります。校内の同好会の輪を広げ、千葉高、千葉女子高との交流を持ったのです。はじめは情報交換を中心に、毎月一回でしたが、互にひとつのテーマをとりあげて考えようという方向になり、毎学期一回会場は三校が持ちまわりの形に落ち着きました。学校行事などのため日程の調整がむずかしく流れてしまうこともありました。最近では昨年六月に本校家庭科室で、旧約聖書ヨブ記をとりあげ、前記三校以外の市内高校生も加えて約三〇名の出席がありました。

五十六年六月は千葉高社会科室で長時間活発な討論がもたれ、十一月には女子高校で開かれています。

会員であった卒業生の中には、愛隣地区で保母として活躍する方や、筑豊炭鉱で社会事業にたずさわる方もあります。

四十周年式典をかざるパネルの一つとして、すがすがしい「シャロンの花」が加えられ、校歌冒頭の「シャロンの花」の由来が話題になりましたが、聖書に出典のあるパレスチナ民族のゆかりの花であることは覚えていて欲しいことです。（口絵参照）

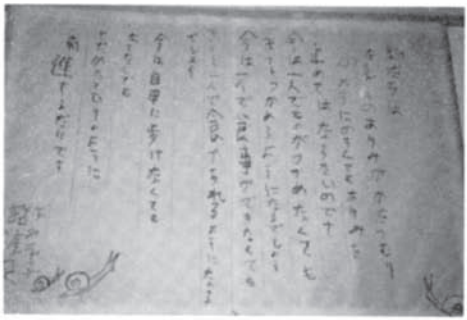
キリスト教とは比較的縁のうすい日本ですが、聖書に由来する事柄はあまりに多く、関係の書物も多数出版されています。国際人として羽ばたいて行く若人たちが、相手国を理解するために、あるいは日本の伝統的な生き方考え方をふりかえってみるうえで、高校時代に聖書をひもとき親

しむことが必要だと、聖研の活動を通してあらためて感じています。

JRC同好会

顧問　高沢　百合子　　東　敬子

JRC（Junior Red Cross）青少年赤十字では、青少年自身が赤十字の精神に基づき、日常生活のなかで、望ましい人格と精神を自ら形成することを目的として、主にボランティア活動を行っています。



桜ケ丘育成園の子供の詩

戦後、日本青少年赤十字が再建され、着実にその組織と行動の実を挙げて、学校教育の中にその根を下したころ、昭和三十四年、県立銚子商業高校より石毛貞雄校長を迎え、ようやく本校にもその産ぶ声が上りました。

校長の音頭で「JRCを理解しよう」という小冊子が作られ、全校生徒に配られ、啓蒙活動が全校規模でくりひろげられました。担当は篠田義三郎先生でした。二学期に、現アンリー・デュナン教育研究所主幹橋本祐子先生を迎え講演会が開かれました。この講演を機に、この秋正式に日赤に加盟登録し、JRCが発足しました。

爾来二二年、顧問は奥山浩、山根茂、菱木道人、山泉彰、鈴木富士夫先生方及び現在は、東敬子、高沢百合子と入れ替り、生徒も衛生看護科設置（昭和四十一年）と共に、メンバー数も急増し、TC・VS活動もその成果を挙げて参りました。

現在の活動について説明します。

一、ボランティア活動（VS）

ボランティア活動は、①自ら進んで人の役に立つ行動をすることと、②自他が共に生きる活動です。決して犠牲やあわれみではなく、その行動は、相手に役立つものでなければ、ボランティアは成り立ちません。

ボランティア活動を成立させるために、まず、活動の必要性を考えます。相手の立場にたち、自分に置き替えてみるのです。一番簡単な考えで言えば、自分の「してほしいこと」を「してあげる」に切り替えるのです。現在、JRCでは、このような考えに基づき、自己満足

や、ありがた迷惑に終わらないように活動の必要性について話し合い、ボランティア活動を行っています。

二、ワークショップ（WS）

VSをより効果的に実践するために、十分な企画と準備をする具体的な実行案づくりが、ワークショップであり、ワークショップを行うことによって、充実した活動が行えます。WSの内容は、いつ・どこで・誰が・何の為に・何をする・という五項目を考えることで、JRCでは、一つ一つの活動についてWSを行います。

三、地区メンバー協議会

隣接する数校が組織するもので、千葉県は、西部・東部・東南部・南部・中央部の五地区に分かれて活動しています。本校は中央地区に所属し、佐倉高等学校・千葉盲学校・四街道高等学校・愛国学園短期大学付属四街道高等学校・千葉東高等学校の五校で構成されています。協議会では、お互いに情報交換をしたり、メンバーの親睦をはかったり、合同で施設訪問をすることを計画し、実践しています。

四、トレーニングセンター（TC）

JRCでは、各地区毎に次のような目的に基づいて合宿を企画し、日本赤十字千葉県支部の職員と各学校の顧問等により実施されていますが、集団生活の種々の体験の中から赤十字の精神、自分自身の役割、協力の大切さを真に知ることが目的です。

五、青少年赤十字協議会高校分科会

千葉県内のJRC全加盟校で構成され、各学校の代表者が集まり、メンバーの親睦、情報交換が行われます。分科会で話し合われた事は、機関紙により他のメンバーへ連絡され、具体的に活動に移されます。

六、JRCの活動内容――（VSやWSの検討と再認識）

①校内活動

○活動日は、毎週月水金の三日間です。

○機関紙の発行。毎月一回“Look Look JRC”と称して全校生徒に活動状況を広報します。

○使用済み切手の収集。日本赤十字千葉県支部へ届けます。

○桜ケ丘育成園訪問。中央地区メンバーと合同で訪問し、園児と語り合ったり、折り染めなど一緒に行います。原則として、学期に一回訪問します。

○海外（フィリッピン）との文通。昭和五十六年より開始し、情報交換をしています。皆で頭を揃え、辞書を片手に英文を作ります。

○献血の手伝い。毎月一日と十五日の二日間、千葉駅前で、受付などのＶＳです。
○募金運動の協力
　通年――赤い羽根・歳末助け合い・障害者の絵はがき・平和の鐘の鉛筆
　五十六年――国際障害者年より車椅子募金・交通遺児育英資金の為の街頭募金
○アンケート調査。ＪＲＣについての意識調査や、国際障害者年について等、全校生徒に向けて実施する。
○文化祭への参加
・バザー。ベデスダホームから持ってきた作品の販売・クッキー販売。
・チャリティーコンサート
・募金箱の設置（ユニセフ募金）
・映画上映
②校外との連携活動
○高校分科会への参加
○中央地区メンバー協議会の参加
・トレーニングセンター（ＴＣ）合同合宿
・中央地区ピクニック（親善交換）
・他校への啓蒙（各校の機関紙を送り、ＪＲＣの浸透）
・老人ホームの訪問（佐倉更生園）
・五十六年度、駅における障害者の環境調査（国鉄千葉駅）

以上がＪＲＣ活動のあらましです。

漫画研究同好会

顧問　鈴木　健生

「漫画研究同好会」！　なんとなく時代の申し子という感じがしないでもありません。週刊漫画誌がはじめて世に出たのは、私たちが高校生のころであったように記憶しています。それ以来十年、それまではほんの子供の読み物――私たちの時代には、中学生になると漫画を卒業したものでした――であった漫画が一つの市民権を得るまでは、たいした時間を必要としませんでした。現在では老若男女を問わず、実に幅広い読者層を誇っています。漫画研究同好会が誕生する由縁です。我が漫研は東高の数ある同好会のなかでも古い歴史をほこり、他の部活動と比べても、なんら遜色のない活動を続けてきたと自負しています。結成以来十三年、東雲祭参加、機関誌「漫妖集」発行をはじめ、各種行事への協力と多方面にわたる活動をしてきました。最近とみにパンフレットなどへのイラストの需要が増

時間なんか気にしない

加して、漫研のメンバーはそれこそ東奔西走の活動振りです。例えば最近では東雲祭パンフレットのイラスト、創立四十周年記念の合唱コンクールのパンフレットのイラスト等が挙げられます。更に三年前に制作したアニメーション漫画映画「スタージャッジ」は大変好評を博し、請われて出品したフリータイムス千葉社主催の8㎜フェスティバル「高校生の8㎜映画祭」では技術賞を受賞しました。今年度からは漫妖集の月刊化を計画して着々とその準備をしているところです。予算、活動場所等、制約の多い、どちらかというとめぐまれない条件の同好会ではありますが、精一杯の活動をしてきた卒業生、在校生のメンバーの諸君に、前任の顧問の椿行雄先生（現佐倉高校）と共に、心からご苦労さんと申し上げたい。

鉄道研究同好会

顧問　南部　博昭　渡辺　陽

鉄道研究同好会の活動について、その全盛期を中心メンバーとして活躍した清山健史君（昭和五十五年度卒業生）が、まとめてくれました。

昭和五十一年に未公認ながら活動を続けていた「鉄道愛好会」が、昭和五十二年の生徒会で公認され、「千葉東高鉄道研究同好会」として正式発足しました。当時の会員数は六名、翌五十三年には二〇名に増加、全盛期を迎えました。しかし、創立者たちが卒業するとともに活動は停滞し、会員数も五十五年には七名、本年は三名で、衰退の一途をたどっております。

活動は、鉄道に関することすべてが含まれますが、月例定期旅行と、レイアウト（鉄道模型）の製作、の二つが主なものです。

月例定期旅行は、資金難もあり、実際には不定期にしか実施できず、また参加者も一部の者に限られる傾向がありました。それでも、五十三年の江ノ島・鎌倉方面への江ノ電見学、五十四年の首都圏一周百円旅行や、鶴見線のモハ

72系の電車見学、五十五年には、銚子電鉄、大井川鉄道の見学へ足をのばしております。五十四年には、東京機関区視察も計画されておりましたが実現しませんでした。

レイアウト製作は、九ミリ幅の鉄道模型Nゲージで、発足以来、毎年の東雲祭展示を目標に改良を重ねております。五十二年度は、ベニヤ定尺一枚程度の小さな固定式レイアウトでしたが、五十三年度には分割式にし、大きさ、910mm×450mmのモジュール、曲線部の500mm×500mmのモジュールを一〇個組み合せの構成で3.7m×1mのものを完成することができました。線路配置は複線エンドレス（周回線）で二列車同時運転が限度でした。五十四年度には、東京駅付近の六線区間の再現を目標に活動をすすめましたが、東雲祭には間に合わず一部未完成のままの展示となりました。しかし、線路配置は一本のエンドレスをふやし、中央部で三複線を作り駅もホームを三面もつものにしました。未完成ながらも、なかなかの好評を博しました。駅前を津田沼駅付近にしましたので、サンペディクの模型等が人気を集め成功でした。

五十五年度は、鉄道模型の月刊誌『鉄道模型趣味』のレイアウトコンテスト（六月）出品を目標に6.4m×2.1mの、全国一、二位争う大きさのものを計画し、四月より、シーナリー（風景）とストラクチャー（構造物）の充実につとめましたが、会員数の少ないことと資金難のため未完成のままの出品となりました。前掲誌（一九八〇年十一月号）三六頁に、「東雲鉄道」という名で紹介されております。

東雲祭では、更に、ホームを四面にふやし、東京駅のレンガ駅舎、高さ一メートルに及ぶ高層ビル、自動信号機の設置等、種々の工夫をこらしました。四列車同時運転は、観客に好評で、特に小さな子供たちの目を楽しませました。

この『東雲鉄道』は、東高鉄研の象徴であり、汗と努力の結晶でありますが、未だ二〇パーセント程未完成の部分が残り、また保管場所が十分でないため、既に完成した部分の老朽化も起こりはじめております。今後の会員が解決すべき課題でありましょう。

東雲祭では、駅弁販売が名物になっております。これは当日の早朝、会員が手分けして、東京・上野・横浜・木更津・千葉の各駅に買い出しに出るものです。人気銘柄は、木更津のバーベーキュ弁当、横浜のシウマイ弁当、上野焼き肉弁当、東京チキン弁当などで、品切になり困ったこともあります。レイアウト以外にも、例えば、国・私鉄の運賃差の比較研究など発表したこともあります。鉄研は今後伸びなければならない、必ず伸びる活動分野だと確信します。

運動系

陸上競技部

顧問　古市　純久

陸上競技部には数々の栄光の戦績の跡があります。この十年以前にも、全国高校総体（インターハイ）優勝、関東高校総体総合成績第三位、県高校総体総合成績第一位等、数えあげればきりがない程、関東、全国レベルでの活躍を見ることができます。現在、人口急増地域である千葉県は、高校数増加の中、高体連陸上加盟校も増え、登録生徒数も三千数百名という勢いです。この状況下、本校部員の体力、学力等の変化を考える時、県・関東入賞は至難の業と言わざるをえません。しかし、運動部未経験者の多い部ですが、厳しい自己統制のもと、勉学と人格の陶冶に対する姿勢を、日々の練習を通して、技術の練磨と共に確実に体得しています。以下、十年間の成績を各年度ごとにまとめてみます。なお、資料不足のため不明な点が多いことをお詫びします。（県大会入賞以上を記載）

瞬発・躍動

年度	顧問	大会名・成績・期日・場所
47	野村	県高校総合体育大会　5月12～14日（船橋）
		県3位　千六百Mリレー　3分33秒7　石井達規、桑島弘人、高橋広文、伊藤慎、関東出場
		県6位　四百M　52秒8　石井達規　関東出場
		県高校新人大会　10月13～15日（天台SC）
		県3位　四百MH　58秒2　高橋広文
48	野村	県4位　八百M　2分6秒1　伊藤　慎
		県5位　四百M　52秒9　高橋広文
		県高校総合体育大会　5月11～14日（天台SC）
		県4位　四百MH　58秒5　高橋広文
		県5位　四百M　52秒6　高橋広文
		県5位　ヤリ投　49M98　鈴木常雄
		県5位　千六百Mリレー　3分33秒1　提坂芳正、伊藤慎、加藤岡宏之、秋元　以上四種目関東出場（茨城）
49	野村	県断郊競走大会　県2位　四千M　田生健一

50 野村

県高校総合体育大会　5月11～12日　18～19日
県4位　ヤリ投　31M36　高橋紀子　関東出場
県4位　円盤投　31M02　高橋紀子　関東出場
県5位　ヤリ投　51M06　藤崎博史　関東出場
県高校新人大会　10月9日　12～13日（天台）
県4位　円盤投　27M40　福井明子
県5位　八百M　2分04秒8　田生健一
県高校総合体育大会　5月17～20日（天台）
県3位　八百M　2分02秒9　田生健一　関東出場
県4位　円盤投　28M54　福井明子　関東出場

51 野村

県高校総合体育大会　5月8、15～17日　天台
県5位　5種競技　記録不詳　並木利公　関東出場
県7位　八百M　2分0秒5　池田隆康
県高校新人大会　10月16～18日（天台）
県5位　四百M　53秒2　池田隆康
県5位　八百M　1分59秒6　池田隆康

52 野村

県断郊競走大会
県1位　三千M　森田朋愛
県2位　三千M　池田隆康
県3位　三千M　本　充彦
県高校総合体育大会　5月14～16日（天台）
県3位　八百M　2分02秒9　池田隆康　関東出場
関東高校総合体育大会　太田市運動公園
予選落　八百M　2分0秒5　池田隆康
関東選手権兼全日本選手権予選、関東七県対抗千葉県代表として出場　池田隆康
この年より前顧問野村和先生転勤のため、君津高校より古市を迎え、新しいスタートをきる。

53 古市

県高校総合体育大会　5月15～18日（天台）

54 古市

55 古市

56 古市

優勝　ヤリ投　55M50　後藤一郎　関東出場
県5位　八百M　2分0秒1　田中考一　関東出場
県6位　二百M　23秒1　植草透公　関東出場
関東高校総合体育大会　6月13～15日（千葉）
関東5位　ヤリ投　55M48　後藤一郎（全国大会）
予選落　二百M　22秒8　植草透公
予選落　八百M　2分1秒2　田中考一
全国高校総合体育大会　愛媛県松山　8月1～5日
予選落　ヤリ投　後藤一郎　52M20
県高校新人大会　9月12～14日（天台）
県5位　円盤投　39M02　宮沢直人
県高校総合体育大会　5月14～17日（天台）
県2位　百M　11秒0　植草透公　1位と同記録
県2位　二百M　22秒4　植草透公
県5位　四百M　50秒4　植草透公
県3位　円盤投　39M48　宮沢直人
県3位　砲丸投　14M07　宮沢直人
県5位　団体総合　得点20　以上5種目関東大会出場
関東高校総合体育大会　6月19～21日（東京大井埠頭運動公園）
準決勝落　百M　11秒24（電気）　植草透公
予選落　二百M　23秒01（電気）　植草透公
棄　権　四百M　この大会は、脚捻挫のため不調。四百Mを放棄して、二百Mをアップがわりとして百Mにテーピングを足首にして種目をしぼって出場。入賞可能性が大きかったので残念である。
関東5位　砲丸投　14M13　宮沢直人　全国出場
関東6位　円盤投　41M48　宮沢直人　全国出場
3年生の植草君の分まで頑張って2年生の宮沢君が2

種目全国高校総体への出場権を得、健闘する。
全国高校総合体育大会　神奈川（三ツ沢競技場）
予選落　円盤投　43M76（自己新）宮沢直人
予選落　砲丸投　13M86　宮沢直人
県高校新人大会　10月2～4日（天台SC）
県2位　円盤投　43M56　宮沢直人
県4位　砲丸投　13M86　宮沢直人

剣道部

顧問　本屋敷　博

剣尖一閃

本校剣道部の歴史は古く、戦後日本の剣道復活とともに、千葉県下でも一番早く創部されました。いままで多くの先輩と優秀な成績を残していますが、ここ十年間は、昭和四十年の関東大会出場を最後に、成績は不振を続けています。しかし、「剣道は勝つことのみにとらわれる競技でなく、自己を克服し生活に役だてること」と世の先人が教えているように、本校剣道部は毎年十数名の新入部員を迎え、活気ある活動を行っています。平日は午後四時より五時半まで、土曜日は一時半より三時までで、日曜日は休みとなっています。年間では、寒稽古を正月元旦より五日間行い、合宿は、夏休中を利用し一週間行うのをこの十年間の行事としています。本校が進学校としてめざましい飛躍をとげたこの間は、剣道部にとってもまさしく文武両道の部活動の時代であったと思います。

学業と部活動を両立させ、世にいう一流大学に合格した生徒が、「僕が合格できたのは剣道をやったおかげです」、といった言葉が今も鮮明に残ります。剣道部の成績は、昭和五十年度卒の山口喜弘君の時代に関東大会の出場権をかけ、準々決勝で安房高と対戦し、惜しくも一対四と敗けベスト8になったのが十年来の最高の成績となりました。この時古屋純君が、優秀選手に選ばれています。

さて現在、入部した部員は、三年生までには必ず有段者となって卒業するのが本校剣道部の特徴となっています。なお卒業後も剣道を続ける者も多く、千葉市の少年剣道指導者として活躍している者の中には、昭和五十年度卒の山

口喜弘君、中村真琴君、土肥信介君、鈴木伸生君、五十二年度卒の関野晃史君、桜木武人君、鈴木典子さんなどがいます。また剣道部創部以来の部の卒業生を、一期生（昭和二十九年）から二十七期生（昭和五十五年度）まで数えますと、三一三名という人数の先輩がいます。現在は、部員四九名という大人数で道場せましと毎日の部活動を行っています。

柔道部

顧問　江口　憲治

本校柔道部は、昭和二十五年に千葉第三高等学校として男女共学が実施されたとき、共学による男子の女性化を防ぐ目的で、生徒会組織の中に、剣道部・野球部・ラグビー部とともに勇壮な男性的クラブとして発足しました。創部当時は部員数も少なく、白帯だけで大会に出場していましたが、年々増加し活動も増々活発となってきています。

昭和三十二年には、県大会を勝ち進み、県代表として第五回関東大会に出場し、本校柔道部の名を県下にとどろかせました。昭和三十九年には、松岡伸泰先生（現高体連柔道専門部副委員長）が顧問となり、その熱心な指導は着実に実を結び、昭和四十四年には第十七回関東大会に県代表として出場しました。昭和四十六年の本校創立三十周年記念の年には、県新人柔道大会第二部でみごと優勝に輝いています。

柔道一筋

昭和四十七年から、江口憲治（体育科）に受け継がれ、そして五十五年からは吉野博（数学科）も加わり現在に至っています。部員数の方は昭和五十年ごろからの全国的な部員減少の傾向が本校にも見られ、加えて本校における柔道経験者の入学は皆無に等しく、近年入学してくる生徒も徐々に変わりつつあり、やや体力的、精神的に欠けるものがあります。

現在、徐々にではあるが未経験者による柔道愛好者がふえてきており、柔道をやることにより基礎体力や、人間性豊かな実践力に富んだ人間を育成するという本校の教育目標の達成に少しでも寄与できればと願っています。

〔現在の部員数〕

一年　八名・二年　七名・三年　八名

過去十年間の主な成績は次のとおりです。

＜個人戦＞

昭和四十八年五月　関東大会県予戦　島崎　泰　県ベスト8

昭和五十五年六月　全国大会県予戦（軽量級）　大津山　高司　県第三位

昭和五十五年五月　関東大会県予戦（無差別級）

六月　全国大会県予戦（軽量級）　大津山　高司　県ベスト8

＜団体戦＞

昭和五十二年六月　全国大会県予戦　ベスト16

昭和五十四年五月　県総合体育大会　ベスト16

昭和五十五年六月　全国大会県予戦　ベスト16

昭和五十五年十一月　県新人戦　ベスト16

サッカー部

顧問　青山　克

昭和四十二年四月、千葉東高に着任した二日目であったと思いますが、三須君等二年生の三人が来室し、サッカー同好会を作るので顧問になって欲しい旨の話がありました。前任校で長くサッカー部顧問をしていたためらしいが、学校の様子も不明で明確な返事をしませんでした。しかし彼らはその後同好の友を集めてボールを購入し、グランドで更衣して、隅の空地で、あるいは放課後医大下グランドに集合してボールを蹴りはじめました。そのうちに他校と練習試合も始め、学校として放置するわけにもいかず、職員会議で同好会を認めるかどうかの激論がなされました。グランドの手狭まさに既存の他部の練習に支障をきたすし、第一に危険であるということが問題点でありました。当時全国的にサッカー熱が上昇している時でもあり、健全なスポーツを抑制することに疑問視する意見もありましたが設置は難航しました。既に三年生になろうとしていた彼らが同好会設置にやみくもにつっぱしることはせず、関係職員の意見に従い自重して練習を重ねたことが好感を持た

第14回関東高等学校蹴球選手権大会

れ、当時の体育主任石川先生（現八千代高校長）、生徒会顧問黒川先生（現姉崎高校長）のお骨折で四十三年同好会として認められました。ただし予算はゼロ、練習は朝練習に限る、との厳しい条件のもとでのスタートでした。晴れて公式戦にのぞむことができるようになりましたが、今までの練習時間の短かいことがたたって、当時の一期二期生あたりは前半は動いても後半は体力が続かず、声は出ても自身は走れず、体力の充実が第一の課題でした。朝練習は七時から八時でしたが、練習に熱が入ると更衣等で手間どりホームルームに遅刻する者が多くて顧問として一番気を使ったことでした。一方朝の七時ごろにはグランドに出るわけですから、遠方の者は五時過ぎに家を出る始末で、親は四時台の起床となり、夏はともかく、厳寒の一月二月ごろは父兄にとっても大変なものであったと思われます。よく私のところにサッカー部だけが朝練習なのは不公平であるとのお小言を頂戴したものです。しかし朝練習の厳しさを通り抜けた彼らが、よくやってきたという思い出と根性を身につけたことは間違いないことです。

さて東高サッカー部の名を初めて県下に周知させたのは第四期生（四十六年当時の三年生）でした。とにかく部昇格へ、生徒会予算確保へ、と目標に猛進した熱情は、総合体育大会においてあれよあれよと県下の強豪をなぎたおし、決勝で習志野高に敗れはしたものの準優勝し、当時のサッカー専門部長より朝練習のみの学校でありながらよくここまで戦ってきた旨のおほめを表彰式で受けたものです。このときは関東大会に出場し日立一高と対戦しましたが、今一歩のところで惜敗しました。本当に走力持久力と揃ったチームでした。この大会出場結果で四十六年七月に部への昇格が認められました。各期ともそれぞれ個性のあるチームを作り、総体、県選手権、新人戦の三つの公式戦に東高の名誉をかけて戦いました。まず第六期（四十八年三年生）は、新人戦で県下を三ブロックに分けた中でのブロック優勝、決勝トーナメントで茂工に一対〇で負けましたが、今一歩でした。続いて総体でベスト8、県選手権においても千葉高、国分、東葛等を破ってベスト8に入りました。次の第七期は総体で茂工にまたもや三―一で負けはしたものベスト8に入りましたが、県選手権で早々と八千代と対戦したのは不運でした。更に第八期（五十年三年生）も健闘し、新人戦で四街道、東総工、市川等と破ってベスト8入りを果しました。七期ともども攻撃的な大型チームでした。第九期は県大会で四回戦まで進出するなどがんばり、第十期（五十二年三年生）は新人戦で勝ち進み、最後に習志野高と

ぶつかり一対〇で惜敗したのは残念でしたが、ベスト8に入りました。更に第十一期は同じく新人戦で市立千葉、若松、市川、経済、成東と連破し、準決勝で市原緑に一対〇で負けましたが、県で第三位の成績をおさめました。このときの主将布君は五十三年の国体に県代表選手として活躍しました。しかしその後の第十二期より現十四期までは、サッカー加盟校が一四〇校近くになり、特に千葉地区は県下の激戦地区として強豪がひしめき、ブロック予選を勝ち抜くことすら困難な現状となっています。

ただ前述のように五十六年四月より十三年間続いた朝練習が、グランド改修のおかげで週一回を除いてなくなりましたが、このためOBとの合同練習もなくなり一抹の寂しさを伴いますが、東高サッカー部の本当の活動はこれから始まるとはいえるかもしれません。幸いに創部以来十数年間顧問として他数の部員を送りましたが、一期生以来各期の結束も固く、年一回のOB総会には卒業した女子マネージャーも加わって賑やかに旧交を暖めています。

各期の公式戦のスコアは省略せざるをえませんでした。また各期が重複して試合に出場していますので、一部に疎漏の点があるとも思われますが、紙面の都合上ご了承いただきたいと思います。

卓球部

顧問　松崎　好男

卓球部は昭和二十六年五月に創設された、といいますから、既に三十年余の歴史を持っていて、本校の部の中でも古い方でしょう。今ここに「卓紫会」と称する卓球部OB会の名簿がありますが、歴代卓球部員を網羅してはいないこの名簿の中だけでも、最古参は昭和三十九年卒業生であり、昭和五十六年の卒業生までで総勢一三五人にわたる。

練習風景

この名簿からもこの部の歩んできた道のりの長さがうかがえます。

この決して短くない道のりの中で、卓球部はどのような伝統を築き上げ、それを継承してきたのでしょうか。そしてそれは現在の卓球部にどのように生きているのか、あるいは生きていないのか。こ

の小文の中で私がOBたちの話を参考にしながら考えてみたいのはそのことです。

卓球部はその創設当初から、技術上の指導者にはあまり恵まれなかったようです。当初は他校のOBの指導を仰いだこともあった位で、毎日の練習の全てを任せられる人はなく、勢い、計画も、実地の練習も、一から十まで自分たちの力だけでやるという形が定着してゆきました。ただ合宿にはOBが来て指導しましたし、日常の練習でもそれはあったでしょうが基本的にこの形は襲踏されました。いや踏襲せざるを得ませんでした。そしてこの形、自分たちの力だけで活動するという形こそが、卓球部の伝統の根底を形成してきたのです。

この伝統は部員たちに一種の独立独歩の精神をもたらしてきたようです。練習の雰囲気を自分たちが厳しくしなければ、ゆるみを是正してくれる人はない。倒れるまでやろうという気持がなければ仲間に負けてしまう。まして七、八年前までは現在の卓球場ではなく旧体育館を活動場所としていましたので、一日おきにしかボールを打てず、他の日はトレーニングに充てざるを得ないという厳しい状態でした。その中から自己にも厳しく他にも厳しいという心構えが、多かれ少なかれ、年々の部員の中に浸透して行ったと思われます。

その影響は当然成績の上に現れ、昭和四十九年卒業の大川原氏、昭和五十年卒業の萩原氏はともに県大会男子シングルスでベスト16に入り、その二人が組んだダブルスも同じ成績をおさめ、これが少なくともこの十年間の本校卓球部の歴史の中で最高の成績となったそうです。これを初め、千葉市内では、指折の強豪として上位を争っていたようです。

しかし、残念なことに、この伝統は卓球部を理想的な方向にのみ導きはしなかったようなのです。自分たちだけで練習し、誰にも頼らないことは、一方で独立心を養い、部員相互の結束を固めましたが、他方で部員の視野を狭め、周囲を見にくくさせ、練習に打ち込むあまりとは言え、下校時刻のような学校の枠を、ともすれば逸脱しがちにさせました。つまり、この伝統は、卓球部にとって両刃の剣だったのですが、とにかくこの剣を額に押し当ててひたすら歩んできたのが卓球部だったと言ってさしつかえないでしょう。ところが、卓球部を長く見ているOBの話によれば、五年程前からこの伝統にある変化が生じたようです。すなわち自他に対する厳しさが減じてきたのです。剣の一方の刃が欠け始めたのです。その後一時厳しさをとり戻すこともあったものの、その状態が現在まで続いていると言ってよいことは、時々練習を見に来るOBたちの話からも

察せられますし、本校着任二年目の私自身が見る所からも想像できます。そのためか、厳しかった一時期を除けば、最近は県大会に出場するのも容易でなくなったのは残念なことです。

卓球部は現在も刻々に変化しています。部員たちもよく努力していますが、今後どのように変化してゆくか、指導力の乏しい私には断言はできません（無責任のそしりはまぬかれませんが）。しかし、我身に向く刃を消し去り、欠けた刃を研ぎ直すこと、すなわち伝統を新しく理想的な形に生まれかわらせ、視野が広く、しかも自他に厳しい精神を涵養することが現在の卓球部に与えられた課題であること、これだけは確言できます。

熱心に練習にとりくんでいたOBたちは、異口同音に卓球から様々なものを得たと言います。曰く、努力は必ず報われる。曰く、厳しい練習を乗り越えた自分にできないことはないという自信がついた。曰く、同じ苦しみに耐えてきた者同志の友情は何ものにも代えがたい。云々。

現在の部員たちも、卒業後、このような平凡だが重みのある感想が実感をこめて言えるかどうか。是非とも言えるようになってほしいと思います。昨春の総体ブロック予選の男子シングルスで、現三年の倉谷君がカットで粘り抜き、ついにブロック代表になりました（この時は男子団体も県大会に行きました）。私はそれが心から嬉しかった。それが本校で初めて私が経験した県大会出場であったこともありますが、それよりも何よりも私の見る限り、彼は大変に真面目に練習し、しかも常に部全体のことを考えていたからです。それを思い出すにつけても、卓球部が自らの課題を解決する時は遠くはないような気がしてなりません。

テニス部

顧問　野口　宏

テニスは傍から見た華やかさ、ロマンチックムードとは違って、毎日毎日厳しい練習を積まなければ人並みになれません。一年生は毎年三・四〇人入部しますが、テニスならラクなのではないかと思って入るものも多いようです。しかし連日の球拾い（これは足腰を鍛える訓練になる）と、トレーニング（一学期はほとんどボールを打たせてもらえない）に参って止めてしまうものが多く、卒業する時には良くて七・八人という状態です。それだけに最後までやり抜いた生徒は折目正しく、忍耐強く、人間的に尊敬できる者がほとんどです。大学への進学においても受験オンリーの生徒に決してひけをとっていません。また卒業生の中でも良く

白球を追って

コートに来てくれる「先輩」たちは、いずれも自分の仕事を立派に果たし、良き家庭を持った建設的な社会人です。

テニス部の一年は次のようです。一年生が入部するころの三年生は、今までのテニス生活の総決算である総合体育大会の県大会を目前に控えて、目の色が変わっている時期です。ブロック予選を通過できない時などは涙が止めどもなく頬をつたうのも当然でしょう。総体が終わると三年生は引退し、受験準備に全力を傾けることになります。かわって二年生がキャプテンになり新チームづくりをめざします。最初の山場は夏期合宿です。カンカン照りの中でのハードトレーニングだから、時には失神したりするものも出るほどです。夏の苦しい練習が終わると新人戦の予選です。春の総体を念頭に置きながら二年生中心の腕試しです。首尾よく県の新人戦に出られ、活躍することができれば春の総体でそれなりのアドヴァンテージもとれるので必死です。冬だからといって手は抜けません。寒風の中真暗になるまで練習します。春休みにもう一度合宿をやって総体に備えます。

こうした練習で何とか宿願を果たせた時は本当に嬉しいものです。五十一年男子団体はベスト8の成績もさることながら、第一シードの成東を破った時の黒子君たちの嬉しそうな顔は忘れられません。また五十四年、女子金子・田口組が関東大会出場権を手にし、更にベスト8をかけて全国に名をはせている成田の二番手をファイナル・セットまで追いつめた時は、惜しくも敗れたもののその敢闘ぶりは脳裏から離れることがありません。反対に五十一年関東大会で、堅実なプレーで定評のあった大久保・渡辺組が思わぬダブルフォールトなどで敗退した残念さ、五十四年、三年は原・志津組の二人だけという困難な中でキャプテンの責を全うし、志津君を励ましながら遂に県大会出場を果たしたが一回戦で敗退、観覧席の芝生にうずくまっていつまでも男泣きに泣いていた原君も忘れられない好プレーヤーでした。

そのほかコート整備のため、少しでも金を浮かせよう

千葉東高テニス部のあゆみ

39　男子個人　松田・田中組、吉川・大野組　インター・ハイ出場（西之宮）
40　男子個人　松田・田中組　インター・ハイでベスト4（大分）
41　男子団体　県2部リーグ優勝1部へ昇格（鈴木・志水、下枝・河野、斉藤・松浦）
42　県軟庭連盟、高体連に正式加盟
　　女子団体　関東大会出場（豊田・森、浅尾・佐川、秋本・伊藤）（高崎）
43　男子個人　佐谷・戸木組　関東大会出場（千葉）
44　男子個人　佐谷・戸木組　関東大会出場（小田原）
45　高体連軟庭部発足
49　千葉県で関東大会
　　男子個人　国吉・峰島組　県新人戦ベスト8
50　男子個人　国吉・峰島組　関東大会出場（黒磯）
　　女子個人　大久保・渡辺組　県新人戦ベスト8
51　男子団体総体ベスト8、第1シードの成東を破る。（津田・黒子、横枕・花沢、斉藤・川添）
　　男女団体　市民大会優勝
　　女子個人　大久保・渡辺組　関東大会出場（千葉）
52　コート整備、男子全部員で廃土運び。
54　千葉ブロック参加校増で2つに分れる。（現在全県147校参加）
　　女子個人　金子・田口組　関東大会出場（熊谷）
55　コート新装成る。11月23日コート開き。
56　12月25日　部員田中啓介君病死。

※旧顧問、旧部員の方々の記憶をたどって年譜にしたものです。欠けているところ、違っているところがあったらお知らせください。

歴代顧問、キャプテン

	顧問	キャプテン 男子	キャプテン 女子		顧問	キャプテン 男子	キャプテン 女子
	これ以前は不詳			47	吉野・水野		
36	佐藤			48	〃　〃	片山	松尾
37	和田・亀			49	〃　〃	浜田	篠原
38	〃　〃	和田		50	〃・野口	峰島	長瀬
39	〃・小高	竹下		51	池田・〃	津田	大久保
40	〃　〃	田中	泉水	52	〃　〃	斉藤	千葉
41	〃　〃	鈴木		53	〃　〃	中山	蛇川
42	〃　〃	斉藤	豊田	54	〃　〃	原	金子
43	〃　〃	小嶋	浅尾	55	〃　〃	清水	川崎
44	〃　〃	戸木		56	〃　〃	森村	中島
45	〃　〃	新谷		57	〃　〃	関山	石井
46	〃　〃	小原					

※キャプテンは卒業時の年代です

と、全員で手にマメをつくりながら廃土の運搬にひと月近くを費やした想い出も忘れられません。また五十七年卒予定の森村君は、二年間同学年はひとりというなかで最後までテニス部を守ったことも挙げておきたい思い出です。

テニス部は四十年前後は常時県大会で上位を争っていたといいます。五十一年はひとつのピークでした。その後ブロック内に新設校が増え、テニスブームで競争が激しくなるにつれ、現在では県大会出場自体が一つの目標になるほど上位進出が困難になりました。また有名「受験校」になるにつれ、勉強のためにやめるという者が増え、男子はここ二・三年卒業時わずかに一・二名という状態が続いているのは情けない限りです。

折角の新装コートが何かもう一つ冴えないのもあながちあの新緑の柳の樹々が一掃されてしまったからとのみ言い切れないものがあるようです。

終わりに五十六年暮、急性骨髄性白血病で現役部員のまま短かい生涯を閉じた田中啓介君のことも悲しいことながら記録に留めておかなくてはなりません。

男子バスケットボール部

前顧問　佐藤　昭勝

私が部の顧問となった昭和四十四年ごろのバスケットボール部の練習場所は現在の旧体育館で、バスケットボール部、卓球部、剣道部、柔道部が、前後半に時間を分けて、バスケットコート半分を各部が使用していました。

部員数も女子四名、男子二三名で、主将は伊藤武志君でした。学生運動が我が学園にも起こり、放課後よく全校集会がもたれ、部活動もできない日がかなりありました。部活動もまだ、後輩が床に雑布がけをしているのを先輩が椅子に座って終わるのを待っているという、一時代前の部風が残っていました。卒業生がコーチに来て、フットワーク、ルーズボール、うさぎとび等が中心の練習をし、これがいやで部をやめるものが多い話を聞き、部風を変え練習内容も変えました。その点では古い卒業生には嫌な思いをさせたことと思いますが、この場をお借りしてお詫びさせていただきます。昭和四十四年度は、確か、聖書学園（現千葉英和）に一勝しただけで他は全敗でした。

昭和四十五年度の主将は都築哲夫君で、一番の思い出は、春、薬園台高校と練習試合をし、ダブルスコアーで敗

れ、その後練習を積んで（夏の合宿は安房農高で一週間合同で行いました）、秋の新人戦において同校にダブルスコアーで勝ったことです。計画通りの練習がいかに大切かがわかり、練習にも熱が入るようになったと記憶しています。そのころの練習は、一時間体育館でボール中心の練習をし、外では（現在のテニスコートの東側にバスケットコート一面あり）オールコート練習、また、千葉公園で体力づくり、持久力等のトレーニングを行っていました。

昭和四十六年度は、主将仁藤正己君を中心に、高村（現千葉高体育教諭）、樫浦（故人）、久保、勝山、太田君と二年生の活躍により、県大会出場、新人戦ベスト8、総体でベスト4として、夢の初関東大会出場を果たし、現在、全日本で活躍している日本鋼管の北原君のいた明大中野高校（この年インターハイで優勝）と対戦したのは、よい思い出となっています。

昭和四十七年度の主将、鶴田啓一君の時代はベスト16でした。このチームに、部活動をやりながら現役で防衛大学合格し、部活、勉強の両立可能を実証した一人として市原信三君がいたことを加えておきます。

昭和四十八年度の主将は広瀬光哉君。昭和四十九年は斉藤謙吾君で部員はぎりぎりの五名でした。昭和五十年度は主将米村勝一君に率いられて善戦し、あと一勝で関東大会のベスト8でした。その次の年、松元照人君のシュート力を生かして関東大会出場、と意気ごみましたが、審判のトラベリングの判定で敗れたのも、よき思い出の一コマとして今でも語りつがれています。この時代は一二名の男子部員がおり、仲がよく、中に、現在鎌ケ谷西高校の化学の教諭で、バスケット部コーチをしている古川知巳君がいることを記しておきます。

昭和五十一年度主将の佐藤勝範君の代は、小粒ではありましたが強いチームでした。春休み、新潟まで遠征させてもらい、全国でベスト8の白山高校と接戦したこともありました。

学校群の時代の昭和五十二年度井上雄二君、五十三年度大岩一弥君、五十四年度長沼義一君の三年間は、入部も多いかわりに、勉強の心配で退部も多く、部の成績も上がらなかったことは一番さびしいことでした。

昭和五十五年度主将の金瀬聡君の代は、部員数も一二名となり、銚子遠征等で力をつけ、新人戦ベスト8となり、関東大会をねらいましたが、大会三日前、主将金瀬君が捻挫をし、ベスト8で終わったのは記憶に生々しく残っています。今後も、さらに千葉東高バスケット部の活躍を期待

します。

女子バスケットボール部

（県立柏井高校）

前顧問　佐藤　昭勝

私が部の顧問になった昭和四十四年度の主将は、並木敏子さん。その他に三年生部員一名、マネージャー一名、二年生部員三名の六名の部員数でした。練習も同好会的で、組織的練習はあまりやられていなかったようです。

次の年の昭和四十五年度は、主将未田加津子さんで、新入部員一名、二年生に一名入部、たった五名の部員で、試合の時などは、ファイブ・ファールはしないように、タイム・アウトは休むために取り、相手のメンバー・チェンジをうらやましく見ていたものでした。

昭和四十六年度、萩原弘子主将の代に七名の部員が入り、ようやく部として活気のある練習ができるようになりました。昭和四十七年度、四名の部員が入り、主将黒河由美子さんが男子なみの走力ジャンプ力の持ち主で彼女中心となり、勝つ目標をもって練習できるようになりました。

昭和四十八年度は、主将高中智恵子さんを中心に九名もの部員がいて、女子で県大会ベスト8に入り、県下の他の学校にひけをとらないで戦えるチームに成長しました。

カット・イン許さず

昭和四十九年度、主将武田典子さんの代も一〇名部員、昭和五十年新藤幾代さんを中心にして次々と県大会出場をはたし、女子の部活動として立派な成績を残しました。

また、昭和五十一年度は、大木幸子さんを中心に一二名の部員が、『おんぼろ車』という部誌を一年から三年まで書きつづけ、部の練習内容から顧問の悪口まで細かにつづられた貴重な資料が残っているのもよい思い出です。この代は、新人戦で市立銚子高校（その年に関東大会優勝）と対戦し、延長二回の末、一点差で敗れた思い出は印象深いものです。また、この代は、千葉大二名、宇都宮大、図書館短大、上智英文、青山短大等、現役で進学し、後輩に文武が両立できる確かなものをつくり上げてくれました。

昭和五十三年度は浅野景代主将で、県大会出場はしたも

のの、全国優勝した昭和学院高校と対戦し、一九八点入れられた苦い思い出もあります。この年より、石渡正一先生をお迎えし、二人の顧問で部を見ることができるようになり、練習も充実して行えるようになってきました。

昭和五十四年度は、新入部員も一八名入部し、主将田崎美恵さん中心に、部員数三九名となり、練習も十分できるようになりました。今後益々、千葉東高女子バスケットボール部が活躍することを期待します。（県立柏井高校）

バレーボール部

前顧問　野村　松三

部発足の年月は不明ですが、戦後であることには間違いない。以来三十余年の歩みを続けています。昭和二十年代後半の活躍はめざましく、県高校バレーボール選手権大会（現在総体と称している）で入賞（ベスト四）の栄に浴したこともあり、その健闘は三十一年ごろまで続きました。当時の指導者は愛敬高輝先生、佐々木鉄太郎先生でした。以後部員の数も少なくなり捲土重来を期しての練習でした。三十四年度、藤倉守男先生、三十五年度、奥山浩先生、三十六年度、曽根正之先生が就任しています。三十七年度から十年間、山辺泉先生が指導にあたり、三年後の四十年には九人制の部で優勝し（当時六人制・九人制を各チームで選択し、出場した）関東大会に出場して、輝しい足跡を残しています。四十七年度、柴内恒先生、四十九年度、根本剛先生、五十五年度福田靖先生、五十六年度青柳伸一郎先生へと顧問が引継がれてますが、基本に忠実で明るいプレーをするチームカラーは脈々として後輩に受けつがれています。

同好会的な男子チームの県下高校の公式戦初出場は、昭和三十四年十月の新人戦でした。一セット三、四点しか取れないあわれなスコアで大敗しましたが、男子バレーボール部の歴史はここから始まりました。三十七年六月の総合体育大会では三位（ベスト4）となり、関東大会に出場し、二回戦まで進み、以後県下で上位の実力を堅持するようになりました。四十七年の新人戦（前回の大会にベスト8チームに与

第35回関東高等学校男子バレーボール大会
（昭和56年6月6日、7日川越市民体育館その他）

えられる推薦出場）に二年生の部員がいないので一年生のみで出場し惨敗を喫しました。その後、低迷の道を辿りました。しかし、五十五年の新人戦で八年ぶりにベスト8に入り、五十六年の総合体育大会では五位となり、関東大会に出場し、二回戦まで進んでいます。

戦績

男子

47年度	県高校総体	四回戦（ベスト8）
	県国体予選	五回戦（ベスト8）
	県高校新人	一回戦
50年度	県高校総体	二回戦
	県国体予選	一回戦
52年度	県高校総体	二回戦
	県国体予選	一回戦
53年度	県高校総体	二回戦
	県国体予選	三回戦（ベスト16）
	県高校新人	一回戦
54年度	県高校総体	二回戦
	県国体予選	一回戦
55年度	県高校総体	一回戦
	県国体予選	二回戦
	県高校新人	三回戦（ベスト8）
56年度	県高校総体	四回戦（ベスト8）
	関東大会	二回戦
	県国体予選	五回戦（ベスト8）

女子

50年度	県高校総体	二回戦
51年度	県高校総体	一回戦
54年度	県高校総体	二回戦
	県国体予選	二回戦
55年度	県高校総体	二回戦
	県国体予選	四回戦（ベスト16）
	県高校新人	一回戦
56年度	県高校総体	一回戦
	県国体予選	一回戦

（市立千葉高校）

野球部

顧問　濱井　清之

千葉県高等学校野球連盟への加盟校は、この十年間で二倍に増加し、現在一四〇校にもおよび、全国でも有数の激戦区となりました。この急激な発展に対応するために、各校とも、様々な問題をかかえていたかと思います。本校では、部員の確保が最大の問題でした。たとえば、部員不足のため、公式戦には他部の生徒をメンバーに加えて試合に

臨んだこともあり、練習試合の際には相手チームの選手を借りて試合を行い勝ってしまったというようなこともありました。しかし、現在では部員数もふえ、本年度は三九名、県下でも平均以上となりました。このような困難な時期に、多くの問題をかかえた本校野球部へ情熱を傾け熱心に指導をなさった野村典平先生（現君津農林高野球部長）、木下忠一先生（現成東高校野球部長）、仕事を持ちながらも野球部の練習のために時間をさいてくださったOBの方々に心から感謝します。こうした方々の努力によって本校野球部の堅固な土台が築かれたと思います。今後は、この土台の上に大きく飛躍し、東雲健児の意気を見せたいと思っております。

第63回　全国高校野球選手権（千葉県大会）

夏季大会成績（最近十年）

47年	二回戦	千葉東	2対1 下総農業
	三回戦	千葉東	1対7 国府台
48年	二回戦	千葉東	12対2 京葉工業（五回コールド）
	三回戦	千葉東	3対4 成田
49年	一回戦	千葉東	4対1 安房農業
	二回戦	千葉東	1対3 東総工業
50年	一回戦	千葉東	0対7 匝瑳
51年	二回戦	千葉東	2対0 大原
	三回戦	千葉東	1対8 柏
52年	二回戦	千葉東	1対11 佐倉（六回コールド）
53年	二回戦	千葉東	0対15 佐倉（六回コールド）
54年	二回戦	千葉東	5対9 鎌ケ谷（延長十回）
55年	二回戦	千葉東	2対3 野田北
56年	三回戦	千葉東	4対7 成田西

ラグビー部

顧問　亀　忠　夫

記憶の限りこの十年間の公式戦の記録と、当時の主将の名前とポジションをあげると、次のとおりです。

年度	春県総体	関東大会	秋インターハイ県選考会	冬新人戦	主将（ポジション）
47	鴨川×				堀（エイト）

48	ベスト4	水戸×	ベスト4	ベスト4	畑野（センター）
49	準優勝	甲府×	準優勝	準優勝	福田（エイト）
50	準優勝	熊谷×			室井（フッカー）
51	優勝	東京×		準優勝	外山（エイト）
52	優勝	宇都宮○	準優勝		山田（センター）
53	準優勝	前橋×	ベスト4	ベスト4	平野（エイト）
54	優勝	横浜○	優勝	優勝	山本（フルバック）
55	優勝	水戸○	準優勝	優勝	佐藤（プロップ）
56	優勝	千葉×	優勝	優勝	張能（プロップ）

関東大会には連続十年出場していて、その成績は三勝七敗です。最返になって三年生が秋のインターハイ予選まで残ってくれるようになりましたが、それも何とか「花園」が手の届く所に迫ってきたからでしょう。以前はやはり関東大会出場が目標であり、春には強いが、秋には弱い、という世評をずーとうけてきました。四十七年は、小川先生が日体大を卒業して赴任してきた年ですが、彼のまいた種が芽を出し、花を咲かせようとしているといっていいでしょう。彼の急死は、惜しみても余りあるものです。その後を継いだ本城先生のラグビーによせる情熱も、彼に劣らず、昨年は単独チームで、千葉県では初めての予選を勝っての国体出場を果しました。

常勝千葉東

昭和五十五年八月二十九日(金)　保土ケ谷ラグビー場

千葉県（千葉東高）16 {9—4 / 7—4} 8埼玉県（熊谷工高）

ついで足利市での栃の葉国体に出場

一回戦　十月十三日(月)　渡良瀬グランド

千葉県（千葉東高）11 {4—7 / 7—3} 10広島県（全広島）

ノーサイド直前のペナルティゴールによる劇的な逆転勝ちで、応援にかけつけた相川校長も大変喜ばれました。翌日、全愛媛には敗けてしまいましたが、この十年間のラグビー部の歴史で、いや創部以来の特筆すべき壮挙といっていいでしょう。

しかし、そのおよそ一か月後に、痛恨の一戦が待っていたとは、神のみぞ知る、といっていいでしょう。そうです。この一戦に勝てば、六十回の記念大会で花園に行けるという県選考会の決勝戦で、千葉南に一点差で敗けてしま

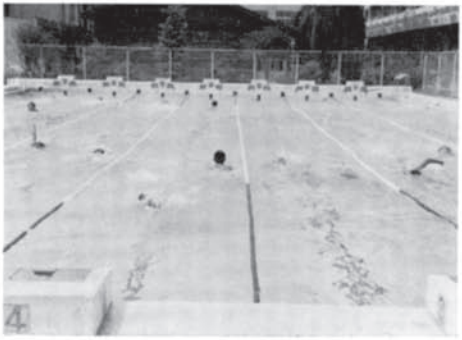
ったのです。勝負のきびしさをこれほど、叩きつけられるように知らされたのは、初めてでした。勝負根性に乏しいと言われても仕方ないと思います。ふりかえってみると、僕が昭和四十年に顧問をひき受けてから七年間の成績は、新人戦での優勝と準優勝が各一回、関東大会出場が二回でした。素人の悲しさ、OBたちに助けられてやっとできたことです。当時は部員も少なく、集めるのに苦労しました。新人戦の時など、柔道部やバスケット部から借りてきて、やっと出場したこともありました。ところが今は六〇名程の部員になりました。強くなりたいがそのためには部員が欲しい、という溢路を、ともかくぎりぎりの部員で強くしようということで、ハードな練習と温かい接触を織りまぜて、約七年間の長い指導の努力が、今日になっていると思います、ほかでもないその努力の人こそ故小川先生です。それにくらべれば贅沢な悩みですが、三年生になっても公式戦に出してもらえない部員がでてくる日も近いのです。今の二年生は二二名もいて、ポジションは一五しかないのです。しかも一年生にもいい部員がいて上級生だからといって、うかうかしておられません。しかし、レギュラーになれそうもないと思って、部をやめる生徒もほとんどいないのは感心です。いつも言うのですが、例えば優勝といっても、レギュラーだけの力でできるものではなく、毎日の練習から全員のチームワークによるものです。これは人間形成にとって大きな意義をもっていると思います。「みんなが一人のために、一人がみんなのために」が、ラグビースピリットです。僕がラグビーに魅せられたのもそのためです。

本当に三年間のうちに、あんな足の遅かったのが、やせでチビが、あるいはデブが、よくぞここまでやれるようになったと驚くことが屢々です。毎日の練習によって、身体的にも精神的にも成長してゆく姿をみることは、親が子を見るのと同じ様にとても嬉しいことです。勉強も大事、クラブも大事、何とか両立させて頑張っていこう、これがラグビー部のモットーです（千葉東でならその夢がかなえそうだと思って本城先生も赴任してきたそうです）。ここにこそ、まさに青春、高校生の理想追求の、厳しいが、美しい姿があるのではないでしょうか。

水泳部

顧問　佐藤　敦　　平安　隆雄

七月中旬に高校総合体育大会があるため、毎年新学年が始まると、早くプールに水を入れてくれと生徒に催促されるのが年中行事のようになっていて、顧問としてはまこと



戦績潜行意気軒昂

に苦しい思いをしてきました。しかし今年度は学校の了解が得られて五月六日に水を入れることができました。それに夏休中もほとんど毎日練習をつづけましたので、練習量は例年にくらべてずっと多かったようです。

プールの循環装置の取扱い、薬品の散布など管理上のいろいろな仕事がありますが、体育科の先生方の指導のもとで生徒もよく協力してくれました。

プールサイドで見ていて「不器用だなあ、種目を変えてやったらどうだろう」と思わせる一年生部員も毎年何人かいます。しかし黙ってがんばりつづける姿を見ていると、それをいうのもさしひかえてしまいます。それが翌年になるとけっこう形がついてくるのです。競泳の場合、競技そのものは個人的なものが大部分でありますので、結局はひとりひとりの努力がものをいうことになります。その点各人それぞれによく努力しているといえます。ただ三年生になると受験のため「隠居」してしまうのが残念です。

自己との苦しい戦いを通して得られたがんばり精神は、学習面にもかなり表れていて、部としてはよい進学成績をあげていると思っています。

今年は、これといった試合成果は残せませんでしたが、在校生の最近の県大会での成績は次のようなものです。いずれも新人大会のものです。

54・9・9　男子二〇〇mリレー
（中山、庄田、小嶋、宇宿）一分五六秒一　四位
55・9・16　男子二〇〇mリレー
（岩元、庄田、小嶋、宇宿）一分五三秒二　二位
同　男子一〇〇m自由形
宇宿達也　一分一秒三　二位

部長及び部員は次の通りです。

年度	部長名	人数（男・女）
昭46年度	伊藤政春	一〇（六・四）
昭47年度	伊藤陽一	一二（六・六）
昭48年度	千川弘之	一七（七・一〇）
昭49年度	清藤昇	八（四・四）
昭50年度	許斐邦男	八（五・三）

昭51年度　大原信行　六（四・二）
昭52年度　早川貴　三（二・一）
昭53年度　森谷俊文　七（七・〇）
昭54年度　山地雅宏　三（一・二）
昭55年度　中山昌洋　五（四・一）
昭56年度　宇宿遠也　一二（一〇・二）

山岳部

顧問　大沢浩一

資料不足で心許無いですが、まず山岳部の歴史を項目ごとにまとめてみます。顧問は主たる者。リーダーはだいたい二年生、男、女の順。その下の数字はその学年（前年度入学）の部員数。山行の上の数字はそれを行った月です。

三十年前はハイキング程度。以降四十年ころまでは先鋭的

高知県石槌山系

年度	顧問	リーダー	主たる山行	備考
25				男女共学となる。初めて登山部の名称を用いる。ただしラグビー、野球等かけもち多し、右三年のうち一度岩原へスキー。高体連加盟。この年と翌年女子の入部認めず。部員の喫茶店、映画、スキーを禁止。「ケルン」創刊
26	佐々木		夏、三ツ峠	
27	〃		夏、上高地（西穂、焼岳）	
28	〃		夏、志賀高原	
29	木島	藤田	11丹沢（県大会） 春、丹沢（新人歓迎沢上り）	
30	〃	伊藤	7鳳凰三山（県大会） 8後立山縦走 12～翌1不帰東面の偵察	
31	〃	有沢(3)	7木曽駒（県大会） 8涸沢（前穂東壁、滝谷）	
32	〃	山本	7尾瀬（関東大会、女子） 8涸沢（同前年）	「三高アルペンクラブ」発足。かけもち部員なくなる。
33	〃	小出	5房総（関東大会） 金峰（県大会） 8立山縦走	右を「シャロンアルペンクラブ」と改称。前年の会結成時カラコルム遠征を決議。
34	〃	釜石 石橋		
35	〃	河野	8浅間（県大会）峯	
36	〃	古市	8赤城（県大会）	「ケルン」12号。

37	〃	石崎	8北（剣、三俣連峰、槍） 8北ア（白馬、鑓、黒部、剣）	
41	野村 長谷川		8北ア（剣、薬師、槍）	
42	〃	矢崎(1)	3北八ツ（双子池、横岳） 8南会津（朝日、丸山、北沢、銀山湖）丹沢（女） 12北八ツ（横岳付近）	OB竹内氏カラコルム遠征。以下46年頃まで部員は多い時で男子6～7名、女子4～5名。
43	〃	本郷 伊藤	3北八ツ（同前） 8南ア（茶臼、聖） 尾瀬（女子） 3北八ツ（同前）	
44	〃	秋山	8南ア。北ア（槍、穂＝女）	OBヒマラヤ遠征
45	〃	(0)	3北ア（遠見尾根） 8北ア（八方、唐松、五竜）	この年頃、東高山岳部OB会としてキナバル（ボルネオ）遠征。
46	〃	斉藤	3北ア（遠見尾根） 8南ア（山伏、赤石、聖） 8笹ケ峰、火打（女子）	
47	〃	磯(2) 斉藤(1)（妙）	3北ア（猿倉、大雪渓） 8南ア（山伏、塩見、濃鳥間、北岳）八ツ（女）	11「ケルン」23号
48	〃	中村(5) 友野(1)	8北ア（栂池、白馬、唐松、五竜、鹿島槍、針の木）	この年から53年まで「ケルン」発刊せず。
49	中村	鈴木(6)	8北ア（横尾＝蝶、槍、穂）	

50	長谷川 〃	阿部(10)(0)	栗原(5)	簡単な山行のみ
51	大沢 長谷川	吉海(6)(0)	3奥多摩 8北ア（常念、大天井、槍）	男子関東大会出場（那須山系）
52	大沢	井沢(5)(0)	3奥多摩 8飯豊（三国、大日、飯豊）	
53	〃	山口(7) 吉田(2)	4飛竜、雲取 8南ア（北岳、台風来る）	
54	大沢	出石(13)	8八ツ（天狗、硫黄、横岳） （赤岳、権現＝女子） ＜男子台風で中止＞	男子総体優勝、全国総体（滋賀、比良山系）参加。
55	小沢 〃	岡田(4) 坂本(10)	3八ツ（赤岳鉱泉、講習会）	3「ケルン」24号 女子総体優勝、全国総体（高知、石槌山系）参加。
56	〃	牧之瀬(5) 篠目(7) 菅倉(4)	4日光白根（五色、白根） 8後立山（白馬、鑓、五竜） 8北ア（常念、燕＝女子） 3八ツ（同前、女子） 4尾瀬（至仏） 8南ア（赤石、悪沢＝男女）	1「ケルン」25号 3「ケルン」26号

登山の時代。打倒日本山岳会の意気を持ち、高校生にして初登攀をめざしています。カラコルム遠征を考え、京大の今西錦司氏を訪ねたりしています。以降四十八年ころまではこれを継ぐも岩上りが少なくなり積雪期の山への志向が生じています。この後軽い停滞があり現在に至りました。

活動の方向性が今後の課題です。

ソフトボール部

顧問　安塚　正明

千葉東高校ソフトボール部は、八年前の昭和四十九年四月に男女ソフトボール愛好会として活動を始めました。当時は活動場所に無理もあり新しく同好会を創設することの非常に困難な時代でもあり、その年の九月の職員会議では承認されませんでした。放課後の校内には活動場所がないために、毎朝六時四十分ころから校庭の草取り、石拾い、グランド整備をしながら少しでも現状より使い易いようにと心がけながら、「朝練」と称して使わせていただく毎日でした。それもままならず校外の空き地をジプシーのように点々とし、千葉公園や競輪場の駐車場を使ったこともありました。職員会議不承認で男女共に解散しましたが、女子は東高でのソフトボール活動を忘れずに女子ソフトボール愛好会として再スタートし、習志野高校へは練習を見せていただくためによく出かけたものでした。ボールの握り方、バットの持ち方はもちろんのこと、ルールもわからない一年生が二年生になった五十年七月七日の職員会議で保留、同好会設立は絶望的かと思われましたが、一学期の終業式前日の七月十八日の臨時職員会議で同好会組織として承認され、選手共々涙した思い出がまだきのうのことのようです。練習試合は小学生の男子や中学校ソフトボール部との対戦が最初でした。右も左もわからない生徒に「ボールは一つだ」の連発で新人戦県大会に初出場（ブロック予選初出場にて県大会出場権を獲得したのは高校女子で初めて）、全国準優勝校の安房南高に善戦しました。五十一年七月の国体予選では田辺淑子（現鎌ケ谷市立中部小教諭）、渡辺寿美子（現千葉市立稲毛小教諭）のバッテリーが三年生として参加しCシード校の小見川高を破りました。その後部員が集まらず同好会存続が危まれましたが、翌五十二年からは十数名の新入生が入部し、五十三年には新人戦県大会でベスト16入りを果たし、練習試合でも県大会の常勝チームと対戦する

苦難を越えて栄光へ

までになりました。活動五年目も終わりに近づいた昭和五十四年二月二十二日の職員会議で部昇格が決まり正式な部活動として承認されたときは感無量でした。またその年の総体より現在まで県大会のベスト16に常時顔を出し、五十四年六月の全日本県選考会では初のベスト8、十一月の新人戦でも準々決勝へコマを進めました。花島里香（現東京学芸大学）、小川里香（現千葉大学）のバッテリー、不動の四番打者水越順子（現日本福祉大学）を中心とした最強メンバーで関東大会を目指した五十五年の総体は惜しくも準決勝敗退、六月の全日本県選考会はBシードを守れずベスト8でした。この時点で千葉東の時代は終わったというムードが全県下に広がり、新人チームは苦しいスタートでした。二〇名近くいた二年生部員も五名にまで減り、中学校時代にソフトボールを経験した者もなく、病気、ケガで苦しむ体の小さなチームでしたが、新人戦ではベスト16に進出できたのはチームワークの力以外何ものもなかったようです。「仲良く思いやりのあるチーム」を目指し、打てるチームを目標に、冬季に頑張りました。翌五月の総体では岩田かがり主将（臼井中、体操）を中心に堀田雅子（こてはし台中、テニス）、永田舞里（松ケ丘中、陸上）のバッテリーに酒井千波（花園中、テニス）、青木玉枝（新宿中、美術）の五人が活躍し、八街高（新人戦ベスト8）を6対0で破り、準々決勝では習志野高を破った渡辺投手（国体指定選手）を擁する市立松戸に6対2にて打ち勝ち、二年連続準決勝に進出し野田高に1対2にて惜敗しました。関東への夢は絶たれましたが、六月の全日本県選考会でも初のベスト4、七月の国体最終選考会では決勝戦まで進出し昭和学院高に0対1で敗れはしましたが内容的には上回っていました。素人でも、体が小さくても、勉強との両立ができるという伝統ができてきたようです。そのあとを引き継いだ大塚淑江主将（菊間中）率いる新人チームは先輩の栄光を大切に、ソフトボール部はじまって以来の猛練習を繰り返し、小林愛子（誉田中）、国井郁乃（千大附中）のバッテリーが頑張り、旭百合（稲毛中）、野城まゆみ（八幡中）の左打者がチャンスに強く、大塚、小林、栗原薫（千代田中）の長距離打者に亀割雅子（千城台西中）、金森和子（千大附中）の足を生かした攻撃、沼沢夏子（松ケ丘中）、村上育子（幕張西中）の頭脳的なプレーで強いチームを目指し、新人戦では初のベスト4入りを果たし、昭和五十六年度の四つの大きな大会は全て準決勝以上に進出しました。素人でも、体が小さくても、誰でもでき、勉強との両立を見事に実践することができました。あすの栄光を目指し、千葉東高ソフトボール部は今年も頑張ります。

第四章　東雲多彩

―回顧と追憶―

《回　想》

思い出すことども……旧職員（数学）高山　孝…一九九
回想の十八年……旧職員（理科教頭）剱持　徹…二〇一
東高校での思い出……旧職員（国語）山根　茂…二〇三
思い出すこと……旧職員（国語）秋山　一郎…二〇五
回想―昭和四十年前後―……旧職員（社会）黒川　泰治…二〇七
三高・東高と共に二十年……旧職員（家庭）須藤　明子…二〇九
東高の九年間……旧職員（国語）山泉　彰…二一一
連綿断章……旧職員（国語）菱木　道人…二一三
小さな生命誕生の魅力の虜になって……旧職員（生物）野村　典平…二一五
千葉東高校の三年間……昭和46年度卒　七里　八州…二一八
献血運動の思い出……昭和47年度卒　松永　伸夫…二一九
空白の二年間……昭和48年度卒　小林　誠…二二一
サッカー部・生徒会・三年三組……昭和49年度卒　木口　清英…二二三
私と書道……昭和50年度卒　高橋　敏行…二二五
777の場……昭和51年度卒　平野　弘之…二二七
私と千葉東高校……昭和52年度卒　伊井　憲一…二二九
二十分の三の重み……昭和53年度卒　足立　暁子…二三一
私にとっての高校生活……昭和54年度卒　今井　恵子…二三三

御霊安かれ

〔故山口道夫先生〕
一瀉千里（故山口道夫先生に捧ぐ）……須賀賢悟郎…二三五
〔故藤本明宏先生〕
故藤本先生の想い出……青山　克…二三六
故藤本先生に捧ぐ……第20回卒業生　板倉　茂…二三七
〔故西山タカ子先生〕
故西山タカ子先生を偲んで……永井　弘子…二三九
故西山先生の想い出……昭和54年度卒　山本　弘子…二四三
〔故小川武久先生〕
小川さんのこと……部長　亀　忠夫…二四四
タケのこと……監督　本城　一隆…二四八
故小川先生の思い出……元ラグビー部キャプテン　山本　浩二…二四八
弔辞……山田　悦朗…二四九

回想

思い出すことども

旧職員（数学）高山　孝

私が千葉東高に勤務していたのは、昭和三十五年四月から四十七年三月までの十二年間でした。当初は、東葛飾高の校長で亡くなられた石毛貞雄先生が校長で、補佐役は畠山一郎先生でした。

教員の振り出しを静岡県の伊東高で経験した私が、千葉東高に転任して来て感じたことに、「今度の学校は地域社会とのつながりが少ない」ということがありました。伊東では、地域社会の中にどっぷりとつかった生活でしたので、その差の大きいことに、あらためて驚いた次第です。

赴任した時の校舎は、木造平家の建物が四棟あったように記憶しています。職員室から一番端の教室までは、ちょっとした距離があり、しかも、あまり上等な校舎でもなかったので、つぎ・はぎだらけの廊下を、ぎしぎしいわせながら歩いたことも、今となっては懐しく思い出されますし、木の温もりというか、鉄筋の校舎にはない「味」があったような気がします。現在は、昔風の木造家屋が姿を消してゆき、鉄筋又はこれに類似の住居がふえている状況ですから、生徒たちは当り前のこととして鉄筋の校舎になじんでいるのでしょうが、機能的には優れているとはいえ、建物に「遊び」がないように思います。この木造平家の校舎は、旧陸軍の倉庫ということで、雨風さえ凌げればよいという感じの粗末な建物であったせいか、天井が低くて夏は暑く、立て付けが悪いので冬は寒い、というところが悩みの種でした。特に、冬は、ストーブをたいても、床板の隙間から冷えきった空気が、吸い上げられるようにして教室内に入りこみ、折角温めているのにあまり効果がなくて、生徒たちは困ったようでした。そのため、一日にコークスはバケツ一杯という割り当て量では足りず、何とか二杯分せしめようとして見つかったり、机・椅子のこわれたのを無断で燃やしたりしたようでした。当時は未だ宿直の制度があったので、宿直に当たった日には、放課後、暗くならないうちに、各教室のストーブの火の始末だけは、神経をつかって点検してまわりました。大抵は燃えかすも灰もなくきれいに掃除して、ストーブのまわりの床には水までまい

てあるのですが、時には、灰のたまっているストーブがあったりして、そんな時には、そろりそろりと灰の中に手を入れてかきまわし、火の気の有無を確めたりもしました。宿直をしていて何が気がかりだといって、「火事」程気になるものはありませんでしたから。職員一人一人が念入りに注意していたにも拘らず、校舎から火が出て、三教室が焼けるという事件が起こりました。私が担任していたクラスの教室も焼けたので、他の先生方と共に、小使室で警察官から「事情聴取」をされました。「最近、生徒から恨みを買われることがなかったか」と訊かれたことだけを覚えて居ります。結局は、一か月後に、放火常習の変質者が捕まって決着がつきました。この事件は、昭和三十六年八月二十二日の深夜に起こり、当日の宿直であった坂本哲郎先生(現県立千葉高教諭)は、放火犯人が捕まるまで、随分と御心労の様子でした。千葉競輪場で競輪が行われると、夜間に盗難事件等がよく起こったので、競輪のある日の宿直は、事故の起こらないことを祈ったものでした。この放火事件も競輪開催中の事件でした。

校舎が全面改築されることになり、木造校舎が取り壊されていきましたが、その中に、剣道場がありました。この道場の床板には、多くの剣道部員の思いがこめられて居りました。稽古の前後に雑巾で十分に拭きこんだので、水で拭いただけの檜の白木の板が、いつしか艶のある飴色に変じ、鏡のように光沢が出て、校内で一番美しくきれいな床であると評判になり、部員が誇りにして居りました。道場を取り壊すときまった時、床板だけでも生かしてほしいと願った部員やO・Bの気持がよくわかります。

昭和四十一年四月から衛生看護科が新設されましたが、星野和彦先生(現市立稲毛高教頭)と二人で、先輩校の視察を命ぜられ、神奈川県立衛生短大附属二俣川高と沼津市立沼津高を訪問して、資料を少々頂戴して参りました。応募者が定員に満たないのではないかという不安なスタートでしたが、本年の入試では、一・七三倍という高い競争率が示すとおり、素晴らしい発展をしている様子をみて、大へん嬉しく思います。

昭和四十四年九月三十日早朝、県下高校のトップをきって、普通教室棟四階西側の五教室が、「千葉東高全闘委」と称する十人前後の若者によって、いわゆる「封鎖」をされました。この封鎖は、昼前に若者たちが退去したことによって、あっけない幕切れになりました。このあと、暫く校内に異様な空気が漂っていましたが、生徒自らの手で、徐々に正常な状態をとりもどしていったのは、さすがでし

た。

人は自分の経験したことを元にして、その上に更に経験を積み重ねて生きていくわけですが、十二年間の千葉東高での「万事」は、私の生活に大きな影響を与えてくれて居ります。どうにか無事に楽しく毎日を過せていることも、そのお蔭であると感謝している次第です。

（県立千葉高校教頭）

回想の十八年

旧職員（理科・教頭）　剱　持　　徹

創立四十周年を心から御祝い申しあげます。

私は昭和二十八年から昭和五十年まで、途中四年間市立船橋高校に転出いたしましたが、教諭として十五年間、教頭として三年間も御世話になり、千葉東高四十年の歴史の半分近くも御校に勤務させていただいたことを本当に光栄に思っております。

御校に着任したころは、まだ何も判らない新米教師で、先輩や同僚の先生方にずい分と御世話になったものでした。当時の校舎は全くひどいもので、旧軍施設の払い下げを受けたものを改造したもので、黒トタン葺きで背が低く、夏暑くて冬は寒いといったものでした。戦後十年足らずといったこともあって物資も不足しており、窓ガラスが破れても補修することすらできず、紙を貼って凌いでおり、隙間風にふるえながら授業を行ったことを覚えています。

そのころ、教室の壁が落ちてボロボロだったものを、草葉章先生が先頭に立ってベニヤ板で補強作業をしておられたことをつい昨日のことのように思い出されます。

私が市立船橋高の教頭に転出している四年間に校舎の全面改築が完了し、昭和四十七年に千葉東高の教頭として着任した時はすばらしい施設・設備を備えた学校に変容し、まるでよその学校に着任したような気持になりました。

このように整った施設・設備の中で学ぶことのできる後輩の生徒諸君の幸せをつくづく痛感したものです。

千葉東高の長い歴史の中で、昭和四十四年前後に発生した学園紛争は、いろいろな意味で非常に大きな出来事だったと思います。幸か不幸か、ちょうどその時点は私は転出をしておりましたが、あの学園封鎖の報を聞いた時は、まるで自分の学校の出来事のように心を痛めておりました。

私が転出する直前、昭和四十二年の末ごろからボッボッ

その芽が見えはじめ、校門付近でビラ配りなどの政治活動をする生徒が現れて、結果的には平行線をたどりましたが、その生徒たちとずい分と話しあいをしたものでした。私が教頭で帰任した時は、あの騒ぎもうそのように収まり、静かな平和な学園にもどっており、当時の先生方の御苦労が偲ばれました。

ただ驚いたことには、学園紛争の落し子で生徒会が解散してしまって無くなっていたことでした。そのため、部活動を中心として生徒の活動面で大へん不都合な思いをしておりました。昭和四十八年ごろから、生徒の要望も高まり、生徒会を再発足させようということになり、佐野誠先生が中心になって会則の制定から始まって生徒会の再建に着手し、大へん苦労をされて発足させたことを思い出します。

私の教頭時代の思い出として忘れることのできないのは昭和四十八年に発令された教頭二人制です。三月末に突如として石母田権兵衛先生が新たに複数の教頭として着任され私とコンビを組むことになりました。私にとっても大へんな驚きでしたが、幸いなことに石母田先生とは市立船橋時代に一緒に勤務をした間柄で、大へんスムーズにコンビを組むことができましたが、石母田先生にとっては何かとお困りになったことも多かったことと思います。

県内の他校では教頭複数制の問題で、校内でトラブルが起きたところもあると聞きましたが、畠山校長先生の御指導と、良識ある東高の先生方は卒直にこの制度を受け入れて下さり、一切のトラブルも無く二年間大過なくコンビを組むことができたことを今でも感謝しております。

昭和四十八年は若潮国体の開催の年であり、千葉東高の体育館はバレーボールの会場となり、それの準備や開催への協力等で忙しく動きまわったことを思い出します。畠山校長はバスケットボールの役員をされており、開催期間中は会場の木更津の方へ出張されておられたので、留守部隊長として緊張していたことを思い出します。

とに角、千葉東高教頭として三年間大過なく勤めることのできたことは、畠山校長先生の厳しい中にも愛情のある御指導と、心から御協力、御支援をしてくださった職員の方々の御蔭と心から感謝の気持で一杯です。特に畠山先生の御指導は、その後私が校長として勤務するようになってから、どれ程私の力となってくれたか計り知れません。この機会をかりて厚く御礼申しあげます。

私の若いころ、いろいろと御世話になった先輩の先生方、そして苦楽を共にした同僚の先生方の中で、後に高校

長として活躍された方、また現に活躍中の方々がちょっと数えただけでも二〇人を超える程です。

歴代の校長先生、そしてすばらしい先生方と立派な同窓生諸兄姉によって築かれて来た千葉東高は、いまや県内でも屈指の高校として衆目の認める学校に発展してまいりました。

今後ますますの御発展を心から祈念いたしまして、私の千葉東高の思い出とさせていただきます。

（県立生浜高等学校長）

東高校での思い出

旧職員（国語）　山　根　　茂

私が千葉東高校でお世話になったのは、昭和三十三年四月から、五十一年三月までの十八年間です。自分の教職経験の中でいちばん長く勤めていたところですから、それなりの思い出も多く、また住まいも学校の近くだったことがただ通勤に便利だったというだけでなく、家庭と職場の生活に一体感のような親しみがあって、この間の思い出は家族ぐるみの懐しい語り草となっています。

私が赴任して来たころの学校は、まだ千葉三高と言っていました。校舎の作りはすべて木造で、古びた窓枠は立てつけが悪く、校庭の砂ほこりがたえず部屋の中に入り、授業で少し大きな声を出せば、隣りあわせの教室にめいわくがかかるようなことがありました。それだけに昼休みなどすぐグランドに出てソフトボールをしたり、手狭まな体育館でバレーボールに汗を流したりしました。中でもダルマストーブを囲んだ冬の教室でのだんらんはとくに楽しいものでした。

昭和四十二年、現在の鉄筋校舎の建築が始まりましたが、県当局や関係の皆様方の絶大なご支援を受けて、県都にふさわしい学校を建てるのだということで、その期待は大きくふくらんでいきました。たまたま私は校務の管理部を担当していましたので、その計画や工事の交渉に携わることになりました。最近の新設校では規格型の建築が一般ですが、当時は学校の要望をかなり採り入れていただけましたので、諸先生の意見をまとめて、本庁の技師さんに何かとお願いをしたり、現場の監督さんとお話合いをもったりいたしました。二期に分けてすすめられた三年越しの工事がやがて完工し、新装なった校舎を見上げる喜びはひとしおでしたが、その一方で木造の旧校舎が解体されたり移

築されたりするのを名残り惜しく思いました。またこの間に待望のプールができ上り、続いて立派な新体育館も落成。校庭も整備されて、周辺には新たな植樹が行われました。既に校名は千葉東高校と改まり、充実した環境の中で学習の成果も年ごとに向上し、東高の意気はますます上っていったのです。

高校在学三年のサイクルはさまざまな感激を伴って、入学・進級・卒業を繰り返していきます。私の受け持ったホームルームにはそれぞれの個性がありましたが、クラスの雰囲気はいずれもなごやかでよくまとまっておりました。そのころの幾多の行事がいま懐しく思い出されるのは、このときの生徒たちが高校生活を楽しく有意義に過ごしていたからだと思います。学習と部活動を両立させることはむずかしいと言われますが、多くの生徒がこの両面のバランスをうまくとって、学校全体に活気がみなぎっていました。やがて私は、管理部から生徒指導部の担当に移りましたが、規律指導・教育相談・HR指導・クラブ指導・集会指導等、いずれも先生方の適切なご指導と生徒諸君の自覚に支えられて、計画的な実践ができたことを感謝しています。

今でもバスや電車の中、駅などで東高の生徒に会うたび何か一言声をかけたい気持ちになりますが、楽しそうに話し合っていたり、本を読んでいたりする諸君に、「しっかりやりなさいよ」と励ましのことばを心の中でつぶやいている私です。

蛇足めいたことになりますが、在勤中の思い出として、他の二・三のことについて添えてみたいと思います。

＜PTA会報の編集＞　毎学期一回、PTAの広報誌を発行することになり、昭和四十一年七月にその創刊号を出しました。内容は学校からの情報提供とPTA活動の紹介が主なものでしたが、会員の皆様や諸先生のご協力をいただいて、第三十号までの編集にかかわってきました。つづり合わせてみると当時の学校の様子がよくわかって、現在勤めている新設高校運営の参考にもしています。

＜NHK学園の経営＞　昭和三十八年、東高が通信制のNHK学園の協力校となりました。全国の通信制課程併置校にこの要請がありました。しかし当時の東高通信課程には、集団生の入学が多いなど、諸般の事情からこれを一部の全日制職員と外部の講師等によって受け入れることにしたのです。県内在住の学園生を集めて、月二回行われる日曜日のスクーリング、夏の合宿や修学旅行等、すべて東高の通信生と同じように扱って運営されてきました。本年四

月からこの学園は四街道の愛国学園の方に移りましたが、開設以来十三年間、私はこのN学の生徒ともいっしょに過ごしてきたことを懐しく思っています。

＜救急法講習会の実施＞　赤十字の行う講習に救急法・水上安全法・家庭看護法の三つがありますが、私は前二者の事業に関係していますので、何回か東高の施設をお借りしてこれらの講習を実施してきました。ただ水安講習は受講資格のつごうで高校生を対象にできませんので、東高生には毎年救急法の指導を行っておりますが、いつも熱心に受講しており、この行事は今でも希望者に、冬期の休業中を利用して実施しています。他校に移ってからの私は、この機会を楽しみにして東高校を訪れています。

（県立市川北高校教頭）

思い出すこと

旧職員（国語）　秋山　一郎

私が千葉東高に勤務したのは昭和三十九年九月から五十年三月までの約十年間で、年齢的にも三十代の前半から四十代のはじめにかけての、気力・体力ともに最も充実していたころでした。

いま創立四十周年記念誌の原稿依頼を受け、ペンをとって静かに一昔前を振り返ってみますと、苦楽を共にした同僚の先生方のなつかしいお顔や学園紛争の苦い経験など、当時の印象的な出来事の一つ一つが脳裏に浮かんできます。それらの中から、忘れ難い思い出のいくつかを書きとめて、私に課せられた責任の一端を果たしたいと思います。

＜三十周年記念誌編集のこと＞　四十六年の創立三十周年に当たって、編集委員のひとりとして記念誌発行の仕事に携わったときのことは、十年後の今でも記憶に新しく残っています。

私は主として市立千葉高女時代を担当しましたが、創立当時のことは戦災に遭ったりして資料が乏しく、まとめるのにたいへん苦労しました。私は、編集委員長をしておられた勝輝夫先生のお供をして、テープレコーダーを手に、学校創立当時の事情にくわしい旧職員の先生方を中心に、話を聞いて回りました。故宮内三朗元千葉市長をはじめ、第二代校長の楠原信一先生、千葉大の林勢司先生、退職されて間もない山崎一郎先生など、草創期の教育にご尽力された方々のご自宅を訪問して、古い記憶を思い起こしてい

ただきながら、市立高女時代のことをいろいろと伺いました。

話題は敷地建物の変遷から、校外学習のこと、戦前の教育のこと、学徒動員や勤労奉仕作業に至るまで、戦時下の学園生活全般にわたりました。お話を伺っていると、若々しい情熱が今もそのままこちらに伝わってくるようで、お年を感じさせないほどご記憶の確かなのには驚きました。特別教室や体育館もなく、教室不足で二部授業も余儀なくされた不自由な施設・設備の中で、建学の意欲に燃えて教育に打ち込んでおられた諸先輩の方々の意気込みがひしひしと感じられ、創設当時のご苦労がしのばれる思いで、たいへん感動させられました。

こうした古い先生方の実地の体験談をもとに、市立高女時代の概説がまとめられたわけです。

〈文学クラブの旅行〉　私は特別教育活動では、文学クラブの顧問を長く勤めました。平素の活動は、主として十月か十一月に行われる文化祭を一つの目標に、文学作品をテーマに読書会を開いて感想を述べ合い、展示用にまとめることと、雑誌『小径』の発行に間に合うように、各自が創作や詩歌を作ることでした。しかしそれ以上に、夏休み恒例の文学遺跡めぐりの一泊旅行は、部員の楽しみの一つでした。

私の最も印象に残っているのは、四十四年の伊豆方面への旅行でした。たしか一四、五名の生徒にOB数名も加わり、貞末貫一郎先生と私とが顧問で同行しました。沼津の千本松原公園で若山牧水の歌碑を見たりして達磨山のバンガローに一泊し、翌日は修善寺を起点に、川端康成の名作『伊豆の踊り子』の舞台となった天城街道を歩いたり、康成若き日のあしあとを残す湯本館にのぼったり、作家の井上靖氏の実家に立ち寄って親族の話を聞いたりして、河津から電車で帰りましたが、けっこう楽しい旅でした。

翌四十五年の夏も、長野県の軽井沢・小諸方面に旅行しました。軽井沢は近代文学ゆかりの地で、多くの作家や歌人の碑が建てられていますが、生徒と堀辰雄の文学碑の拓本をとったりしたのが記憶に残っています。夜は小諸に近い民宿に泊まりましたが、さすが田舎とあって、食べきれないほどの新鮮な野菜がたくさん出されて腹つづみを打ちました。習日は小諸の懐古園で藤村記念館を見たり、「千曲川旅情の歌」を思い起こしながら、城址で古老の吹く草笛の音に耳を傾けたりしました。

こうしたクラブの旅行も、四十六年からは部員が減って実施できなくなったのは残念でした。

そろそろ私に与えられた紙面も残り少なくなってきました。私の赴任した四十年ころの東高は、国立大学の合格者がまだ十数名しかなく、就職する者は一〇〇名近くもありました。それが今や進学率百パーセント、国公立大学合格者数も二〇〇名に迫ろうとする勢いで、とくに千葉大学合格者数では全国一を誇り、県下でも有数の進学校にのし上がりました。わずか創立四十周年にして、これほど飛躍的な発展を遂げた学校は、他に例を見ないと言ってもいいでしょう。できれば、今日のすばらしい実績が築かれるに至るまでの四十年代の進学指導の実際についても少し触れたかったのですが、もう紙面の余裕がなくなりました。千葉東高のますますのご発展を祈り筆をおきます。

（県立千葉高校教諭）

回想—昭和四十年前後—

旧職員（社会）　黒川　泰治

昭和三十八年四月から五十二年三月末までの十四年間、私の教職生涯の最も長い期間を、千葉東高に勤務させていただきました。お仕えしたというより、ご厄介をおかけした校長は、石毛貞雄（故人）・内藤貫一・澤田繁二・村田泰次郎・畠山一郎の各先生。同様に、教頭は、畠山一郎・鬼島正雄・草葉章・釼持徹・石母田権兵衛・小嶋健一の諸先生でした。同じ時期に在職された方々は、もちろん、相当の数にのぼります。

在職中のあれこれや、当時の生徒諸君も含め、行き交った人々のことどもは、時として限りなく思い出されるようでもあり、また、模糊としてかすみの彼方のようにも思えます。ここでは、はじめの数年間、昭和四十年前後にしぼって、思い出すままにいくつかを記させていただきます。石毛校長から内藤校長のころ、ということになります。

＜石毛校長のころ＞　小・中学校の教育課程に「道徳」の時間が特設され、高校社会科の「倫・社」の開始を前に、一部に道徳教育反対の声が高かったころですが、高教研社会部会長でもあられた石毛先生は、つとに、道徳教育に意を注がれた方でした。儒・仏・キリスト教に共通の徳として、また万国共通の徳として、〝思いやり〟を強調され、小さな親切運動やＪＲＣ活動の推進に努められたこと。また、校舎内外の教育環境の整備にきめ細かに心を配られ、当時、〝花一輪いけてはぐくめよい校風〟といったような標語が、校舎内の各所に掲げられていたことなどが

思い出されます。風が吹くと窓ガラスがガタピシする木造の校舎ではありましたが。

寒げいこを奨励され、畠山教頭と共に自ら竹刀をとって凍てつく道場に立たれたことも印象に残ります。

当時、私は、木島学年主任（現市立銚子高校長）の下でクラス担任をしておりましたが、奔放な生徒諸君も多く、修学旅行中に多数の喫煙者を出してしまったことがありました。帰校後、停学等の処分が行われたのですが、その際、旅行団長の畠山教頭と木島学年主任がひそかに辞表を用意されたとかうかがったのは、それから十何年か後のことでした。

〈内藤校長のころ〉　懸案の校舎改築が急速に推進され、轟の丘に建設のひびきがこだました時期で、衛生看護科が併置されたのもこのころだったと思います。私は東高では二回目のクラス担任（山崎学年主任）、そのほか生徒会顧問や組合役員まで背負いこんで、かなり忙しかったような気がします。それだけに心に残ることも多いわけですが、そのうち生徒会顧問としてかかわったいくつかを挙げてみます。

皮が破れて倉庫に眠っていた剣道部の大太鼓を見つけ出し、石川先生（現八千代高校長）等と相談して内藤校長に資金の工面をお願いして、修理してもらったことがありました。石川先生に同行願って浅草の岡田鳴物店に持ちこんだのですが、一目見て店主のいうには、二十年くらい前に、同店で製造したものとのことでした。当節なかなか造れない良いもので、大事にしてもらいたいというようなことを言われた後快く引き受けてくれたのですが、奇しき偶然に石川先生と驚きかつ喜び合った次第でした。やはり剣道場に太鼓はつきもので、立派に修理された太鼓が道場いっぱいに鳴りひびいたときは、我がことのように嬉しかったのを覚えています。たしか、田野先生（現生浜高教諭）が愛車コスモス一号で運搬して下さったかと思います。

当時生徒会長だったK君や体育委員長だったN君は、たいへんなはりきりボーイでしたが、同君等と相談し、運動会を盛り上げようということで万国旗を買ってもったこともありました。しかしこれは、一、二回飾っただけで、スポーツセンターでの陸上競技大会や球技大会に切り替えられたと思います。

毎年在校生から卒業生に贈る記念品について、校章つきのキーホルダーを継続的に、という方向がきめられたのも当時の生徒諸君とはかってのことでした。

現在は、押しも押されもしない名門千葉東高ですが、か

つては、東高生はおとなしすぎる、覇気がない、とか、果てはナンパだなどという評判もなきにしもあらずで、何か歯がゆい思いをしたこともありました。バンカラでもいい、たくましい生徒であってほしい、活気に充ちた学園であってほしいという気持が、当時の私には強かったような気がします。とはいえ試行錯誤の連続で、それは、その後も今日に至るまで続いています。

輝かしい四十周年をひとつの転機として、東高が更に大きく飛躍されるよう心から祈念いたします。

（県立姉崎高等学校長）

三高・東高と共に二十年

旧職員（家庭）須藤　明子

校庭の一隅にガタガタする朝礼台を引っ張り出し、ここで私の新任式が行われました。昭和三十年の九月一日のことです。十年以上のブランクの後に再び教壇に立てた私は三十七歳でした。「戦後の教育は経験がありませんが、一生懸命やって行きますからよろしく」なんて新卒教師と同じような挨拶をして頭をあげ、ドキッとしました。大きな男の子がいっぱいいるのです。幸い、私の家庭科は女子だけが対象ですが、その後しばらくの間は、見上げるように大きい（私が小さ過ぎるのかな）男の子に出会うと、強そうな犬に会った時のようにそ知らぬ顔で急いで通り抜けたりしたものです。戦後の男女共学の線にそって男子を入学させた三高では、当時は一学年七学級で、そのうち一学級分くらい女子の数が多かったようです。昭和三十年といえば、社会一般ではかなり経済的な安定を見ていましたが、いつも遅れるのが教育です。生徒の下駄ばき云々ということが職員会議で取りあげられたり、用務員室前の小さな購買部では、白衣を着た女の先生がコロッケ屋のおばさんよろしく、コロッケにソースなどかけて売ってたりもしていました。校舎も、十六年の開校から戦後にかけて末広――葛城――そして現在地裏の丘へと移動を余儀なくされた模様で、軍隊で使っていた厩舎をうまく作りかえて校舎にしたのかしらと思われるような建物が三棟並び、一番北側の芸術系校舎では、廊下の穴うめ仕事に用務員のKさんは追われっきりだったようです。しかし「住めば都」とでもいうのでしょうか。新しい校舎に移ったころ「前のボロ校舎の方が学校らしくてよかったわ」ともらす生徒もありました。私も、身にしみるような隙間風とは裏腹に、

何かあったかしいものを心に感じていました。生徒数も今ほど多くはなく、不十分な施設の中で、生徒と先生とのふれ合いは緊密だったということなのでしょうか。また余り広くもない職員室にほとんどの先生方が一緒で、放課後はストーブを囲みながら、ゆうべは酔って国電に乗り、中野と千葉の間を何往復かして船橋の自宅に着いたのは朝だったというX先生の奇談や、身振り手振りで語るY先生の二等兵物語にお腹を抱えて笑いころげたこともありました。

家庭科教室は離れた別棟で、調理・被服それに洗濯室がありました。教室内の道具には「市立高等女学校」と記名入りの物も幾つかあり、男子もほとんど入って来ないし、女学校という感じが残っていました。薄汚れたようなトタン張りの調理台に、木炭と石油のコンロが一つずつ置いてある調理室も、やがてプロパンガスが入り、授業能率もあがり、放課後のクラブ活動も盛んになってきました。食物クラブの生徒たちが、夏の運動クラブの合宿に食事作りの一役を買って出たのはこのころでした。そして男子が、食事のために調理室に出入りするようになってからのことですが、こんな事件がありました。クリスマスのころです。ケーキのデコレーション用クリームその他の準備を済ませ、さて準備室へと行った生徒たちが悲鳴をあげました。

「先生！　昨日焼いといたスポンジがありません！」生徒は泣き出しそうです。八個中四個が消えて、お皿だけが残っていました。誰の仕業？　そういえば調理室の裏の方で数人の男子がうろうろしているのを見たわよ。などということで「あきらめましょう」という結論が出て、残ったケーキに山盛りのクリームをデコレーションしてその授業を無事に終わらせました。これが女だけの学校だったらこう簡単には済まなかったと思います。こんな悪質（？）ないたずらは見逃すわけにはいかないなどと理屈をつけて、生徒指導部あたりへ犯人探しを申し入れてたかも知れません。「男女共学って、こせ〳〵しないでいいなあ」と思ったものです。そういえば、新任のころの男子生徒に対する「恐れ」の気持も、いつの間にやらなくなっていました。

校名が千葉東高校に変わり（校名変更の時には幾つかの名前が候補にあがりました。轟高校ではちょっと落ち着かないし、西千葉が近いから西高校にしてはなどと。東は、日出ずる方角を意味するから発展途上の学校名にぴったりという当時の教育長のすすめで決まりました）、そして新しい校舎ができ上がり、普通科の他に衛生看護科が併設さるようになったころから、男女の比率が三十年代と逆転しました。男子二対女子

一です。このころから、女だけだった食物部にも男子が入部するようになり、男女協力して作った料理を楽しく味わうとか、文化祭の食堂に男子のキリッとしたウェーターが活躍したりするなどという。家庭科本来の目的に沿った光景が見られるようになってきました。

よい先生方、そしてよい生徒たちに恵れて、私も私なりの成長をさせて頂きましたが、三高——東高と二十二年も居座って六十歳の定年を迎えました。昭和五十三年の三月も終わりに近い日の夕方、私は長い年月の間にたまった本やプリントなどを家庭科室裏の焼却炉に運んで焼きました。楽しく過ごさせて頂いた想い出の数々もみんな燃えてしまえと焼きました。ゴーッと音を立て真赤に燃え上がる炉の傍で流れ出る涙を拭くことも忘れて私は立っていました。

東高の九年間

旧職員（国語）　山　泉　　彰

この度、めでたく創立四十周年の記念式典を挙行されましたことを、心よりおよろこび申し上げます。

御校に勤めさせていただいた九年間のご恩と幸せを、あらためて想いおこす次第でございます。

四十七年四月、村田・草葉両先生よりバトンタッチされた畠山校長、釼持教頭に率いられて、田中・鈴木健・江口先生、柴内（現・県教委）・水野（市立稲毛）・中村（同）・小川（故人）の諸先生とともに、はじめて東高応接室で顔合わせした日のことが、つい昨日のことのように思われます。歴史の浅い私の前任校にくらべ、県都に位置する東高は、ベテランぞろいの先生方によって洗練された学校運営がなされ、生徒も実にスマートな感じがしました。はじめて聴く「シャロンの花」のメロディとともに、さわやかな印象をもちました。

勝学年主任のもと、羽生（市船）・鈴木正（千葉）・坂本・

柴内・佐野（千葉商）・椿（佐倉）・鈴木健・曽根（県教委）、の諸先生方とともに一年の担任として東高生活のスタートを切りました。中禅寺湖畔の菖蒲ケ浜・千手ケ浜キャンプをはじめ生徒とともに、色々と楽しい行事の月日を過ごしました。

卓越した学校経営をなされた畠山校長の数々の業績の中で、特に国際交流が挙げられます。我が国の経済力の伸長にあわせて、これからの青年は、どんどん海外に雄飛しなければならない、そのためには早くから国際感覚を身につける必要があるとのご着眼によって、アメリカ・カリフォルニア州・サンタクララ市のブクサー高校との日米交換学生の制度が設けられました。

英語科の松本先生（退職）を中心に諸先生方のご苦労されているのを、何回か傍らで見ていた私が、五十二年七月末、悲しくも急逝された藤本先生にかわって教務部の仕事とともに引き継いだ時は、まったく途方に暮れてしまいましたが、田中・中村両先生はじめ教務部の先生方に手伝っていただき、また、その窓口となって超人的な仕事をなされた水元先生（生浜）はじめ英語科の先生方のお力添えによって、どうにかその責を果たさせていただいたことは忘れることのできない経験でした。この制度によって、幾多の生徒が貴重な体験を持つことができたものと思います。

また、畠山校長が当時、千高教研・国語部会長であられた関係上、斉藤国語科主任（市原）はじめ県下にその陣容を誇った東高国語科の諸先生方とともに、部会事務局の仕事をお手伝いしたことも、私にとっては忘れられない思い出になりました。

さて、畠山校長にかわって、相川校長がご着任された五十三年四月は、五十年より三年間実施された総合選抜制から単独選抜制に移行した最初の年でした。

相川校長は、単独選抜制にかわった今後の東高の将来図を、その深い洞察眼をもってえがかれ、新時代に沿った数々の改革案をたて、次々に実行に移されました。私ども、まさに目を見張る思いでした。通信教育棟の建築、グラウンドの大整備、植樹美化等の外的事業、内にあっては、学検作業の合理化、校務分掌の統廃合など挙げきれません。

この九年間の東高の躍進は実に見事でした。例を、大学進学にとってみても、四十七年、私と入れ違いに卒業していった生徒の国公立（四年制）大の合格者数は、僅か一九名であったのが、三年後の五十年三月には四六名と増加し、そして五十六年三月の卒業生は、実に、一〇七名という数字に至ったことがそれを示してくれます。

東高に入学してくる生徒の資質も急上昇し、県下の最難関校になりました。運動部の活躍も、常勝ラグビーをはじめ、山岳・ソフトなど続々と名乗りをあげています。マンドリン、ブラバンの定演も、市民の注目の的になっています。まさに・文武両道の全人教育の場として、県下中学生の憧れの高校となっています。これも、ひとえに東高全職員によるご指導のチームワークの賜物だと思います。

その躍進気流の中に、九年間の長きにわたって籍を置かせていただいた幸せを深く感謝申し上げて、拙文を終わらせていただきます。

（県立松戸六実高校教頭）

連綿断章

旧職員（国語）菱木道人

昭和四十五年四月の赴任でした。「……粉砕」など校内に落書が残り、正門ではOBの赤ヘル白ヘルがスピーカーをがなり立て、若かった私は彼らに抗議いたしました。勝負は鞘の内にあり抜かずして勝つ、無刀の心境で逃れましたが、西千葉駅では彼らに牽制されました。「激動する七〇年」この年はまた思想の踏絵、三島事件がありました。

新・離任式、生徒総会など全校集会では、浅瀬にあだ波、蛙鳴蟬噪。ゴム輪で紙つぶてが飛び、紙ヒコーキが乱舞。隣をつつく、上靴を脱いで投げる、傍若無人。

生徒会では、目的設定、創意工夫、自主性と責任、ルールを提言すると、「先生は発言しないでください。私たちが楽しめばよいのですから」と封じられました。しかし翌年からは、文化祭はテーマを設け、グループ音楽の発表は全曲を事前に聴いて、発表形態と明るい場所で演奏することを決めました。この中の生徒の一人は大学卒業後、警察官になって成田空港の警備に現在、勤務しています。

教室では、「先生は授業をやるから、つまらない」と詰め寄られた反面、「応用問題も出してください」と自主的な生徒もいました。勉強中心というより、どちらかというと赤点も気にせず落ち着かない雰囲気でしたが、京都大学に合格した生徒もいました。

最初の学級担任は男子組でした。テレビでキック・ボクシングが流行、真空跳び膝蹴りで門歯を折られた生徒が教室内で出、両者の家庭訪問を繰り返しました。これを契機に私は自動車運転免許を取得しました。教習所で三年生の何人かと同席したのは驚きでした。当時は、一年から二年

になる時に、文・理コースの学級編制があり、膝蹴り事件を扇動した生徒は引き受け手がなく、三年間担当いたしました。彼を二年の時、千葉駅で某校の高校生から救出し、以来、私の言うことは聞いてくれるようになりました。

芸能人志望生は二浪と迷いましたが、りっぱに大学を卒業、県立高校教師として活躍し、連絡は現在もしてくれています。この学年のこの学級からは、国公立合格者は二名で、両名とも公立義務制の先生になっています。

OB会が堅固な剣道部は、この年、一年生だけで二一名と多く、朝稽古も好きで、床は清拭され、部室は整然、私の稽古着、袴まで奪い合いで洗濯してくれました。専用道場はなく、旧体育館でバスケット、体操、柔道と共用交替制で、そのため出稽古が多く、土・日は弥生小学校で、少年剣友会の指導に当たり、後で自分たちの稽古をしました。

さて、若い新任者は最初の一年間、また三年間学級担任後の一年間は担任は休みというサイクルでしたが、二回めの学級担任は昭和五十年、大学共通一次実施の声が出、県内は高校総合選抜第一回生が誕生しました。自治医、慶応医、京都府立医大に入学した生徒ですが、律義で真摯、その反対に模擬試験や学校行事を無断で欠席するなど、個性の強い集団でした。文化祭発表も、やや安易になりました。

この学年は、二年から三年になる時、文・理コース学級編制があり、私は男子組、攻撃は最大の防禦なりと先を懸け、夏休み全家庭を訪問し、生徒・保護者・教師、三位一体の共通理解を持ちました。二学期は自学自習の習慣が身につき、自習時間は水を打ったように静粛でした。出張なさる先生方も安心して自習時間に下さいました。この学級からは、一期二期合わせて国公立現役一八名合格、この学年前後から千葉東は急に躍進いたしました。学級運営は二律背反を避け、礼と心の形から出発と確信いたしました。

そして三回め、ほぼ理想的な学級を担任させていただきました。夏休みは全家庭を訪問し相互理解に努めました。礼と和と規律を尊び、与えられた責務を全うし、掃除も実によくやり、日光菅沼キャンプ、修学旅行なども率先して後始末ができました。文化祭では創意工夫を凝らした手製プラネタリウムを発表し、努力を惜しまず、苦楽を共にしチーム・ワークのよさを示しました。この学級にはイカロスならぬ墜落事件などエピソードもありますが、三年生として在籍中でありますので、またの機会に譲ります。道理をわきまえ、明るさ、さわやかさ、インテリジェンス、調

和のとれた社会人の誕生が待たれます。十年後の十一月十九日、クラス会を約し、再会を楽しみにしています。

在勤十一年間。県生活指導部会では事務局員として運営、会計。「新しい高校生活の創造」から「新しい」を取り去り、交通安全教育と性教育の増訂・編集。県ＪＲＣトレセン講師。県国語部会では「房総の文学めぐり」写真、年表等の編集、執筆。県高体連剣道部、学校剣道連盟の運営、会計など、その他。千葉東は事務局の多い学校であります。後を引き継いでいただく方の御労苦を偲びます。

新装成った千葉東の象徴は椿です。「椿」は和字ですが、漢字では霊木の意味になります。椿は万葉の時代から愛好され江戸時代に流行した格式の高い花であります。夏目漱石は「それから」の冒頭で、自我の覚醒の原点を椿の花に見ています。新しい象徴を頂き、勝利と栄光の月桂冠を手中に納めてください。ご発展を祈り申しあげます。

（市立千葉高校教諭）

小さな生命誕生の魅力の虜になって

旧職員（生物）　野村　典平

私が千葉東高校に赴任したのは昭和三十六年でした。ちょうど千葉三高から千葉東高校へと校名が変更になった年でした。以来二十年間に当時の校舎、運動場も全面的に変わり、わずかに当時の面影を残しているのは、旧体育館、看護実習室のみになり、つくづく時代の流れを感ぜずにはいられません。その間学校火災、学校封鎖等思い出されることは沢山あります。私も生物を教えるかたわら、ラグビー部、柔道部、山岳部、野球部と四つの運動系の部顧問として楽しかった思い出、くやしかった思い出は数多くありますが、記念誌編集委員会より私が十三年間昆虫を中心とした生物写真を撮り、たまたま視聴覚の全国自作教材コンクールに出品した作品が入賞した思い出を中心にという注文がありましたので、私事ですが私の思い出を書かせていただきます。

私も生物教師ですので昆虫には興味があり、多少の生態も知っておりました。なぜ昆虫写真を撮り始めたかと云うと、年々自然が破壊されるなかで、ひっそりと生き続ける

小さな生命を保護しようと思い、国蝶オオムラサキの飼育を我が家で始めたのが、私を小さな生命誕生の魅力の虜にしてしまったのです。すなわち飼育中の脱皮、蛹化、羽化などの瞬間をこの目で観察した時の生命の神秘さ尊さを感ぜずにはいられませんでした。これらを忠実にしかも速やかに記録するには写真によるのがいちばんよいと考え、その方法を取りはじめました。しかし実際に仕事にとりかかってやって見ると、その意余って力が足らず、思わざる困難にぶつかり、失敗や徒労の連続で苦しみが多く、くやしい目に会うこともしばしばありました。まず写真の材料となる昆虫の採集から始めなければなりません。お金で買えるものならよいですが、とにかく自分が探さなければなりません。一日中歩き廻っても目的の昆虫が採集できないこともしばしばありました。思い出に残る採集はオオムラサキの幼虫の採集です。毎年十一月から十二月にかけては、食草であるエノキの木の根元の落葉に付着して越冬する幼虫探しです。まずエノキの木を探してその根元で一枚一枚枯葉をめくり探し出さなければなりません。ある時は人家近くで探しているとイヌにほえられたり、道行く人には何かめずらしいものがあるのですかと声を掛けられたりしたこともしばしばありました。それでも幼虫を見つけ出した時の感激は忘れることができません。苦心して採集したものを成虫まで飼育する苦労も大変なものです。

オオムラサキの飼育は木に袋を掛けて行いますが、四月中旬から毎朝五時に起きて世話をしました。たとえ人間に害する昆虫でも、育てて見ると愛情が湧いてくるものです。次に、採集、飼育した昆虫の生態を撮影しなければなりません。数ミリの卵、幼虫などの撮影もありますので撮影は四階の生物準備室で行いました。大体の昆虫の羽化は夜から朝にかけて行われます。必然泊りがけで撮影しなくてはなりません。大体蛹の色の変化などから今夕は必ず羽化するものときめレンズを向けて蛹とにらめっこをしている。真夜中を過ぎ夜明けになってもあまり変化が見られない。腹がすいたので朝食を買いに出掛けた十分位の間に羽化してしまい、カメラをよそにみずみずしい翅がぐんぐんのびてくる成虫の姿を見た時は、その美しさや愛らしさもさることながらシャッターを切れなかったくやしさにじだんだをふんだこともありました。昆虫の種類によっては、そのチャンスが翌年のその時期まで待たなければならないものもあるからです。私が撮影で一番苦心したのはマイマイカブリの蛹化の撮影でした。この虫は土中で蛹になります。このような虫は自分で蛹室を作りその中で蛹化するの

です。それを人工的に蛹室を作り撮影を試みましたが、どうも虫がきにいらないのか蛹化してくれません。このような時など虫の本能のすばらしさをつくづく感じました。数匹試みた中で、一匹が三晩にらめっこの末やっと四晩目の真夜中に蛹化を初め、無意識にシャッターを切った時の感激と喜びはとうてい何物にもたとえようがありませんでした。全身に流れる熱い血と汗とを意識して、はじめてわれにかえるようなありさまでした。このような悲痛なまた痛快きわまる幾度かの思い出の残っている写真を眺めるたびに、今さらながら感無量です。虫たちの写真を撮影して十三年、やっと虫の気持がある程度わかるようになってきたきょうこのごろですから、なおさらその感を深くします。生物生態写真の撮影はシャッターを切る技術ももちろん必要ですが、それにもまして、シャッター以前のチャンスをつかむ直感と「ねばり」とが最も必要なことではないでしょうか。東高校での採集飼育撮影の苦労は今となっていろいろと思い出されますが、ただ虫を愛するという心情と、卵―幼虫―蛹―成虫までの移り変わりの神秘な姿や、虫たちの奇妙な本能のえい知などに深い思い出と感動を覚えています。虫とカメラだけを見つめて夜をあかした晩などは、むしろ、言うに言われぬ楽しみでもありました。自然の片隅でひっそりと生き続けている虫たちの写真を、今後も撮り続けるつもりです。私にとっては身体の一部分になってしまっていた千葉東高をそのために離れたのですから。

（君津農林高校教諭）

全国視聴覚教材コンクール

第一回　アブラムシの天敵　―入選―　昭和四十九年三月二十七日

第四回　マイマイカブリの一生―優秀―　昭和五十二年十月二十六日

第六回　生命の誕生　―優秀―　昭和五十四年十月十七日

千葉県視聴覚コンクール

第十七回　昆虫の変態　―優良―　昭和四十七年

第十八回　国蝶オオムラサキ　―優秀―　昭和四十八年

第十九回　野の花　―優良―　昭和四十九年

第二十一回　生命の誕生　―優秀―　昭和五十四年

トプコン接写コンテスト

ハエトリグモの目　―入選―　昭和四十六年

アケビコノハ　―佳作―　昭和四十九年

クワコガの顔　―佳作―　昭和五十一年

シロスジカミキリの顔　―佳作―　昭和五十一年

千葉東高校の三年間

昭和46年度卒　七里　八州

私が入学したのが、昭和四十四年、早いものですでに十二年、そして創立四十周年おめでとうございます。

三年間の思い出は、数多くあり、また、私の二十八年間の中でもっとも印象の深い三年間でもあります。それぞれ家庭をもち、子持ちになった今でも、連絡をとりあい、つれだって遊び歩くのは、二、三年生当時のクラスメートです。その時の話題の中心は、やはり高校時代のものになります。不思議なもので、毎回同じエピソードを話しあってもその都度新鮮に思え、大笑いしてしまいます。クラスNO1の秀才で早々と上智大学に推薦入学を決め、他の人の受験勉強を邪魔してた高橋准一君、陸上競技大会の花形田中和紀君、芸術家の雰囲気をまったくもたずに芸大を受験した増見保彦君等、個性豊かな連中ばかりで、先生方には大変ご迷惑をかけました。特に担任をしていただいた高橋衍先生、ありがとうございました。

こういった個性豊かな者が集まったのは、私らの年代に限らず、千葉東高の校風である「みんなが、自分の意見を主張しあいながら和を保つ」という自由な空気が育てたものだと思います。その中で「校舎封鎖」というやや脱線気味もありましたが。

それと、人前で一生懸命勉強することを罪悪とする照れがありましたが、現在もありますか？

絶対忘れることができないのが、今でもOBとして参加させてもらっているラグビー部での三年間。

入部のきっかけは、中学の先輩である鈴木さん(四十五年度卒)に「ラグビーのおもしろさはオレが保証する。」と言われ、入部したのを思いだします。入るまでの、泥だらけになってブツかりあう不安は、初めてゲームに出してもらって消えさり、それからはラグビーの魅力にとりつかれ、毎日まっ暗になるまでボールを追い続けたものです。

ラグビー部監督は英語の亀先生。現在も部長で御活躍です。一年生の時担任をしてもらい、それから私の仲人をお願いした恩師です。いつも温和な表情で指導されていましたが、気を抜いた練習態度には、どこから出るかと思えるような声でカミナリを落されたのをなつかしく思い出します。

東高ラグビー部から得た物はたくさんありますがここでは三つだけ書かせてもらいます。一番目は、今では家族ぐるみでの付き合いの友人有岡忍君。

二番目は「苦しくなってから、あと一歩」、つまり、苦しいところでやめれば進歩しない、自分の限界にたえず挑戦せよと言うことです。この言葉は、理解できた今でも実行は難しく恥かしい限りです。

三年間のハイライトは、なんといっても一年生の二月、新人戦での優勝です。名門千葉東高ラグビー部がしばらく優勝から遠ざかっているとOBから聞いていただけに、あの時の感激は忘れられません。翌日の新聞記事の切り抜きは今でも大事に保管してあります。その後は関東大会・全国大会、各予選ともベスト4どまりで、十年以上たった今でも、「もっと練習すればよかったなあ。」と悔しがっています。

先輩の指導のよさ？　で、私が卒業後は、毎年全国大会代表候補までいっておりますが、あと一歩で何度も涙を飲んでいますが、夢はかならずかなえて下さい。

卒業してから年月がたつほど母校にたいする愛着が深まるのは私だけではないと思います。その点ラグビー部に在籍してた私は幸せです。毎年全国大会の予選日程が決まると、OB会より連絡が入り応援にかけつけます。そして自分らの姿を現役の選手の中に埋め込み、自分らが果たせなかった夢を託するのです。ほんとうに高校時代に戻った新鮮な感激が味わえます。現役諸君の負担になってはいけませんが、今年こそは花園ラグビー場へと、祈っております。東高ラグビー部、後輩諸君、ありがとう。

最後にもう一度、千葉県立千葉東高校創立四十周年おめでとうございます。これからの変わらぬ発展を願って止みません。

（住友ベークライトKK勤務）

献血運動の思い出

昭和47年度卒　松永　伸夫

私が東高に入学した昭和四十五年という年は、社会的には七〇年安保の年であり、沖縄をめぐる問題が世論を騒がせている時でした。

東高においても前年に学園紛争（九条問題）があり、入学した時は生徒会がなかったのが今でも印象に残っています。そのような中でスタートした私の高校生活は、入学して一週間くらい後に、当時担任であった西郡先生より、「松永、保健委員をやってくれ」と言われてから、委員会活動、文化祭企画、実行委員長などの活動をやることになったわけですが、今考えてみますと、良くあのようなバイタリーティーがあったものだと自分で感心をしてしまいます。

先に生徒会がなかったことについてふれましたが、私ばかりでなく友人も、生徒会はなくとも、委員会活動、クラブ活動をはじめ、精力的に高校生活をエンジョイしていたように思えます。もちろん、今程ではないにしろ、受験とか進路の問題もあり、悩み多き世代ではあったのですが、その悩みすら行動力の源泉であったような気がします。

そのような高校生活の思い出の中から、いくつかの話しを思い返してみたいと考えます。

話はやはり、三年間ずっと御世話になった保健委員会のことになるのですが、私が保健委員会がなぜ好きだったのかと考えますと、実は公欠が多かったためではなかったかと思います。（諸先生方の御怒りの姿が目に浮かびますが、昔の話と笑ってくださいますように）。保健委員会で思い出すのは、まず、先生方に公欠の印をいただきに行ったことがすぐ浮かんでくるのです。その次は春の健康診断でしょうか。

そしてこれから書こうと思う献血のことになります。私の高校生活と献血の関係は、単に保健委員会の大きな行事だったにとどまらず、同窓の仲間を白血病で失ったことと大きく結びついて、忘れられません。四十周年記念誌への寄稿として、このような話題が妥当であるかどうか考えたのですが、私が高校生活の思い出を語る時、このことをぬきにして語れないのです。

それは、私と同期の多くの仲間が、やはり、海老原君の死と言う思い出を避けて通れないのと同じだと思います。彼と私は生物クラブで知り合い、同じクラブ員であったのですが、本当に心のやさしい男でした。彼のことについて書き出すと、あたえられた紙面ではとてもたりませんので、これを読まれる方には、本当にいい奴だったということだけを御理解いただければと思います。

彼の死に直面をするまで、私にとって、保健委員という職責は、学校方針の中で生徒のやるべき委員会活動の一つであり、ある種の連絡と、定められた内容の消化にすぎず、自ら全力を投入してと言う類のものではなかったように思います。もちろん献血についても同じことが言えます。

私は、献血について、それこそ一人ひとりに呼びかけました。いえ、私ばかりでなく、当時の保健委員の一人ひとりがそうであったと思います。皆それぞれに、生命の大切さ、自分にできることを、自分でやれることを、とそんな気持ちで全生徒に呼びかけていったものでした。それはとりも直さず、友人の大切さ、仲間の偉大さを知りえたからにほかなりません。

そして、献血の日、献血車の前に並ぶ多くの生徒の姿を見た時に、自分のできることを、やれることを、と今でも思える自分がそこにいたのだと言う気がします。その後、厚生大臣だったか誰かよくわかりませんが、表彰状を一枚、献血をやったと言うので東高がもらったことも付け加えておきます。

私は、東高は男女共学の学校のつもりで入学したのですが、当時は女性の数が少なく、三年間男子組に押しこめられておりました。それは男の巣窟と言うにふさわしい、いたって殺伐とした教室でした（現在の三年八組の諸君、教室はきれいですか？）。しかし、そのような教室に学んで、卒業を前にした大掃除の日、猛者共は、何を考えたのか、いつまでたっても掃除をやめず、柱や床はもちろん、ありとあらゆる所を雑布でみがき、三年間何もやらない天井までも、もし良かったら光って下さいと祈りつつ、大掃除をやりぬきました。

もちろん、だから皆さんお掃除はまじめに、などと言う気はありませんし、あの時の猛者共も掃除が好きな奴はいなかったと思います。ただ、どうしても、面白かったと言う思い出として書きたかったのです。

やっと高校生活の思い出の戸をノックできた気がします。これから自分の中の思い出の一つひとつと、酒をくみかわしながら対面をしたいと考えます。

最後に、東高に学んで、東高で嫁さんも見つかりましたので、よかったなと思っております。（鈴木工作所ＫＫ勤務）

空白の二年間

昭和48年度卒　小林　誠

私は中学二年から高校一年まで新潟県ですごしました。そこは山あり川ありそして海あり、夏は強烈に暑く冬は深い雪の中に埋まるという、まさしく田舎そのものでした。そこですごした三年間は短かかったのですが、たくさんの想い出がつまっています。特に高校一年のときに所属した山岳部で得た山のすばらしさは、今でも私をとりこにして離しません。

「起床四時十分。ちょっとたって日の出。金色にはえる槍、穂高がとてもうつくしい。」

これはその当時、北アルプスでの山日記の一コマです。毎日毎日が感動の日々でした、と言っても言い過ぎではないような気がします。頭の中だけの記憶はすぐ白い霧の中に消えてしまいますが、肉体が覚えたことはそう早くは消滅しないものです。

そういう意味では、千葉東高校の二年間は私にとって「空白の二年間」と言えます。高校の想い出といえば、ゴミひとつ落ちていない白い廊下と、広々とした体育館があるだけで、その中で何をやったかと考えても別にこれといって浮んできません。そしてただ学校でも家でも、高校生特有ともいえる悩みに毎日縛りつけられて、厚い殻を自分の囲りに張っていたようです。当時の日記を見ても、「生とは？　死とは？　恋愛とは？」というようなことを自分に浴びせては劣等感を感じているような、暗いイメージのものばかりです。その日記の一節に、「生とは……順調な勉強」と書いてあるに及んでは、それが多少の揶揄を含んでいるとしても、受験に目をギラつかせていた自分にゾッとしてしまいます。

中学時代が何にでも感動する純粋な私を作り、大学時代が社交的で陽気な私を作りあげたとしたら、千葉東高時代は、集団とはいつも距離をおいてひとり静かに沈む私の一面を形作ったといえます。

そんな高校時代にも救いはありました。陳腐でたいへん恐縮ですが、それは修学旅行で京都の町を自由に歩いた一日でした。そこで私は少人数でしか接することのできない、京都の心というものに触れた気がして、とてもすがすがしい気持ちになったのを今でも覚えています。すこし長くなりますが、当時の日記からその部分を抜粋してみます。

自由見学の日は、交通機関は市電と私鉄だけで、あとはすべて歩いた。その代わり意外な収穫があった。その一つは京都人の親しさに触れたことである。市電の車掌に乗るべき電車を聞くと、電車を動かすのを忘れて懇切ていねいに教えてくれる。路上でガイドブックを広げていると、二階の物干し場からおばさんが、どこへ行くの、と声をかけてくれるし、（中略）、観光の町、と言えばそれまでだが、それ以上の何かが彼らの中にあるのではないだろうか。

都会へと無理して背伸びしている千葉の殺伐とした雰囲気と、勉強に追いたてられている毎日の中で、すさみかかっていた私に、そんな京都が新鮮で強烈なくさびを打ちこんだのです。孤独と競争の中で出会ったオアシスは、いつまでも私の心の中に残り、大学受験のとき、真剣に、関西方面に行こうかと考えたほどです。

理科系の道を歩んでいた私が、何の因果か現在はすこぶる人間臭い「教師」という職業に就いています。この職業は情熱、研究心も大切ですが、それよりもごまかすことのできない自分の「生きざま」みたいなものが如実に現れてしまうもののようです。ここで最も必要とされる生徒との人間関係をもうひとつうまく保つことができない自分を見

つけることがたびたびあります。授業の進め方や話術は年月がたてばそれなりに上達もしましょうが、人格などはそう短期間では変わるはずもありません。人になんとなく冷たく接してしまったり、他人のことよりも自分のことを優先してしまうのは、高校の空白の二年間が大きく起因しているのではないか――こうして改めて高校時代を振り返ると、ふとそんな思いにかられるのです。

大学も終わりに近いころ、私は教育実習のために再び東高にお世話になりました。校舎は相変わらず隅々まできれいでしたし、生徒たちも礼儀正しく、物わかりのよい人たちばかりでした。こんな環境の中で私が終始気持ち良く実習を続けられたのは言うまでもありません。文化祭にも行きましたが、音楽や映画などの技術的な進歩には目を見張るものがありました。ところが今思い返すと、そんな生徒たちの中に第二、第三の私が伏せ目がちに座っていたようで、うす気味悪い感じがするのは、気のせいなのでしょうか。

（千葉市立幕張中学校教諭）

サッカー部・生徒会・三年三組

昭和49年度卒　木口　清英

入学から二週間ほどして、私はサッカー部に入部しました。当時、サッカー部の本格的な練習は、他の部のそれのように放課後に行われたのではなく、毎朝七時から始められていました。それは、同好会にもかかわらずこの前年度に関東大会出場を果たした実績が評価されて「部」への昇格が認められた際、グランド使用に関して既存の関係各部より示された条件でもありました。

元来朝を苦手としていた私にとって、この朝練は私の入部を二週間躊躇させるには十分であり、また入部後も文字どおり大変な高校生活を強いる最大の源となりました。特に運動部に於ける一年生の地位は選手兼雑用係です。練習の始まる七時ちょうどまでには、ボール全部に空気を入れ、ゴールを移動させ、ネットを張り等の仕事を終了させねばなりません。ですから通学距離の比較的短い私でさえ、五時半起床、六時五分の始発バスに乗り、六時半には部室に到着しているという毎日です。

また他の部がグランドを使用している放課後は、ボールが蹴れないのですから、練習は専ら走ることだけでした。校舎の周り、千葉公園は言うに及ばず、天台の総合運動場まで走りに行きました。ただ走ってタイムを計る練習は、ある意味では朝練よりも苦痛でした。走りながら、なぜこんなことをしているのかと思うこともありました。走り終

わるとグランドに戻り、片隅で基礎トレ、筋力トレ、とっぷりと日が暮れたころ、部室に帰るとボール磨きが待っています。帰宅時間は八時前後になるのが常でした。

母は、食事と入浴と睡眠だけのために家に居る私を見て「下宿人」と呼んでいました。実際、日の出の遅い冬などには、我が家の玄関が太陽に照らされた姿を見ない日が丸一週間続くことがよくありました。

こうしてみると、なぜ退部しなかったのかと思うほど、苦しいサッカー部での生活でしたが、不思議なことに今では微笑みながら思い出せます。勿論楽しく、嬉しい出来事も沢山ありました。けれどもそれらは、今ここで文字となって並んではくれないのです。それはもしかしたら、現在の自分が苦しさにぶつかっていくことを恐れてしまっているからなのかもしれませんが——。

二年生。部では後輩もでき、主導権も三年生から譲りうけ、実質的に最も活動できる時期。クラスも文系と理系とに編成し直され、法学部への進学を考えて文系を志望した私は三組になりました。

そしてこの年、私は生徒会会長に選ばれました。このころ世の中はいわゆる七〇年安保の余波が続き、私たちが入学する前年ころにはこの波は千葉県の県立高校下で最も早く東高に及んだのです。その結果、東高の生徒会、とりわけ執行機関が全くその機能を停止させ、私たちが一年生のときには文化祭もなく、予算も未配のままでした。

当時の総会に次ぐ議決機関である評議会（各ホームルームの評議員で構成）では、この事態を打開するため、生徒会会則の改正を連日のように審議していました。そして大筋として、執行機関の代表者不在をなくすためには、その候補者を議決機関に決定させるという案でまとまる方向を示し、現在のような代議会—本部会のシステムとなったのです。関連するその他の細則はとりあえず傍らに置き、新しい生徒会を発足させることが急務でした。

一年生のころから評議員として評議会での審議に加わってきた私は、新生徒会第一期の書記として課された仕事にとり組むことになりました。しかし半年の任期では、目の前に累積された過去一年余の仕事はいかんともしがたく、その年の後期の役員にはどうしても前期の役員の中から数人が残らねばならない状況となりました。

そんなわけで、私が会長を務めた第二期の生徒会は、半年のうちに当該年度の予算を配り、初めての文化祭も実行するという多忙な活動を余儀なくされました。予算折衝で各部の代表と口論したり、総会のための報告書の作成に日

曜の夜九時近くまでかかったりしました。サッカーの練習と並行させていたわけですから、我ながら当時の充実した高校生活ぶりには感心します。

三年生になり春の大会を最後にクラブから引退すると、級友たちとの交際が一層深まりました。我が三組は個々人が非常に強い個性を持っていながらも団結力が強く、かつ活動的なクラスでした。例えば七月七日には誰となく笹や折紙、はさみ、のりなどを持ち寄り、いつの間にか短冊をつけた笹が廊下の窓に掛けてあるという具合です。男女のつき合いにも妙なわだかまりがなく、そのせいかどうか、卒業七年目の今年に入り夫婦が二組も誕生しました。

ふりかえると私の周りにはいつも友達がいました。そして現在なお私は彼らとの交わりの中にいます。つまり私にとって東高の思い出は、私と私の友達との歴史に外なりません。彼らが生涯の友達である以上、これらの記憶は常に私の胸の中に生き生きと輝やき続けるでしょう。私にこんな素晴らしい思い出を残してくれた母校よ、ありがとう！

（県立市川南高校教諭）

私と書道

昭和50年度卒　高橋　敏行

学生生活を終え、書道の教員としての生活も早や一年半が過ぎました。その間、無我夢中でやってきて、失敗もたくさんしましたが、生徒たちといろいろなことを話していると、本当に教員になって良かったと思います。

さて、私は現在、高等学校の書道の教員をしているわけですが、中学、高校時代の私を知っている人は、私が書道の教員をしているとは夢にも思わないでしょう。なぜなら中学、高校生活のほとんどが野球だったのですから。野球しか頭になかった私が書道を教える。自分でも不思議に思うことがあります。それでも自分のこれまでをふり返ってみると、書道をやる環境にいたのだと思います。

まずは私の父。非常に日本の伝統を好む人で、今でも会社で行事があると筆を持って頑張っています。この父にさんざん怒鳴られ、泣きながら書き初めの宿題をしたこともありました。小学一年の時のことです。

それから次は小学校の担任をして下さった先生。六年間で三人の先生が担任でしたが、三人とも字のきれいな先生で、特に三年の時の先生は、今も筆を執っていらっしゃい

ますが、この先生のおかげで、本格的に習字をすることになりました。競書雑誌の課題を書いて出す。作品が良いと、級があがるというもので、四年間で三段までとりました。もう少しのところで特待生になれなかったのが残念です。

三番目は中学の社会科の先生。この先生、実は書道部の顧問の先生で、ある日授業が終わってから、「高橋、書道部に名前かせや。」と言いながら、すでに私の名前を記入してある名簿を見せてくれました。もちろんこの時は野球をやっていましたから、とりあえず名前だけ入れてもらい、展覧会の時だけ作品を出させてもらいました。それでも、運の良いことに、三年の終わりに体育館で全校生徒の前で校長先生から賞状をいただけたのは最高の気分でした。

そして最後に、高校時代。安塚正明先生との出会いが私の人生を大きく変えることになりました。正直言って、高二の二学期中ごろまで私は大学に興味もなく、いきたいとも思わず、父が機械関係の仕事をしていたこともあって専門学校へいくつもりでした。しかし高一の時の書初展と、高二の時の某大学主催の全国展と二度入選したこと、そして安塚先生の何事に対しても情熱的でひたむきな姿にひかれて、書道の教員になろうと決心したのです。野球しか頭になく、芸術では音楽をとり、必修クラブでしか書道をとらなかった私がです。

このような、いろいろな先生との出会いの中で、少しずつ書道の方へ私は導びかれてきたのです。人それぞれにいろいろな出会いがあります。それがその人の一生を大きく変えてしまうこともあります。そう思うと、人との出会い、そして、それをとりまく環境というのがとても大きな要素であるとあらためて痛感します。私にとってはその二つの大きな要素がうまくからみあって、ここまでこれたのだと思います。何一つ不自由なくここまでこれた私には、これからが試練です。自分に甘えることなく、精一杯生徒にぶつかっていく気持ちを忘れないで頑張りたいと思います。若くして逝ってしまって夢を果せなかった私のおじ、そして、私が教員になれたことを報告できぬうちに他界してしまった祖父の遺志にそむかぬように、ますます努力していきたいと思います。

さて最後に私にとっての書道ということですが、これは一言で言って「書道＝スポーツ」ということになります。自分の体調を絶好調にし、筆先に全神経を集中させ、一気に作品を仕上げることは、コンディションを整え試合にの

ぞむのと同じなのです。作品が大きくなればなるほど、この気力と体力が必要になるのです。幸いこの気力と体力というものを私は、野球の中から得られました。私の書道には野球というものが不可欠の要素でもあるようです。

今はまだまだ勉強不足で、生徒たちにとってわかりやすく楽しい授業というものをしてあげることはできませんが、これまで得てきたものを大切にして頑張っていきたいと思います。

（県立四街道高校教諭）

777の場

昭和51年度卒　平野　弘之

創立四十周年おめでとうございます。同窓の皆様と同様喜びにたえません。そしてそれを如何に文章で表現するかで、今私は困り果てています。現在私は、この種の文章とは無縁とも言えるものに囲まれて生活していますので、諸兄諸姉の玉稿を汚さぬものを書けそうもありませんが、そこは皆様に御容赦をお願いすることとして、ここに、四十周年を記念して、私が過した高校生活を振り返ってみることにしました。

入学して間もなく、当時地学を教えられていた佐野先生に巧みに説得されて、瞬く間に生徒会会計に選出されてしまったのですが、今にして思えば、ここで私の高校生活が方向付けられた気がします。そうこうして、生徒会予算案作成のための各部各委員会との折衝日程などの校内放送を依頼するために、会計の職務上放送室へ日参しているうちに、総務委員会（現放送委員会）の先輩方に気に入られ（？）て、みごと（？）総務委員会へと天下りの運びとなりました。この委員会は、「委員会」と呼ぶより、遙かにその仕事の性質上、放送室に毎日通わなければならないので、各委員との交友関係は、他の委員会と比べて、親密なものでした。

朝登校すると教室より先に放送室へ、そして放課後も放送室へと、次第に放送室を学校での生活の場とするようになって行ったのです。

「今日おまえの弁当、カレーピラフだっただろ？」
「なんでわかる？」
「ぼくの弁当、肉じゃがだったもん」
「例の対数の問題解けた？」
「あの人が、カレーピラフのときは、どうも私、解けないのよね」

ここにはある種の奇妙な連帯感を持った人々が集まって来るように思えました。こんな放送室に、「スリーセブン

(777)」というテープレコーダーがありました。なにぶん老朽化の兆があり、たびたび修理しながら使用していました。かなり重くて、番組の効果音を録るためにコーラのケース運搬用の台車に積んで校内を歩き廻ったこともあります。777は放送室の主のような存在で、毎年このような多くの人々の顔を観てきたようです。

さてここで、私の「放送室物語」の主人公たちを紹介しましょう。私と出会った順に、「ネコ」と呼ばれていた佐藤文男君、「モリカリ」の森川裕君、「シラケのアベ」の阿部雅孝君、その他数限りなく変わった主人公たちの集りのような気がします。ここに名を記した三人と私は、第二十三回NHK杯高校放送コンテスト全国大会において、一席の、「文部大臣賞・NHK杯」を受賞しました。文部大臣賞の賞状が、橙色に近い黄色で、下部に「大蔵省印刷局」と刷り込まれていて非常に大きかったことと、NHK杯の見た目より重かったことは、今でも鮮明に思い出されます。しかしここで特記したいことは、この受賞は番組に対してだけではなく、777と共に過した高校生活に対してであると、今でも思っていることです。「三無主義」とか言われて、ただなにげ無く登校して、定刻の電車に飛び乗って帰って行く高校生活ではなく、自分たちなりに共に考え学んでいった成果がある意味で認められたのだろうと思います。おそらく、スタッフの全員が、自分の人生にとって貴重な一ページが、「受賞」だけではなく、それを誘い込んだとも言える放送室という場での高校生活であると答えるでしょう。私たちは、人生という、限りある自分に与えられた限りある時間を本当の意味で費やしたといえる気がしています。その記念碑が「受賞」なのです。さらにそれには、数多くの方々、先生方のお力添えがあったことは言うまでもありません。

私たちは普通、校舎に人気(ひとけ)が無くなってから録音を始めます。それは何よりも、私たちの心が雑音を嫌っていたからです。録音はその番組に命を吹き込む時なのです。それだけにその時の緊迫感は想像を絶するもので、各個人個人が一本の槍のようになっていました。ある番組制作時のことです。病人が苦しむ声の効果音がどうも現実みが薄いように聞こえてしかたがなく、録り直しの決定をしました。その時、普段無口なスタッフの一人が、急にスタジオ内に横たわって、折り畳んであったスチール製の椅子を体の上に乗せて他のスタッフに踏ませたのです。最初は笑ってしまった私たちは、その発せられた「苦しむ声」の現実みに驚き、急いで録音したことがあります。今となってはまっ

たくの笑い話となって語り継がれています。こうして777と同居していた当時のスタッフたちは、昨年も再会を喜び合うかのように私の所へスキーをしにやって来ました。

いやはや窓の外は知らぬ間に雪化粧をした山々が見えるというのに、何時もながら拙い文章をしたためてしまったようです。最後になりましたが、同窓の皆様のより一層の御発展を信じ、御多幸を祈って筆を擱くことにします。

（山形大学）

私と千葉東高校

昭和52年度卒　伊井　憲一

私の高校の合格発表は一風変わったものでした。というのも、市立千葉高校で自分が千葉東高校へ進学することを知ったからです。

私の高校受験の年に（三年で終わってしまいましたが）、千葉県では総合選抜制度、いわゆる学校群制度が始まり、千葉東、県立千葉、千葉女子、千葉南、市立千葉の五校を一つの学校群とした入試制度が実施されました。したがって私たちの学年はこの総合選抜制度の第一期生となったわけです。受験生は合格定員内で各校に振り分けられ進学する高校が決められたのでした。こうして私の合格発表は、受験会場であった市立千葉高校で行われ、発表を見るまでは千葉東高校へ行けるのかどうかわからず、掲示板の自分の名前の横に「東」の文字を見た時は、合格の喜びよりも、ホッとしたのを今でも覚えています。

ところでこの総合選抜制度が実施されなかったら、私たちは違った先生や仲間たちと高校生活を送ったであろうことは想像に難くありません。この制度が良かったかどうかは別としても、このようなある種の偶然さが、私の千葉東高校での三年間の始まりであったことは、現在考えるとても不思議に思えてきます。つまり各校への振り分けという偶然性を経て、現在知っている先生、先輩、友人たちに出会ったわけです。これも人間のめぐりあわせというものだったのでしょう。かといって私たちの学年がそのことを特に意識していたわけではなく、自分でもこの文を書いて始めてこの出会いのことを再認識した次第です。ともあれ、ちょっと変わった私の高校生活のスタートでした。

さて私の高校生活といえばもう五年も前のことで、「早いものだな」というのが実感です。そして今では、凝縮された三年間の思い出が私の記憶の中にあります。

入学式の時には、あの「シャロンの花」で始まる校歌を聞いて、いささか驚きを感じたことを覚えています。最初

は他人だったのに時がたつにつれて打ち解けあったクラスの仲間たち、キャンプや修学旅行、苦しかったクラブ活動、月並みな思い出だな、と思いながらも、私の高校時代の一ページだったのです。また友人と二人で尾瀬へ行き、尾瀬沼の見えた瞬間の喜びも忘れられません。クラブ活動を途中でやめたことも、当時は真剣に考えた結果でした。受験のための勉強なんかやめようと思った時もありました。厳しかった先生、時に退屈だった授業、窓から見える千葉の町、冬の西千葉駅、笑っている先生の顔、テスト、遅刻しそうになって走り抜けた校門、旧体育館での剣道、東雲祭、怒っている友達、図書館の本、ひとつひとつが私の高校時代のワンシーンだったのです。

また時には社会の矛盾を感じ反発を覚えたこともありました。自分が流されているなと思いひどく焦躁感を覚えた日々、自分自身がなさけなかった日々、恋した日々、他人を羨望した時、自分の将来について悩んだ時、歓喜した時、泣きたかった時、我を忘れて夢中になった時、……今にして思えば他愛ないことでも、当時は真面目に考えていたことに苦笑することもありますが、そのすべてが私の高校時代だったのです。

現在、私は大学で化学を学んでいますが、その動機も高校時代に生まれたものです。いろいろな意味において自分を変えた時期だったような気がします。最高の高校生活だったと、うぬぼれるつもりはありませんが、少なくとも自分なりにやったと思っています。それに自分には千葉東以外の高校生活はありえません。はたから見れば平凡な高校生活でも、自分には貴重な三年間だったと思います。

現在、私は千葉東高校とは、あまり縁のない人間ですが、新聞等で「千葉東」の文字を目にすると、喜びのような、また他校に対するライバル意識のようなものを感じます。このように千葉東高校を意識することは自分だけではなく、卒業生なら誰でも感じる気持ちではないかと思います。たとえ同じ世代でなくても、四十年間にわたって、千葉東高校という同じ空間を共有した人々が、同じように母校として千葉東高校をとらえることは、不思議なことでもあり、素晴しいことだと思います。この四十年間に千葉東高も大分変わっているはずです。けれども学校の前を通り過ぎれば、自分がかって高校生であったことを思い出し、いろいろと感じることは同じでしょう。そんな心のつながり、学校の歴史が、もう四十年も続いている、そう考えるだけでも、人と人との絆が存在することが素晴しいものに思え、千葉東高校があらためて自分の高校だと思えるので

す。

二十分の三の重み

昭和53年度卒　足立　暁子
（早稲田大学）

六年前のその日は確かセーラー服だけでは寒さを感じるような秋も深まった夕暮れだったと思います。中学三年だった私は、地図を片手に東高へやって来ました。生れた時から千葉市に住みながらどこにあるかさえ知らなかったのです。西千葉駅から歩いて十分、この十分がなんと短く感じられたことか。見知らぬ学校を一人尋ねて行く不安と期待で夢中でした。商店街の雑音がとぎれ、気がつくと校門の前でした。もう既に日は落ち、あたりは暗く、運動部のかけ声だけが校庭から響いていました。そのころの東高は校舎への通路の両側や塀にそって植えられた木々に守られるように建っていました。常緑樹の深い緑の落ちついた姿は、今でも鮮やかに脳裏に甦ってきます。校門から見ただけで十分東高というものを感じることができました。だからその時は校門から眺めただけで満足し、帰り道ではもう「この学校にきっと来る」と心に決めていました。

それから三年間の高校生活、締めくくりの卒業式、私は自分の選択が間違っていなかったことを確信しました。クラスで、生徒会で（私はクラブには入らず本部会の仕事をしていました）、受験で、私は自分の思うとおりに行動して充実していたと思えたからです。周囲から「進学校」と呼ばれながら進学校らしくなく、ゆとりのある雰囲気の中での恵まれた三年間でした。

入学して最初の夏、菅沼でのキャンプ。やっと慣れ、まとまりかけたクラスを一層結びつけたのがこのキャンプでした。高原のおいしい水、ランプと薪の生活、迫ってくるような星空、どれも都会っ子といわれる私たちにとっては新鮮に感じられました。それになんといっても「クラスのみんなと一緒」という特製スパイスが効いていましたから。

また大きな収穫として、友達の別の側面を見ることができたことがあります。思いがけない優しさや思いやり、あるいはエゴイズムを発見して、驚いたり悲しんだり。相手を理解することのむずかしさを痛感したのです。

そして本部会役員選挙。この時から一年間二期にわたって、会計、副会長として生徒会の仕事をすることになりました。予算の作成、会費の値上げ、文化祭、会則改正の検討など仕事は、山積みしていましたが、大多数の生徒が無関心であるためになかなかはかどりませんでした。会議一つにしても委員の集まりが悪く流会になったり、私語が多かったり

でイライラすることもたびたびでした。また上級生や先生方と意見が対立し苦しんだりもしましたが、人それぞれ、とりわけ男女間の考え方、価値観に大きな違いがあることがわかり、自分自身について振り返ってみるきっかけとなりました。一歩さがって相手の意見を聞く余裕を少しずつでも持てるようになったのもこのころだったと思います。

このように書いてくるといかにも自分一人でがんばってきたように思われるかもしれませんが、決してそんなことはありません。常に先生方や友人の援助がありました。東高の先生方は、生活態度（たとえば、あいさつ、遅刻など）にはきびしいのですが、ホームルームや課外活動は全く生徒の自主性にまかせ、やりやすいように配慮してくださいました。もちろん横道にそれそうになればストップがかかりました。特に心に残っているのは、入学してまもなくのこと、教務室内でコートを脱ぐということを知らなかったわけではありませんが、校内ではあまり気にしていなかったのです。礼儀さえ充分に身につけていないと言われながらも注意する人のない私たちです。こんな小さなことにまで気を配り注意してくださっていることに驚き、また嬉しく思いました。

また放課後、薄暗くなるまで先生と話し込むこともありました。堅苦しい相談から、クラスの中で起きたちょっとしたこと、友人のこと、ボーイフレンドのことなどの雑談まで熱心に聞いてくださり、まさに「at home」という言葉がぴったりという感じでした。一方、受験が近くなると、休日返上で朝八時からの学習会、日常の細かいアドバイス、能力偏重でない個人の意志を尊重した進路指導など、先生方の熱の入れようがひしひしと伝わってきました。一般に「つらく暗い受験生活」とされているのですが、今振り返ると、それなりに充実していたように思います。夏休みに家にいては怠けると学校に集まり、励まし合って勉強したり、競争して一冊の問題集を解いたりなど、苦しい中でも結構楽しんでやっていた一方、受験勉強に支配されている自分に疑問を抱いたりもしました。そんな時、私は、将来のため、望む仕事をするためのひとつのステップなんだと考え歯をくいしばりました。そして大学三年のいまになって、高校生活がいかに大きな変化を自分に与えたかが少しずつわかってきたような気がします。つらかったこと、楽しかったこと、すべてが今の私の基礎になっており、二十年の私の人生の中でずっしりと重い東高の三年間です。

（千葉大学）

私にとっての高校生活

昭和54年度卒　今井　恵子

私が東高に在学中は、大袈裟に言えば、制服と体操服と寝間着しかいりませんでした。いわゆる私服というものはほとんど必要のない毎日だったのです。

何か運動をしたいと思い、高校に入ってすぐにソフトボールクラブに入部しました。入部当初の話では、適当に休みもあり、そう練習もつらくないとのことでした。でもまあ、どのクラブでも部員を勧誘する時には使う手なのですね。日がたつにつれて、だんだんと様子が見えてきました。とにかく私の一日は、まず制服を着て朝家を出る。学校に着いて体操服に着替えて朝練（朝の練習）。授業中はもちろん制服で、それが終わると放課後の練習。家に帰るころはいつもまっ暗で、家に入るととたんに疲れが出て、食事をする気力もなく寝間着になって眠ってしまう。本当にこのような毎日でした。休みの日も、たいてい午前中は練習があって、試合があると一日つぶれてしまいました。

今思い出しても、よくあんな生活ができたものだと思います。私にとっては、高校生活をふり返る時、部活動なしには考えられません。常にクラブというものが私から離れることはありませんでした。それほどまでにクラブに打ち込んでいたというよりは、クラブが私につきまとっていたという感じさえします。いつも何となく疲れていました。授業中は眠たくて、空を見ながら「あっ、雨が降りそうだ。降ればいいな。練習が休みになるかもしれない。」などと、ボーッと考えていると、先生に指されてドギマシてしまったこともあります。球技大会などの学校行事があると、練習はたいてい休みになってうれしいのですが、そのうれしさのあまり、エネルギーを使い果たしてしまうと、翌日の練習ではミスばかりで、顧問の先生にこっぴどく叱られます。こういう時は、つくづくクラブをやっているのがいやになりました。中でも私にとっての一番の悲劇は、定期試験の前後です。「勉強とクラブの両立」などと言いますが、完全に両立できた人などいたのでしょうか。私も試験で悪い点だけはとりたくないと、部活動の停止になる試験前一週間は、まじめに勉強しました。けれども、なにしろ普段の勉強量がゼロに等しいですから、一週間ですべてを復習するのは、なかなかハードでした。ただでさえ眠らないともたない性質なのに、睡眠時間が減るので顔色も優れず、試験最終日の最後の時間終了のチャイムが鳴ると、皆は喜びの声をあげるのに、私はというと、練習が

また始まると思うとゾーッとして、家に帰って眠りたいと思いつつ暗い気持ちで部室へと行ったものです。

このような思いをしてまで部活動を続けていたのは、どうかしているようにも感じられます。ソフトボールがよっぽど好きだったというならともかく、そうでもなかったのですから。事実、やめようと思ったこともあります。でも、私を支えてくれたのは、クラブの仲間でした。いつも一緒に苦しい中をがんばってきた友達。自分を信じてくれている仲間を捨ててまで、やめられませんでした。私にとってこんな強い支えができたのも、クラブがあったからこそです。辛くても、皆で何かひとつのものに向かって努力して、とにかく一生懸命だったから、普通の友達よりももっと大切な存在ができたのでしょう。

早く部から解放されたくて、引退を待ち望んでいましたが、最後の試合に負けて、もうこれで引退するのだと思うと何とも言えなくて、涙を流して泣いたのでした。それこそその時は、これで自分の青春も終わりだ、などと思ったのを今でも覚えています。それほど、自分にとっては大きなものだったのです。

いやいやながらも、最後まで続けることができましたから、失ったものもありますが、得るものは大きかったように思います。肉体的にも精神的にも、どこかひ弱なところのあった私ですが、両方ともそれなりに少しはたくましくなりました。これが私にとっては一番良かったことです。以前の私でしたら、もろく崩れていたであろうことも、何とかのりきることができているようです。大学に入ってからやっとそれに気づきました。

とにかく、これからの人生を含めたとしても、私にとって東高での生活は、大変強烈な印象で思い出されることでしょう。そして、部活動を除いてしまったら空白も同然なのです。おかげで、今でも日々、大学のサークルでのトレーニングで汗を流しています。女子の体力のピークは、十四―十七歳という体育の日の新聞記事を見て、ガックリし、ソフト部の友達に「まだ走ってるの。」などと言われて、私は異常なのかしらと思いつつ……。それでも、私の体の中では高校のころの生活が習慣化しているのか、今では苦しい練習が快感になりつつあるのですから、不思議なことです。

私は、高校生活に悔いはありません。あらゆることを精一杯やって、あっという間に過ぎ去った三年間でした。こんな生活のできた東高の、明るく伸びやかな校風を大切にして、一層飛躍されますことをお祈りしています。

（早稲田大学）

御霊安かれ

故 山口道夫先生
北海道生まれ。
東京教育大学卒。
長生高を経て、昭和36年4月本校に着任。通信制を経て、理科（生物）担当。43年5月8日肝臓癌にて死去。享年35歳。

一瀉千里（故山口道夫先生に捧ぐ）

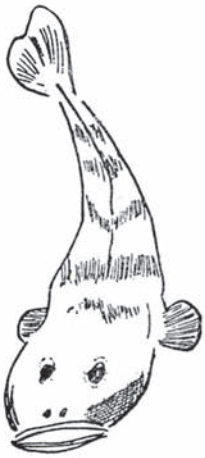
須賀　賢悟郎

下のハゼのカットは、通信制の機関紙《東高通信》五十九号（四十一年）に山口君が描いたものです。頭のてっぺんについているハゼの目玉は比較的小さいが、山口君の目玉は大きくギョロッとしていて、口も大きく、背は高く、口角あわを飛ばして大声でしゃべる。生物が担当で、白い作業衣を着て大股で歩きまわり、いかにも精力的、積極的。人に圧迫感を与えたかもしれないが、彼はまだ若かった。彼のファイトに満ちた前向きの姿勢の中に、私は何か未完の大器を思わせるものを感じたのでした。

ハゼは貪欲で餌と思えばなんでも食いつくといいます。彼もハゼに似てその意欲は旺盛で、今私の手元にある四十年から四十三年までの資料だけでも次のとおりです。

千葉県高等学校教育研究会発行の高校理科第十号に「千葉県木、イヌマキ」（四十二年）。東高生物教室編さん「生物実験書」（四十三年）。通信制の機関紙《東高通信》に執筆したものに、「雌雄異株と光周性」、「成果のあった学習会研究交歓会」、「木村君の京大入学を祝して」、「おもしろい農業をするためには」、「表紙は語る〈ベニオキナエビス〉」、「表紙は語る〈イヌマキ〉」、「表紙は語る〈なの花〉」、「ゆかたと夏の夜」、「己にかつ」など。それに、毎月ワラ半紙一枚のガリ版刷りの学級新聞の発行。彼自慢のプラスチックの昆虫標本の作成。高教組中央執行委員として千高教組新聞の発行……ときりがありません。

彼は酒が好きでした。京成電車を利用して同じ方向に帰るので、乗りかえ駅の幕張では一しょによく飲みました。我々は飲み屋の名前は勝手につけて呼びました。曰く、「紅衛兵」、「ミェちゃん」、「世界一」。幕張の町並みもずい分変わりまし



たが、いまも歩くと山口君の匂いがします。ほどよく酔いながら彼は言いました。「こういうレバーのもつ焼きを食べていればね、肝臓癌にはならないんだ。へへへ……」と、とぼけたように笑っていました。

そう言った彼自身が、東高の通信制から全日制に移って一年そこそこで肝臓癌で死んでしまいました。未来の大校長、組合をこよなく愛した山口道夫。享年三十五歳。新緑の五月でした。

落涙の如くつぎつぎに花が散り
吾も嗚咽をしのび得ぬ五月　＜山口由幾子＞

息子の死を歌人の母親はこう歌いましたが、八十三歳で今なお健在です。

故 藤本明宏先生
広島県生まれ。
広島臨教卒。
東金高、長生高、千葉工高を経て、昭和41年4月本校に着任。
理科(物理・化学)担当。52年7月24日胃癌のため死去。享年53歳。

故 藤本先生の想い出

青山 克

藤本先生と初めて顔を合わせたのは昭和三十一年の前任校での挨拶のときでした。長身のやや面長ともいえる人から、理科の藤本です、と自己紹介され、そのなまりから広島一中出身とわかり、出身校こそ違え、小中学校を広島で過した私にとっては特に親近感を覚えました。以来前任校で十一年間同室で机を並べ、先生が東高に転任されて一年後、私も縁あって東高にお世話になり、物理、化学と室こそ別れましたが、同じ理科教員として十年間親しく接することができました。同室で同教科、また同じ学年のルーム担任として数回、本当に長いつき合いに、お互いによく、若い時のことは言わないことにしようと笑ったものです。

先生の笑みをたたえながらの人をそらせない静かな語りかけ、あいずちは、決して私たちに不快感を与えず、いつも温かい雰囲気をただよわせていました。だから私もよく、藤本さん、ここはどうしたらよいのだろう、と教えを頂戴したものです。ご自身はどんな時でも高ぶらず、物理化学を専門に学んでおられましたが、東高では専ら物理を担当されました。日ごろより実験を重要視し、器具の充足に気を使っておられ、空き時間にこつこつ一人で実験室で組み立て等なさっていました。

長い間のつきあいにはさまざまのことがありました。お若いころは、酒宴では裸になるのが好きで、裸踊りや裸で

欄間にぶら下ったりされまして、みんなの拍手をあびたものです。また理科の人たちと船橋や千葉で宴を開いた帰りに、一寸待っててね、と横道にそれるので何をしているのかと思うと、いや、うちの女房のみやげにね、と一折の箱をたのしそうに振った姿が目に浮びます。どのような時にでも心から奥さんや子供さん方を思いやっていた方でした。生徒にたいしても父親のような愛情をもたれて接せられた方でした。

教務部長となられてからは益々学校の中心として、教務やＰＴＡ関係等のお仕事を一手に受持たれてました。各仕事が円滑に動いたのも先生のすぐれた人柄の賜ものと思います。

手術後は人間味を更に増され、植木やら鉢物金魚等趣味も広く、碁も本当にたのしそうに、勝負にこだわらず、さらっとした感じで、勝てばラッキーだよと言い、負ければ駄目だねー、と一つ一つをかみしめるように話されておりました。

本当に素晴らしい、教師として人間として、いつまでもいつまでもおつき合い願いたかった先生でした。

故 藤本先生に捧ぐ

第二十回卒業生　板倉　茂

光陰矢の如しで、千葉東高を卒業して早くも十三年余りになりました。我々が在学中に工事を始めた鉄筋コンクリートの新校舎、そして卒業後、新体育館やプールができ、学校全体の趣きも全く変わりましたが、当時のころを振り返ると多感な高校生活時代が走馬燈のように思い出されます。

一年生を終了し、理科系と文科系に分かれる二年生に進級した昭和四十一年四月、藤本先生は千葉工業高校から赴任され我々二年七組の担任になりました。朝礼の時に赴任された先生の代表として挨拶されましたが、その時の印象は物理の先生らしく、物静かで実直そうな感じを受けました。実際、思索的な学究肌のタイプでした。授業は時々実験を取り入れ、理論の検証を重視し、基本的な理解を第一義にしたように思います。試験ではかなり高度な問題も出したりしましたが、「基本が大事だよ」とよく言われていたのを思い出します。

先生は進学校にありがちな、勉強だけできれば良しとせず、物理クラブの顧問をされ、文化祭にも生徒に交って楽

しそうにクラブ発表の準備をされていました。体育祭の時も、クラスの仮装行列の準備で皆がワイワイやっていると、顔を出しては手伝ったり、アイデアを出したりしてくれました。二年生の夏休みには、親睦とレクリエーションを兼ねて、当時の剣道と柔道用の体育館で一泊のクラス合宿をしました。昼は球技大会を、夜はゲームをしたりしました。記憶が定かではありませんが、調理室を借りて皆で料理を作って食べたように思います。今となっては懐しい思い出です。

三年生になると進学が大きな問題となりましたが、先生は、基本的には我々生徒の希望と自主性に任せるという主義でしたが、いわゆるすべり止めの確認や、浪人してもいい覚悟があるかどうか細かく気を配っておられた記憶があります。残念ながら私も含めて半分以上が浪人しましたが、予備校の帰りに先生に会いに行くと、「〇〇君は元気でやっているか」とか、「□□君は△△大学を目指して頑張っているか」というように、クラスの友人たちの近況をよく尋ねられたものです。

卒業後三年程は、年賀状や暑中見舞を出しました。その時は必ず返事を戴きました。この原稿を依頼されたのを機会に、県庁や市役所に勤務する者が一〇名程集まって、酒を飲みながら、高校時代のことや近況等の話題に話が弾みました。皆先生が亡くなられていたことを知らず残念がっていました。そしてそれまで持ったことのないクラス会を開くことと、近いうちに先生の墓参りをしようと決定して散会しました。

学校の方に話を伺うと、先生は亡くなる三年前の定期検診で胃に異状を発見し、一回目の手術をしたということです。しかし二年後不幸にも再発し、大分痩せられたようです。ところが、体調の悪いのにもかかわらず、教務部長をしておられた先生は持ち前の責任感から、無理を押してPTA総会の準備や教務等の激務をやりとげられたという話でした。

今でも、好きなタバコを燻らしながら穏やかに話す先生の顔が想い出されます。

最期まで東高に尽力された藤本先生に、心から御冥福をお祈りいたします。

（千葉市役所勤務）

故 西山タカ子先生
東京生まれ。
武蔵野音大卒。
茂原工高、山武農高、市川工高を経て、昭和46年4月本校に着任。音楽担当。53年8月31日肺癌のため死去。享年48歳。

故 西山タカ子先生を偲んで

永井 弘子

西山先生が逝って三年を経たのに、彼女のさわやかな思い出がそちこちにたくさん残っていて、どんな面影を記念誌に残したものかと考えこんでいましたら、偶然にも四年前の学年だよりの合唱コンクール特集が出てきました。

折しも四十周年記念式典の合唱コンクールの熱気のさなかでもありましたので、先生の講評の一部が再び鮮やかな印象となってよみがえりました。

合唱コンクールをふりかえって——……いよいよ本番になって全員が体育館に集合した。何やら楽しい雰囲気がただよっていた。球技大会とちがってステージに級全員がひとかたまりになって協力し合うという光景は美しく見えた。ステージに整列していざ歌い出そうとしているその瞬間に、そのHRの協調の度合いを感じた。何をしてもそうだけれど大勢が一点に集中した時大きな力が出るのだから、いいハーモニーも心が合わなければ響かない。今度の合唱コンクールが心の調和の結晶したものだと痛感した。声は悪いより良い方がよいが、問題はやはり心だと、歌うとき私はいつも思っている。

一番嬉しかったのは、どの級も課題曲、自由曲とも暗唱してくれたことで、惜しかったのはそのため歌詞が不安で充分声を出しきれなかったことだ。もっと練習してもらえたらと思った。その点三組の合唱は力強く、聞いていて気持よかった。人生もそうであるように本番は一回きりだ。やり直しはきかない。その意味を一番痛切に感じたのは出をとちって惜しくも五組に一位をゆずった三組のみなさんではないだろうか。

一番悲しかったのは、聞く側のマナーができていなかったことだ。とてもはずかしい。

コンクールが済んでも折にふれて「白いブランコ」があちこちの教室の窓から流れてくるなどということは、夢のような話だろうか？　——審査委員長　西山タカ子——

（昭和五十二年十二月）

先生が病にたおれられたころ、次のようなことをしみじみ話されたのが忘れられません。

私は教育者として今とてもはずかしい。重大な病気があると知らないでついこの間まで大事な生徒たちと一緒だった（結核と信じておられた）。そのことが責められてならない

の。自分の健康の管理が出来るくらいの知識を積極的に学んでおけば良かった。

音楽しか私にはない、とこの道をえらんだけれど、歌は趣味としても良かった、看護科の生徒に、良く学んで、良い仕事をしてって、始業式（二学期の）の時伝えてね。いつ退院できるのかわからないけど、学校に出られるようになったら、生徒の一人一人に言うわ、受験戦争に勝ち抜くためには、勉強だけじゃ駄目なのよ、最後は体力なんだってね。教師として、人として、本当に本当に惜しい方でした。次に親しかった先生方の対談をひろってみました。先生を偲ぶよすがになれば幸です。

長谷川　彼女来たばかりのころね、音楽室にひとり納まってないで生物の部屋によく行ってたね。相手が男の人だからって変に構えない、誰をも引きつけるものを持っていた。〝番長〟（西山先生のニックネーム）はドライブ好きでさ、「ちょっと地酒買って来た」なんて、気さくでね。（笑）

野　口　番長っぽかったのいつごろから出てたのかな。

長谷川　そうねえ、彼女、上の原好きだったのよね。「木の芽摘んで天ぷらにして食べるとうまいんだ」って典平さんの部屋でしゃべったんだ。そしたら「あたし今度とってくる。」っていってさ、僕は湯がいて食べるとかその位だと思っていたら、鍋とかみんな持って来てさ、みんなを前に並べて……揚げたてを食べたの。敦さんとか錦織さんとかずらっとならべてね。そして「ほまれ国光」っていう沼田のそばの村の地酒でさ。そういうとこがね、男の人がいるから私は引込む、そんなんじゃない人間同志だって感じなのね。人に言われてじゃなくて、自由にやらせると、みんなをうまく動かしちゃう、そういうとこがあってね。

亀　あまり飲まないけど雰囲気が好きだったのかな、野口さんはよく西山さんとしゃべってたよね。

野　口　碁仇でしたからね、っていうより私がやって勝てる唯一の相手だった。最後は彼女も能力を認識してやめるようになったけど、俺と同じでいくらやってものびない。あればかりは不肖の弟子だったね。（笑）

亀　それは社会科行ってやったのね。

野　口　そう「たのもう――」って入って来る。（笑）

長谷川　ほら佐瀬さんも一緒だったのよ。両方ともおぼえ方というか、師匠が野口さんでさ。だからまあ先は見えてる訳だけど。（笑）

亀　そういう風にしてみんなと一緒に何かやろうっていう風なつき合いうまかったな。よくみんな車にのせて

もらったね。

山本　草葉教頭や黒川さん須賀さんたちと一緒に、水郷にはぜ釣に行ったことがあるのですよ。寒いのに堤防に陣取っていても口程にみんな釣れない。そしたらそばにいた人が沢山くれましてね。本当はそこで天ぷらするはずだったけど寒いんで帰って来てしまった。翌朝そのはぜが天ぷらになって教務室にいたんですよ。（笑）

永井　マラソンの時、豚汁作ろうと思い立ってね、前の晩に助っ人たのむって電話したら、彼女すぐのってくれてね。翌日大鍋やお椀を須藤先生に借りてきてくれたの。センターの台所でうすめてあたためてね。甘酒やったこともあったわ。気の合う相棒って感じで。

長谷川　そう、いつも番長のとこには食べ物があった。（笑）

コンパやって歌って、って言うとすぐ歌うでしょ。ああいうとこすごくいい。

野口　プロぶらないでね、素晴らしかった。

勝　淡谷のり子の「別れのブルース」よかったなあ。

長谷川　男子の扱いがすごくうまかった。僕のクラス、音楽室の掃除さぼるでしょ。彼女らしいやり方で自分の生徒にしちゃう。あれはちょっと真似できない。男が男子を扱うよりずっと気持ちつかんじゃうのね。担任は全部を一括してみてゆく、彼女は音楽と掃除を通して見てくれる、少なくともおかしい方向へ行ってると、おかしいよっていってくれるし、私がやるわよって手をのべる。チーム組んで安心していられるもの。相互信頼がチームワークのベースよね。

山本　生徒が掃除さぼると、担任あてに「ウナ電」と称して名前書いた紙が届くんですよ（笑）。ユーモアがあるんですよね。掃除ひとつでもきちんとけじめをつけさせる。

それである時「先生クラス持ったら」って言ったら、「私はひとつのクラスにのめり込まないで、一歩下って全部とつき合いたいのよ」ということを言ってました。

僕のクラスのTという生徒が通知票の音楽の評価が不服だって、教務室に来たんですよ。伝票の写しちがいではないし、ちょうど西山先生はそばのソファーで二葉の箱弁を食べていたんでおたずねしたら、

「なあにいT君、点数がおかしいって……。君にはそれでも良すぎる位よ」とひと言、箸を使いながら平然と言われたのには、Tもびっくりそのまま引き下がった。私の転任したてで、しかも女の先生だったし、その毅然と

した態度にこちらもはっとしましたね。

勝　そう、することに責任というか、自信を持ってましたね。教育課程の編成の時だったか、堂々と意見をのべられて、教頭さんにも一歩もゆずらない。立派でした。

山本　男でもなかなかできませんね。

長谷川　千手が浜のキャンプで「日光の四季」っていい歌があったのよ。そのメロディを五線にのっけて番長のとこへ持って行ったら、斉唱じゃ勿体ないって二部になおしてくれた。それをあの学年の学年歌にしちゃった。いまでも酔っぱらうといつもあれ歌うのよ。

亀　僕らの学年でコーラスやった時、「白いブランコ」を課題曲にして、それを三部に作ってくれた。すごく気さくなんだよね、いいって思うとどんどん走る。ああいう人は最近ちょっといないね。だんだん言われたことしかやらないって感じ強くなってね。

山本　彼女の最後の年の七月、キャンプの歌の指導してくれて近年になく素晴らしいできだった。その時菱木さんに言われてテープとったんですよ。先生も生徒も実にのってってね。体育館から帰って、「先生お疲れさま」っていったら、冗談のように、「私が死んだらこれは記念になるわね」っていわれて。その時は菱木さんなんかとひやかして笑いとばしてしまったけど、あとで心にのこってね。ここにあるんですけど。このままここに置いといていいのかなあって思ってるんです。

佐藤　毎朝自動車にのせてもらってて、勝手なこといったら、勝さんと二人そろって叱られたことがあった。実に几帳面でいいかげんがきらいなんですね。時間も正確でしたね。

山本　女の人にはめずらしいというか、良い意味の男まさりでしたね。

勝　それでいて生き物を大切にする人でした。文鳥を放し飼いにしてて、朝起きたらつぶしてしまったって車の中で涙ぐみながら話してました。金魚も飼ったし花も好きだった。

永井　人も好きだったのね。友達がすごく多かった。

勝　すぐ打ちとけちゃうからね。

佐瀬　上の原の民宿に毎年行ってたんじゃないですか。自動車のセールスの人をかわいがったり、ガソリンスタンドの人とも。みんな親しくつき合っちゃう。

勝　実に誠実な真心のある明朗な女性でした。

山本　素晴らしい人ってのは、短時間に燃焼させちゃう

ってことでしょうか。

永井　先日お義姉さんから電話で、「今家族でタカ子さんのことを話し合ってたんですが、タカ子さんは幸せだったんだって結論になったんです。夏の初めに好きな旅もしたし、学校でもみなさんに愛されて、最後の最後まで先生方にみとっていただいたんですもの……」とのことでした。まだ語り切れないたくさんのエピソードがあるのですが、今日はこの辺で。　（昭和五十六年秋）

故　西山先生の想い出

昭和54年度卒　山本　弘子

西山先生のことを想い出す時、なぜか音楽のことよりも、喜々として音楽室の掃除をなさっている先生の姿がまず浮かびます。整頓された用具入れ、分担の確認表、ワックスがけのまめなこと。当時掃除当番だった人たちはよく覚えていることでしょう。先生は、すべてをきちんと完璧になさる方でした。それでいてどこにも嫌味がないのです。生徒は、知らず知らずに、先生と一緒に、熱心に掃除をしているのでした。

音楽の授業では、〝帰れソレントへ〟を独唱して下さった時のことが記憶に鮮やかです。暗幕を引き、そこだけ明るいピアノの前に立って先生は話して下さいました。「私は本当は無口で内気なんですよ。でも歌う時は、自分をそこに置いてきてしまって、ステージに上がるのです。」そして先生は、男子生徒から借りた学生服をはおって、うつむきかげんに歌いはじめました。ピアノの音が高まり、歌の中で、先生は本当に泣くのでした。

私たちの学年で行われた合唱コンクールも想い出深いものでした。合唱することに慣れていない生徒間では、盛り上がりが今一つだったように思いますが、それでも、先生はこの企画に大変喜んでいらっしゃいました。「全校の教室から歌声が聞こえてきたら、素敵ねえ。」とおっしゃった先生の言葉は、先生の音楽教育の姿勢だったかも知れません。あの試みが学校行事として続いていて欲しかったと思います。

体育館での、校歌や夏キャンプの歌の練習。眼下に広がる烏合の衆。しかし、「静かにしなさい」の言葉を聞いた覚えがないように私は思います。どんなに騒がしくとも、文句を言う前に、ハイ、もう一回。先生は常に前向きでした。練習時間が長引いても、先生の屈託のなさ、熱心さに、歌うほうもうんざりしている暇がありませんでした。「それじゃいいですか、一、二、三。」と言われると、不思

議にみんなの口から声が出て歌になるのです。ハーモニーが合った時の嬉しさを一人でも多くの生徒に感じて欲しいと、タクトを振っていらした先生でした。

先生にはもっと歌って頂きたかったし、私たちは先生から学ぶべきことがまだまだたくさんあったはずですが、早くにお亡くなりになってしまいとても残念でなりません。何時までも歌を忘れないこと。私たちが先生のためにできるささやかな御恩返しだと、私は思っています。

故 小川武久先生
長崎県生まれ。
日本体育大学卒。
昭和47年4月本校に
着任。体育科担当。
55年1月4日、不慮
の交通事故で急逝。
享年29歳。

小川さんのこと

部長　亀　忠　夫

小川さんのことを書こうとすると、すぐ奥さんや、恭輝君、勝久君の顔が目に浮んできて、言葉につまります。でも忘れないうちに、彼のことを書きとめておくことも、僕の義務のようにも感じます。全てを尽すことはできませんが、想い出すままに、書いておこうと思います。

彼は、長崎県の佐世保北高から監督にすすめられて、日体大に進みました。その高校は、進学校であまりラグビーも強くなかったようです。日体大の三年から四番ロックとして、試合に出場しています。レギュラーになると奨学金が出るとかで、親孝行した、と言っていました。何しろ部員が一〇〇人もいる中から選ばれるわけですから、大変です。負けず嫌いの彼の性分が、練習にもでて、認められたのでしょう。彼の出場したビッグゲイムは、近年の名勝負の一つと言われる四十六年正月の大学選手権の決勝でしょう（なおこの試合には、スクラムハーフとして現市川工高の天才的大型ハーフといわれた本田先生、右ウイングに現佐倉高の快足高橋先生も出場しています）。日体大は惜しくも九対一四で早稲田に負け、連続優勝を逸しています（ついでに書いておくと、前々年の四十四年の大学選手権は一四対一四の早慶両校優勝という珍らしいケースだったのですが、この試合に本校卒業生坂内（ばんない）君が、早稲田の五番ロックとして出場しています）。

僕は名前も顔も知らない彼を、秩父宮ラグビー場のこの試合で、恐らく見ていたのです。それが初対面といえばいえるのですが、お互い、将来同じ職場に勤めることなど、全然分からないでいたのでした。日体大のFWは今の明治大

をしのぐ戦車のようなFWで、すさまじい突進力をもっていたのです。僕も、日体大のFWはよく走るなあと、次々に縦につなぐパスに感心したのを、覚えています。彼は卒業後千葉県にきて、本城先生と一緒に教員チームのロックを組んだわけですが（その縁で、本校が長狭高に行って合同の春合宿をやったり、また長狭高が冬本校の練習に篠原旅館に泊って通うこともしばしばでした）、千葉教員のFWも、日体大のそれを思わせるものがありました。本当に、当時ビデオを持っていて千葉教員チームの試合を撮っておいて、今のラグビー部の生徒たちに見せられたらなあ、と残念でなりません。

彼は教員チームの中では、名前をとってタケ、とかタマと呼ばれていました（特に日体大出身の人がタマと呼ぶことが多かったような気がして、現勝浦高の夏目先生――教員チームのナンバーエイトでキャプテン――にその由来をききますと、鼻のわきにある小さなホクロが、ノリタマのコマーシャルと似ていて、日体大にいた時ついたアダ名だそうです。彼は二代目で、初代には夏目先生と同級の人がいた、ということです）。彼は、酒が強く、演歌も好きで、チャン、チャカ、チャンと口で伴奏したりして、酒席ではよく上手に歌ったものでした。それでいて妙に僕には遠慮ぽい所もありました。それは僕の性格の堅さと、年齢が違うせいだったかもしれません。その彼が郷里に帰らず千葉にきたのは、四十八年の千葉国体のためよい選手を探していた現銚子商高、県ラグビー協会理事長、吉田豊治先生のすすめでありました。偶然にも吉田氏は彼の高校の先輩にあたるとは、世間も狭いものです（吉田氏が〃兄ちゃん〃と千葉教員の連中によばれるようになったのも、そのせいかもしれません）。日体大の綿井監督（オヤジさん、と呼んでいた）も、一も二もなく賛成したとのことです。ただ村田校長には、二回三回と面接され閉口したといっていました。察するに、国体要員――定員増なら別――を採用することに反対だった高教組の方針に、現場での混乱を懸念されたせいでしょう。しかし、そんな心配は千葉東高では全然いらなかったのです。

四十七年四月、彼が本校に赴任してきた当時は、まだ学校紛争の余韻が残っていて、職員間にもいくらかギクシャクした空気があったことは、否めないでしょう。そういう空気をふっとばすような彼の新任の挨拶は、とても爽やかだったので、忘れられません。〃よろしくお願いします。〃という言葉で結んだのですが、今は普通によく聞かれますけど、当時は、とても新鮮な響きがあったのです。そして、〃あ、彼だ。〃思ったのです。それは前年夏、千

葉県のラグビーレフリー講習会に、関東協会から派遣された講師の助手として、イガグリ頭の彼に、天台のラグビー場で逢ったのを想い出したのです。ラグビーの人がくるということは噂で知っていたのですが、どんな人がくるか全然知りませんでした。

彼が明るくていい男だということは、つきあえば誰にもわかることですが、それだけ僕が一番心配したのは、国体が終われば九州に帰ってしまうのでは、ということでした。それには千葉から奥さんを貰えば、などと考えたこともありました。が、その心配は杞憂でした。四十八年の四月には、奥さんのさよ子さんを連れて戻ってきたのでした。奥さんとは幼稚園からの幼馴染で、中学三年の時は、教室の机も前後に座っていたとのことです。恐らくそのころ婚約したのでしょう。高校は違ったそうですが……。

彼の愛妻ぶり、子煩悩ぶりは相当なもので、つきあいで遅くなる時、あるいは合宿先からなど、自宅にまめに電話をしていましたし、また、土産もよく買っているのをみかけました。

このおしどり夫婦にも、意見のくい違いが一つあったことを、あとで聞かされました。それは、彼のラグビーの指導力がかわれ、山口校長の八千代松陰高校発足の時、ひっぱられ彼も乗り気になったそうですが、奥さんに猛烈に反対され、思い止まったということです。

彼は初任できて数年担任にならず、ラグビーに専念していたのですが、五十一年の職員異動のため佐藤敦先生の学年で、副担任から三年生を受け持つことになりました。この学年は傑物が揃った近来まれな学年と言われています。酒が強い人が多いのも、その一つでした。中でも野村松三先生は、部屋も一緒、大学の先輩でもあり、彼も影響をうけ、特に教師として担任となる重要性を教えられたようです。その学年を卒業させると、一年休んで五十三年初めて一年から持ち上りの担任になったのでした。そして、担任と担任でないのとでは、生徒から慕われる度合がまるっきり違うことが分かった、と言っていました。一方彼がどんなに生徒から尊敬されていたか、彼の葬式の時集った卒業生——関西からかけつけたラグビー部のOBもいた——、在校生の夥しい数でもわかるでしょう。また人気があった一例として、「タウン情報千葉」誌とパルコの共催で、人気投票で上位に（一時トップだったのに組織票に破れて、）入っていたことでも分かります。これは、僕たちがいくらやきもちをやいても、くやしがっても、脱帽しなければならないでしょう。

小川さんが生徒の面倒みのいいことは、部員の成績が悪かったり、怪我したり、クラブをやめたいなどと言ってきたりした時は、よく家庭訪問をしていたようですし、時には親代りになって面倒をみるから任して下さい、というような場合もあったことを卒業生からきいています。また家庭に電話をしてよく生徒のことを話しあっていたようで、父兄からの信頼も絶大なものがありました。でも熱意に溢れるあまり、ちょっと行きすぎ気味のこともありました。いつでしたか、ラグビー部員がロングホームの時間にさぼってラグビーをやっていたのが担任にみつかり、本人は謝まるつもりだったのを、代わりに俺が行ってやると乗り出して、担任にたしなめられた、ということもありました。

五十二年は僕が学年主任になった年ですが、その年、学年の合唱コンクールを開くことができ、そして翌年にはスキー教室を計画しました。それはいろいろな事情で実現しなかったのですが、それはともかく、彼に電話して、ラグビー部員の希望者もスキー教室に連れていきたいと言ったのですが、練習やるから困る、というきっぱりした返事でした。もうそのころは、はっきりインターハイをめざすことを意識していたようです。市立銚子高が日川高を破って出場したのを見て、刺激されたこともあるでしょう。そして、勝つには練習しかないと、口癖のように言っていました。ある年の決勝戦の前日、自らかってでて選手のタックル台（タックルされる人、僕など一度で、参ってしまうでしょう）になり、〝さあ、こい〟と声を出して、レギュラーが一廻りするまで相手してやっていたことなど、今でも目に浮ぶなつかしい光景です。

彼のラグビーへの情熱は、あの堅物の相川校長を動かし、五十三年から夏休みの山中湖合宿を認めさせたのでした。生徒の経済的負担については、県の優勝チームには国体の強化費が出ること、また野球の野村典平先生に頼んで（最初は頼まれてかも。記憶不詳）、夏の予選の野球場の補助役員をやらせてもらい、何とか軽減できるということ、またラグビーは夏千葉でやるのには向かないこと、井の中の蛙では駄目で強いチームと当たって鍛えられなければならないこと、いろいろ理由をあげたようです。確かに、この山中湖の合宿から、千葉東のラグビーはまた一つのステップを進んだように思います。県外合宿など前例のないことで、僕には思いもよらぬことでした。それを直接校長にかけあって、よくやった、と感心しました。

そして何と言ったらよいのか、千葉に落ち着くことを心に決め、ぼちぼちマイホームのため貯金をしなくちゃ、と

ラグビー仲間とのマージャンを断ったり、グループ保険をやめたりしていた矢先でした、あの事故に見舞われたのは。人の命のはかなさ、まことにはかり知れません。今彼の育てたラガーマンが千葉大に五人もいて活躍しており、そして彼の青春の血をわかせたあの秩父宮ラグビー場では、早稲田の山田や、日体大の楫田などが頑張っています。彼がそれを見たら、さぞかしどんなに喜ぶことでしょう。そして、僕は今、彼がかなえられなかったインターハイ出場の夢をうけついで、微力ながら本城先生と頑張っています。進学校の本校では無理な願いと、挑戦もせず断念していた僕ですが……。その夢を実現することが、三十そこそこで天に召された彼への最大の供養と思っています。

タケのこと

監督　本城　一隆

ラガーメンとしての小川先生は、高校、大学時代から有名であり、熱心なファンの中には、彼が千葉東高へ新任教師として赴任してからも時々、彼のグランドでの姿を追い続けたものもいたというエピソードの持ち主でした。

そんな彼を得た千葉教員ラグビーチームは、まさに鬼に金棒で、チームの快進撃が始まりました。昭和四十七年度鹿児島国体（第三位）、四十八年度千葉国体（優勝）、四十九年度茨城国体（第三位）、五十年度三重国体（第三位）、五十一年度佐賀国体（第五位）、と連続五年間関東地区代表として国民体育大会に参加し、立派な成績を残す原動力となったのです。更にその間、東日本社会人大会出場、第一回東日本都道県対抗ラグビー大会千葉県代表選手として活躍する等、彼のラガーメンとしての実績は枚挙にいとまがない程です。彼はラガーメンとしては決して体格に恵まれてはいませんでした。もちろんフォワードの核としてはの意味ですが。彼は温厚で誠実な人柄で、チーム内の誰からも、「タケ、タケ」（時にタマ、タマ）と親しまれていた好漢でした。人づき合いも良く、特に酒を飲んでのラグビー談議には多くの思い出があります。最後に、小川先生を失った千葉県ラグビー界の今後の一層の奮起を小川先生の霊に誓いつつペンを置きます。

故　小川先生の想い出

元ラグビー部キャプテン　山本　浩二

「さあ、がんばっていこうぜ」

夕暮れの校庭に響く小川先生の声。それは、苦しい毎日の練習に負けそうになっているぼくたちラグビー部部員を

奮いたたせてくれました。

毎日の放課後三時間の練習。夏のカンカン照りの暑さの中でも、冬の北風の強い凍えるような寒さの中でも、小川先生は一日も休むことなく、自ら先頭に立ち僕たちをひっぱって下さいました。特別素質があるわけでもない僕たちに、どうにかして優勝という経験をさせてやろうと、先生は自分の体をはって教えて下さったのです。

そして、小川先生はラグビーを通してがんばることの大切さ、やりぬくことのすばらしさを教えて下さいました。

また、練習中は厳しい先生でしたが、練習が終わると、部員と相撲をとったり、サッカーやソフトボールをしたりして、まるで友達のように僕らと接して下さり、いつだったか夏合宿の納会の時に、小林旭の歌を歌って聞かせて下さったのを覚えています。

僕がまだ二年生の時、春の総合体育大会の千葉県の準決勝で我孫子高校に大逆転して勝った時、泣いて喜ぶ部員とともに、目をしばたかせ、とても喜んで下さった小川先生の姿は忘れられません。

部員とともに喜びや悲しみを分け合って下さった小川先生の夢であるラグビー部の全国大会出場は、まだ果されていません。しかし先生が築きあげて下さったラグビー部の伝統は生きており、いつかその夢を達成してくれるものと思います。

（昭和54年度卒）

弔　辞

小川先生

先生はなぜこんなにも早く我々を残して逝ってしまわれたのでしょうか。もっともっと先生のご指導を頂きたかったのに。

一月四日、新年の挨拶をし、初練習の後、談笑し、今年の抱負を語り合った数時間後には、二度と帰らぬ人となってしまわれるとは。あまりにも悲しい運命のいたずらを誰一人嘆かない者はおりません。

先生は日体大ご卒業後、ラグビー部監督として、我々をご指導下さいました。爾来八年、やや沈滞気味であった当時の東高ラグビー部を持ち前の情熱と信念で、ご指導下され、今では県内で押しも押されもせぬ名門校に育てて下さいました。連続八回、関東大会出場、県大会での優勝も数度に及んだことは、よくそれを物語っています。

先生はラグビーの虫で寝てもさめてもチームを強くする方法を考えておられるようでした。そして色々新しい練習の方

法を考え出され、我々部員にぶっつけてきました。練習はきつく、時にはゲンコのとぶこともありましたが、部員は誰一人先生を恨んだり、ラグビーがいやになることはありませんでした。練習後の先生のお話や、冗談あるいは屈託のない笑い顔、それらに練習の苦しさも忘れて、また翌日は、グランドに出て行きました。

故 小川武久先生とともに

先生はこの上なくラグビーを愛され、ラグビーに生きられました。そして我々に単にラグビー技術を教えられるだけでなく、ラグビー精神を叩きこまれ、人間としての生き方を示して下さいました。早く言えば、勉強とスポーツの両立ということでした。自分に甘えず、苦しさから逃げず、根性でやり抜くこと、その大切さ、尊さを身をもって教えて下さいました。

毎年、毎年、来年こそは花園で正月を、という長年の先生の夢を果せず、期待にそえなかった我々、きっと今年は卒業生在校生力を合わせて、先生の念願を果したいと思います。どうぞ我々を見守っていて下さい。

先生の温かいご指導は、いつまでも我々部員の心の中に生き続けることでしょう。

先生、どうか安らかにお眠り下さい。

先生に一番お世話になった千葉東高ラグビー部卒業生在校生を代表して

早稲田大学ラグビー部二年　　山田　悦朗

昭和五十五年一月七日

第五章　明日に向けて

―各教科の現状と展望―

自分を見つめ、考える——国語科の現況と展望——……二五三
教科の基本姿勢
学年別履習内容
国語の学習に関して
国語科教員のプロフィール
幅広い視野を求めて——社会科の現況と展望——……二五六
社会科のプロフィール
社会科の学習
社会科の教育課程
数学縦横——数学科の現況と展望——……二六一
数学の学習方法
学年別履習内容
数学科職員のプロフィール
自然科学と人間——理科の現状と展望——……二六五
物理科指導方針
化学準備室の窓から
生物科より
地学について
心身一如——保健体育科の現況と展望——……二六七
人間・調和・美・造形——芸術科の現況と展望——……二六九
音楽科
美術科
書道科
広く世界に眼を開け——英語科の現況と展望——……二七一
家・家族・生命・生活——家庭科の現況と展望——……二七四

自分を見つめ、考える——国語科の現況と展望——

大沢　浩一

教科の基本姿勢

右のような項目をまず掲げましたが、それほど明確な、あるいは意識的な姿勢もありません。雰囲気等について述べてみます。

現在、人員は八名、二十代から五十代までいます。が、特に年齢を意識させることもありません。親睦を深めるために年一度ぐらい、主として夏に二泊の旅に出ます。商売柄、普段は行き難い旧蹟等を訪ねますが、それほど堅苦しいものではありません。京都祇園の茶屋に二度上がりましたが概ね好評でした。近い所では柴又帝釈天に出かけ、帰りがけに江戸川端の料理屋で川魚を食ったりもしました。本年度は都合がつかず出かけられませんでしたが、来年豪華にやろうと積立てに励んでいます。

授業は主として自分の所属する学年のものを持ちますが、これは前年度の末に皆で協議して決めています。幾つかの申合せ事項はありますが、大体において担当者にすべてがまかせられます。二人で行う場合は二人で相談し、一人の場合はほぼその者の考えどおりになります。科としての一貫性に欠けているとも言えるし、一つの枠にとらわれずに各人が個性を発揮しているとも言えます。

しかし、教材研究等においては互いに率直な意見のやり取りをします。今年度、科内の研修として芭蕉の連句を少しばかり読みましたが、この時も自由に意見を述べ合いました。今後もこの姿勢と科内の研修は、持続発展させていきたいと考えています。

学年別履習内容

今、現行のものと五十七年度からの新教育課程を示します。

多少の説明を加えます。現行三年の文理コースは五十六年度のみで、それまでは文と理に分かれていました。現行のものでは三年文系の古典四単位が、新しいものでは二年次に準必修の国語Ⅱのかわりに、現代文と古典を履習する

現行	現代国語	古典Ⅰ2	古典Ⅱ	計
一年	3	2		5
二年	2	3		5
三年 文	2		4	6
三年 理	2		※2	2※2
三年 文理	2		※2	2※2

新教育課程	国語Ⅰ	現代文	古典	計
一年	5			5
二年		3	2	5
三年 文		3	3	6
三年 理			※2	※2

（※選択）

ようになっているのが、それぞれ一つの特徴でしょう。後者について言いますと、国語Ⅱの中で現代文、古文、漢文とやるよりも、はっきり区別してやった方が本校生徒にとってはいいのではないか、と考えたためです。

国語の学習に関して

本校職員の本校生徒に対する把握の一つに次のようなものがあります。つまり、理解力には秀れるが、創造力に欠ける、ということ。これは、与えられたものはよく摂取するが、自ら積極的に求めることはしない、ということにつながります。どの教科でもそうでしょうが、国語は特に自分自身が問題意識を持たねば成り立たぬ教科です。ひが目かも知れませんが、数学や英語では問題がはっきり与えられるため、それを割と熱心に行いますが、国語、特に現代国語はほとんど無視されているように思えます。

では、どのように学ぶか。これは結局、読み、書くことに尽きます。読むことは同時に考えることであるし、書くことはさらに積極的に考えることです。本を読んだということは自慢になりません。読んで何を理解し、さらにそこから何を考え出したかが問題です。自分が理解したことは表現し得て初めてそれが証明されます。わかっているがうまく言えないというのは、全くとは言わぬにしろ、嘘です。うまく言えた時、また書けた時、わかったのです。少なくとも自分の理解は明瞭になっているはずです。

何を読むか。何でもいいが、教科書で学んだ作品、またその著者のものに触れて行くのなど一つの手でしょう。教科書に出て来るものをばかにする者がいますが、現在まで残って名作とされているものにはそれだけの重みがあるはずです。それがわからぬのは自分に目がないのだと思っていい。

国語はやってもやらなくてもかわらぬようですが、三年の後半にもなると力の差は歴然と現れます。しかも、もう取り返しがつきません。いわゆる受験勉強が忙しくなる三年生以前に、よく読み、よく書いてほしいものです。

国語科教員のプロフィール

〔玉山慶一〕 渋さと飄逸さが特徴、生徒は敬意をこめて「玉ジイ」と呼ぶ。常にノー・ネクタイで、形式的なもの、権力的なものを好まない。専門は河原者に発する演劇。

〔星野志朗〕 温厚篤実さの中にユーモアがある。が、学への厳しさを持つ。中国古代思想が専門だが、古典一般に造詣深い。加えて話しが滑らか。理系のある生徒が「古典の神様」と称した。旅を好み、京都は土地の者より詳しい。

国語科職員

〔柾谷 明〕 一見、温厚、実際もそう。が、しばしばきついブラックジョークが飛び出す。民俗学が専門でそれに関した著書もあります。一年の学年主任で事務能力抜群。後述の池田や松崎はしばしば尻をたたかれている。

〔橋本 正〕 堂々たる体軀で押し出しもいい。渋く、低い声でゆったり話すところ、大人の風格がある。酒はビールならいくらでも飲む。が、このような外貌に反し、あるいはマッチし、「源氏物語」を好み、また、詳しい。

〔大沢浩一〕 省略。（この文章が語っているだろう）

〔池田哲雄〕 学校へは授業よりもテニスに来ている感じがある。国語科の教員にして読書が嫌い。愛読書は「ものくさ太郎」。詩人であり、直観に秀れる。

〔宮部浩次〕 哲学科出身。卒論はニーチェ。心誠実で行為は着実。若くして哲人の風あり。文化祭で生徒の母と話していて他の生徒に本人の奥さんと間違えられた。独身。

〔松崎好男〕 一番若いが学的知識はしっかりしている。が、近世文学専攻者らしく真面目さのなかにおかしさがある。専門の芭蕉を地で行っているのか。女性に対しては既婚者に雄弁で「近世的」冗談を言うが、独身者には寡黙。やはり独身。

幅広い視野を求めて——社会科の現況と展望——

社会科のプロフィール

社会科は、人と人との関係、人と社会との関係、また、人と自然との関係を追求していく学問です。そして、これらを学習することによって、現代社会のさまざまな問題に取り組み、適正な判断や、対応のできる能力を養い、さらには、人間生活の根本的なあり方にまでさかのぼって考えてみることが大切です。社会科は、現在、「日本史」・「政治経済」・「世界史」・「倫理社会」・「地理」の五科目から構成されていますが、以下各科目の内容及び、本校社会科の教科担任とその簡単なプロフィールを、そして教育課程を紹介します。まず教科担任ですが、「日本史」は、学究的で緻密、常に深く広い視野を以って臨む斉藤健司先生と、思いやりがあって、いつもよき生徒の相談相手である鈴木富士夫先生。「政治経済」は、若さと才気に溢れ、いつも生徒と共にある石渡正一先生。「世界史」は、まず生徒の幸せを考え、理想に生き抜こうとする野口宏先生と、純粋で常に実践と情熱を傾ける平安隆雄先生。そして、常に教育に没頭し、人間的魅力に溢れる福田靖先生。「倫理社会」は、重厚で円熟した人柄、そして豪快な一面を持つ桜井久温先生。「地理」は深い学風と洗練された人格の勝輝夫先生と本校通信制課程の新進気鋭の石嶋博行先生です。

（勝輝夫ほか）

社会科の学習

日本史　日本史学習についてはたえず内外の動きに注意して、日頃時代を見る目を養っておくことが大切で、また時間的に余裕のある一、二年生のうちに、日本史に関する教養書を積極的に読むように心掛け、歴史に対する幅広い理解と柔軟な感覚を身につけておくように指導しています。そういう中で大きな動きとして昭和五十三年度からの共通一次テストの実施と主題学習の展開が挙げられます。

まず共通一次についてみると、他科目にくらべ受験者が多いということで、問題がやや難であり、初年度参加者数と得点に問題が生じ、実施二、三年度では、問題内容が検討改善され、さらに五十七年度教育課程改善に伴い、六十

年度より科目選択が検討されることになっています。

主題学習については、日本史学習が文化を総合的に考察し、歴史的思考力を培い、史実を実証的科学的に理解する能力を養うという目標に基づいて、学習を深めるため、授業展開の中で主題を設定して、その歴史的事象を総合的に考察し、それを通して歴史的思考力の深化をはかり、歴史学習の方法に目を開かせる方法として位置づけられたものです。実際の取りあげについては主題内容、学習の時期、方法や資料、授業時期などからみ、多くの問題を含んでいます。

社会科職員

昭和五十七年度より実施の新教育課程では、日本史選択が文系理系が三年生で実施されるのに伴い、文系では社会科八単位の中で地理との組合せで一科目選択、倫理、政経三単位選択と併せ履修、理系は日本史、地理、倫理、政経の三科目より四単位選択として学習することになっています。「現代社会」の必修科目設定に伴い、昭和五十九年度の生徒履修選択が大きな課題となってきています。

（鈴木富士夫）

政治経済　現代は「激動の時代」などともいわれるように、国内国外の別を問わず、政治や経済が大きくゆれ動き、それはただの一時も留まることを知りません。国内の経済についてながめてみると、第二次大戦後の復興に始まって、飛躍的な高度成長を遂げたかと思うと、その半面では、国民福祉の向上にとって大きな障害となる公害その他さまざまの問題を発生させ、また国際関係について見ても、東西対立の冷戦の時代から、やがて多極化の時代を迎えるに至りました。

このような「激動の時代」に生きるわたしたちとしては、政治や経済あるいは国際関係の現象と、その基底に横たわる本質とを見きわめる学習を進めることが必要です。それらの学習なくしては、現代を生きぬくことも、また、これからの政治や経済あるいは国際関係のたどるべき方向を正しく理解したり判断したりすることもできません。現象をとらえるとともに、さらに問題の本質にまで踏み込ん

でそれをえぐり出そうとする学習こそが「政治・経済」の学習には必要です。

また日常の学習としては、(1)予習・復習をしっかりする。(2)新聞、TVなどを通して社会の動きを知ると共に、学校で学んだ知識を社会に「応用」する。この二点を要望します。

（石渡正一）

世界史　「歴史から何事かを学ぶとは、過去に関する知識を『歴史は鏡である』という意味で、現在の参考にするというだけのことではない。われわれが、現代から未来への歴史創造に積極的に参加し、現代を正しく生きるために、歴史をどう考え、これまでの歴史の結論である現在をどうみるか、歴史変革＝創造はどのようにしてなされるのか、ということをも含めて学ばなければいけない。」

これは歴史学者井上清の言葉ですが、高校世界史の教育実践においてもこうした認識は不可欠のものと言えます。

例えば、ここ二、三年に見られる日本の社会の極めて不可解な動向が、どのような歴史的構造のもとで形成され、それがどのような指向性を持っているのか、といったことまでも把握することが大切だしまた、そうしたことを基底として実践するということも大切であると思います。

本校における世界史教育は、こうした考え方を原動力として実行されつづけてきました。またこれからもそうした姿勢は持続していかねばならない、ということで指導者の意志一致がなされています。

（平安隆雄）

倫理・社会　倫理社会は三つの目的と要素の有機的結合の上に成り立っています。第一に、人間行動の基本的特徴を理解することによって、人間形成上最も大事な発達段階にある高校生に、「自覚的」な自己形成の手がかりを提供することです。第二に、現代社会の特質と重層する社会関係の認識を通じて、「現代とはどんな時代か、現代をどう生きるか」という問いを誠実に受けとめることです。第三に、その時代を精いっぱい生きた人々の思索の跡をたどることによって、永遠で普遍的な人間性に触れ、自己の奥底に眠る人間性を覚醒・開発することです。永遠で普遍的な人間性は時代の課題と自己の生き方への真摯な問いを通じてのみ、はじめて現れます。本来的なものを問いつづける蓄積なくして新しい創造は不可能です。「どう生きるか」をたえず問いながら生きること、それが時代を生き自己を生きる基本ではないでしょうか。昭和三十九年度に発足した倫理社会は五十七年度を最後に姿を消し、選択倫理とし

て新しく生まれかわりますが、大事なことは「どう生きるか」という、自ら問い自ら答えるしかない問題意識をもって、日常の生活体験を踏まえながら、「学びて思い、思いて学ぶ」という学問の常道を行くことではないでしょうか。

（桜井久温）

地理　現在、世界中が、観光ブームに沸いています。最近、年々、数千万人の人々が外国旅行に出発するといわれています。これらの人々が出発に際して「期待するもの」は一体何なのでしょうか。人は、誰でも自分の居住する地域と、他の人々の居住する地域との、自然と人文上の地域差について強い関心を持っています。そして地域差があるとすれば、それは、どのような地域差なのか、それを知りたいと欲します。実は、多くの旅行者が、未だ見ぬ土地に期待するものは、主としてこの「地域差の発見」にあるのです。それはまた、言葉をかえれば、地理的知識の要求ともいえるでしょう。地理学習の基本はこの「地域差の発見」にあります。地域差を、地理的には、地域性、あるいは、地域的特色と呼んでいます。

その内容は、地形・気候・産業経済・政治・文化・人口・人種などのあるゆる地理的分野への広がりをもっていますが、要は、日本及び世界各地域のこれらの内容について根気よく学習すること、それぞれの「異なる地域性」を把握することこそ地理の目標です。一方、現代は、日本及び世界各地域で、それぞれ個性特色をもって営まれている人々の生活が、相互に深い「つながり」をもって成立していることをよく理解するとともに、各地域の生活の個性特色は、自然環境との「かかわりあい」によって生ずるものであること、また、一方において、自然環境そのものが、科学技術の発達や、生活様式の変化などの社会的要因によって変容しつつあることもよく認識する必要があります。

さて、社会科地理は、昭和五十七年度からの教育課程の改訂により、別表「新教育課程比較表」に示したとおり、現行の一年必修科目から三年選択科目に変わり、本年度の一年からは、新設必修科目である「現代社会」が登場することになりました。

（勝輝夫）

社会科の教育課程

社会科の現行の教育課程は、四十八年度から学年進行で実施され、五十年度で旧課程との切りかえをすべて終えましたが、五十二度以降は、理科類型の政治・経済の履修単

位を、それまでの三単位から二単位に変更して、現在に至っております。

五十七年度からは、新教育課程が年次を追って実施されていきますので、五十九年度までは新旧併行で進むことになりますが、今次改訂の要点はおよそ次のごとくであります。

① 一、二年には、新必修科目の現代社会、それに世界史（普通科）をそれぞれ全員に履修させる。

② 三年（普通科）の場合、(ア)地理、日本史、倫理、政治・経済四科目の教科内選択について、文・理両類型に応じ科目選択の幅を拡大した。(イ)自由選択科目の「自由研究」には、特別講座の設置が予定されている。

（斉藤健司）

現行・新教育課程比較表

教育課程	科目	一年（看）	二年（看）	三年 A	三年 B（看）	計 A	計 B（看）
現行課程	倫理社会		2（2）			2	2（2）
	政治経済			3	2（2）	3	2（2）
	日本史		（3）	4	3	4	3（3）
	世界史		2	2	2	4	4
	地理B	3（3）				3	3（3）
	計					16	14（10）
新課程	現代社会	4（4）				4	4（4）
	世界史		4			4	4
	倫理			3	2	3～0	2～0
	政治・経済			3	2	3～0	2～0
	日本史		（3）	5	4	5～0	4～0（3）
	地理			5	4（3）	5～0	4～0（3）
	計			※	※	16	12（10）

（注）(1) A・Bはそれぞれ文・理類型、※は選択を示す。

(2) 他に3年（普）対象に、選択科目「自由研究」講座の開設が見込まれる。

数学縦横——数学科の現況と展望——

南部　博昭

数学の学習方法

高校数学の学び方について考えてみましょう。まず、一般教養として数学を身につけるにはどうしたらよいでしょうか。

それには基本の概念や法則（定義、定理）を徹底的に理解することです。そのために教科書の予習が大切で、わからないところは授業で確かめておくようにします。また復習も大切で、これはその日に履習した定義、定理を理解するためのもので、簡単な問題を用い、演習を通して確実に理解するようにします。それに加えて、予習を通して物事を探究する数学の精神を養い、特に、理論の構成の仕方に目を向けるようにすることが重要です。中学校と異なり、学習する事項が非常に多くなるので、予習復習の習慣をつけ、常に授業に対して気力充分で臨むよう心がけます。

最近、上級生になるにつれて計算力の不足がもとで基本事項の理解に苦労している場合があるので注意を要します。

これは一、二年次における基礎事項の学習が不足しているためです。とにかく、取り組み方が少し甘いのではないか、大いに反省してほしい点です。

それから、将来、数学と関連のある職業に進もうとする人々に対する注意をします。まず教科書の進み具合ですが、二年生の終了時までに高校で履習する部分の大半を予習しておくよう心がけます。また三年生になったら問題集を通して、どんどん演習をくりかえし、数学に対する勘を養っておきます。質のよい程度の高い問題も進んで解くようにします。雑誌「大学への数学」、「Z会の添削」なども参考になるでしょう。そして余裕があれば、三年次ぐらいから大学の一般教養程度の本を併用していくこともよいでしょう。特に「微積分学」、「代数と幾何」、「行列とベクトル」などの本や数学史的な意味で「数学序説」（吉田洋一、赤摂也著）などを読んでみるのもよいでしょう。また数学や物理に関する啓蒙書、岩波、中公新書の中の数学関係の本

も読んでほしい。ただし、これらは高校の範囲をこえるので参考資料として読む程度にとどめておくのがよいのです。単に高校の数学が好きだからということだけで数学をやろうというのは、やめた方がよいでしょう。抽象的思考に対する興味とか能力を備えていなければ進路先で苦しむことになるからです。

次に、大学の入試に向かっての数学の学習の方法ですが、授業を大切にして毎日勉強することが、まず必要です。三年次の一学期で、高校数学の全部を終了しておくことが望ましい。こうすることにより何回もくりかえしてレベルアップをはかってゆけるからです。理論の構成に目を向けていくと単純な暗記をしないで、効率のよい学習が可能になります。とにかく問題演習をどんどん進んで手がけることです。必ず自分で解くようにしなければ実力はつかめません。これに参考解説図書（たとえば「チャート式」など）を加えていけば非常によろしい。最後に自分の受験する大学の過去の入試問題を最近三か年ぐらいながめておくことです。

いずれにしても「数学に王道なし」です。数学の学力向上については短期間に効果が上がらないので地道に努力する以外に方法はありません。授業、演習を通して充分実力の養成を図ってもらいたい。諸君の健闘を祈ります。

最後に、本校では、定期試験時間（中間、期末テスト）に九十分制度をかなり前から導入しています。このため数学の実力を充分、発揮することが可能で学習者にとってはよい励みとなるでしょう。

学年別履習内容

本校の学年別履習内容は次表の通りです。

現教育課程（56年度まで）

学年 / 科目	普通科					看護科		
	1年	2年	3年			1年	2年	3年
			A	B	C			
数学Ⅰ	6					3	2	
数学ⅡA								2
数学ⅡB		5						
数学Ⅲ			3〜5	6	4〜6			

新教育課程（57年度以後入学生）

科目＼学年	普通科				看護科		
	1年	2年	3年 A	3年 B	1年	2年	3年
数学Ⅰ	5				3	2	
代数幾何		3					
基礎解析		3					
微分積分				3			
確率統計			3	3			
数学Ⅱ			3				2

解説――現教育課程の三年次Aコースは数Ⅲ三単位必修で、選択（演習）二単位となっています。

Cコースは、コース選択者の調整がどうしてもつかなかったために昭和五十六年度の三年生に対して臨時に設けられたものです。このコースは数Ⅲ四単位必修で二単位選択（演習）となっています。

またAは文科コース、Bは理科コース、Cは文理コースと呼称されています。Aは、文、法律、経済、社会、外国語等の学部に進路を求める学生に設けられたコースです。

Bは、理、工、医、薬、農等の関係に進むものに適しています。Cは、このうち、特に農、教育、薬、生物系統の進路に適しています。

次に、新教育課程のAは文科系統に、Bは理科系統に進路を求める学生に対して設置されています。Aの確率統計と数Ⅱは、いずれか一方を各自の興味、進路先に応じて選択すればよろしい。なお、数Ⅱは、代数幾何、基礎解析、確率統計の一部、及び電算機等を総合したものです。

どのコースを選択するにしても、各自の能力、適性、興味に応じてよく考えて意志を決定してほしものです。

数学科職員のプロフィール

これからしばらく、各先生方のプロフィールを、私め、数学主任が、独断と偏見でながめます。本校の数学科は和気藹々をモットーとしています。少し弁解しておかねばなりませんが、和気藹々といっても妥協ではなく、その中には厳しい監視の目も光っているので安穏としてはいられません。ここ十年ほど、年二回の教科旅行が続いています。これは他教科にない特徴で、教科内の団結と話し合いの場になっています。ただし、旅行とは名ばかりで現地の最低の旅館に宿泊するのが建前で、とにかく毎回寝るのにも大変苦労で、一度行った場所は決して忘れることができないほどです。

数学科職員

〔朝日伊豆雄先生〕　総務部長。別名「アサヒ将軍」と呼ばれ、皆から畏敬されています。生徒に対する愛情は科内一。教科に対する批評は手厳しく手ぬるさを許しません。教科外でも万能の才を示します。時には軽いジョークも飛ばす純粋派。

〔中台正先生〕　第二学年主任。機転がきき、寛大さをもっています。数学と社会の対応の仕方を心得ています。人間味あふれる親しみやすい実践派。

〔山本守先生〕　生活指導主事。女生徒にもてること抜群。頭脳も心情も共に大きく、やさしく全体をつつんでくれます、しかし生徒を見る目は鋭く、厳しい指導者。

〔三塚隆昭先生〕　教師の模範。とにかく着実でそつがありません。かくれた才能に、思わず引きこまれるようなうまい文章を書く特技をもちます。聖職者。

〔渡辺陽先生〕　数学に身を捧げる学者肌の人。数学以外はすべてかまわず、生徒からは愛称で親しまれています。なぜか独身。女生徒のひそかな関心をかっています。諸作業能力抜群。懐疑の人。

〔吉野博先生〕　数学の問題を解くのにかけては天才。一度くらいついたら離すことなく、チャンスとみると恐るべき大ナタをふるい問題の解決をはかる頭脳の持主です。事務能力抜群。たのもしい柔道家。

〔時田和之先生〕　数学科唯一の貴公子。身体と思想でスマートさとクールを売り物に人気を保つ貴族。剣道の達人。

〔南部博昭〕　数学主任（筆者）。もうこれ以上、書いていられません。どこから凶器が飛んでくるか不安になります。とにかく、この稿の独断と偏見をお許し下さい。

自然科学と人間——理科の現状と展望——

物理科指導方針

能條正敏

我々の世界における森羅万象が、一定の法則に従っているという事実は古くから知られていました。物理学はこのあらゆる自然現象の根底にあって、それを支配している普遍的な法則と、それによって全自然を統一的、根本的に理解しようとする学問です。

理科職員

高等学校の物理の学習では、このような物理学という学問のもつ本来の体系的な構造がとらえられるよう可能なかぎり指導します。

力学・熱学、波動、電磁気学、光学などの古典物理学は、互いに切り離された形で扱うのではなく、原子論的に説明するという方法を取り入れ、自然現象の本質が、統一的に理解されるよう指導します。

電子、原子、原子核、素粒子などの現代物理学については、単なる事項の説明にとどまらず、力学、電磁気学の基本法則を可能なかぎり応用して、現象の物理的内容を理解できるよう指導します。

物理学は、実験科学であり、実験に基づいて理論を構成し、これを実験によって確かめて築き上げられるものですから、基本的な事実や法則については、どのような実験事実に基づいて、どのようにして理論が構成されるかを明らかにします。また、生徒実験はむやみと数ばかり多くするのをやめ、生徒自らよく考え、計画し、検討するように指導します。一方、教師実験はなるべくその数を多くします。

物理学を確実に身につけ、使いこなせるようにするには、単に教科書を読んだり、講義を聞いたりするだけでは

不十分で、演習問題を自分で考え、自分で解くという修練を積むほかありません。これが物理学の理解を深める最良の方法であることを理解させます。

すべての学問のうちで、物理学は最も基礎的、かつ包括的であって、あらゆる学問の発展に大きな影響を与えてきました。物理学は、単に自然科学の一分科であるというよりも、自然科学のすべての領域に適用できる基礎的な方法を与えるものであることを理解させます。

化学準備室の窓から

小沢　誠

化学準備室には「生徒相談室」のはり紙がしてあり、気楽に生徒が入って来られるようになっていますが、深刻な生徒よりも、先生方がぶらっと入って来て、いろいろな話題に花を咲かせて、サッと去っています。ゆっくりしていく人はたいてい、上品な机とソファのため、いや、雑誌「ニュートン」のため、いやいや、美人の実習助手の米野井玲子さんがいるためです。当然火、木、土、の来客が多い。卒業生も多数見えます。大学生活での楽しい話題などが途切れるころは、そごうのネオンがともるころになり、「鳥千」か「古都」に恩師とともに行くことが多いようです。

化学では生徒実験を重要視します。二年生の化学では、実験室に馴れるための基礎実験から始まって、有機化学のエステル化の実験まで、三〇回をこえて実験を行っています。(化学Ⅱでは二五回程です)このレポートを見るのが大変で、半谷先生は、風呂敷に包み、自宅で採点しています。レポートの中には、図書館で克明に調べてきて、教員が驚くような内容のレポートを提出する者もいますが、これはごくわずかで、ほとんどは他人のものを写す「写し屋」なのには落胆させられます。大変残念なことなので、何とか良いレポートを作成しようと努力する姿勢を全員に定着させたいものです。

実験器具も、かつての諸先生方のお陰で、豊富に揃っています。(理振の充実百分率は現在五〇%です。)。しかし、ガラス器具を中心に器具の破損も多く、その、主なものを順にあげると、1、試験管、2、ビーカー、3、一〇ミリリットルのメスシリンダー、4、電流計などです。

化学教師三人とも、鉄は熱いうちに打たねばならないとの信念から、生徒指導は厳しい。生徒を叱る大声も聞かれますが、質問に訪れる生徒には、担任のいかんにかかわらず、懇切丁寧に教えています。

生物科より

高橋　重夫

生物科は永年勤められた野村典平（昭和三十六年四月一日着任）、錦織保夫（昭和四十三年七月十六日着任）両先生の後を受け継いで、本年より高橋重夫（市立千葉高等学校より）、中安均（県立若松高等学校より）が着任しました。

昭和五十七年度より教育課程が変わりますが、理科教育の本質は変わるわけではありません。専門分野について、ますます造詣を深め、両先生の培われた探究的学習の伝統をより一層伸ばすよう心掛けています。

地学について

辻川　正昭

現在（昭和五十六年度）までは一学年必修の地学Ⅰと三学年選択の地学Ⅱがあり、できるだけ地学の全分野にわたって学習するよう心掛けています。

地学は地球を中心として正しい自然観を養う学問です。その内容は、われわれを取りまく地球の環境から、天体としての地球、さらに太陽系、広大な宇宙の構造、それらとわれわれの関連を学びます。一方、現在地球に起こっている火山、地震などの現象から過去の地球の歴史にさかのぼり、われわれの歴史背景を追求します。

これによって、複雑な自然現象の根底にあるしくみや、はたらきを理解し、現代の正しい自然観を学びとるようにしたいと思います。

その他、地学には各分野に独特な方法論や科学史があり、単に知識を羅列したものでないことが分かってきます。そのことをおりにふれて強調していきます。

昭和五十七年度からの新教育課程になっても、地学の分野についての上記の姿勢は変わりません。

心身一如――保健体育科の現況と展望――

本屋敷　博

本校体育科の基本姿勢は、科内の体育学習目標の達成にむかい指導のあり方などの創意工夫に務めることにつきると思います。目標は次のように設定してあります。

第一に、運動を身体発育、発達の手助けとしてできるだ

保健体育科職員

け活用して、健康の保持増進、体力の向上に役立てていくために、積極的に体育授業に参加する。

第二に、身体活動にはつねに精神的な働きが伴うので、より高い技能や記録に挑戦して、旺盛な気力や強固な意志を養っていく。

第三に、運動競技を通して、よりよい人間関係を作り、社会性を身につける場にしていく。

第四に、現在及び将来において、運動を人間生活の基本の一つとして利用できるよう、運動の楽しさ喜びを知り、技能を身につけていく。

以上の目標を本校体育授業の基本におき指導しています。

来年度より新教育課程に移行するわけですが、体育科の主な改訂点は、運動領域、運動種目など、学校の実態を考慮して大幅に選択できるのが大きな特徴です。本校でも施設設備、体育科職員の構成を考えて、年間計画の作成を行いました。今までと違ったのは、種目の選択で、一年男子にハンドボール、三年男子にラグビーをとりいれたことです。また格技の選択は、一年男子より三年男子まで継続して柔・剣道を履修するのは現行どおりです。同一種目に時間をかけ授業を行うことができますので、より高度な技能、種目に対する知識が身につくものと思います。

体育行事としては、校内体育大会を年三回実施しています。六月に球技大会（バレーボール、サッカー）、十月に陸上競技大会、二月にマラソン大会（一、二年のみ）と、天台の県スポーツセンターで全校生徒職員が参加して行います。諸準備は各クラスの体育委員が中心に行い、体育科でその指導をするという形で行います。大会の運営や内容などは、充実したもので、特に陸上競技大会では新記録が毎年のように生まれている現状です。生徒の積極的な参加、競技にとりくむ真剣な姿勢、態度は、日頃の体育授業の成果でもあると思います。進学校と呼ばれるようになった現在こそ、体育の重要性を認識して、その内容充実を考え、実行していくべきであると思います。

人間・調和・美・造形——芸術科の現況と展望——

音楽科　井辻紀一

「学校音楽、校門を出ず」昔からよく、学校でやる歌を皮肉ってこんなことをいいました。遠足などで歌われるものは、ほとんどコマーシャルベースにのった歌です。それでは学校でやる音楽は必要でないのか、というとやはり必要なのだと答がかえってきます。ではなぜ必要なのかというと説明が難しい。二年ほど前だと思うが、テレビでホロビッツという名ピアニストの、長い間公的な場での演奏をいっさいやらなかったので非常に注目された番組の演奏会があり、その席に列席したアメリカ前大統領のカーター氏が演奏の前に挨拶をしました。その内容が作曲家ジョンスタッフォード・スミス（アメリカ国歌 The Star-Spangled Banner の作曲家）からマーラー、ブルックナーにいたるまでのユーモアたっぷり実に素晴らしい挨拶でした。ホロビッツ氏の演奏もよかったが、私はカーター氏の挨拶を聞き、はたして日本で同じ立場の人が、これだけのことができるのか考えてしまいました。日本では昔から歌舞音曲は男のやることではないとか、歌の下手なのが男らしさの代表だと得意になる場面をよく見ます。今の高校生が日本のリーダーになるころには、日本という国だけを考えていたのでは成り立たないのではないか、既にその徴候は表れていると思います。国際感覚を持ち、広い視野で外国人と対等に振舞わなければいけません。そのためにはなんでも知ってやろう、日本の伝統文化の基礎の上に新しい文化をどんどん吸収してやろう、の主義でスケールの大きな人間に育っていかな

芸術科職員

いとどうにもならなくなるような気がします。音楽の教科は大学入試という土俵では直接関係ありませんが、その先の長い人生には絶対大切なものと思い毎日頑張っています。

美術科

平松　生夫

私は四十周年に当たる今年度、本校としては八人目の美術教師として赴任しました。前任の秋吉先生の永年の経験の上に立った個性的な教科指導は、私にとって貴重な足場となりました。

美術の基本的な姿勢として、高校生としての客観視できる表現力の養成に主眼を置き、オリジナル性のある自己の表現を目指しています。二単位の時間内での制限はありますが、多様な素材と方法をできるだけ取り入れていきます。同時に、制作に中心を置き、実践的に体験しながら感覚の安定と拡大を計っていきます。それに伴い日常的に「視る」ことを通して鑑賞的態度が持てることを期待しています。

＜学年別履修内容＞　一年は年間を通して基本的な見方と表現力の養成が中心です。西洋現代芸術の鑑賞、石膏像木炭デッサン、油彩人物画、日本現代芸術の鑑賞、彫塑人物像、木版画。

二年は未知な分野の経験を主眼とします。日本西洋の中近世芸術の鑑賞、銅版画による構想表現、日本画の鑑賞、日本画の制作。

三年は一、二年時の経験をふまえて、各自、絵画、彫塑、版画、デザインより選択し、自由制作で大作を目指します。

書道科

安塚　正明

高等学校から芸術科のなかにはいる「書道」は音楽、美術に比べ小・中学校からの一貫性に乏しく、国語科に書写として存在することから「高等学校芸術科書道」という教科を把握している中学生はほとんどいません。しかし我々は活字文化のなかに生きているのですから毛筆に対しては特別の感情を抱くわけです。器用でお手本をそっくり写し取ることのできるデッサン力のある中学生はともかくとして、不器用で書くことの苦手な多くの中学生は「悪筆」とあきらめきっているのが現状のようです。誰もが美しく早く書くことができれば良いのですが、それは非常に難しくしたがって書写から書道への導入が一つのポイントになります。授業ではただ技術の向上のみに終わらず漢字や平仮

名の成立やしくみ、時代、環境、風土による特長を知り、美しいものを見たり聴いたりするなかで、人間の作り出すリズムの共通性を理解することにより芸術全般にわたり素直に美を意識する感覚を養うことを目標として、個々について理論的に解明します。授業は実技主体に行われ、各学年共に東雲祭に参加、一月には全国展に出品し、小画仙紙半切にて五十枚清書して作品交換を実施します。その他の内容については次のようにわかれます。一、二年生は選択必修のため共通内容ですが、三年生は自由選択で人数が少ないため一、二年の基礎をもとに得意な分野を勉強します。

一年　中学校国語科書写との関連性について
　楷書・行書・仮名の研究
　創作作品制作の研究（小品・半切）
　鑑賞（日本書道史を中心として平安時代・唐時代）
二年　書体の成立と変遷（中国・日本書道史）
　篆書・隷書の研究（篆刻作品制作）
　草書の研究
　創作作品制作の研究
　鑑賞
三年　臨書と創作との関連性について
　古典・右筆の研究
　刻字の研究
　書論

また毎年書道を専攻するために進学する生徒がいますが、音楽、美術の大学に比べると実技の比重が少ないために、学科試験さえ良ければだれでも進学可能であり、国立では特別教科教員養成課程（高等学校教員）、私立では日本文学科（国文学科）や中国文学科を専攻すれば、高等学校書道の他に国語、また中学校国語の免許状が取得できます。

広く世界に眼を開け——英語科の現況と展望——

佐藤　敦

指導方針としては特に目新しいことはありませんが、学校環境・教科の性質からいわゆる受験英語に走りやすいので、もっと広い視野をもった英語学習にしたいと心がけています。

さいわい本校では長年にわたって国際交流が行われていますから、それを大いに活用して国際理解を深めるのに役立てたいものです。

本校では文法の教科書は使用していません。これは文法を文法のみの立場から取り扱うよりも、むしろ読解、作文と並行して総合的に取り上げた方が効果的と判断したためです。

現在、細野教頭を含め一〇名のメンバーでそれぞれの持ち味を生かした授業を行っています。

次に五十七年度一年生から新課程によって学習が進められることになりましたので概要をしるします。

（普通科）

第一学年　六単位　英語Ⅰ　総合的学習
第二学年　五単位　英語Ⅱ　総合的学習
第三学年　六単位　英語ⅡB・三単位　読む力に重点
　　英語ⅡC・三単位　書く力に重点

なお三年時の選択科目二単位については、英語科では次の二講座を予定しています。

講読　原書講読など、まとまったものを読む
作文　やや長い文の練習により発表力を高める

（衛生看護科）

第一学年　四単位　英語Ⅰ　総合的学習
第二学年　三単位　英語Ⅱ　総合的学習
第三学年　三単位　英語Ⅱ　同右の継続

職員寸描

〔石井　栄〕　ニュージーランドのオークランドで日本語科の先生をしていて本校へ。向こうで赤ちゃんもできて素敵な生活だったもよう。ある時数人で職員室で梨を食べながら、「梨は二人で食べるものですって」「???」「ペア」。ユーモアもあり、千葉県人とは思えぬスマートさ。女生徒あこがれの的。

〔金子澄兄〕　ニュージーランドに文化交流で半年間留学。ニュージーランドの自然の美と羊をほめたたえる。小柄だが案外と足が速く、飄々として「飛ぶがごとく」、世の憂いを一身に集めたキリストのごとく、憂い顔の君子。その緻密な頭脳と推進力には定評がある。進路指導部の貴重な存在。

〔亀　忠夫〕　旧制一高よりも当時の若人のあこがれのまとであった海軍兵学校を経て東北大哲学科出身。珍しい名前だ。本物の亀さんは、背筋のピンと張った胸毛の見事な堂々たる偉丈夫。大人の風格がある。ラグビー部の

顧問で、生徒と一しょになって走っている。あのスタミナはいったいどこから来るのか。

〔亀山仁寿〕　英語に sure という言葉があるが、確実な堅実な人柄。身なりはいつもきちんとして、激せず、乱れず、その論理は明快。前頭部が広く後退したところなど、どこかベートーベンの風格を思わせる。酒もタバコもやらないが、食べ物についての蘊蓄は超一流。ひたむきな職人気質があり、頼りになる人。県高校演劇連盟事務局長。

英語科職員

〔桜井功造〕　数年前、修学旅行で台風に遇い、旅館に閉じこめられた時、生徒が余興に先生の授業風景を実演したことがある。割れんばかりの拍手喝采で、人気絶大、そのじゅんじゅんとして説く授業には定評がある。一見おだやかで物柔かいが、確固とした心がある。毎朝、千葉公園でジョッギングをしており、健康管理も怠らない。

〔佐藤　敦〕　英語科の主任。長老。「言葉というものは生きており、われわれはその表現を素直に受けとめて検討する柔軟性が欲しい」と言う。ハンチングをかぶり、服装もしゃれてきちんとしており、飲みすぎるほかは紳士。こっちがわからない質問には親切によく答えてくれる。東高の校歌の英訳は格調がある。水泳部、尺八クラブ顧問。

〔須賀賢悟郎〕　慶応仏文出身。先年自費であこがれのパリを訪ねた。留学生の受け入れ担任の経験も一番多い。江戸っ子。下町出身の文学青年で永井荷風に心酔している。口数は少ないが剛直、曲がったことが大嫌いで、矢でも鉄砲でも持って来い、という心意気の持ち主。

〔鈴木健生〕　通称「ケンさん」。教務部の海外交流の係で、英訳に一心に取り組んでいる。美声の持ち主。アナウンサーとしても大成したことであろう。からだは大きいほうだが、職員会議などでは、その身をかがめるようにテーブルに手をついて発言する。謙虚な心のあらわれであろうか。そんなに遠慮することはない。

〔吉田秀樹〕　カリフォルニア大学のバークレー校で二か月研修。また青年の船の指導教師として東南アジアを廻った。前任校で英語の研究指定校での研究発表は、見に来た全国の高校教師が舌をまいたといわれる高度なものだった。やや太目の身体でスキーの達人とは想像がつかぬが、生まれが長野ときけば、うなずける。

家・家族・生命・生活——家庭科の現況と展望——

坂本　あい子

戦前の女学校における女子教育といえば、裁縫、家事という名称で、その授業時数も多く、その他の授業時数は男子の中学校（旧制）と比較し少なかったのです。戦後六・三・三制の教育制度が実施され、教育課程もいろいろと変わり、家庭科の全課目が選択となっていた時代もありました。家庭科は、高校入試の試験科目にもなく、国公立大学の共通一次及び二次試験にももちろん入らず、私立大学の入試でも出題している大学は少ないのが現状です。しかし入試対象学科でないから軽視してよいという教科ではなく、むしろ人間が生きてゆく上で、最も大事にしなければならない教科です。その教科内容から一つ二つをとりあげてこの点を考えてみたいと思います。

人間はだれしも高年齢まで元気で生きたい、とねがうのが人情であり、平均寿命は延びても現実には、寝たきり老人も多く、死亡率も癌と心臓疾患が一位を争っています。私たちは毎日、三度三度の食事をとっていますが、その食事内容が病気に関係がないでしょうか。私たちの体は、食物を摂取することにより、血液がつくられ、細胞もつくられています。「食は生命なり」、「体は食物の化身である」と強調し、薬を使用せずに、食物のとり方のみを指導し、病気の治療をしている医師が何人も活躍しているほどです。このようなことを考えると、家庭で食事をつくる人は、家族の健康の全責任を背負っていることになります。また、下宿で自炊生活をしている学生や、昼食を外食している人も、男女の別もなく、自分の健康のために、食物を選んで食べることは、とても大切な問題です。以上のような理念を基本にして、家庭科ではどのような食品を、どのくらいの分量を、どのように調理して食べたらよいか、実

習を通して学習しているのです。

次に保育の学習内容を考えてみます。最近は新聞、テレビ、ラジオ等のマスコミを通して、家庭内暴力、校内暴力等について悲しいできごとが連日報道されていますが、家庭内での幼少時の保育に全然関係がないのでしょうか。家族が三世代、四世代と同居していた時代は、それとなく、祖父母等にも助けをかりることも出来ましたが、最近のように核家族になると、それも出来ずに未経験の若い母親が、育児書を頼りに、はらはらしながら育てているのが実状です。家庭科では履習時間が少ないため、保育に対しては、その重要性、心構え、子供の心と身体の発達等について、最も大切な点を、重点的に学習し保育についての方向づけをしっかり身につけるよう授業を進めています。

家庭科　坂本先生

最後に再び教育課程にふれますが、昭和五十六年度までは家庭一般が必修で四単位（一年二単位・二年二単位）で、三年の選択で食物二単位を男女の別なく履習できましたが、新教育課程（五十七年度より実施）では、家庭一般は従来どおりに四単位女子のみ必修で、選択の食物については二単位女子だけが選択できるように変わりました。

選択で男女共習のときは、男子の選択者も多く、四十名余りが前掛をかけ、調理室で熱心に授業を受けていたこともありました。最近偶然に知人を通して食物を選択した男子卒業生の消息を知ることができましたが、その卒業生は現在国立大学に在学し、両親の許を離れて生活しているが、食物を学習したことが大学生活の上で大変に役立っているということでした。

第六章　衛生看護科十五年史

——模索から充実へ——

ナイチンゲール像

見よや　かの悲歎の家に
ランプ手に貴人行くを
たそがれの薄明りさす
ここの部屋　またかしこの部屋と
鳥のごと　軽やかに行くよ
幸福の夢かとばかり
ものいわぬ傷手の人は
おもむろに身を起しつつ
そとくちづけす　貴人の影
黒き壁の上に落つるを　　（ロングフェロー）

はじめに
1　設置の経過……二七九
2　教科の目標……二八一
3　教育課程……二八二
4　入学生の意識……二八八
5　図書館の利用状況（衛生看護科生）……二九五
6　千葉県保健婦等修学資金借用状況……二九六
7　病院実習……二九七
8　進　路……二九九
9　教　員……三〇五
10　非常勤講師……三〇八
11　問　題　点……三〇九
12　准看護婦教育と高等学校衛生看護科の動向……三一〇
13　今後に向けて……三一三
14　回　想……三一四
開設当初をふりかえって……永井弘子……三一四
十年のあゆみ……昭和45年度卒……佐久間早苗……三一六
看護に携わって……昭和51年度卒……小管方子……三一八

はじめに

昭和四十一年四月、本校に衛生看護科が併置されてから十五年の月日が流れました。十五年の歩みは全く長い道のりでしたのに、無我夢中であったためか、当初のことがついこの間のようにも思えます。

新しい特色ある学科の創設は予想以上の困難をはらんでいましたが、内藤校長初め全校職員の協力と努力が軸となって発足することができたのだと思います。その後も引き続き、歴代諸先生方のご理解とご支援に育くまれ、今日に至りました。特に学科の性格上、病院関係、医師、看護婦等多数の方々からの得がたいご厚情にはお礼の言葉もありません。

今、十五年を振り返ると、労苦の成果を喜び合った時、力の限界を嘆いて失意の時と、紆余曲折はありましたが、その足跡は十三回の卒業生四八一名によって、いきいきと証しされていることをここに報告させていただきます。

未解決の問題が山積したままの衛生看護科はこれを契機に一つの曲がり角にあると言えましょう。これからの展開のために一層のご支援をお願いいたします。

1　設置の経過

深刻な看護婦不足という社会的要請と、高校教育の多様化の機運にのって本校に衛生看護科が設置されましたが（註1）その背景には医師会の強い要望がありました。事前の調査（註2）に基づいて、立地条件の良い本校にしぼられ、その是非が熱心に職員会議で討論されたと聞きます。

高校の中に准看護婦教育をもりこもうという極めて事例の少ない課程の内容については、短期間のことでもあり練れた準備には至りませんでしたから、全国に先がけて設置された神奈川県立二俱川高校を、全面的に模写するという構想で発足することとなりました。

ナイチンゲールの墓
（イギリス　イースト・ウェロー）

（註1）

衛生看護科設置にいたる推移

昭35・8　文部省大学局看護学視学委員の総括意見として、准看護婦教育を高等学校の教育課程に組みいれてはどうか

昭37　中央産業教育審議会（文部大臣の諮問機関）から職業教育を拡充する必要あり、その中に准看教育を高校の中に設置してはどうか

厚生省でも看護教育の向上と医療近代化に即応できる看護婦養成について検討

昭39・4　神奈川県立二俣川高校開校

当時の学習指導要領には、この教科科目は示されていないが学校教育法施行規則別表第三に規定する「その他特に必要な教科」によって教育課程が編成されている。

（註2）

本校に衛生看護科が設置された経移

昭39　県下の看護婦不足はますます深刻となり、医師会の強い要請とともに、看護婦養成への検討が進められた。おりしも高校進学率が高まり、多様化の機運とマッチして神奈川県立看護高校に注目したという。

当時の高木教育長（県医師会副会長）の肝煎りで市内高校に併設するべく調査がなされた。

昭40　数校の候補があげられ、入学希望者のアンケート調査等も行われたが本校では校舎全面改築の時期でもあり衛看設置とともに建築の具体化が条件とされ、検討の結果決定を見た。引き続き学校内で教務部によるアンケート調査、学校訪問が行われ、集計結果が残されている。

昭40・12　千葉県立准看護婦学校指定申請　千葉県教育委員会より、文部省宛提出

昭41・2　教諭一名発令

教育課程の研究、施設、設備の検討調査にあたる

2・28　第一期生　志願者数＝四八　受験者数＝四七　合格者数＝三一　入学者数＝三〇

3・5　発表　三一名

3・9　実習室の整備始める（玄関脇会議室）

3・10　教育課程案　教育委員会へ提出

教科書選定　実習服デザイン発注

3・11　非常勤講師　手続上の問題で全員取消し

3・16　非常勤講師　実習病院の件再交渉　承諾を得る

3・28　備品購入計画

昭41・4・1　保健婦、助産婦、看護婦法に基づく高等学校衛生看護科として文部大臣より指定をうける

実習助手一名　事務（専任）一名発令

4・7　入学式　入学許可　三〇名

2　教科の目標

前述したように設置当初、「学習指導要領」に示された目標がなかったので、本校では次のようにしました。

「学校教育法の趣旨にのっとり高等普通教育および衛生看護に関する専門教育を施すことを目的とする。」

そして具体的には神奈川県立高校の目標を参考にしました。すなわち「現代女性としての教養を高めるとともに、実生活に役立つ教育を施し、また将来家庭の主婦として、子女の育成、家族の厚生に必要な生理医学についての知識と看護法を習得させ、人間性の涵養と品性の向上につとめる。」（註3）であります。

病院実習

文部省ではこの年（四十一年）に、高等学校衛生看護科教科・科目参考例のなかで、教科を「看護」としその目標を三項として示しました（註4）。その冒頭に「看護に必要な知識と技術を習得させ、医療および家庭生活における看護を適切に行なう能力を養う。」とあり、職業教育とともに、高等学校女子教育としてのニュアンスがうかがえます。本校では、四十二年度から四十七年度まで、これにのっとって目標を設定しました。

四十五年、学習指導要領に看護が初めて位置づけられました。その目標として「看護に関する知識と技術を習得させ、看護を適切に行なう能力と態度を・・・」（註5）と打ち出されました。したがって本校では、四十八年度から五十六年度現在まで、これに準じて目標が定められています。

この度の指導要領改訂によれば、教科の目標は特に「看護の基礎的・基本的な知識と技術を習得させ・・・」（註6）と、職業に関する学科の性格を一層明確にする方向で示され、五十七年度より実施の運びとなっています。

（註3）

神奈川県立二俣川高校　教育目標

現代女性としての教養を高めるとともに、実生活に役立つ教育を施し、また将来家庭の主婦として、子女の育成、家庭の厚生に必要な生理医学についての知識と看護法を習得させ、人間性の涵養と品性の向上につとめる。

（註4）

高等学校衛生看護科教科・科目参考例（昭和41・5公示）

教科の名称　看護

教科の目標

1　看護に関して必要な知識と技術を習得させ、医療および家庭生活における看護を適切に行なう能力を養う。

2　看護技術の科学的根拠を理解させ、その改善進歩を図ろうとする態度を養う。

3　社会生活や家庭生活における看護の意義を理解させ、看護に従事する者としての心がまえを身につけさせ、国民の健康の保持増進に寄与する態度を養う。

（註5）　学習指導要領（昭和45公示）

1　看護に関する知識と技術を習得させ、看護を適切に行なう能力と態度を養う。

2　看護技術の科学的根拠を理解させ、その改善進歩を図る能力と態度を養う。

3　看護の社会的意義を理解させ、看護に従事する者としての望ましい心構えと国民の健康の保持増進に寄与する態度を養う。

（註6）　学習指導要領（昭和53公示）

看護に関する基礎的・基本的な知識と技術を習得させ、看護の本質と社会的な意義を理解させるとともに、国民の健康の保持増進に寄与する能力と態度を育てる。

3　教育課程

衛生看護科の教育課程は、学校教育法施行規則別表第三に規定する「その他特に必要な教科」に位置づけ、職業教育を主とする学科として、普通科目の必修単位数を編成し同時に准看護婦試験の受験資格を得るため、「保健婦・助産婦・看護婦学校養成所指定規則第八条別表四」に定める教育内容に合致するよう専門科目をも編成する必要がありました。衛生看護科が初めて高等学校に誕生したのは昭和三十九年度のことで、神奈川県の努力に敬服しながら、それを参考に最初の教育課程を決定しました（表1）。

戴帽式（今は行われていない）

文部省では、本校発足の四十一年に「高等学校衛生看護科における専門教育の教科・科目参考例」を作成し、これに準拠するように指示されました。した

表1　千葉県立千葉東高等学校衛生看護科教育課程

昭和41年度

	教科	科目	実施単位	Ⅰ年	Ⅱ年	Ⅲ年	備考
普通教科	国語	現代国語	7	3	2	2	
		古典甲	2	2			
	社会	倫理社会	2		2		
		政治経済	2			2	
		世界史A	2			2	
		地理A	3	3			
	数学	数学Ⅰ	5	5			
		数学ⅡA	2		2		
	理科	物理A	3			3	
		化学A	3		3		
		生物	3	3			
	保健体育	体育	7	2	2	3	
		保健	2		1	1	
	芸術	書道	2	1	1		
	外国語	英語A	9	3	3	3	
	家庭	家庭一般	4	2	2		
	普通科目計		58	24	18	16	
		解剖生理	2	2			
		細菌及消毒法	1	1			
		個人衛生	1	1			

専門教科	看護一般	食餌療法	1		1		
		薬理概論	1	1			
		疾病と健康の社会的考察 関係法規	1			1	
	看護原理Ⅰ	看護史及看護倫理	1	1			
		看護原理及実際	3	3			
	看護原理Ⅱ	内科疾患及看護法	3		3		
		外科 〃 〃	2		2		
		小児科 〃 〃	2		2		
		産婦人科 〃 〃	1			1	
		精神科 〃 〃	1			1	
		眼歯耳鼻咽喉科 〃 皮膚泌尿器科 〃	1			1	
		理学療法	1			1	
	実習	看護実習	20		7	13	
	専門科目計		42	9	15	18	
教科科目計			100	33	33	34	
特別教育活動			6	2	2	2	
計			106	35	35	36	

表2　　昭和42年度～47年度

学科		衛生看護科		
類型		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
国語	現代国語	3	2	2
	古典甲	2		
	古典乙Ⅰ			
	古典乙Ⅱ			
社会	倫理社会		2	
	政治経済			2
	日本史			
	世界史			A2
	地理	A3		
数学	数学Ⅰ	5		
	数学Ⅱ		A2	
	数学Ⅲ			
理科	物理			A3
	化学		A3	
	生物	3		
	地学			
保健体育	体育	2	2	3
	保健		1	1
外国語	英語	A3	A3	A3
芸術	音楽	1	1	
	美術			
	書道			

学科		衛生看護科		
類型		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
家庭	家庭一般	2	2	
	被服Ⅰ			
普通教科計		24	18	16
看護一般	看護原理	1		
	解剖生理	2		
	病原微生物	1		
	薬理	1		
	衛生		1	
	看護基礎技術	1		
	食事療法		1	
	看護関係法規			
成人看護	内科系疾患と看護		3	1
	外科系疾患と看護		3	2
母子看護	母性看護			1
	小児看護		1	
看護実習	基礎看護実習	3	2	
	成人看護実習		5	8
	母子看護実習			5
専門教科計		9	16	17
特別教育活動		1	1	1
合計		34	35	34

表3　　昭和48年度〜56年度

教科	科目	1年	2年	3年	計	
国語	現代国語	3	2	2	7	9
	古典Ⅰ甲	1	1		2	
社会	倫理社会		2		2	10
	政治経済			2	2	
	日本史		3		3	
	地理B	3			3	
数学	数学Ⅰ	3	2	2		7
理科	物理Ⅰ			2	2	8
	化学Ⅰ		3		3	
	生物Ⅰ	3			3	
保健体育	体育	2	2	3	7	8
	保健			1	1	
芸術	音楽Ⅰ 美術Ⅰ 書道Ⅰ	2				2
外国語	英語A	3	3	3		9
家庭	家庭一般	2	2			4
普通教科計		22	20	15		57
看護	看護概説	2				2
	看護基礎医学	4		1		5
	成人看護		4	3		7
	母子看護		1	1		2
	看護実習	4	7	12		23
専門教科計		10	12	17		39
教科外活動	LHR	1	1	1	3	6
	クラブ	1	1	1	3	
合計		34	34	34		102

表4　　昭和57年以降

教科	科目	標準単位数	1年	2年	3年	4年	単位数合計 科目	単位数合計 教科	備考
国語	国語Ⅰ	4	4				4		
	国語Ⅱ	4		3	2		5		
	国語表現	2							
	現代文	3							
	古典	4						9	
社会	現代社会	4	4				4		
	日本史	4		3			3		
	世界史	4							
	地理	4			3		3		
	倫理	2							
	政治・経済	2						10	
数学	数学Ⅰ	4	3	2			5		
	数学Ⅱ	3			2		2		
	代数・幾何	3							
	基礎解析	3							
	微分・積分	3							
	確率・統計	3						7	
理科	理科Ⅰ	4	2	2			4		
	理科Ⅱ	2							
	物理	4							
	化学	4			3		3		
	生物	4		2			2		
	地学	4						9	
保健体育	体育	7～9	2	3	2		7		代替保健 2
	保健	2						7	
	音楽Ⅰ	2	○— 2				2～0		
	音楽Ⅱ	2							
	音楽Ⅲ	2							
	美術Ⅰ	2	○— 2				2～0		
	美術Ⅱ	2							

芸術	美術Ⅲ	2							
	工芸Ⅰ	2							
	工芸Ⅱ	2							
	工芸Ⅲ	2							
	書道Ⅰ	2	○				2～0		
	書道Ⅱ	2							
	書道Ⅲ	2						2	
外国語	英語Ⅰ	4	4				4		
	英語Ⅱ	5		3	3		6		
	英語ⅡA	3							
	英語ⅡB	3							
	英語ⅡC	3						10	
家庭	家庭一般	4		1	2		3	3	代替1
看護	基礎医学	5～6	5				5		
	基礎看護	8～10	6	2			8		
	成人看護	12～14		8	4		12		
	母子看護	4～5			4		4		
	臨床実習	10～15		3	7		10	39	
特別活動	ホームルーム		1	1	1			3	
	クラブ活動		1	1	1			3	
計			34	34	34			102	

がって第二回生からは、看護の内容を四科目に整理した教育課程に改訂しました（表2）。

その後教育課程審議会の答申に基づき、参考例の実施による意見などを資料として、四十五年初めて学習指導要領の第二章第十三節に看護が位置づけられましたので、四十八年四月、第八回生からこれが実施されました（表3）。

その後引続き検討が重ねられ、五十三年に再び新指導要領が告示され、今、次年度入学生（五十七年四月）から学年進行をもって実施されようとしています（表4）。

4　入学生の意識

衛生看護科に入学してきた生徒の意識を知る手がかりとしてアンケートを試みてきました。その質問に不備な面もあり、まだこれで良いとは言えませんが、それによりわかりましたことなど、二、

三紹介してみます。昭和四十一年度より入学生を迎えていますが、アンケートは四十二年度入学生から始められました。途中、質問形式に変更などがあり、この十五年を通じ同じ項目で比較してみることができないのは残念ですが、およそ、どのような意識を持って志望し入学してきたかがわかります(表5)。

表5

衛生看護科志望の動機	四二年度(三〇名) 数	%
(一) 技術資格を身につけていれば役に立つから	一九	五一
(二) 看護婦は尊い仕事だと思って	七	一九
(三) 中学校の先生にすゝめられて	四	一一
(四) 親又は他の人にすゝめられて	二	五
(五) 就職の心配をしなくてすむから	二	五
(六) 看護婦になりたかったから	一	三
(七) 他に行くところがなかったから	一	三
(八) 特に理由なし	一	三

祈りと奉仕

「技術、資格が身につく」という理由が圧倒的で、将来に対し堅実な考えを持っていたことがうかがえ、「看護婦は尊い仕事」また、「看護婦になりたかったから」を加えれば三分の二がはっきりと看護を見すえて入学してきていることがわかります。

四十七、八年の入学生に対しては、この項目に答えを用意せず、自由に書かせた結果は、次表です(表6)。

表6

入学志望動機(一)	入学年度 四七年度(四〇名) 数	%	四八年度(三九名) 数	%
(一) 自分で選んだ	二四	六〇	二五	六四
(二) 中学の先生にすゝめられた	一一	二七・五	七	一八
(三) 家族にすゝめられた	四	一〇	六	一五・四
(四) 知人にすゝめられた	一	二・五	一	二・六

六〇%強が自分の意思で選んできていることがわかり、家族も一〇～一五・四%は、すすめていますが、反面、看

護婦になりたいという意志表示に強い反対を見せていることも、アンケートからわかりました。

表6(一)の「自分で選んだ」者の「動機」は何か、同じく答えを用意せず、自由に書かせました(表7)。

表7

入学志望動機(二)	四七年度	四八年度
(一) 家族、自分の入院、通院で看護婦に接して	一二/二四人中	一五/二五人中
(二) 資格を得、将来家庭に入っても役に立つ	七	八
(三) やり甲斐、生き甲斐を求めて	四	八
(四) 看護の仕事に関心、その働きの偉大さに魅力	四	二
(五) 看護婦不足	二	七
(六) 看護婦になるために衛生看護科入学が修業年限において最短距離である。	一一	五

これは意外にも、働く看護婦の姿を見、看護されて受けた感銘なのです。看護婦の優しさに触れ、不安の中で、心の安らぎを得、きびきびした働き振りから信頼、尊敬の念を抱き、「私もあのような看護婦になりたい」と、進路を決定しています。しかし、この中には、ツンツンした看護婦に接し「病気で苦しんでいる病人にあのような態度をとっては、心が安まらないではないか、私が看護婦になって一人でも多く」と反面教師の役割を果たした看護婦も無くはなかったようです。

四十二年度では、「就職の心配をしなくてすむ」、という理由で、五番目にあがって来ているものが、四十七・八年度では、「看護婦不足」と端的な表現で、二名、七名、おり、これも「空いたベッドがあるのに、入院できない患者がいる」ことを知って、と、あくまで病人サイドからの志望であることに、入学して来る生徒の純粋さがわかります。

やり甲斐、生き甲斐の中味は、社会福祉に関心を持っており、人の役に立つ仕事をしたいと願っての「やり甲斐」、「生き甲斐」です。

以上のような動機で看護婦を志望し、看護婦になるのなら、高校の衛生看護科に入ることが、修業年限において最短距離であり、同時に高校も卒業できるということにメリットをおいて、四十七年度一一名、四十八年度、五名が、衛生看護科を選んでいました。

次に最近五年間の志望の動機を表にしました。これは、答えを用意し、該当するものを選ばせたもので、ほとんどが複数箇、記入しています(表8)。

表8

入学志望動機	入学年度(%) 五二	五三	五四	五五	五六	平均%
(一) 将来性のある技術が身につく	二七(二六・四)	二四(三三・八)	三四(三三・七)	三三(二六・八)	三二(二八・八)	(二九・九)
(二) 社会のために役立つ	一三(一二・七)	一四(一九・七)	一三(一二・九)	二五(二〇・三)	二二(一九・八)	(一七・一)
(三) 人の世話が好きだから	一五(一四・七)	一四(一九・七)	一〇(九・九)	一二(九・八)	一六(一四・四)	(一三・七)
(四) 将来家族や親類に病人が出た時役に立つ	一七(一六・七)	二(二・八)	一四(一三・九)	一六(一三)	一二(一〇・八)	(一一・四)
(五) 女として良い職業	一三(一二・七)	五(七・〇)	一一(一〇・九)	一六(一三)	一四(一二・六)	(一一・二)
(六) 親にすゝめられて	五(四・九)	三(四・二)	六(五・九)	八(六・五)	四(三・六)	(五・〇)
(七) 家族、親類に病人がいるので	三(三・九)	二(二・八)	三(三)	五(四・一)	二(一・八)	(二・九)
(八) 中学の先生にすゝめられて	一(一)	一(一)	二(二)	一(一)	○	(〇・九)
(九) たゞなんとなく	七(七)	六(八)	八(八)	七(六)	八(七)	(〇・五)
(一〇) その他	一(一)	○	○	○	○	(七・二)
(一一) 修学金があるので	○	○	○	○	○	○

この期を通して衛生看護科を志望した動機の一番は、資格、技術が身につく、ということであり、しかも、社会の為に役立つ看護の仕事を尊いと思い、その仕事にやり甲斐、生き甲斐を求め、将来の天職と選んで志望して来ていることがわかります。

次に看護婦になりたいと、多くが、自分で選んだ、看護の仕事を、中学三年の時点で、どのように理解していたのか、誤った考えのもとであったら、悲劇ともなりかねないと尋ねました(表9)。

質問に対し、四つの答えを用意しそれから選ばせたもの

表9

看護の仕事をどう思うか	四二年度（三〇名）	
	数	%
(一) 多くの人に奉仕して生甲斐のある仕事	二〇	六四・五
(二) 名誉ある立派な仕事	七	二二・六
(三) わからない	四	一三・〇
(四) 仕事許り辛くてつまらない	〇	〇

で、集計は楽ですが生徒の生の声が聞かれないのが少々物足りなく思えます。

四十七・八年度入学生のものは記述式です(表10)。

表10

看護の仕事をどう思うか	入学年度 四七（四〇名）	四八（三九名）
(一) 人の生命を預るので失敗の許されない責任重大な仕事	二一	二一
(二) 素晴しい立派な大事な仕事、愛のある誇り高い仕事	一二	一七
(三) 自分を犠牲にしても病人に尽くさねばならない つらく苦労の多い忙しい仕事、夜勤もあり重労働	一四	九
(四) 地味だがやり甲斐のある仕事	九	一二
(五) 苦しんでいる人を助け安らぎを与え心身の健康をとり戻す手助けとなる仕事	一	四

以上を見てもわかるように看護という職業を実に良く理解しており、五番の答えのように看護の本質を良くとらえているのには驚きました。まだこの他にも、各一件宛ですが、「心の広い、人間性豊かな人でなければできない仕事」、「女性の繊細な神経がなくてはできない仕事」、「生死に関わるので他の職業より喜び、悲しみを多く感じとる仕事」、「医師の手助けをして患者の世話、心の支えになり生命を守る仕事」など、この仕事の特性を良くとらえております。中には「医師の助手」と、古い考えもありましたが、社会一般がまだこのように思っていることも、否めませんので、かえって、この考えの少ないのに、驚くくらいです。また「楽しい仕事」と答えた生徒もおりましたが、おそらく四番、五番のような仕事であるから、「楽しい」ということではないかと思います。この他に、「労働の割に

生命を守る

給料が安い」と見ている者もおりました。

次に五十二年度入学生の看護に対する職業観、この年も、質問に自由に答えさせ、まとめたものです(表11)。

表11

看護の仕事をどう思うか	五二年度
(一) 大変だがやり甲斐がある	一四
(二) 社会的に貢献でき重要な仕事	一三
(三) (人を助けることができて)素敵で立派な仕事	一〇
(四) きつくて大変な(体力、忍耐力)仕事	七
(五) 将来性のある仕事	五
(六) 女として良い仕事	三
(七) 病気回復に医師と同じくらい重要な役割を持つ	三
(八) 医師の助手	三
(九) 生命を預かるので細心の気配りを必要とし、緊張するむずかしい仕事	三

以上の他に「心身の健康保持に努力し、安心した楽しい生活を営むようにする仕事」という「新しい看護観」が、入学してきたばかりの生徒によって書かれていることには、本当に驚かされるばかりです。

次表は、五十四、五、六年度入学生に用意された答から選ばせたものです(表12)。

では以上のように思っている職業に、自分の性格は適しているか、と質問しました(表13)。

表12

看護の仕事をどう思うか	入学年度 五四年	五五年	五六年
(一) 人のためにつくせるので生き甲斐をもってやれる仕事	二五	三二	三二
(二) 暖い心で接し、責任をもってやれる仕事	二九	三二	二三
(三) きびしく大変な仕事	二三	二三	二八
(四) どんな職業にもおとらない仕事	一一	二一	一八
(五) 奉仕の心をもって行う仕事	一三	一四	一七
(六) 親切に患者を助ける仕事	一二	八	九
(七) むずかしい仕事	一〇	一一	七
(八) 将来性のある仕事	五	一三	八
(九) 人の面倒を見るので大変な仕事	八	一〇	七
(一〇) 心と心でわかり合える素晴しい仕事	五	六	九
(一一) 余り社会的に認められていないが大切な仕事	五	六	八
(一二) その他	○	○	一

(体が丈夫でないと出来ない仕事)

看護の仕事を良く理解していたように思えるものゝ、この仕事に自分は適していないと、はっきり言いきっている者が、多少でもここを選んで入学してきていることに、どう解釈したものかと思わされます。適していないとしたその理由は、(一)、面倒見が良くない、(二)、依頼心がある、(三)、気が弱い、勇気がない、(四)、のんびりしている、また

表13　看護の仕事に自分の性格は適しているか

（　）内は%

年度	四二（三一名）	四七（四〇名）	四八（三九名）	五一（四〇名）
(一) 適している	一（三・二）	二五（六二・五）	二〇（五一・三）	三三（八二・五）
(二) わからない	二六（八三・九）	一一（二七・五）	一三（三三・三）	五（一二・五）
(三) 適していない	四（一二・九）	三（七・五）	六（一五・四）	二（五・〇）
(四) 解答なし	○	一（二・五）	○	○

あわて者、(五)、体力に自信がない、となっており、中には、適性をつくっていきたい、と述べている生徒もおりました。

五十二年度の八〇%強の生徒が、自分の性格を適しているとした根拠は、圧倒的に「世話好き」（一九名）次いで「やさしい」「明るい、困った人を見ると助けたくなる」（各三名）、「人をたのしませるのが好き、人と接するのが好き」（各二名）、「細やか、冷静、責任感、忍耐力、負けずぎらい」（各一名）で、

五十四、五、六年度になりますと、質問に適、不適の欄を設けず、「あなたのどういう性格が看護に適していると思うか」と、適しているものとして直接内容があげられ、それを選ぶ形をとっております（表14）。

表14

あなたのどういう性格が看護に適していると思うか	入学年度 五四	五五	五六
(一) 明るさ（おゝらかさ）	二五	二五	二一
(二) 他人に対する思いやり	一七	二五	一二
(三) 困っている人を見過ごせない	一七	一九	一七
(四) 責任感が強い	一六	一八	一八
(五) やさしさ	一三	一八	八
(六) 世話好き	一二	一二	一四
(七) 根気強い	八	一二	一一
(八) 人なつこい	五	八	八
(九) 度胸がある	六	七	七
(一〇) まじめ	七	三	六
(一一) その他	二	三	三
(一二) 不明	一	○	一

最後に、生徒は、自分の性格を用意された答えの中から次のように選びました（複数）（表15）。

全体を通し、年を追って本科志望は、自分の意志によるものが多く、その動機は、堅実で、将来を考え、また、病院等で接した働く看護婦の姿からの影響も意外とあり、地味で重労働だが、尊い仕事と、この仕事に、やり甲斐、生き甲斐を感じ、そのきびしい仕事にもかかわらず、自分の性格から、適している仕事であると三分の二が答え、それを支

表15

性格について	入学年度 五二	五四	五五	五六
(一) 社会的（外向的）である	二〇	一六	一五	二二
(二) 勝ち気である	一七	一八	二〇	九
(三) 内気で消極的である	三	七	七	七
(四) 意志が弱い	六	二	八	八
(五) 劣等感が強い	三	四	一	一〇
(六) 悩みを打ちあけられずひとりで悩む	一	四	七	八
(七) なにごとも素直に受け入れず反抗する	四	三	一	五
(八) その他（単純、落ちつきがない、正義感が強い、意志が強い、はきはきしている、責任感が強い、明るい、人見知り、頑固・短気、てれや、憶病、素直、決断力が欠けるなど）	一〇	一〇	一一	九

える性格は、明るく、思いやりと、やさしさに、そのうえ、人の世話が好き等、衛生看護科入学生が浮きぼりにされております。看護が、その起源を母が子を養育し、女主人が家族の中の病人や産婦の世話をしたように、女性の特性が、看護に要求されました。このアンケートから知る限り、いまま、衛生看護科を志望し入学して来た生徒は、堅実で、周囲を明るく、温かく包むやさしさを持ち、また、世の中のために尽くしたいという真摯な考えを持つ、極めて、まじめな女性らしい生徒である、ということができるでしょうか。

5 図書館の利用状況（衛生看護科生）

現在の生徒の図書借用状況は、月平均三〜四冊です。傾向としては、SF小説が多く、これは全校生徒の傾向のようです。

看護科の特色としての医学書・看護学書は、病院実習がはじまると、課題の参考書として多く利用されています。

その他としては、推理小説が多く、授業の課題としてでしょう、国語や社会などの参考書、女の子らしい料理の本、といったところです。

読書好きな生徒は、月一三〜一四と多いのですが、0冊の生徒もかなりいます。

図書借用状況に、看護科の特色はあまりでていないようです。

6　千葉県保健婦等修学資金借用状況

千葉県保健婦等修学資金は、県内の学校又は養成所に在学する者で、将来県内で看護の業務に従事しようとする者に対し、無利子で貸し付けられる資金です。これにより修学を容易にし、県内における保健婦等の充足を目的としています。

次の表16は、現在までの借用状況です。四十一年度は、全員に貸与されましたが、翌年から希望制となりました。返還免除されるためには、三年間県内で看護業務に従事しな

表16　千葉県保健婦等修学資金の借用状況

年度		41			42			43			44			45			46			47			48		
金額 1ケ月		1,500			1,500			1,500			1,500			1,500			1,500			2,500			2,500		
		在籍	借用者数	割合	在籍	借用者数	割合	在籍	借用者数	割合	在籍	借用者数	割合	在籍	借用者数	割合	在籍	借用数者	割合	在籍	借用者数	割合	在籍	借用者数	割合
学年	1	31	31	100%	30	26	87%	40	26	65%	37	14	38%	38	10	26%	40	17	43%	40	19	48%	40	4	10%
	2				31	31	100%	31	28	90%	40	26	65%	37	14	38%	38	10	26%	40	17	43%	41	19	46%
	3							31	31	100%	31	29	94%	39	25	64%	37	14	38%	36	10	36%	40	17	43%
計		31	31	100%	61	57	93%	102	85	83%	108	69	64%	114	49	43%	115	41	36%	116	46	40%	121	40	33%

年度		49			50			51			52			53			54			55			56		
金額 1ケ月		3,000			3,500			4,000			4,500			5,000			5,500			6,000			6,500		
		在籍	借用者数	割合	在籍	借用者数	割合	在籍	借用者数	割合	在籍	借用者数	割合	在籍	借用者数	割合	在籍	借用者数	割合	在籍	借用者数	割合	在籍	借用者数	割合
学年	1	40	16	40%	40	16	40%	40	13	33%	40	7	16%	41	14	34%	42	17	40%	40	13	33%	42	15	35%
	2	39	4	10%	36	11	31%	40	18	45%	40	14	35%	41	7	17%	41	19	46%	42	18	43%	41	13	31%
	3	40	19	48%	39	4	10%	35	9	26%	40	18	45%	38	15	39%	39	7	18%	41	20	49%	40	19	47%
計		119	39	33%	115	31	30%	115	40	35%	120	39	33%	120	36	30%	122	43	35%	123	51	41%	123	47	38%

ければならなく、借用の中途辞退・他職種への方向転換の場合には全額返還しなければならないためと思われます。

現在は、約半数の生徒が利用しています。金額も年々増え、学費はもちろんのこと、進学のために貯金をする者もいるようです。

7　病院実習

現在までの十四年間、国立千葉病院を主な実習施設として、ご厚情にたより、得難いご指導をいただいてきたことは、本校にとって何よりの幸いでした。

同病院では、附属看護学校を初め、国立下総療養所附属准看護学校、千葉看護

表17　病院実習　　（○は各年度の実習病院）

年度	学年	生徒数	実習日数	実習病院 指導教員数	国立千葉病院	国立下総療養所	千葉県がんセンター	国立療養所下志津病院	国立療養所千葉東病院	川鉄病院	聖路加病院	放射線医学研究所付属病院	中央保健所
41	2												
	3												
42	2	31	31	2	○								
	3												
43	2	31	20	5	○								
	3	31	52	5	○	○			○				
44	2	40	20	2	○								
	3	31	45	4	○	○			○				○
45	2	37	20	4	○								
	3	40	45	5	○	○			○	○	○		
46	2	38	21	4	○								
	3	37	42	5	○	○		○					
47	2	40	21	4	○								
	3	36	43	5	○	○		○				○	
48	2	41	21	4	○								
	3	40	45	5	○	○	○	○					
49	2	39	16	3	○								
	3	40	43	4	○	○	○	○					
50	2	36	16	4	○								
	3	39	35	4	○	○	○	○					
51	2	40	18	4	○								
	3	35	37	4	○	○	○	○					
52	2	40	18	4	○								
	3	40	35	4	○	○	○	○					
53	2	41	13	4	○								
	3	38	36	4	○	○	○	○					
54	2	40	16	4	○								
	3	38	38	5	○	○	○	○					
55	2	42	17	4	○								
	3	41	37	5	○	○	○						

専門学校（高等課程）、本校と、四校に教育の場を提供しておられます。

開設当初格別のご配慮をいただきました鈴木五郎院長を初め歴代の院長、看護部長、医師、そして看護婦の皆様方に懇切な指導をいただき感謝にたえません。

他には国立下総療養所、千葉県がんセンター等にも（表17）の通り、大変お世話になっております。

衛生看護科の教育課程において、病院実習の占める単位は大きく、年度により日数の変動はみられますが、二年・三単位、三年・七単位実施しています。

一期生の実習は月・火曜日の週二日間を分散して実習させましたが、二期生からは木曜日をのぞく週五日間の集中実習に変え現在に至っております。

実習の目標（註7）にそって、細かい計画のもとに開始する病院実習ですが、生徒は不安と期待のいりまじった落ちつかない気持で迎えるようです。

この実習は、学校で学んだ知識を本当に自分のものにできる、学習の場であり、患者を知ることにより、学校の中では感じたことのない自分のあり方を考えるよい機会となります。また人間形成、看護観、看護思想の確立の場ともなる重要な教育活動です。

（註7）病院実習の目標

看護臨床実習では、学校で学んだ知識・技術を基礎にして、①患者のもつ実際的な問題をとらえ解決する力と②看護するものとしての態度を身につけさせる。

各学年の目標

一年

病院見学により、病院の組織や機能及び看護婦の病院の中での役割等を理解させる。

二年

① 地域社会における病院の機能と看護の役割等の理解を深めさせる。

② 患者の日常生活に接し、健康人との違いの理解を深めさせる。

③ 看護婦の援助活動を観察し、日常生活の援助、診療の補助を実践させる。

④ 看護の実践・体験を通して、規律及び協同の認識を深めるとともに、これらの態度を身につけさせる。

三年

① 学習した看護の知識・技術をもとに、受け持ち患者の理解に努め、状況にあわせて看護計画をたてさせ、それを実践させる。

② 患者および家族に接し、生命の尊さを考え、看護への認識を深めさせる。

8 進　路

十四回生を送り出し、進路の資料をみると、衛生看護科の特質がよくうかがえます。看護学校進学者の割合が（表18）、圧倒的に多く、それは、年を追って増加する傾向にあります。当然准看護婦として就職する生徒は減っています（表19）。

これは、この先二年、専門の学習を積めば、看護婦国家試験を受験できるからです。

看護学校進学も（表20）、開設当初は親の郷里の学校へ、進んだりする生徒がみられましたが、年を重ねるごとに、県内及び東京・埼玉・神奈川の地域に限られてきました。五十六年四月には、千葉県立衛生短大の開校をみたので、教育の場としての充実と発展を期待しています。

卒業時の進路未定者も翌年には、看護学校や看護以外の大学へ進み、それぞれがんばっています。

生徒は三年生の三月に准看護婦試験を受験し、各年度とも一〇〇パーセント合格しています。ただし、受験は強制しませんので、自分に適性がないと認めたか、又は准看護婦の免許を必要ないと申し出て、受験しなかった生徒が一四年間に四名ありました（表18）。

表18　進路概況　　各年度4月末日現在

年度		43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	計
卒業生数		31	31	38	37	35	40	40	39	34	39	38	38	41	481
看護学校進学	計	11	16	24	22	16	22	29	32	32	32	34	23	33	326
	県内	9	13	18	13	7	14	16	16	13	15	16	8	26	184
	県外	2	3	6	9	9	8	13	16	19	17	18	15	7	142
看護外への進学		1	2	2	1	4	8	5	2	1	1	2	0	1	30
准看護婦として就職	計	16	10	8	11	9	5	2	2	0	4	1	8	3	79
	県内	14	5	8	9	7	2	2	2	0	2	0	5	3	59
	県外	2	5	0	2	2	3	0	0	0	2	1	3	0	20
一般就職		1	2	2	1	4	4	1	0	0	0	0	1	0	16
家事従事・未定		2	1	2	2	2	1	3	3	1	2	1	6	4	30
看護学校進学率及び准看護婦就職率	計	87%	84	84	95	71	68	78	87	91	95	97	85	87	
	進学	35%	52	63	59	46	55	73	82	91	85	95	61	80	
	就職	52%	32	21	30	26	13	5	5	0	10	2	24	7	
准看護婦試験合格者数		31	31	38	37	34	39	39	39	34	39	38	37	41	477

表19　看護外への進学　　各年度4月末日現在

年度	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	計
人数	1	2	2	1	4	8	5	2	1	1	2	0	1	30
学校名（　）内は人数	東京ビジネス学院	千葉女子専門学校保育科 千葉県立歯科衛生士学院	千葉県立歯科衛生士学院(2)	千葉簿記学校	慶大外国語学校 帝京大学柔道整復科 千代田ビジネス学院 千葉県保育専門学校	千葉県立養護専門学院(2) 虎ノ門タイピスト学院千葉分校 植草幼児教育専門学院 千葉女子専門学校(4)	日本医療事務学校 清和女子短期大学・土岐学園 明徳短期大学・東京文化学園	ゴルファー専門学校 東京テレックス学院	東京農業大学栄養科	千葉女子専門学校	高山美容専門学校 桜美林短期大学		飯田橋外語専門学校	

一般就職

年度	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	計
人数	1	2	2	1	4	4	1	0	0	0	0	1	0	16
就職先	池袋西武デパート	東京電電公社 千葉支払基金	丸高株式会社 共栄公業株式会社	千葉東高校理科助手	千葉婦人服ミカド店 千葉銀行・資生堂（東京） 検見川千鳥幼稚園	三越本店 千葉銀行・小出カメラ 千葉資生堂	ベデスダホーム					東京クレジット関東支社		

准看護婦として就職　　各年度4月末日現在

年度	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	計
人数	16	10	8	11	9	5	2	2	0	4	1（時就4 定制職）	8	3	79
県内（　）内は人数	千葉県対がん協会 放医研付属病院(2) 千葉市立病院(3) 国立下志津病院(6) 川鉄病院(2)	大百堂歯科医院 船橋済生会病院 国立千葉病院(2) 川鉄病院	桜ケ丘育成園(2) 習志野産婦人科医院(2) 国立千葉病院(2) 茂手木医院 千葉そごう医務室	浦安町役場 千葉大医学部付属病院(4) 成田赤十字病院 国立千葉病院(3)	国立松戸病院 松戸市立病院・市原市三井石油会社 千葉大医学部付属病院 国立下志津病院(3)	千葉社会保険病院 菅沼外科医院	高仁堂産婦人科医院(2)	市川病院(2)		於保産婦人科 千葉県立鶴舞病院	（千葉県立鶴舞病院）	結核予防協会 社会保険船橋中央病院 和光皮膚科(2) 弘人会板倉病院	新検見川歯科医院 川鉄病院 健生病院	59
県外	都内私立学校養護助教諭 江東診療所	東京陽和病院 群馬太田病院 慈恵医大付属病院(3)		順天堂病院(2)	北里大学病院(2)	藤倉電線株式会社 東京女子医科大学第二病院 賛育会東海病院				鬼子母神病院 癌研究会病院	（癌研病院） （昭和大医学部付属烏山病院(2)） 東京女子医大付属病院	東京女子医科大学付属病院 銀座ビル診療所(2)		20

表20 進　　学

看護学校　　各年度4月末日現在

設置主体	学校名＼年度	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	計
千葉県	千葉県立衛生短期大学（56年4月開校）													8	8
千葉県	千葉県衛生専門学院	8	6	10	8	3	8	11	4	6	9	8	1	9	91
千葉県	千葉県立鶴舞病院附属看護学校(定)					1					1	1			3
厚生省	国立療養所千葉東病院附属看護学校		4	6	2	1	2	1	3	2	5	1	2	3	32
厚生省	国立療養所松戸病院附属看護学校（定）						3		2						5
川鉄健康保険組合	川鉄病院付属高等看護学院							1	4	3		5	5	3	21
旭中央病院組合	旭中央病院付属看護専門学校		3		1	2			3	1				3	13
医療法人	亀田総合病院付属高等看護学院	1		2	2		1	3		1		1	募集停止		11
県内進学計		9	13	18	13	7	14	16	16	13	15	16	8	26	184
埼玉県	埼玉県立衛生短期大学									1	1	2	1		5
神奈川県	神奈川県立衛生短期大学									1					1
学校法人	東海大学医療技術短期大学								3	2	1	3			9
東京都	東京都立公衆衛生看護専門学校						1	4	3		7	1	1	4	21
神奈川県	神奈川県立病院付属高等看護学校				1	1									2
岡山県	岡山県立倉敷中央高等学校専攻科	1													1
北海道	北海道立衛生学院										1				1
横浜市	横浜市立大学医学部付属高等看護学校												1		1
浜松市	浜松市立浜松高等看護学校	1													1

学校法人	日本大学医学部附属高等看護学院											2	2	2	6
学校法人	日本医科大学看護専門学校							1							1
学校法人	北里相模原高等看護学院					1			2	6	2	募集停止			11
学校法人	聖マリアンナ医科大学看護専門学校		1			1	1								3
学校法人	帝京高等看護学院												2		2
学校法人	昭和大学附属烏山高等看護学校(定)					1						2			3
学校法人	東京医科大学附属看護専門学校			3			1								4
学校法人	東京女子医科大学附属看護専門学校									4					4
学校法人	慈恵第三看護専門学校						1								1
学校法人	東京衛生学園高等看護学校						2								2
学校法人	日本医科大学丸子看護専門学校										1				1
厚生省	国立療養所多摩全生園附属看護学校		1												1
厚生省	国立療養所宮城病院附属看護学校				1										1
厚生省	国立療養所村山病院附属看護学校							3							3
財団法人	聖路加国際病院附属高等看護学校		1	3	5	1		1	1	2	2	4	1		21
財団法人	警察病院附属高等看護学院				2	1	1	1	2			1	募集停止		8
財団法人	癌研究会高等看護学院（定）											1			1
医療法人	育仁看護専門学校												1		1
社会福祉法人	三井記念病院高等看護学院						1	1	1	3	2		3		11
労働福祉事業団	関東労災看護専門学校					2						1	1	1	5

済生会	東京都済生会高等看護学院							1	4			1	1		7
済生会	静岡済生会病院附属高等看護学院					1									1
社会福祉法人	京都桂病院附属看護専門学校							1							1
学校法人	慶応大学医学部附属厚生女子学院												1		1
県外進学計		2	3	6	9	9	8	13	16	19	17	18	15	7	142
進学合計		11	16	24	22	16	22	29	32	32	32	34	23	33	326

表21　県内就業状況（卒業生総数 481 名）

56年 4 月末現在

施設名 ＼ 卒業年度 ＼ 回生	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	合計	
	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55		
国立千葉病院		1	1	1	1									4	卒業生総数481名（約）
千葉大学病院				4		2	1	1						8	
千葉市立病院	2	3				2			1	1	1			10	
県がんセンター	1	1	2			3			1	3				11	
国立下志津病院					1	1	1	1						4	
千葉労災病院			3				1							4	
亀田総合病院						1			1		1			3	
成田赤十字病院							2	1						3	
県救急医療センター					1	2		2		4	4			13	
川鉄病院							1	1	2		4		1	9	

放医研	1														1
船橋中央病院	1				2		1	1	2	1	2	1			11
旭中央病院								3		1					4
国立千葉東病院			2		1		1			2					6
県立鶴舞病院										1	1				2
銚子市立銚子西高校			1												1
茂原市役所					1										1
市川市役所				1		1									2
千葉中央保健所				1					1						2
千葉市役所			1		1										2
館山保健所						1									1
野田保健所				1											1
佐倉保健所						1									1
京葉腎センター								1							1
その他の診療所・病院				1		3	2		2	4		3	2		17
計	5	5	10	9	8	17	10	11	10	17	13	4	3		122

65名は進学中）

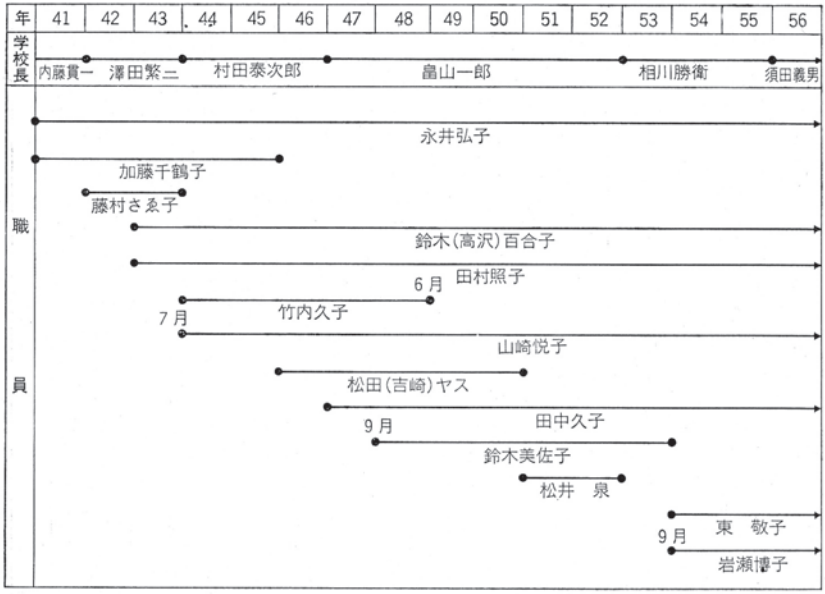
県内就業者数約122名

進学校を卒業後、多くは県内へ就職しており、看護が生かされていることが追跡調査からはっきりみられます（表21）。

9 教員

本校衛生看護科が今日に至りましたのは、校長をはじめとし、東高校の教員の皆様の温かいご支援の賜と感謝して

表22　衛生看護科教員表



講師

49	50	51	52	53	54	55	56
黒見　坦	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 9月より 五の井　透
〃	山本　実	〃	鈴木　俊雄	〃	〃	〃	〃
〃	〃	高橋　公毅	〃	〃	〃	〃	〃
〃	徳政　義和	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	藤本　茂	〃	〃	橋川　征夫
〃	首村　紀夫	岸本　圭司	〃	〃	〃	西牟田敏之	永山　洋子
矢野　徹	〃	〃	佐藤　真理	〃	〃	片桐　裕子	本田　徹
松井　宣夫	〃	伊藤　達雄	〃	〃	保坂　瑛一	〃	〃
〃	〃	千葉　次郎	張　春　輝	〃	安藤　豊彦	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

おります。衛生看護科の教員数は、人数不足の年もありましたが、教員表（表22）のごとくほぼ満たされております。他県では、教員の確保に困難をきたしている所がありその点本校では恵まれているといえます。また、教諭と実習助手の定員について、学校によっては全員が教諭である所もあり、今後に改善の余地を残しております。

次に、学習指導にあっては、教員をめぐっていくつかの問題をかかえております。その一つは、一学年一学級であることや、指導担当科目が三か年一クール方法（いろいろなやり方をした結果、欠点をかかえてはいるがこれに落ちついている）であるために、せっかくの教材研究の活用がたったの一回きりで、これはかなりの無駄があることです。

二つには、学習指導は校内にとどまらず、これをふまえて病院で体験学習させていくのでありますが、そのための対外的交渉や、実習指導計画とその実施は、人間関係を含めなかなか思うようにはかどりません。

三つには、指導の充実を考えると、教員はもっともっと臨床に接していないといけないのでありますが、病院と学校が離れているために教材が得にくいことであります。

また、公立学校の宿命である校長の異動は、衛生看護科にとって大きな打撃であります。特に対外的な接渉を必要

表23　非常勤

41年	12	43	44	45	46	47	48
伊藤　力	〃	〃	田中　好則	〃	〃	田沢　洋一	〃
仙波　正義	〃	〃	堀部　治男			山本　健介	〃
安井　成美	〃	〃	〃	〃	〃	村山　智	植村　展子
杉山哲次郎	崎山比早子	〃	高山　直秀	桑田勢津子	久保勢津子	〃	〃
	成田　光陽	〃	〃	〃	木村敬二郎	〃	寺沢　捷年
	広瀬　賢次	〃	〃	〃	佐野　元昭	丸山　佳子	〃
	奥井　勝二	〃	〃	〃	宮内　好正	〃	奥井　勝二
	船橋　茂	新美　仁男	〃	〃	〃	伊藤　純一	〃
	北村　玉枝	高梨　もと			北村　玉枝	〃	
		隆　勝明	佐藤　尚信	〃	太田　東吾	〃	〃
		村田　和夫	伊藤　力	奥山　隆保	〃	〃	〃
		小沢　号			忍足　正之	〃	〃
		大藤　敬美			大藤　敬美	〃	〃
		武宮　三三			武宮　三三	〃	矢島　寿夫
		青木　芳郎	〃	〃	〃	〃	〃
		岩津　英雄	〃	〃	〃	〃	〃
		伊東　和人	小林　道彦				
		木田　もと					

とする年度初めに、新任校長が衛生看護科の特性をすぐ理解することは困難と思われます。この校長異動の時期に、看護科の教員がその対外的交渉等の任を一手に負わねばならないことはまことに残念なことであります。

そういう中にあって、教員に与えられた各種の研修の機会には、進んで参加させていただき努力しております。校長協会主催による「全国高等学校衛生看護科研究協議会」と、「関東地区高等学校衛生看護科研究協議会」の研修会は次のような特質をもっております。衛生看護科は全国的にみて学校数が少ないことや、歴史が浅くて試行錯誤の初期にあることで、独立するにはまだ足元がおぼつかなく、校長協会をバックに保護されつつ運営されているということです。今までの研究協議会の討議内容を振り返ってみますと、次のようなものがあります。最初は各学校間の情報交換でしたが、たび重なるにつれ看護免許の発足と取得、教員の定員数の問題と研修、さらに実習病院の現状と問題点、教科科目の指導内容と方法……と、多岐にわたり、ましたが、順次真髄に触れてまいりました。

この間、千葉県内にも昭和五十三年に市立銚子西高等学校に衛生看護科が併設されましたので、姉妹校として連携をとり合いながらお互いの向上のために努力していきたいと思っております。

10　非常勤講師

教科の性格上、臨床医学分野の講義は、『保健婦・助産婦看護婦法』の中に医師によると明記されています。

そのため多忙をきわめる臨床医のうちに適任者を求めねばならず、年度ごとに校長の苦労する所ですが、幸いなことに本校の場合国立千葉病院、千葉大学、千葉市立病院のご好意により、毎年立派な講師の派遣をいただいています。現在「解剖生理」「薬理」「病原微生物」「内科」「外科」「整形外科」「小児科」「産婦人科」「皮膚・泌尿器科」「精神科」「耳鼻科」「眼科」「歯科」と一三の講座が開かれており、二時間続きの授業が週一回行われています。

熱心な先生方の授業に休講はほとんどなく、むしろ延長授業となることもしばしばで、本校の実状は他校の羨むところとなっています。しかし多忙な講師間の連携をとることは至難であり、唯一の手段として当初より年一回の非常勤講師打合せ会を設け、その席で准看護婦試験の合格率及び生徒の動向を報告するとともに、生徒指導にあたっての意見交換を行っていますが十分とはいえず、そのために生徒の負担になることや、懇切な講義にもかかわらず生徒が

ついてゆけないとか、講師の方の都合により時間割が制約され変則を余儀なくされる（百分授業など）ことなどが問題といえます。講師の方へも学校行事とのからみで試験の採点を急いでいただいたり、短縮授業になったり、休講になったりと無理をお願いすることがたびたびです。

そのような中で、看護科開設当初より本校非常勤講師としてずっとご指導を仰いでいる岩津英雄先生、青木芳郎先生、大藤敬美先生をはじめ、長年にわたってご指導下さっている諸先生方に深く感謝いたします（表23）。

11　問題点

＜病院実習＞　看護科最大の教育行事である病院実習には、その内容、運営上とも多岐にわたる問題があります。

現場実習の性格上、一定時期に集中して実施するため起きる学校行事とのからみ、単位換算やその時期、特殊な時間割の作成等の校内事情はもちろんのこと、実習場が、多忙を極める病院に委嘱せねばならぬという決定的な難題が基本にあります。

犠牲をはらって協力を願っている病院の実状は、数校からの実習生であふれ、業務に支障をきたすほどであり、善意にたよって指導を願うには限界があります。

そのうえ直接指導にあたってくださる看護婦諸姉は、臨床指導者の位置づけもなく、特に無資格の生徒に看護行為をさせる後だての責任は重大であるにもかかわらず、全く無償であります（教員の産業教育手当もいまだ確立していません）。

カンファレンス（病院職員とともに）

心苦しく思いながら、無理な計画でお願いしている以上問題が多いのは当然なのですが、これを差し引いてもこの実習体験は生徒にとってかけがえのない収穫となります。今後ますます実習委嘱は困難となる見通しであり、引続き重大な問題です。

＜施設・設備＞　当初、旧玄関脇会議室を実習室として一時をしのぎましたが、HR棟新築に続く管理棟建築のた

め取りこわされ、四十三年に、職員室・校長室であった現実習棟に移動しました。仮住まいのつもりが、そのまま十五年を経てしまい、年々巣立ってゆく生徒に申し訳なく思っています。

校内において初歩的な技術をしっかり身につけさせることを願いながら、教員の努力と工夫では補いきれぬ施設の不備がいつも問題となっています。

産振基準は五十年に改訂され、新カリキュラムも次年度から実施の運びとなった今、一層基礎基本の重視のため、施設・設備が充足されねばなりません。

新生児看護実習

12　准看護婦教育と高等学校衛生看護科の動向

高等学校衛生看護科の教育目標は、発足当初は「家庭にも役立つ看護」でしたが、現在は「准看護婦養成としての職業教育」を色濃くうたっています。

一方、看護の専門職能団体である「日本看護協会」では、准看護婦制度について、昭和三十七年より、ここ二十年間にわたりさまざまな検討経過をたどり、ついに准看護婦養成廃止の見解を打ち出し、実施に踏み切ろうとしています。

こういう世の中の動きの中で、高等学校衛生看護科の存在は世論の動きと相反する一面をもっていて、存在の是非にはいろいろの問題があり、すっきりしない状況です。

そこで、本校の生徒には、准看護婦にとどまらず、看護婦になるように進路の方向づけをしています。つまり、この科を卒業しますと、准看護婦免許取得のための受験資格が得られますのでその免許を取得させ、卒業後にはさらに二年課程の看護婦養成施設に進学、国家試験を受けて看護婦の免許を取得するようにすすめています。准看護婦で働くということは、就職の間口も狭く将来伸び悩むと思われ

るからです。

また、准看護婦養成施設数や高等学校衛生看護料の学校数について、年次別推移をみますと、グラフ（図1・2）のとおりです。これによると、准看護婦養成施設数は、昭和四十五年ころから減少しはじめ、昭和五十五年にはかなりの減少を示しています。あわせて高等学校衛生看護科の学校数についても、昭和五十年からは増加はみられず停滞気味です。

さて、どうして准看護婦養成廃止が提案されるのか、その理由を日本看護協会ニュースよりみてみますと、次の内容であることがわかります。

○准看護婦発足（昭和二十六年）当時は「看護婦の補助者とする」と厚生省は見解を出したが、数年後からは、准看護婦のその立場は失せてしまい、その人数は現在二〇万人を越す状態となりいろいろと混乱している。当然この制度を見直す時期にきている。

○めざす看護の役割を、現行の准看護婦教育を受けた人々に期待するのは難しいといえる。

○中学校卒業を基礎学歴とする准看護婦教育は、看護の基礎教育としてふさわしくない。

○准看護婦学校と進学コース（二年課程の看護婦学校）の連携をみると、一貫した教育の難しさと無駄があり、本来の継続教育になりえない。

○看護婦と准看護婦との資格差が、さまざまな葛藤を生み、チームワークを妨げている。

○保健医療では、他の関係職種とのチームワークも大切であるが、横の関係チームワーク職種はみな高等学校卒業を基礎条件として教育されているのに対し、准看護婦の教育レベルは低く、均衡を失する。

○准看護婦教育の養成は、大半が私的養成機関であり、その施設の要員確保に主眼が置かれているので、公的立場から、推進されなければならない。

○中学校卒業を入学資格とする准看護婦学校へ、高等学校卒業者が入学する傾向にあり、准看護婦養成に不合理がある。

以上を要約しますと、准看護婦養成廃止案に伴い、養成施設数の減少と高等学校衛生看護科数の停滞、実習病院の確保の困難及び准看護婦としての就職の狭さ等、さまざまな因子をもっており、今後さらに准看護婦制度について検討され、日本の看護教育が見直され、改善されていくもの

図1　准看護婦養成施設数の年次別推移

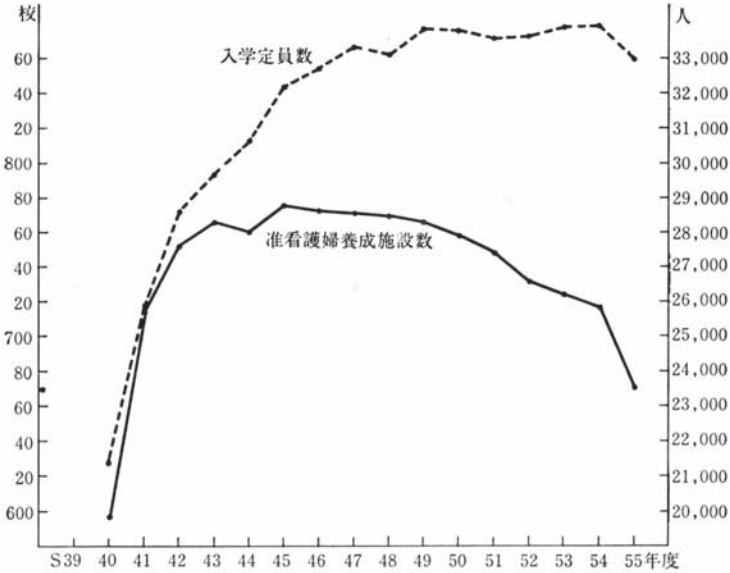
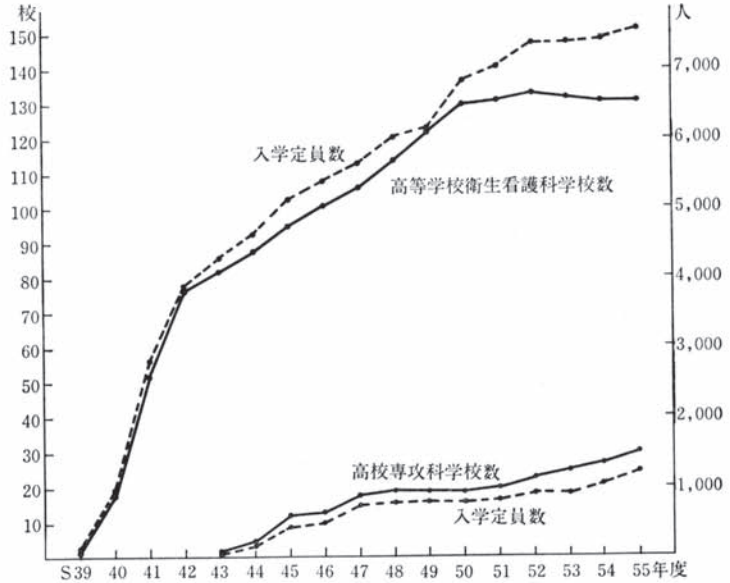


図2　高等学校衛生看護科学校数の年次別推移



統計資料「文部大臣指定医療関係技術者養成学校一覧」文部省大学局医学教育課より

毎年5月1日現在

と思われます。

13　今後に向けて

看護婦不足が社会問題となった設置当初から、おいおい要員の充足がなされ、看護は量から質を求められるようになりました。

職能団体である日本看護協会を中心に、看護制度の検討がなされ、准看護婦廃止の世論が醸されるようになり、既に千葉市周辺でも公立病院へ卒業生（准看護婦）の就職は困難となってきています。

その影響は生徒の進路にもはっきり表れ、看護婦学校進学者が九割となりました。

卒業生は自分たちの一般教養の不足を訴え、受入れの臨床上司からは、専門的知識技術の不足を指摘され、病院実習経験の少なさは卒後教育に負うことが多いのが現状です。

これらのことをふまえて、このたびの新カリキュラム編成に際し専門科目は資格取得のため従来どおりとし、普通科目についても現単位数の減は考え得ませんでした（表24）。

人間形成途上にある高校時代には、偏りなく幅広い学習が必要ですし、教科以外の活動にも十分参加させることが意義深いと考えます。

衛生看護科職員

本科の教育が即プロとしての教育とはならないかもしれませんが、看護の基礎基本を身につけさせ、その学習を通して生命の尊さを考え個々の全人的な育成をはかるのが第一義だと思います。なお引続き学習意欲を持って進路選択をし、卒業後深く看護を追求する者であって欲しいものです。

待望の県立短大も五十六年開校しました。謙虚に社会の評価をうけとめ、今後の教育方法について熟慮し、進学コースとの連携を密にする努力が一層必要となる時期にきていることを感じます。

なお県立短大に隣接した敷地に、看護の単科高校設置の構想が発表されて久しく、数年来生徒の動揺をよんでいましたが、五十九年度から発足の気運です。

現状の施設設備には大きな問題がありますが、新設校開校、学級増となった暁に、実習病院をどのように開拓するのか全く見通しがつかず、単純に整備された新校舎を夢見ることはできないのが正直なところといえましょう。

現在東高校という恵まれた教育環境にあって看護を学ぶ生徒が自分自身を見つめることに始まり、家族、友人へと徐々に視野を広げて健康を考えることができるようになり、広く看護が一般に浸透することに活かされるなら、一層千葉東高校衛生看護科の存在は意義あるものとなると思います。五年十年後どのように成長するかを期待して、発足から十五年のまとめとします。

14回　想

開設当初をふりかえって

永井弘子

千葉東高校に看護科を設置するため採用したい旨、県からの連絡を受けたのは昭和四十一年一月末でした。

全く未知の看護高校について、神奈川県の友人に問い合せ、その任の重さに器でないことを知り、おことわりするつもりで初めて東高校を訪ねました。

校長室（現在の実習室）で内藤先生にお目にかかり、「四月開設の手はずであること、教員が得られないこと、資格をもつ者として一緒に苦労してみませんか」などのお話をうかがい、負いきれる荷であろうかと大変不安でしたが、開設のお手伝いをさせていただくことにしたのでした。

予想以上の問題につまずきながらここに至ることが出来ましたのは、多くの方々のおかげです。

五里霧中のことばどおり、何から手をつけたらよいやら途方にくれるほどでしたが、まず准看教育を知るために県医務課に日参し、数々の初歩的なご指導をいただけたのは幸いでした。

学習指導要領に看護の科目は定められていないので、全国に先馳けて設置された神奈川県立二俣川高校をモデルとし、教務の高山、星野両先生が前年に調査なさった資料を参考に教育課程を定め、教科書選定、医師講師・実習病院の依頼、備品購入計画、予算資料作成、校内実習室の整備等々、校長先生や藤野事務長の指示によって走り回りましたが、今思えば無鉄砲だったな、知らないことは強いなあと感慨ひとしおです。

息つく間もなく第一回生三〇名の入学許可が決まり、四月には若々しい加藤千鶴子先生と、看護科の専任として事務に伊藤晋さんをお迎えし、どんなにほっとしたかしれま

昭和43年度卒業生一同（２年次の戴帽式）

せん。

当時普通科九学級でありましたから、看護科は一〇組となり、旧校舎のＨＲで三〇名と対面した時はオリエンテーションもおぼつかない新米でした。学年の先生方や山崎学年主任には殊のほかお世話になりました。校内での衛看の位置づけにとって、スタートが山崎学年であったことは大変に恵まれていたと思います。

このころは教員による宿・日直がありました。日曜出勤のある日、日の当たる宿直室でたくさんのリネン類に記名しておりましたら、剣持先生が達筆で協力してくださいました。図書については古沢先生に、ユニフォームのデザインは須藤、坂本両先生にというように、目立たぬご助力は数えきれません。補正予算に間に合わせるための資料作りや、アンケート調査、講師手続。入荷がおくれたために、千葉高へ骨格模型を借用しに走ったりで、教材研究も不足がちとなり、一回生には申し訳なく思うばかりです。

財務課の応援を得ての入札では、物を指定する時の仕様の細かさにびっくりしました。タオルは大きさだけでなく重量がその質を表すことや、使い慣れた医療器具の高価さを知ったのもこのころです。

約束の校舎全面改築は、着々と進み、夏休み中に北側校

舎をとりこわし、ボーリングが始まり、HR棟から年を追って特別教室建築へと予定が発表され、近い将来に衛看棟もと、心づもりしたものでした。

備品の入荷が始まり、急拠中庭にプレハブの準備室がたてられ、実習室には湯沸器と流し、一〇台のベッドが所狭しと並べられました。一学期末には実習が始められるはずでしたが、小さな物品一つ不足しても単元の変更をせざるをえず、ある時は、こうしたつもり、あるつもりでなどと、展開が仮定に立つものとなり、生徒には迷惑なことでしたが、本当によく協力してくれました。

最初の講師として、国立病院から解剖生理を伊藤力・仙波正義先生、薬理を安井成美先生、細菌消毒法を杉山哲次郎先生が担当し、基礎作りに大きな力をくださいました。

病院実習は二年後期よりと定め、実習直前には戴帽式が行われました。指導課からの来賓、ご父兄の列席もあり、澤田校長から一人一人に白いキャップが与えられました。

緊張した面持の生徒の顔が思い出されます。

この秋一三年ぶりの顔ぶれも加えて第一回生のクラス会がもたれ、木造の校舎、渡り廊下、コークスを炊いたストーブ、雪の日の病院実習、補習授業、仮装行列やお世話になった栗林さんと話がつきませんでした。

着任したばかりのころ、指導課にいらっしゃった奥山浩先生から、「開設期の記録写真をとっておくといいですよ。」と助言されましたのを記憶しながらも、刹那々々を送ってしまい、今記録を書くに当たり、大変後悔し、申し訳なくも思っております。

十年のあゆみ

三回生（昭和45年度卒）　佐久間　早苗

「大きくなったら看護婦さんになるんだ」と幼い頃からのあこがれが、中学三年の進路を決める時、東高衛生看護科の受験を決意させました。

運よく合格し胸ふくらませ門をくぐった時のことが今でも目に浮かびます。「あら、お互いに入学できてよかったわね。」と喜びあった友がいました。入学試験の時、控室に受験票を忘れ二人でとりに行った印象深い友が、現在も親友としてお附合いしているのが、不思議な気がします。

私にとって、高校時代といえば、白いキャップを頭にのせていただいた時の感激、少々太り気味の私でさえ身がキュッとひきしまったような気がしました。そしてブルーのユニフォームを着ての病院実習。「この患者さんにとって今一番必要なことは…」と毎朝考え通ったこと。いつもや

さしい先生方も、この時期はなんときびしく感じたことでしょう。

無我夢中での三年間、はちきれんばかりの想い出なので卒業の感激はもちろんでしたが、看護の道に携わっていた母の喜びは私以上により一層大きいものだったと思います。

卒業後は、先生のおすすめどおりに、母の若いころのあこがれでもあった聖路加病院の進学コースに入学し、初めての寮生活を経験することになったのです。親もとを離れ、秋の夕暮れふと淋しくなったこともありましたが、二年間看護の基本を学び、常により高い看護をめざして働く姿勢を見て、女性として最もやりがいのある職業と確信しました。

そして現在は、地域の健康を推持、増進する役割の保健婦となり、より広い看護の道に一歩踏み出したと同時に、家庭では妻として、また二児の母として奮闘しております。

産休あけ、まだ首もすわらない子を預け仕事に向かう朝、泣かれたわけではないのに何か胸があつく、涙がこみあげてくるような複雑な気持ち。お昼近くやや緊張ほぐれ、子供のことを思い出すとお乳がピーンと痛くなる。出るお乳も与えられない、そして何といっても病気の時に思うように看病してあげられないのが共働きのつらいところです。

「今日は、だれがみてくれるの」と具合悪い四歳の息子のことばを聞いて、母としての役割を果たしているのだろうかと考えることもありました。

いくつのころからか記憶にありませんが、ずっとずっと頭の片隅にしまってあったこと、私はカギッ子で淋しかった思い出があったため、自分の子にはこんな淋しい思いは絶対させたくないと。しかし母となった今も仕事をもち、今後も続けるつもりでいます。もちろんそれには夫の協力なしには不可能ですが…。

自分の健康は自分で守りましょうとか、元気な子を産み育てるには、赤ちゃんの発育、発達は順調ですか、お年寄りがねたきりにならないようにするためにはなど、健康な人にはそれを守り、より増進するために、失いつつある人には回復の援助を、と働いております。

こんなことがありました。ある一児をもつ母親からの電話で赤ちゃんの発達に関する相談でした。実際にみたところが、私自身も少し不安に感じ、専門機関をすすめたところが、ある病院で「異常なし」と言われたためすぐ安心してしまい予約を取り消し、それでもなおすすめる私をうる

さがり、結局拒否的な態度となり、「親の気持ちなんかわからないんです。もう放っておいて下さい」との電話が最後でした。子供の将来を考えての気持ちであり、私も保健婦なりたてで未熟な点もありましたが、それなりに一生懸命でショックも大きく、あふれてくる涙をおさえるのが精一杯でした。正直なところ何度やめちゃおうかなと思ったかわかりません。

それから三年後、その方と道でバッタリ、三歳になって歩けず、しゃべることができない子を連れた母に、「あの時、すすめられた通りに行っていれば…」と言われた時にはすぐに返事ができませんでした。ああやめないでよかった、と同時に、あの時もっとなんとかしてあげられなかったかと。しかしその子のあどけない顔をみたら、これからだと思い、「今からだって遅いことはないじゃない」とやっと答えました。

時には、初めての妊娠の時に母親学級に参加された方が、再び大きなお腹をかかえ、二歳位の子の手を引き「おかげ様でこんな大きくなりました」と声かけられた時、なんと月日のたつのは早いものかと感じさせられます。

今になって、現在も働いている母の気持ちを理解できつつあると同時に、働いている母に感謝もしております。

私の子供たちも、働いている親を理解し、よかったと思ってくれることを信じて…。

看護に携わって

九回生（昭和51年度卒）　小管　方子

私が看護に携わってから早や二年半の月日が流れましたが、看護はとてもやりがいのある仕事だと考えています。

臨床で学び得たものは数知れないほどたくさんありますが、その中でも私が一番大切だと思ったのは、看護観察及びコミュニケーションでした。何をするにもそれらが基礎となっていたことを改めて再認識したからです。

患者の観察は、ただ身体的なものを見るだけでなく、心理的状態やニードを把握するためのものでもあり、予測・判断の一データともなるからです。それは、看護計画をたてるのにはなくてはならないものの一つでした。観察そしてデータ収集は、患者が入院し病室に着きアナムネーゼをとるという行為から直ちに始まります。必ずしも、全ての情報がコミュニケーションより得られるわけではなく、バイタルサイン測定中、又は処置及びケアー中にも観察はできるのです。それをしなければ、処置は処置にしかならず、ケアーはそれだけの中途半端なものとなってしまう恐

れがあるのです。

実際臨床をやってみて、一番良い機会であると感じたのは、日常行う看護ケアーの一つである清拭でした。このケアーにより、さまざまな情報を得られたからです。患者の身体を清潔にしたり、循環を良くするだけでなく、発疹・変色・浮腫・褥瘡などの皮膚や粘膜の変化をはじめとする身体の異常の有無、また創の状態をチェックしたり、運動機能を見たりもできたからです。それにもまして、コミュニケーションをかわすよりよい機会となり、患者の気持や気分を知ることもできたのです。

このように、一つの事だけに看護の目をとらわれずに患者を正しく認識していくことは、重要なことだったのです。これによって得られた情報を医療・看護に反映しなければなりません。ここで、治療方針と平衡して看護計画がたてられ実践・反省そして評価がなされ、再度計画がたてられるのだと思います。

私は、ただ単なる処置をするだけの看護婦にはなりたくないと、日ごろより考えています。

次に大切だと思ったのは、看護婦の言葉や態度でした。何気なく出た言葉や態度が、時として患者の気持を明るくしたり、反対に暗くしてしまうこともあるからです。健康人同士でも、そのようなことは日常茶飯事にみられることですが、病を持った人は、それ以上に敏感であるからです。私たち看護に携わる者は、こういうことを踏まえた上で、言葉などの選択をしていかねばならないと考えます。

現在、臨床を離れ、県内を廻り地域住民の健康診断とその事後指導をする職についているわけですが、ここでもやはり、直接看護ケアーをしたりはしていませんが、先に述べてきた、観察・言葉や態度が重要となっています。健康診断に必要な問診等の場は、その人が自分の目の前に座ろうとしている時から、その場を立って次の所へ行くまでの短時間が勝負だと思っています。歩いて来て座るまでの相手の状態、顔色や表情・話し方などを素早く観察し、またその人にあった話し方をして、より正確な情報を相手より聞くことが、診断にも役立つと考えているからです。

このように、どのような立ち場で職に携わっても、看護の根底を流れるものは同じであると思います。正確な情報を得て、適切な処置・ケアーをし、その人を一刻もはやく健康に近づける援助をしていくことだと考えます。

それをしていくため、私はいつも思いやりを持って一人ひとりに接していきたいと思っています。そして、また改めて看護の良さを見出していきたいと思っています。

第七章　通信教育この十年

―生涯教育の実践―

創立四十周年を祝して……通信制振興会会長 文化女子高等学校長　植草　ふう……三三
東高通信・昨今……通信制教頭　松本一平……三四
沿革年表……三六
回想東高通信
有言実行……第三代主事　中野舜一郎……三三
千葉東高の想い出あれこれ……旧職員（国語）椎名　純……三三
思い出に残るもの……旧職員（商業）宮代清一郎……三四
思い出すままに……第六代教頭　鵜沢武視……三六
千葉東通信制を回顧して……旧職員（社会）大岩美代……三八
ある想い……旧職員（国語）牛島玲子……三九
千葉東高通信制に勤務して……旧職員（理科）小笠原　正……四一
四十周年記念によせて……昭和46年度卒　松本美子……四三
思い出の通信制高校……昭和47年度卒　菅原成子……四三
我が通教生魂……昭和49年度卒　竹前政則……四四
意志……昭和51年度卒　石橋康郎……四六
二度目の青春……昭和54年度卒　柏原斐子……四七
笑話徒然草……昭和55年度卒　小村佐清……四八
御殿場合宿に参加して……昭和55年度在校生　瀬下とし子……五三

創立四十周年を祝して

通信制振興会会長
文化女子高等学校長　植草　ふう

県立千葉東高等学校創立四十周年、まことにおめでとうございます。数多い県立高校の中で名門校の名を轟かせていることを、誇り高く感じている関係者一同は、一際今日の隆盛を我がことの如く喜んでおることと存じます。

千葉東高等学校とのご縁の初めは、昭和三十九年でございました。学校法人植草学園の中に、中学卒業者を入学資格として、県から認可された家政高等専門学院（家政と被服製作技術を中心に、国語・数学・社会・書道・茶道・華道等を指導）という小規模の学校がありました。今から十八年前ごろは既製服などあまりない時代でしたから、女性は家族の着るものぐらいは一応作れなければならないと考えて、入学してまいりました。高校に十分入学できる生徒が多かったものですから、この生徒たちの将来を考え、高校卒の資格を与える道はないものかと、何度も文部省に足を運びました。また県にも申請し、県立千葉東高等学校通信制課程普通科の教科を併修することが許可され、四ヵ年で二校の全課程を修了できるようになりました。

昭和三十九年四月に第一回の入学式が挙行され、それから喜びと苦労を繰り返し、十八年が過ぎました。そして五十六年三月までに一〇六九名の卒業生を送り出しました。卒業生の中には大学進学者も数名おり、短大や専門学校へも相当数進学しました。現在教員として活躍しておる者もおります。

十八年の間、校長先生としては、石毛貞雄先生・内藤貫一先生・沢田繁二先生・村田泰次郎先生・畠山一郎先生・相川勝衛先生・須田義男先生、主事・教頭先生としては、山川達二先生・早川俊一先生・中野舜一郎先生・村越林太郎先生・鵜沢武視先生・松本一平先生の諸先生方に、言葉では到底表現し得ない御世話に相成りました。卒業生一同やその親たちに代わりまして、心から深く御礼申し上げます。さらに御高恩にあずかりながら、日ごろ御無沙汰に打過ぎ申し訳けなく存じております。この機会をお借りいたしまして、御礼と御詫びを申し上げる次第でございます。

なお植草学園の通信生は、昭和五十七年三月の卒業生で最後となります。今から三年前に文化女子高等学校と組織を替えて、現在は第一条校としての教育に取り組んでおります。永い間本当にありがとうございました。千葉東高等学校の御発展と、ますます弥栄を祈念いたしまして、祝辞とさせていただきます。

東高通信・昨今

通信制教頭　松本　一平

＜はじめに＞　思えば四月二十日、他の高校などの転編入者八一名を含め三二七名の入学者を迎え、一方、待望ひさしかった新校舎が落成し、二十年間住みなれた通信棟から移転し、「居は気を移す」という言葉どおり、気分をあらたに、活気に溢れた新年度がスタートしました。

その後、懸案のグランド拡張工事に伴う総合整備第一期工事、引続いて第二期工事が進行し、天候に左右されやすい土木工事のため若干の遅れはありましたが、十二月はじめには、鉄筋校舎にふさわしい現代的な新校門をはじめ通学路、テニスコート、バレーコート、多目的小グランド、総合運動場など装いをあらたに完成し、更に、防塵緑化のための校内の全面植樹と舗装工事が完了し、創立四十年目を迎え、発展する本校にふさわしい教育環境が整備されました。次に諸君に直接関係したいくつかの行事について、その印象をたどってみます。

＜合宿研修＞　五月末と八月初めに、それぞれ県立東金青年の家及び国立中央青年の家で行われた合宿研修では、特に、不得意科目の学習方法や現在生徒諸君が直面している諸問題について活発な意見がだされ、聞く者も学ばされることの多い熱のこもった討議が展開されました。教師と生徒、生徒同志の協調融和を深めるうえで大変有意義な研修であったと思います。

＜生活体験発表会＞　出場者全員が自らの体験をもとに、自身の苦心や努力が生々しく発表され、その真剣な生活態度と障害を克服し、新しい道をきり開いていこうとする、ひたむきな努力に、快よさというより敬意を覚えずにはおられませんでした。

＜修学旅行＞　社会人ではあるが東高生として参加の修学旅行の秩序は極めて良好で、さすがは模範的な社会人であると意を強くしました。短期間のあわただしい旅でしたが、車中やバスの中、そして旅館での共同生活の中で、平素を忘れ有意義な時をすごせたものと思います。この旅

が、今後の学習や社会生活への活力になることを期待してやみません。

〈クラス対抗バレーボール大会〉　老いも若きも、男子も女子も、プレーヤーも応援者も、すべての生徒が童心にかえり、それぞれのチームが、クラスの名誉をかけ、総力をあげて奮闘された姿が、今でも脳裏に焼きついています。大変有意義な楽しい一日でした。

〈おわりに〉　諸君に対してやや手厳しい注文になって恐縮ですが、諸君の生活全般について反省してみましょう。

生徒手帳に、生徒の心得として、守るべき事項が数項目書かれていることは先刻承知のことと思いますが、最近ルーズになってきたように見受けられます。先ず学習面についてみると、面接指導（スクーリング）における平日登校者の増加や、他人のレポートの書き写し、レポート提出についての注意義務違反者の増加などがあります。生活面では東高生らしからぬ服装や礼儀作法などがそれです。注意事項の詳細は生徒手帳にゆずるとして、自分の都合が相手の迷惑にならないよう十分考えて下さい。教育を受けるのにわがままやあまえは絶対許されません。もちろん、われわれの指導が至らなかったことを反省しなければなりませんが。ともあれ、職業を第一義にしながら、そのうえ学問をすることの難しさはよくわかりますが、自ら求めて通信の門を入った以上、学んでいない人たちと同じ楽しみを求めて歩んだのでは目的達成はおぼつきません。何か一つ犠牲が必要です。今年一年を振り返り効果のあがる学習を各自で考え、頑張ってほしいものです。

沿革年表

昭29・4・1　県立千葉第一・第二高校より本校に通信教育部を統合設置（専任教諭八名・事務職員二名）
12　秋山利雄主事以下五名着任
6・1　通信教育機関誌「三高通信」創刊号発行
13　第一回入学式挙行（三一一名入学）
7・4　第一回本校面接指導実施（三九年度まで毎月一回）
18　第一回巡回面接指導実施（柏・大原・佐原地区）
昭30・10・27　文部省実験校に指定される（協力校について）。三二年二月七日協力校匝瑳高校で研究発表を行う。
昭31・8・18　第一回合宿スクーリング実施（至二〇日、於鹿野山、男女別各一泊二日、参加生徒四二名）
9・2　第一回定期試験実施（本年度より試験定期化）
昭32・3・1　通信教育部第一回の卒業式挙行（三名卒業）
昭34・4・9　通信制独自の帽章、バッジ、ボタン制定
5・11　文部省実験校に指定される（通信教育における学習指導の効果的運営について）。三五年三月二一日研究報告書を発表
昭35・4・1　NHK通信教育放送研究委嘱校となる。
5・22　通信教育部専用校舎竣工（六月二〇日移転）
8・19　法務大臣より感謝状を受ける（千葉刑務所における通信教育講座開講に対して）。
昭36・4・1　秋山利雄主事転任により、山川達二主事着任
7・15　第六回合宿スクーリング（至一七日、本年度より会場を国立中央青年の家に移す、二五〇名参加）
10・31　「通信制の課程」となる（学校教育法の改正）。
11・6　第一回修学旅行実施（至一〇日、奈良・京都方面）
昭37・3・24　第一回学習会連合研究交歓会を行う（於木更津、県立青年の家）。
5・13　生徒会設立、第一回総会を行う。
7・15　生徒会機関誌「雑草」創刊号発行
昭38・4・1　日本放送協会学園高等学校の協力校となる。
7・6　読売教育賞（定時制・通信制部門）受賞（学習会の育成とそれに伴う研究実践に対して）
昭39・2・1　教科書・学習書の無償交付金第一回受領
4・1　NHK通信教育放送研究委嘱校となる。
昭40・4・1　本年度より学習規制実施。本校面接指導は毎月二回となり、巡回面接指導は廃止される。
昭41・3・20　卒業式（第九回、八〇名卒）を単独で挙行
6・1　国鉄運賃割引制実現（面接指導用五割引回数券）
9・17　千葉東高校通信制振興会発会
昭42・3・19　卒業式（第一〇回、五九名卒業）を日本放送協会学園高等学校と合同で挙行することとなる。

昭43・4・1　山川達二主事退職により、早川俊一主事着任
昭46・4・1　早川俊一主事転任により、中野舜一郎主事着任
4・18　入学式（入学生三九一名）
5・9　生徒会総会（今年度より会費三〇〇円に値上げ）
6・10　全国通信教育研究協議会（至一一日、盛岡）
27　第二〇回千葉県高校定通体育大会。バスケットボール女子、二部に優勝、他五種目に入賞
7・1　通信教育用郵便料金六円に値上げ（一〇〇gまでごとに六円）
17　働きながら学ぶ青年の会に斧木公博君ら六名参加（至一八日、国立赤城青年の家）
8・7　第一五回合宿スクーリング（至九日。御殿場市国立中央青年の家、参加者二五〇名）
9・13　文部省主催全国定通研究協議会（至一四日、東京）
10・3　第九回千葉県高校定通総合文化大会。絵画、被服その他に八点入賞
19　関東地区通信教育研究大会（至二〇日、新潟）
31　体育祭
11・2　創立三〇周年記念並びに新校舎落成記念式典挙行
6〜7　学習交歓会（県立鶴舞青年の家、参加者三〇名）
20〜23　修学旅行（関西方面、参加者四六名）
昭47・3・19　卒業式（卒業生一八一名）
4・16　入学式（新入生三九一名）
5・7　生徒会総会
21　球技大会
6・8〜25　全国高等学校通信教育研究大会（東京）
9　第二一回千葉県高校定通体育大会。バレーボール女子優勝、陸上女子綜合三位
7・22〜23　リーダー研修（県青少年会館四〇名参加）
8・5〜7　第一六回合宿スクーリング（御殿場市国立中央青年の家、参加者二五〇名）
9・30　学習交歓会（東金青年の家、参加者三〇名）
10・8　第一〇回千葉県高等学校定通綜合文化大会。手芸、被服その他入賞
17〜18　第二二回関東地区高等学校通信教育研究大会（伊香保）
11・11〜14　修学旅行（関西、四国方面、参加者一〇九名）
昭48・3・18　卒業式（卒業生一七七名）
4・22　入学式（入学生四〇五名）
5・27　球技大会（全校生徒参加）
6・6〜8　全国高等学校通信制教育研究会総会
9〜10　新入生合宿研修（県立東金青年の家・生徒六七名参加）。これより毎年の行事となる。
16　千葉県定時制通信制野球大会に参加
7・8　千葉県定時制通信制体育大会（各種目に参加）
28〜30　合宿スクーリング（御殿場国立青年の家・一七二

9・16　一組生必修クラブ活動（本年度より実施）
10・～21　関東地区通信教育研究協議会
11・～10　修学旅行（関西方面・生徒六四名）
～13　卒業式（卒業生一四三名）
昭49・3・17
4・1　中野舜一郎主事転任により後任に村越林太郎主事着任
1　被服科設置定員四五名、植草学園と技能連携実施（五四・四・一募集停止）
21　入学式（新入生三二五名、転編入生他七六名）
30　第一回市原刑務所通信教育講座開講式
6・6　全国高等学校通信制教育研究会総会
～8　新入生合宿研修（県立東金青年の家・生徒一一二名参加）
～9　千葉県定時制通信制野球大会に参加
10　村越主事急逝に伴い鵜沢武視主事着任
17　千葉県定時制通信制体育大会（各種目に参加）
7・7　合宿スクーリング（御殿場国立青年の家・一六一名）
～27　修学旅行（関西方面・生徒一三〇名）
～29　体育祭振替レクリエーション（全校生徒参加）
11・～12　卒業式（一九一名）
24　入学式（新入生六一七名、転編入生他五五名）
昭50・3・16
4・20　第一回スクーリング（以後毎月二回実施）
27　託児施設設ける。託児開始（五五・三・三一廃止）
5・31　新入生合宿研修（県立東金青年の家・生徒九四名参加）
～6・1　全国高等学校通信制教育研究会総会（岡山）
6・～5　千葉県定時制通信制体育大会（各種目に参加）
～6　合宿研修（御殿場国立中央青年の家・生徒一二二名参加）
7・6　第一回生活体験発表会（発表者二名）
～26　関東地区高等学校通信制教育研究協議会（本校）
9・7　修学旅行（関西方面・生徒一三六名）
10・～24　卒業式（二一四名）
11・～15　NHK学校放送研究委嘱校となる。被服科定員九〇名。不二学院と技能連携実施（五三・四・一募集停止）
～18　入学式（新入生四三九名・転編入生他六一名）
昭51・3・14
4・1　新入生合宿研修（県立東金青年の家・生徒四八名参加）
5・～14　全国高等学校通信教育研究会総会（徳島）
～16　千葉県定時制通信制体育大会（各種目に参加）
6・～10　合宿研修（御殿場国立中央青年の家・生徒八七名参加）
～11　通信制職員室増築（四一㎡）
7・4　第二回生活体験発表会（発表者三名）
24
8・31
9・5

9・30　通信制職員室三四・一六㎡増築竣工（五五・四撤去）
10・1　関東地区高等学校通信教育研究会管理運営研究協議会（本校）
11・12～13　関東地区定通研究協議会（銚子）
19～25　関東地区高等学校通信制教育研究協議会（箱根）
28～28　修学旅行（関西方面・生徒一二〇名）
昭52・3・13　卒業式（一七五名）
4・24　入学式（入学者総数四七一・内転編入生他六三）
——交通ストの為、当初の予定が一週間延期された——
5・13～15　第五回新入生合宿研修（県立東金青年の家・生徒五四名参加）
25　定時制通信制振興会会長荒木和成氏死去
28　定通教育三〇周年記念式典（於国立教育会館）
——文部大臣賞畠山校長・秋山元通信制主事、記念会長賞鵜沢教頭——
6・8～10　第二四回全国高等学校通信教育研究会総会（於大分）
——佐藤（敏）、宮代が永年功労者として被表彰
21　関東地区高等学校通信制教育研究協議会定期総会（於国立教育会館）
7・3　千葉県定時制・通信制体育大会（各種目に参加）
9・4～23　合宿研修（御殿場国立中央青年の家・生徒九四名参加）
10・8～11　第三回生活体験発表会（発表者五名）
修学旅行（関西方面・参加生徒数三一四）

10・16　定時制通信制文化祭（於習志野高校）。体育祭。
27　関東地区高等学校通信制教育研究協議会大会
12・12　全国定時制通信制三〇周年記念誌完成
昭53・3・12　卒業式（二〇二名）
31　畠山一郎校長退職のため離任
4・1　相川勝衛校長着任
23　入学式（入学者総数三八八名・内転編入六八名）
5・19～21　東金合宿研修（新入生徒四四名申込み・職員八名）
6・11～14　機関誌「東高通信」三〇〇号記念発行
6・16～17　第三〇回全国高等学校通信制教育研究大会（於仙台　本校視聴覚研究発表）
7・2　県定通野球大会準決勝に出場
二七回千葉県高等学校定通体育大会各部出場（全国大会出場・女子テニス・女子卓球個人・男子砲丸投げ）
9・3～22　合宿研修（於国立中央青年の家、生徒八四名・職員七名）
24　校内生活体験発表会六名出場（内集団生二名）。
市原武君＝関東甲信越大会出場
10・20　関東地区通信制教育研究大会（於水戸南）
22　体育祭（本校校庭）
27　相川勝衛校長、教育功労賞受賞（あわせて千葉県教育功労賞受賞）
昭54・3・11　卒業証書授与式。卒業生三六〇名（男子三六・女子三二四）
4・22　入学式・入学者総数二六三、内新入一九六（男七

七女一一九）、転編入と科目別履修六七（男三〇女三七）

5・27　生徒総会（生徒会会計決算と予算案の承認等）

6・2　新入生合宿研修（新一組生八〇名参加職員四名）

〃3　千葉県高等学校定通体育大会（テニス・男女優勝、卓球・女子団体と個人に優勝、男子団体三位）

7・1　全国高等学校通信制教育研究会総会並びに研究協議会（於国立教育会館）

〃2　二組生以上合宿研修（御殿場国立中央青年の家、生徒六三名参加、職員七名）

〃21　通信棟新校舎建築着工（延べ一一一一・八一㎡）

〃23　校内生活体験発表会（四名参加し、高橋和子が関東甲信越大会へ出場し優秀賞獲得）

8・25　修学旅行・奈良、京都方面へ一二三名参加（一般生二五・集団生九八）

9・2　定通総合文化大会（於匝瑳高校）。写真の部一位（向後幸子）・絵画工芸の部二位（秋山長男）三位（長谷川よしえ）・被服手芸の部三位（高杉一）・書道の部佳作（大柳愛子）

〃7　体育祭

10・14　関通研国語部会（於本校会議室・一九名参加）

〃21　第三回校内展実施

〃26　卒業証書授与式（二七二名）、終業式

11・25　鵜沢武視教頭匝瑳高校定時制へ転任・通信棟新校舎竣工（一一一一・八一㎡）総工事費一一五、七一一千円（昭和五四年度国庫補助金四、五六四千円）

昭55・3・16　松本一平教頭着任

31　入学式・入学者総数三二七。内新入二四六（男一一四、女一三二）、転編入と科目別履修八一（男四〇、女四一）

4・1　新校舎へ移転、旧通信制校舎の撤去

4・20　新入生合宿研修（新一組生徒七七名参加・職員七名参加）

5・31　全国高等学校通信制教育研究総会並びに研究協議会（於芦原）。鵜沢武視前教頭、佐伯智恵子教諭、大岩美代教諭が高等学校通信制教育の振興及び発展に寄与した功績で全通研より表彰された。

〃6・1

〃12

〃13

7・6　千葉県高等学校定通体育大会（テニス・男子個人優勝　柔道・団体三位　卓球・男子団体三位、女子団体二位　バスケット・ベスト四進出　陸上・五〇〇〇m三位

8・2　御殿場合宿研修（全校生徒対象）於御殿場国立中央青年の家　生徒七二名・職員九名参加

〃3

9・7　校内生活体験発表会（四名発表し、芝田芳子が関東地区大会へ出場し優秀賞獲得、佐藤節子が千葉県定通大会へ出場）

10・12　千葉県定通総合文化大会（於長生高校）

19　校内球技大会（校地整備の為体育祭の代りに実施）

11・20　関東地区高等学校通信教育研究協議会定期総会（於宇都宮）

〃21

30　第四回校内展覧会実施

昭56・2・24　関東地区高等学校通信教育研究協議会管理運営部

会（於・本校多目的ホール・二二名参加）
3・15　卒業証書授与式（二五六名卒業）、終業式

回想東高通信

有言実行

第三代主事　中　野　舜一郎

陽光は次第に強さを増し、七月（ふみつき）に入る。ふみづき、ふみつきと称した時代には、旧暦のよび名であるため、秋のはじめであるが現代は夏の盛りである。夏の魅力は、何といっても活動的に、軽快に、人も自然も躍動することにあると思う。

第一学期の期末をむかえて、諸君は、四月からの自分の歩みというものを、ふりかえって努力の足跡の効果を確かめながら、しめくくりとして頂きたいと思う。多忙な日常の貴重な時間の効用に、人知れず苦労してスケジュールを追ってこられたことと思うが、充実した日常であったかどうか――これは、本人のみが測ることのできるものである。同じ教科を与えられ、似たような学習法を経てきたAとB、外面からご当人の充実感を測ることはむずかしい。諸君はひとりひそかに、学び得たよろこびをかみしめ、心の躍動を感じながら、第一学期の終わりをむかえることができたであろうか――。

〃不言実行〃　〃沈黙は金なり雄弁は銀なり〃本を開いて目に触れることわざ、教訓に、沈黙の困難さとその効用を示すものが多い。〃もの言えば負けしと思うかぶと虫〃ものを言ったら負けるという時、じっとおさえている心――、俳句の雑誌でみた句であるが……。

ここでひとつ有言雄弁の方を考えてみたいと思う。ものを学ぶ心はみな若人の心である。若い柔軟な、活動的な心である。環境を良い方に変え、誠意をもって人を説得する。悩みをよく聞き、よく語り、友人との相互理解を計る。これすべて、当を得た言葉の交流なしでできることではないと思う。

3・31　相川勝衛校長退職
4・1　須田義男校長着任

カルチュア――文化、教養などの意味に使われるが、カルチュアとは耕やすという意味である。土を耕して種子をまき、水をやり生物を育てるように、人間の心を耕やすことである。心を耕やし、そこに芽を出し、育てるためには、何が必要であるか。人の心を耕やすためには、学問によるものと、社会によって教えられるものとの二つがある。学問により体系的なものを知る、社会生活に於て、実際にそれを行うことによって、筋金入りの安定した力を養なうことができる。このどちらも大事なものであり、どちらを軽視することも危険である。諸君はこの二つを同じに学んでいるわけである。与えられた諸条件の中で巧みに、これを活用して成果があらわれるよう期して止まない。

〃有言実行〃時と処を得た適切な表現（沈黙も含めて）ほどその人の教養を端的に表しているものはない。……不言とは学問を社会生活とによって練りに練られた有言……の力を基盤にして始めて光彩をはなつものであろう。

（四十八年度東高通信から）（現八千代西高等学校長）

千葉東高の想い出あれこれ

旧職員（国語）椎名　純

快い十月のある夜、千葉東高校の柴田先生からお電話があり、学校の創立四十周年の記念誌に何か書いて欲しいとのことでした。他に適任者が沢山いらっしゃるのでお断わりしたのですが、大分長く東高に勤めていたというので、軽いお喋りということでお引受けするはめになりました。

私は、終戦後、北鮮の平壌から三歳だった娘を連れて引揚げ、北鎌倉の主人の実家に辿り着いて主人の戦死を知らされ、四か月後に東京で教職に就いて以来、丸三十年間、公立私立の五校に勤め、それぞれにユニークな想い出がありますが、昭和三十五年から五十年迄の十五年間は東高にお世話になり、他の学校より長く在職したことになります。

また、初めのころに実家が汐見ケ丘にあり近かった故

か、短期間でしたが、弟（佐倉俊二）と従兄弟（黒岩義之）、それに妹（福田光子）も勤めさせていただいたので、何だか不思議なご縁を感じます。

佐倉東高から転勤したころの私は、何しろ未経験の通信制で、全日制の授業に行く時は気楽でしたが、戸惑ったものでした。

でも慣れるにつれて、通信制の働きながら学ぶ生徒の凄まじい気迫に頭が下がりました。勤務中の昼休みを割いて、作業衣にヘルメットのままオートバイで飛んで来て、職員室で食い入るように物理の質問をしていたT君の姿は眩しくて、ジーンと心に浸み込みました。

生徒から逆に教えられることがいろいろありましたし、年齢、境遇の違うホームルームの生徒一人一人との係わりに全日制とは異質なものを感じ、私なりに全力投球（？）している内に、月日が流れたように思われます。

私の三十年の教員生活の内、組担任でなかったのは、東京から学年途中で匝嵯高へ移った年だけで、二十九年間フル回転でしたので、多くの生徒や父母の方々に接し、さまざまなことにぶつかり、ショックを受けたことも幾度かありましたが、佐倉東高時代から、日本カウンセリングセンターの友田教授について、面接相談の学習をさせていただいていたし、校務分掌は指導部が多かったので、何だかやり甲斐を感じて、ささやかなファイトを燃やしていたように思われます。

カウンセリングでは、年齢の多い生徒、親許を離れて自活している生徒も多い故か、学習、進路相談の他に、結婚について、家庭内の夫婦、嫁姑関係のごたごた等、バラエティに富んだ大人の相談ごとも相当ありました。もっともこれは、私が熟年に近かった故かもしれませんが……。

スクーリングの無い日曜日に、Mさんに頼まれ母親役でMさんと一緒に結婚したい相手のお宅へ伺ったり、「先生、結婚したい相手に一度会って話してみてください。」とYさんに請われ、放課後喫茶店で相手の方といろいろお話をして、その方が誠実な、総べてに健康な人物でほっとしたりしたものでした。YさんたちはYさんの卒業後、親御さんのご了解も得て目出度くゴールインし、お子さんもできて、現在も明るく幸せな家庭を築いています。また、○○さんは卒業後良い職場に就職できたが、不運にも病気になり、なかなか直らず、落胆の余り心身共にすっかり弱り、「死にたい。」等と口走る程苦しんでいたが、何度か話し合っている内に、見事に自分の力で立直り、病気も克服し、再就職もでき、しかも理想的な相手と巡り会い、楽しい家庭を

建設中ですが、何年経ってもこうした想いは本当に嬉しいと思います。

また、学校行事では、初めてプールができた時、当時の校長でいらした沢田先生が、なぜか長目の海水パンツで、しかし実に颯爽と飛込まれ、見事なクロールで泳がれたのが、また、山根先生が水難救助の実演をしてくださったのが、強く印象に残っています。

それから、毎夏行われた御殿場の合宿スクーリングでは、〃富士には月見草が良く似合う〃の太宰のことばを全くだと実感したり、キャンプファイヤーを囲んで、若人たちと全員で合唱する歌の流れと共に、松明がきらきらと夜空に揺れていたのが忘れられません。

でもある年は、途中までバスで行き一部分の富士登山をした時、墜落した飛行機の破片が沢山散乱していて感無量でしたし、また、帰りに忍野八海方面へ廻った年は、平和に廻る水車を見たり、水の滴る洞窟へ降りたり、珍らしい見学を楽しみました。ある年にただ一度ひやりとしたことは、深夜の見廻りの時生徒のベットが一つ空でトイレにも居ないので仰天し、離れた宿舎の男の先生方も皆起こし、教員全員で分散宿舎を捜索したら、ご本尊は他の宿舎の友人のベットに入って寝ていて、ほっとするやら腹が立つやら……。でも今では微笑ましい想い出の一つになりました。

最後に、良い先生方や生徒と過ごした十五年間は本当にプラスになったとしみじみ感謝して居ります。四十周年を迎えた千葉東高が、学力、体力、品格を兼備した名門校として、ますます成長発展されるようお祈りして失礼いたします。

思い出に残るもの

旧職員（商業）宮代　清一郎

＜赴任の年＞　昭和四十年度は、通信制課程にとって、画期的な年でした。原則として月二回のスクーリングと規制学習が実施され、その後三桁の卒業生を送り出す基盤ができました。また関東地区高校通信教育研究協議会の当番校にあたり、大会を銚子で開催するなど大変多忙な年でした。熱心な討議が繰り返され、一方では大会の準備に忙殺されているのをみて、お手伝いしたいと思っても、ただ足手纏いになるばかりの一年でした。

＜運　動＞　添削にあけくれ運動不足になることをさ

けるため、昼休みに庭球・卓球・排球などをすることができました。毎年二学期の中間試験のころ、南関東地区通信実施校の教職員による体育大会が、持回りで開催されました。浦和通信制高校・湘南高校・横浜平沼高校・NHK学園高校などに毎年うかがって、庭球・卓球・排球などの試合を行いました。そこでお互に通信に関する貴重な情報交換をしたり、親睦を深めたりして、大変有意義な会でした。

＜教育研究協議会＞　関東地区高校通信制教育研究協議会では、甲府・前橋・水戸で開催された大会に出席し、全国通信制教育研究協議会では、神戸・熊本・東京・徳島で開催された大会に出席しました。全日制にいた時は、県内教員との交流に限られていました。また通信では県内一校のため、井の中の蛙になりがちでしたので、大変有益な協議会でした。その他札幌での全国定時制・通信制研究協議会や、新潟での全国視聴覚教育研究協議会などに出席しましたが、勤労青少年に対する教育のあり方、教育機器を使用しての新しい授業方法など参考になりました。

＜学習書の編集＞　五十年度に学習書編集委員に選ばれ、一年がかりで編集にあたることになりました。文部省に六人の委員が集まり、分担を定め、原稿を持ちよって、意見を交換しました。より良い学習書を作りたいということで、意見交換は活発でした。各委員の意見を聞き、原稿を書きかえ、また意見を聞き訂正を行うなど、夜遅くまで真剣に編集にあたりました。はじめての経験でしたので、でき上った学習書に喜びを感ずる一方、全国の通信生にどう受け入れられるか不安でした。

＜合宿研修（合宿スクーリング）＞　御殿場国立青年の家での合宿研修は、何回参加しても素晴らしいものでした。地理や地学の勉強にもってこいの素材がそろっています。富士山、富士山が出現したとき溶岩流のためできた富士五湖、熔岩洞穴が人間の胎内を思わせる御胎内、富士の雪解け水が地下にくぐり湧き出した忍野八海、富士の雪が解けて砂中に入り、古富士溶岩盤の上を流れて滝となって落ちる壮大な白糸の滝など、毎年変化のある見学コースを取り入れました。

富士山麓の散策も楽しいものでした。はじめは新二合目までバスで行き、砂地の斜面を登り二合目までの散策でした。ここまでくると灌木帯はなくなります。眺望はきわめてよく、二つ塚の側火山や宝永山が見え、条件の良い時は真上に富士山頂を眺められます。五合目までバスが行くようになると、そこからゴロゴロした岩山の道を、宝永山の

方向に向って散策するようになりました。宝永山の爆裂火口と赤茶けた岩肌は、下界では想像できない荒々しい火山の断面をみせつけてくれます。

この研修は、生徒たちに規律ある集団生活を体験させるとともに、脱落しないで勉強を続けるという意欲をおこさるということで効果のあがった行事の一つです。

＜卒　業　生＞　卒業後結婚して、仙台で印刷業をしている菊地秀雄・みや子さん夫妻は、勉強とともに生徒会で大活躍しました。中年で入学し、次々と資格試験に合格し、後に大学に入った手塚英之進さん、親子で同時に入学し、卒業した松木美子さん・順子さん、中学時代長期欠席者であったが、通信に入ってから、水を得た魚のようになり、卒業後国立大学に入学したTさん、神経衰弱で高校を中退したが、やはり通信の水が良かったのか、目出度く卒業し、東京の会社に就職したS子さん等、まだまだたくさんの卒業生に関する思い出があります。

＜限りなき発展＞　五十二年三月退任する際は、すでに全日制の立派な校舎がたっていました。しかし通信制新校舎の話はなく、学校全体が雑然としていました。ところが久しぶりに訪れますと、待望した四階建の通信棟、綺麗に整備された運動場、庭園のような中庭、整然とした駐車場のある後庭等、その変容に驚き感激で胸が一杯になりました。

今や全日制は数多い高校の中でトップクラスとなり、通信制も全国的に活躍しており、喜びにたえません。四十周年を心からお祝いし、更に一層の発展を期待します。

（文化女子高校）

思い出すままに

第六代教頭　鵜沢　武視

校長先生はじめ先生方のご指導のお蔭で、大過なく楽しく勤務できたことを、大変嬉しく思っている。印象に残っていることを思いつくままに記してみたい。

＜通信制の施設＞　通信制の職員室は旧通信棟の一階（広さは普通教室の一・五倍位で印刷室があった）で、事務職員も同居していた。生徒数の増加に伴って職員定数も増加する傾向にあった四十九年、五十年ごろは講師を含めて二七名位の職員がすしずめのように空間がなくなってきていた。ロッカーや書棚も置き、冬になるとガラス窓を締めてもすきま風が吹きこみ寒いので、中央に大きなストーブを

置き、二つの科で小さなストーブ一個位の割に置いたので狭かった。平日スクーリングには通信棟二階（普通教室よりやや広い）の視聴覚教室と旧クラブ棟（旧校舎）の一教室、それから全日制新校舎会議室をカーテンで仕切って使用していたので不便であった。体育用具を保管する倉庫は衛生看護棟と通信棟の間を利用して屋根をつくっただけで雨天のときは漏り、また地盤が低いので内部に水が流れ込んだりした。事務用品やストーブ等を保管する場所は、プレハブの倉庫八m²位のもの二つ。この倉庫の移動を全職員でやったことが三回あった。五十二年には生徒数一六六一名、職員数三二名と通信制設置以来最高人員となった。植草学園（四十九年）と不二学院（五十一年）との技能連携によるためである。五十一年に職員室増築。私が着任したとき、教務主任の宮代先生から佐藤敏先生が第二期工事の通信棟建築基礎調査をしてくれたお一人なんですよと、隣家に及ぼす日照を測定した何枚かの図面を新通信教育棟の計画書とともにいただいた。日照権の調査は千葉市役所の専門家のご協力を得て測定した結果心配はないということだった。当時新設校の増設に伴う予算の関係で直ちに第二期工事を実施するのはむずかしかったようだ。しかしその時期がきたとき、この調査書や計画書がどんなにか役立ったことでしょう。

＜生徒の教育＞　添削指導が教科指導の中心で、いわば全日制でいうならば授業と同じであると言ってよい。スクーリングで重点や勉強のしかたを指導し、教科書と学習書により、あるいは放送利用により勉強した成果をレポートにまとめる。この添削を迅速、ていねい、正確に記入し、心の通う指導が大切である。教科により多少異なるが一通の指導に要する時間は二〇分位は必要だろうと言われる。スクーリング、テスト、学校行事、家庭連絡等の時は添削できない。一般生と集団生（一日二クラス）の平日スクーリングは、生徒数の多かった五十二年、五十三年はほとんどの日が当たっていた。当時多くの先生方が年間三〇〇〇通程度の添削指導をしていた。同時に補助教材作成、脱落防止のための家庭連絡、夜間学習会指導、千葉刑務所、市原刑務所への出張スクーリング等あるなかで、ＮＨＫ通信教育研究委嘱校となり、釜津田先生（物理）、平野先生（化学）、小笠原先生（数学）、森田先生（英語）の研究発表を全通研仙台大会で立派に発表していただいた（五十三年）。五十年の全通研四国大会には平野先生（生物）、木村先生（国語科として）研究発表と大変なご苦労をおかけした。

＜職　員＞　本校に長く勤続した先生が去り若い新卒

の先生が着任するようになり、平均年齢二十九歳位、三年勤続したら中堅、二十代の青年教師が千葉県の通信制教育の主力をなしていた。若い先生は若いなりによさがあった。体育祭、卒業生を送る会などは、生徒と共に走り、またゲームをし、踊ったり、歌ったりした。全職員が同じ部屋にいるので家族的でなごやかだった。書道の奥村先生は職員の書き初め展を開き盛会であった。職員旅行もよく行った。

＜託児室を設ける＞　五十年五月、県教委高校教育課、当時の中村友彦先生のご指導と畠山校長のご尽力により、旧クラブ棟一階の教室（マンドリンクラブと併用）に、全日制の加山さん（保母資格）、秋倉さん、栢尾さんの三名のご協力を得て託児室を設置した。畠山校長がテレビや玩具をご寄附になられた。千葉東高校通信制振興会の事業として運営することにした。県より人件費として八万円の補助金が与えられた。三歳から五歳まで、生徒からは託児料金を徴収しない。事故がおきた場名の責任者の問題、施設、設備の問題等のことは未解決のままスタートした。冬が近づくにつれて寒くなり、暖房装置がないため校長室脇の応接室へ移転した。重い机を廊下まで出し入れするのは容易でなかった。五十一年植草学園幼児教育専門学校二年生の協力を得て五十五年三月まで続けられた。一日平均八名位の子供を預った。

振興会長植草ふう先生には格別のご指導、ご支援を賜り心から感謝申しあげたい。

千葉東高校には生徒の立場に立つ真に教育愛に燃える伝統が流れている。ご発展をお祈りして止まない。

（県立匝瑳高校定時制教頭）

千葉東通信制を回顧して

旧職員（社会）大岩　美代

昭和三十九年から昨年まで、変貌大きい時期に通信制に勤務致しました。当初木造校舎で体のナマった今の私では到底できそうもないことをやりました。日曜の朝殊更早く起きて出勤し、ガタピシ教室の扉の施錠を一つ一つはずしスクーリング用の厚紙看板を掛けて廻るのです。何しろ鍵や鍵穴はバカになっていてなかなか合わないのですが、当時は学校泥棒が横行してた由。これが転任したての初仕事でした。鰻の寝床のような校舎が四列、床に黒い油が引いてあって時にはツルリとすべるのです。この油の匂いも木造時代に学んだものには懐かしい香になっていると思います。施設も教具も乏しく「こんな面倒なところなら来なけ

りゃよかった。」と思いました。しかし、平素言いたいことを言える職員室（特に職員会議の面白さ）の雰囲気と、物わかりのよい生徒さんたちにひかれて、ついながながと身を置かせていただいた次第です。

生徒の中には社長あり村の世話役ありで、社会を担当する身でありながら、生徒の皆さんの社会学を聞くのが逆に楽しいものでした。株の話・借金の話・工事の手ぬきの話等々、みんな体験談ですから教員社会しか知らない私には勉強になりました。でもたまにしか逢えないので、鈍才の身なりに、何とか生徒諸君が学習に興味を繋いでくれるようにと努めました。試験も細かく出題すると不合格が増えるので、大局的見地から時代思潮や歴史事象を論ずる（すると書き賃を稼いでくれました。）といった具合で、今なら超高校級と言って過言ではありません。昨今の高校生は断片的知識をただ覚えればよいとする傾向が強いようで、勉学効果が永く生かされませんが、これは通信制でも昨今になり、受け身タイプの生徒に見られるかと思います。

昨秋のことです。現勤務校二年生の修学旅行で、お留守役の私はちょっとのんびりさせて貰いました。期日は通信四年次生とかち合ったようで、見学先も大同小異の様子。帰校した生徒たちに「どこが一番印象深かったの。」などと種々聞いてみても、ろくな返事しか戻ってこないのに、自宅には、逆上って二年も前につたない授業を（二年次世界史）聞いてくれていた通信生から絵葉書が贈られたり、こまごまと道中の様子を知らせてくださったりで、「私は通信制の教師により向いてるのかしら。」と考えてしまいました。

兎に角、勉学に対しても先生に接するにしても、問題意識を持って必死にぶつかって行く通信制生徒の前向きの姿勢が存在する限り、通信制も県下無比の高校に違いありません。御発展を心からお祈りし、つたない稿を終わります。

（県立泉高校）

ある想い

旧職員（国語）　牛島　玲子

人は人生の中で、いったいどれだけの人々とめぐり会うのでしょうか。挨拶を交わしただけの人、心の中を通り過ぎて行ってしまった人々との出会いは別として、今忘れ得ぬ人々は、たくさんいまの私の人生の中で、

す。それらの一つ一つの出会いが、私という小さな人間にもたらしてくれたものは大きいのです。

大学卒業後、あるきっかけから教育の場に自分をおくようになったのですが、通信教育に携わったのは、十一年間でした。今、その場を離れてみて思いますことは、十一年間もとどまったということが夢のようです。しかし、私は確かにその間、その場に存在していたことは事実なのです。なぜならば、はっきりとしたかたちでの自己の存在感はつかめないのですが、印象的な人々との出会いが、私の心の中にはっきりと刻まれているからです。

若い人々の中で、いつも教室の目立たぬ場所に席をしめ、学習に熱心にとりくめる喜びを静かにかみしめている六十歳に近いSさんの姿に、学問の厳しさ以上に人間的な温かさを、また、生活も安定し、家族との平和な生活の中で、かつて経済的な理由で進学を断念せざるをえなかったことが、今こうして実現できることが嬉しいと、教科書を一ページ一ページめくりながら話してくれたMさんの姿に充実した女性の生き方を、また、実力主義の世の中といいながらも、中卒ということで何度涙を流してきたかと、重い口調で話してくれたHさんの姿に現実の社会の中で自分なりの生き方を見つけた力強さを、また、何の目的もなく生活してきたが、今高校教育に挑戦したことで充実した日々となり一日が三十時間ぐらい欲しいと目を輝やかせていたOさんの姿に学問に対する情熱を、また、クラスの人々が登校してくる前に教室を清掃し、きれいな環境で学習できることが嬉しいと、雑布をすすぐKさんの後姿にまぶしいものを感じ、遠くからそっと見守ったこと等々、数えきれない人々の姿がうかんできます。

このようにしてめぐり会った人々には、学習する者の厳しさや、人間的な悲しみや苦しみがあったはずであるのに、学習できることの喜びと、人間的な温かさのみが伝わってきたことが、とても不思議です。

今、それらの人々との出合いが、大きく一つの輪になり私の心の中でぐるぐるとまわり出しました。そして、それが「東高通信教育」という大きな存在となり、私の人生のある位置を占めるようになるのだと思います。

（県立泉高校）

千葉東高通信制に勤務して

旧職員（理科）小笠原　正

私が千葉東高校通信制に赴任したのは、大学を卒業した昭和四十九年の春のことである。現在は近代的な校舎になっているが、当時は着実ではあるが質素に歩み続けてきた通信制教育の足跡を偲ばせる、いかにも古めかしい通信棟であった。冬季ともなれば、職員室の中央に大きな石油ストーブが据えられ、仕事の合い間には、そのストーブを囲んで、先輩の職員の方々からしばしば「通信制今昔物語」を伺ったものである。

それまでは、その存在すら知らなかった私にとって、当初は通信制教育とはある異質な教育の場という感覚が先行したものであるが、今から想い起こしてみると、掛け替えのない、たいへん意義深い経験をさせていただいた職場であったように思える。

大学を卒業して、初めて勤務したことに加えて、通信制という独特な教育制から生じる複雑な問題点に対処できなかった私に対し、色々な角度から助力してくださった先輩の職員の方々の構成する職場。また、比較的狭い空間に多くの分野の職員が雑居（？）している家族的な職場。そのような職場の中で、それまで私のふれたことのない世界を多くの職員から見せていただき、数多くの勉強をさせていただいたように思う。

通信制の職場のそうした自由な雰囲気もさることながら、通信制に勤務して、最も印象に残っていることは、なんといっても、通信制生徒の学習に対する力強い姿勢であった。今日、ともすれば、多くの高校生が失ないがちな学習に対する自主性を、幅広い年齢層、各種の職業に従事する多様な通信制生徒が通信制教育の中で繰り広げる学習活動の多くに脈々と生かし続けていることである。

私が通信制に勤務していた時期に、学習会の係を好んで行った理由も、実はここにあったと思っている。学習会に初めて訪問したのは、昭和四十九年十一月の野田学習会であったように思う。その時の印象が通信制教育に対する私のイメージを定着させた大きな契機となっているように思える。というのは、その際の生徒から耳にした言葉が今でも鮮明に残っているからである。

通信制で学んでいることが、日常の生活の上で大きな意味を持っています。自学自習ということは決して易しいことで

はありませんが、多くの社会人のいる通信制の中で、人と接することのできるスクーリングは、全日制と異なる大きな特典です。私たちも全日制で学んでみたかったことは確かですが、全日制で学んでいたら今のように勉強することが自分の生活と直結していて、「辛い」と思っていた勉強が、勉強することが、楽しいと思えたかどうかは疑問です。

この言葉に、私は通信制教育の存在意義が如実に含まれていたように思う。人生の岐路に於いて、通常の高校教育を受けることができなかった人々が現に存在すること。そして、新たに学習をしてみようとする人々が存在するということ。これらの事実に対して、決して十分ではないかもしれないにしろ、それに応えようとする教育のシステムが存在するということは無条件にすばらしいことに相異ない。さらに、その不十分さを、学ぶ側の自主性と根気が補っているということの偉大さ。それらの多くを私は見せていただいたと思っている。

確かに、家庭の状況等により、志半ばで脱落していった多くの生徒もあったことは残念であるが、その中にありながらも、窮地を脱して卒業していった生徒の姿を見た時は、それに微力ながらも手助けできたという誇りを感じることすらあった。

通信制の職場を離れて、まだ一年も経っていないが、数多くの思いが想起される今日このごろである。

（県立成田西高校）

四十周年記念によせて

昭和46年度卒　松本　美子

文筆未経験の私には、四十周年記念を代表して書くなどとは、あまりにも大それたことにて、私は再度御辞退を致しましたが、書かざるを得ないことになり、数日寝むれぬまゝ奮起し、ありのまま思いつくままペンを走らせることを、前もってお断りしておきます。思えば十四年前、市役所の窓口より、夫の持ち帰った一枚のチラシ、それ（本校の通信課程募集案内）を手にした私には、働きながら勉学を志す者への福音でした。戦時中旧制高等女学校にモンペ姿に胸ふくらませ通ったのも束の間、卒業時には、六三制施行により、手にしたものは、木更津高等女学校併設中学校卒業証書、これが私の最終学歴でした。……間もなく結婚・平穏無事の生活も数年、思いもよらぬ夫の病臥となり、代わって勢い働かねばならないことになりました。

なれども、中卒資格の私にとって、就職はままならず店員、工員、等々を経て、無資格保母として三か年、国家試験受験資格を得、取得したときの嬉しさは今でも忘れ得ません。しかし、高卒資格を得たいという希望は、脳裏からはなれませんでした。しかしながらそれはとうてい望みうすとあきらめざるを得ませんでした。機会を失った私にとって、旅人の暗夜に光明を見出した如く、嬉しさと希望にみちみちて本校の門をくぐりました。働きながら学ぶ、それはひとくちにいって並たいていではありませんでした。駅迄バイクで、六キロ行程、電車で二駅乗車、の勤務、帰宅後の学習、レポート提出、単位取得試験、スクーリング等々、この間は、雨の日も風の日も、苦しくもあり、楽しくもありの、四年間でした。幾度か挫折しそうになったこともあり、肉親の励まし、諸先生方の御指導、学友皆さんの心暖まる友情に支えられたことに他なりません。今にして想えばよくぞ成し得たものと、ただなつかしく、良かったの一語に尽きます。心に残る想い出としましては、通信課程それも卒業間近でしたが、働きながら学ぶ通信学生の一日と題して、NHK教育テレビに紹介したい旨、本校の先生よりお話を受けた時、嬉しいやら驚きやらで思いもよらぬことでした。テレビ局より、早速訪問を受け、それも幾日も幾日もの熱意あふれるお言葉をお聞きし放映の運びになりました。局の方々の、早朝より夕刻にいたるまで撮影放映、しかも三十分並々ならぬ御苦労をかけました。諸先生方の御指導、学友の皆さんの御厚情に感謝申し上げます。

希望の峰の白百合は、高く匂えど道けわし

思い出の通信制高校

昭和47年度卒　菅原　成子

私が通信制課程の千葉東高等学校へ編入したのは、昭和四十七年の春です。その年は上の子供が幼稚園に入園した年と同じで、私も四年生へ入学したのです。墨田川高校定時制を四年生の時に退学したので、高校課程が終了していなかったからです。子供もやっと大きくなって、手がかからなくなったので、思いきってまた、学校へ入学することにしました。今でも心に残っていることは、初めて東高の門をくぐった時のことです。四歳と二歳の子供の手をとって通信制の職員室をたずねました。外で待っているはずの子供が、受付の方につれられ職員室に入ってきて、結局三人で

入学の手続やお話をきくことになりました。また、その時の先生方の温かいまなざしや、行為が印象的でした。今、四年D組の名簿を見ながら思い出されることは、みんなが勉強に熱心だったということと大半が年齢的には普通の高校生であったので（年長者は三分の一位でした）学校の門をくぐったと同時に、学生という気持で十六・七歳になったように感じられたのが不思議でした。日曜日の学校が待ち遠しいほどでした。だからといって、勉強が楽しかったということではありません。数学や化学などはとてもむずかしくて、わからないことばかりでしたが、みんなで助け合いのような気持ちがいっぱいでしたので休み時間はわからない所を勉強したことが思い出されます。体育の時間はとっても楽しくて、子供のことを忘れる程でした。振り返って見ると先生方も一生懸命教えて下さっていたことが感じられてなりません。勉強よりもより多くのいろいろな人生を持った人たちの中に入っていろいろな経験ができたことが私の人生において素晴らしい財産だと考えたいのです。また、充実した一年でした。

私の子供も高校へ行く年が近くなっています。子供には目的をもって、それを思いつづけて行うことが一番大切なことだと言って居ります。人生は勉強でありたゆまず努力しなければならないと考えます。目的を見つけてそれに向かって努力する子供になって欲しいと思って居ります。

東高も四十周年ということですが、教育という目的をもってそれをたゆまず行って来た長い長い歴史は大変だったことと思います。これからも教育という目的を持って五十年、百年と輝かしい歴史を積み重ね発展されることをお祈り申し上げます。

我が通教生魂

昭和49年度卒　竹前　政則

千葉東高創立四十周年おめでとうございます。本校出身者として、私も感慨を新たにしています。通信教育課程に学んだ当時を回顧し、雑感を述べたいと思います。

世は高度経済成長に向けて歩み始めた昭和三十二年春、山村の中学を卒えた私は、大多数の就職組に混じって東京の町工場に勤めました。この時を境に勉強とは無縁の世界に埋没していくことになります。未成熟な少年の心は、後にやってくるであろう学力（歴）コンプレックスを夢想だ

にしなかったのでした。

時代は進み、社会の発展が著しい中で、自己の成長は低迷し、世は情報化社会、管理社会に様相を一変、高校進学率も九〇％に迫る勢いは、経済大国日本を支える知的レベルを形成するに至っていました。この時代背景は、私の劣等感を大いに刺激し、躊躇する私を促し、ついに東高通信制課程の門を叩く動機となったのです。二十九歳の春でした。

かくして、一児の父親高校生の奮闘が始まります。長い世俗の生活から脱して学習に打込むには、まず精神生活の転換と、学習時間の確保が焦眉の問題でした。全日制課程と異なり、学習は、一定の日時、場所で行われるという制限がなく、自由な時と場所でできることが通教課程の特徴でしたが、事実上の束縛を否定しようもありませんでした。仕事、家庭、学業と高密度の生活を余儀なくされますと半端な時間をも無駄にできません。通勤途上の車中で、現代国語、日本史などの教科書を広げて新聞や雑誌に伍し、昼休みには、囲碁の誘いを遠ざけ一人読書に熱中する図は傍目に異常な印象を与えたことでしょう。そして、家族が寝静まった後が恰好の勉強時間ですが、この時間帯はまたテレビ番組の誘惑にあい葛藤も熾烈を極めました。仕事と学業の両立が前提ですから、職業生活に変化を来たすと勉強の計画に影響します。転勤や出張の場合がそれです。私も数回の出張の際、宿舎において同僚の目もはばからず教科書、ノートを広げることを常としました。日ごろは、家庭において独学のスタイルで勉強し、各単元ごとに割当てられた報告課題を作成し教科担任の先生に添削をお願いすべく郵送します。返送されたそれを読むと赤ペンでギッシリ書込まれていて、その指摘、指導に従って復習をし、後の科目修得試験に備えるというのが本課程生徒の常態でした。報告課題の往復も一〇〇通を数えますから、慣れてきますと、様々の質問事項を余白に記入し、添削の労を軽減するどころか負担を助長することになりましたが、お蔭で学力の向上に役立った上、文通の楽しさをも味わったものです。

通教生といえども一定の時間、面接授業を受ける義務があります。一年に二五回程の登校日が組まれていて、隔週の日曜ごとに方々の地から仲間が嬉々として教室に顔を見せます。この時ばかりは、高校生の自覚が高まります。集まった面々は、一見何の集団かわからない程の老若男女の集まりでしたから、級や生徒会の組織活動はまとまりがわるいだろうと危ぶまれましたが、そんな心配をよそにスマ

ートに運営されたのでした。彼等の多くは職業を持ち一定の社会教育を先行させていますから、リーダーとなる篤志家を見い出す事欠きません。指導者が決まると若い諸君は尊敬し、年輩者は助力を与えるという協力体制ができ上るのです。こうして年齢や環境の差別を超えて見事に調和が保たれていたのでした。年輩者の思いやりは、学業半ばで落伍しかかった生徒を救う因となり、また、年輩生徒の頭では理解に手間どる数学、物理などの問題では若者の知識を借りることが幾度かあり、素直に教えを乞うたものです。数少ない登校日には、この様にして相互の交流が活発に行われました。何といっても楽しい思い出は修学旅行、新幹線乗車の際一般客と間違われて呼止められたこと、ガイドさんの後に行列をつくって見学して回った名所旧跡がなつかしい。体育祭で、新装なった体育館、最新の施設をつかってのスポーツは貴重な経験でした。努力の功なって卒業の年、長男の入学を迎えていました。

苦楽こもごもの高校生活を感慨深く幕を閉じ思うことは、通教での苦学に耐え得るには、確かな信念、したたかな精神力を養うこと、これだと思います。在学中、多くの仲間が労学の両立に苦悩し、遂には脱落していく姿を見、却って初心を自覚させられたものです。そんな時はガリレオの有名な言葉〝それでも地球は回る〟に貫かれている気骨を思い出します。いつしか学問への憧憬絶ちがたく、東高卒業の春、大学の通教部へ入学、雌伏六年の末卒業できました。入学生のわずか二割しか卒業しない状況の中で、ここでも東高通教魂を実践し証明し得たことに大いに満足したものです。世は、有名校至上主義による受験戦争たけなわ、フェアな競争に敗れると姑息な手段を使っても入学を果そうとする歪んだ教育観が批難されていますが、通教生諸君の純粋な向学心、真摯な勉学態度には無関係な出来事でありましょう。生涯教育の必要がつとに唱えられている中で、通教制度が見直されています。私たちはそこで最も大事な、生活の中に学習の習慣を持つことを訓練し東高は私にとって生涯教育の端緒だったのです。

意　志

昭和51年度卒　石橋　康郎

創立四十年を迎えて、心からお喜び申しあげます。

昔から、「習うは一生」と言われていますが、学校を卒業しても、勉強と縁が切れるどころか、日進月歩の技術革新の今日、ますます、新しい知識の吸収が要求され、日々、これ、学校の延長と言っても過言ではないと思います。

学校では、進学するときや、在学中の期末などに、試験という、教育を〝強制〟させる目標に向って、私たちは勉強しました。社会でも、職業上、必要な資格や知識を得るために、やはり、同様な目標に向って勉強します。けれども、社会で、仕事や日常生活の一般的な教養を高めるための勉強には、試験という目標がありませんので、勉強する、しないは全て自分の意志次第と言うことになります。「歳月人を待たず」のことわざのように、私のように意志の弱い人間には、勉強を、強制促進させてくれるものがないと、日ごろの勉強を怠りがちで、時の流れから取残されそうですので、試験という目標に向って勉強した、高校時代を懐しく思います。私の経験から判断しますと、とかく、意志の弱い人や忍耐力に欠ける人ほど、安易で楽な道を選択しがちで、それが勉強の中途挫折へとつながるものと思われます。学業の成否を決めるものは、自分の意志ですから、結局は自己との闘いだと思います。その意味で、教育における、ある程度の〝強制力〟は、弱い意志を補ってくれるものと思います。勿論、より高い教育を受けようとする人は、それなりの強い意志が必要です。教育に関する限り、自分の意志の弱さ故に学業を放棄し、その非を他のせいにする、被害者意識は見当はずれだと思います。社会のどんな職業でも知的要素皆無の職業は少ないと思いますので、私たちは好むと好まざると、勉強を続けなければなりません。いわんや知的な仕事をする人なら言うまでもないことです。

学校でも、社会でも、教育についての公言は、なかなか本音が聞けませんが、高校、大学への進学率の上昇や、就職してからの勉強熱の共通するところは、「知的な仕事をするためを」と言えそうです。これには異論もあるでしょうが私の実感としては、こと、教育に関しては、私生活が本音だと思いますので、当たらずとも遠からずだと思います。

そして、私もまた、自分の弱い意志にムチ打って叱咤激励し、秋の夜ながをいささか勉強に費やしているこのごろです。

二度目の青春

昭和54年度卒　柏原　斐子

ある学校の創立記念に、グラウンドの土を入れたかんずめを作った所、式典に参列した卒業生の方たちに飛ぶように売れたことを、テレビで放映しておりました。小さなかんずめの中に、若き日の青春の夢をいだきながら、みなさん大事そうに持ち帰ったそうです。このようにどなたにも

学生時代の思い出はなつかしく、胸をしめつけられることもあると存じます。

今年で四十年目を迎える千葉東高等学校、また通信課程を御卒業なさった方たちも、すばらしい青春の一ページをこの学校でおもちになり、過したことと存じます。私も五十五年三月、通信課程を卒業しました四十二歳の主婦です。地方の中学を出まして家庭の都合で進学することができず上京し、二十年間の空白を心配しながらの入学でした。面接日に校門を入り、本校舎の前の整った松の木が妙に印象に残ったことを覚えております。一か月に二回という数少ないスクーリングの中で、先生との交わり、部活動、生徒会活動、修学旅行、体育祭等の行事、またある時は期末テストに徹夜し、分からない一つの問題に一晩中苦しみ、小学校中学校などの教科書を開いたことも度々ありました。何年も前に過ぎ去ったはずの学生時代がよみ返ってきたような錯覚に落ち入りながら、四年間を夢中で過してしまったような気が致します。一緒に勉強した仲間も、学歴社会に悔みながら、資格を取る為に入学した人、基礎的な学力を希望する人、それぞれの目的に向って一生懸命努力しておりました。でも最後は、自分の為、自分を一歩でも前進させたいという目的が大きかったのではないでしょうか。私にとっても通信の四年間は苦しみながら、人生でもっとも充実した日を過すことができた「二度目の青春」として忘れることのできないことですし、また、私たちみたいな年齢の者でも学べる場があり、そこで目的を達することができたことを幸福に思い常に感謝致しております。

現在中学、高校は受験の為の場所である、などと問題になっておりますが、私も高校生を持つ親ですので考えさせられることも種々あります。東高校も今は県内で有数の進学校と聞いておりますが、スポーツ、芸術面でも常に新聞等で目にするぐらい両面共に平行しながら子供たちも健全に育ち理想的な学校像ができていると思っております。昨年完成致しました通信課程共々、今後の御繁栄を心から期待申し上げております。

笑話徒然草

昭和55年度卒　小村　佐清

つれづれなるままに思いめぐらしもの書けば過ぎ去りし日
今のごとくなりにけり

待望の修学旅行の日いつもより早く起床し、新調のスーツを着、颯爽と家を出る。東京駅迄の道のりがやけに長く感じられた。約束の時間よりも一時間も前に着く。仲間は

誰も来ていない。そのうち一人また一人というふうに増えてくる。約束の時間には全員が揃った。全員が集合する迄の一時間は、私にとって不安と焦燥の時であった。それにしても個性豊かで老若男女の私たちをほかの人々は何の集団だと想像したであろうか。高校生の修学旅行などとは誰の目にも映らなかったであろう。そこで私はとりあえず轟農協の肥料課と穀物課の合同旅行と銘うった。希望に満ちた私たちは新幹線に乗る。各々の席につくと偶然にも（策略だったという説もあったが）Y子さんと同じ席だ。先行きの良いスタートとはこのことであろうか。古い都へ向かうはずの電車が私には新しい世界へと針路をとっているように思われた。電車の中で皆雑談に花を咲かせたり駅弁を食べたり、トランプ等して、これから始まる生涯で一番楽しいはずの旅行を思案し、模索していることであろう。私はミス東高の誉高いY子さんの手作り弁当をいただく。生まれてこのかたこれほどおいしい物を食べたことがあっただろうか。とにかく最高の味であった。電車は京都に着き近鉄電車に乗り換えて奈良に着く。いつもなら一時間も乗ると疲れる電車の旅がロマンスカーにでも乗っていたような錯覚に私は陥っていた。近鉄奈良駅から徒歩で奈良公園、東大寺と見物した。確かに我が町の寺とは大分規模が違う。改めて古代人の偉大さを知ると同時に華厳宗の芸術的哲学的思想には教訓を受けるものが数多くあった。仏教国日本に生まれた自分たちが、なぜか世界で最高の崇高な文化を享有しているような気がしてならなかった。夕方宿舎に着き入浴し大勢で食事をとる。日常何でもない一つ一つの動作が愉快でならないのは私だけであっただろうか。でもただ一つ奈良の宿舎で不遇？な出来事が起こった。それはお膳にのったトンカツに見せかけた一枚の冷たいメンチであった。色相といい、大きさといいさぞかしおいしいと思われたトンカツが実はメンチだったのである。古都奈良の絶勝に触れ東大寺の貴重な文化遺産に接触し驚きと敬意を表している私にとってこの一枚の冷たいメンチは実に不満な料理であった。私の脳細胞は食欲に関しては特に至極明快にできているらしい。夜遅く迄人生について（異性のことなど実は他愛のない話題）語り合い妥協することなく無責任に床につく。奈良での夢は家にいる妻のことだとしておこう。二日目ほとんどの人が早く起床している。眠っているのが勿体ないような気になるのである。今日は明日香めぐりである。メンチ旅館からバスに乗り目的地に向かう。ガイド嬢の説明を聞いていると自然に古代社会に引きずりこまれてゆく。石舞台古墳、飛鳥寺と歩き宇治平等院

を見物し琵琶湖周遊である。遊覧船に乗りながら、我が千葉の印旛沼と比べて見る。それほど変わりないように思えた。琵琶湖周遊が終わりバスは二日目の宿泊地京都へと向かう。宿舎に着き入浴する。今夜は夕食後自由行動ができるとあって、いつもより賑やかである。四～五人で買物に出かけた。修学旅行生が多いのは京都特有の現象であろうか。いろいろな地方の訛言葉が川原町通りに氾濫している。私も負けじと友人に向かって「にしゃあにしてっだよ」と大声を発する。実に気持ちのよいものだ。一時間ほどで宿舎に帰る。ほとんどの生徒が戻っていた。私たちは通信制の生徒であるという自覚がこのように歓楽街に出ても一時間ほどで帰宅するなどという複雑怪奇な現象を生む。これも私たちの理性の表れと見るべきだと思う。M先生そうですね。後輩諸君先人の偉大な功績は見習うべきであろう。部屋に入ると気のせいかアルコールの匂いがする、なつかしい香りである。でも実はこの匂いはコーラのせいだった。寝るには早いということで、全員で雑談を始める。今夜の課題は激動する国際情勢から今日のガイド嬢の応対ぶり迄広範囲であった。そんな時、誰かがI氏（I氏は初老の紳士で頭髪に多少ムラがある）を励ます会をやろうと言いだしたのである。突然のシャレにI氏、ひっくりかえり柱で頭を打つ。そこですかさず私が「Iさん大丈夫ですよ怪我ないですよ」と言った。Iさんは少し怒った顔で「君たち私を馬鹿にするのか」と返答した。そこでまた誰かが「そんな気はもうとう（毛頭）無いですよ」と言ったのでIさん大笑いし愉快だなーと満足している様子であった。これ以来Iさんは四組生の輝くスターとして誕生したのである。私たち四組生の男子は三人も集まると不思議なほどに芸術的笑話が生まれる。なんともいえない素晴しい友達である。時計の針も十二時を過ぎている。そろそろ寝ようということで例のごとく無責任に皆床につく。二日目の夢は先生方の御厚情あるテストの夢でもみよう。三日目は清水焼団地をまわり嵯峨野めぐりである。清水焼団地では湯呑みに自分の好きな文字を書くとのことである。みんな一生懸命書いている。なかなか上手な人もいたようだった。私には芸術的素養というものが一片も無いのでこのような作業は大の苦手である。さんざん思案したあげく「古都より愛をこめて」と記入し絵付を終える。清水焼団地を後にしながらバスは嵯峨野へと向かう。今回の旅行の最大のクライマックスである。最初に念仏寺を見学しここから正午までは自由散策ということで解散する。十か所位ある山中の寺を自由に見学するのである。どのような経路をとっても

良いのであるから気が楽だ。私は四〜五人の友人と同行する。女子大生らしい人が多くて私の視線は寺に向いたり女性の方に注がれたりして急がしい。それでも大体のお寺を見学することができ、集合時間は守れた。昼食は京名物湯豆腐だ。さすが天下の食通が集まる所だけあって実においしい。満腹になる迄貧乏人特有の生活様式で食べる。奈良のメンチ料理とは大分差がある。食事が終わって大徳寺に向いお坊さんの講話を聞く。大変ユーモラスに論じているが禅の精神をちゃんと教えているのには、この若いお坊さんの人柄がわかるようだ。自称仏教界の三浦友和といっていたが道理で私と相通じるものがある。私だって東高の三浦友和と自負しているのだから?。大徳寺での講話が終わりバスは宿舎に着いた。今日の嵯峨野めぐりは最高に楽しく、久しぶりに、こころよい充足感を味わった。宿舎の夕食は関西風すき焼だ。五〜六人でテーブルを囲み箸をとった。しかし牛肉が足らず皆不満気だ。そこで私は女性の部屋に行き牛肉の不足分を補ってくれるよう依頼してくる。十分ほどするとそれぞれの部屋から牛肉が運ばれてくる。私とSさんは上半身裸になり五〜六人分の牛肉を汗をかきながら食べた。そんな光景を友人はカメラにおさめていた。肖像権の侵害で告訴しようと思ったがやめた(冗談)。

夕食後入浴し全員で青蓮院に琴の観賞に行くとのこと、宿舎から夜の京都の街を三十分位歩き青蓮院に着く。なんでも格式の高いお寺だとのこと。応待に出た坊主、いや失礼お坊さんも厳しい態度である。抹茶をいただきながら菊の御紋の饅頭をもらう。庭園をはさんで向いの部屋から若い女性の琴の音が流れてくる。照明といい庭園といい、琴を弾く和服姿の女性といい、全てが調和されていて時代錯誤をするほどである。自分が平安貴族にでもなったような気分である。さきほどの食べすぎから身動きするのが辛い。これでは貴族どころか卑族ではないか実にはずかしい。今回の旅行で青蓮院でのひとときが最も素晴らしかったと皆いっていた。皇族の血を受けついだこのような格式の高いお寺を私たちが拝観できるのも戦後民主主義の恩恵であろうか。反面このような立派な寺を建造できた背後には大勢の農民の血と汗が流されたことを思うと複雑な気持ちになる。帰り道私が「若殿様にでもなった気分だよ」といったら誰かが馬鹿殿の間違いだろうという。私の甘い空想はこの一声で遠い彼方へ飛んでいく。人を褒めるのもいい加減にしてほしいものである。宿舎に帰り例のごとく雑談が始まる。今夜の課題は仏教界における思想とは何かである(本当は先ほどの琴を弾いていた女性のこと)。私は途中でO先

生に手紙を書く。内容は徒然草の作者である吉田兼好を評するものであった。自分の目で今日あだし野、念仏寺と見学したので書きやすかった。皆O先生に手紙を書く私を羨望の目でみている様子。優越感が私の心に生じ自信がわいてくる。夜中位迄雑談が続き、今夜もまた妥協することなく例のごとく無責任に床につく。三日目の夢は当然自分が平安貴族になり月光の下で酒を飲みながら美しい女性の琴を観賞する夢でもみよう。琴を弾く女性が東高のO先生に似てきた。これは悪夢だもう寝よう。四日目いよいよ最後の日である。宿舎を出るのが辛い。愛する女性の元から去るような甘い感傷である。朝八時ごろ清水寺に向かう。途中土産物店の主人から手のひら一杯に八つ橋をもらう。我が家の家風に従って人の好意は素直に受けることにし、有難く頂戴する。清水寺に着き、ゆっくりと清水の舞台を見学し、純情そうなガイド嬢の案内に耳を傾ける。このガイド嬢私が質問すると赤くなり、はずかしそうである。この生存競争の激しい社会にこのような素朴な女性が現存していたことに感激をおぼえ親しみをもった。清水寺の本堂を見学していよいよ音羽の滝だ。この滝には三つの流れがあり、一番目の水を呑むと美男美女になり、二番目の水を呑むと頭が良くなり成績が上がるとのこと。そして最後の水を呑むと長生きするとの説明を受ける。私は一番目二番目の水は省略して最後の水だけ飲んだ？（私は素直な人が好きです。）二番目の水を呑む人が多かったが、今度の試験は大丈夫だろうか。そして最後の見学地友禅会館へ行き友禅染めのできる行程を見学した。そして私は二〇〇円の友禅染めのハンカチを買う。本当は妻に和服でも買ってやろうかと思ったが、荷物になるのでやめた（実は残金が乏しかった）。友禅会館の見学が終わると今回の旅行の全ての日程が終わることになる。なんだか寂しい。まだまだ全ての友人と一緒に京都に残留していたい。そんな私の気持ちも知らないでバスは京都駅に着く。今日のガイド嬢はとても印象が良かったので写真撮影をお願いし住所を聞いて別れを告げる。あと何分かすると私たちは東京へと向かう新幹線の車中の人となるのである。私たちの今回の旅行は実に楽しく充実したものであった。私のこの原稿が雑草に載ることろ私達四年生は卒業してゆくのであるが、この四年間おもしろ半分に過ごしてきた私だが、大勢の愉快な仲間と優れた人格を身につけた友人たちと精一杯の交遊と、思い出を残すことができたのは幸運なことであった。この四年間、友人から得たものを忘れず、これからの人生に役立てていこうと思う。これらのことは私の人生に明るい希望を与え

てくれることだろうし処世の糧となることであろう。お互いに卒業し面識する機会に恵まれなくとも、この四年間の苦学の合間の楽しいひとときを忘れることなく自分の人生を意義あるものにし、今回のこの旅行がけっして終学旅行でなかったことを実証したいと考えます。尚最後にこの笑話徒然草を昭和徒然草と解釈していただければ幸いです。

御殿場合宿に参加して

昭和55年度在校生　瀬下　とし子

君の行く道は果てしなく遠い
なのになぜ歯をくいしばり
君は行くのか　そんなにしてまで

歌声と共に三日間の合宿が終わった。今、机の前に座って、目を閉じると、あの雲海の美しさ、バスの中での教頭先生のお話、木更津音頭、そして青年の家の広大な敷地の朝夕、やっぱり参加してよかった。

先生、友人、家族、みんなのお陰で年を忘れて青春を味わってきた。とりわけ一班の先生、班長さんには御迷惑を掛けました。

今回の富士登山は、終生忘れ得ない想い出を作ってくれました。もっと自分では体力に自信があったのに、自分で信じられぬ程、ものの見事にくつがえされました。

何度、途中で引き返そうと思ったことか、その度に、友人に励まされ、しんがりを見守って下さった二人の先生の辛抱強さに支えられて、十歩登っては休み、八歩登っては休んで、やっと辿り着いた宝永山、山頂。みんなの拍手に迎えられたあの感激。天候までが祝福してくれて、鮮やかなパノラマを展開してくれました。富士に登って思ったことは、富士は足下で踏みしめるより、遠くで眺める姿の方が遙かに素晴らしいと言うこと。やっと登った山も風の強さに早々に下山、途中右手の雲海に浮んだ駿河湾、左手に伊豆の山々が、くっきり姿を見せ、その間は芒々たる雲海。しばし足を止め、天地創造の神の前に言葉なく心をうばわれました。稜線を下から這い登ってくる霧……霧……、忽ちにして視界すべてが霧の中に閉ざされ、パノラマは夢かとまがうばかり、目の前の人もおぼろに……。

疲れて帰った宿舎に待ち受けていたのは、あの軽やかな老青年、二十分足らずのゲームで疲れが嘘のように飛散していきました。

夜のキャンプファイヤーも幸い雨が上がり、もえさかる炎のまわりで、各班の趣向をこらした出し物に興じ、フィナーレの詩の朗読に思わず目頭の熱くなるのを覚え、徐々

に消え行くファイヤーを後に、降り出した雨の中に胸の中に熱いものを抱いて、私たちは宿舎へと散って行きました。

慌だしくて自由時間がなくて、あの素晴らしい施設が活用できなかったのは残念でした。そしてまた目の前にある富士を眺めることができなくて心残りでしたが、でも高原の素晴らしさを満喫してきました。夜来の雨に打たれた広い敷地を朝の空気を胸一ぱいに吸い込んで、うぐいすの声に聞きほれ、山百合のあざやかさに見とれ、露に打たれた草花をいとおしみ、目覚めたばかりの周囲の山々に、細胞の一つ一つを開けて、本当に胸の底まで高原のオゾンを吸い込んで来ました。

十代から六十代まで世代の違う生徒を引率して下さった諸先生、本当に有難うございました。また、各班をまとめられた班長さん、役員の皆様、御苦労さまでした。

十代には十代の喜び、四十代には四十代の感激を味わうことができました。参加する前には、躊躇するものがあり、年齢的に若い人に伍して行けるか、自分を楽しむことができるか、ともすれば臆する心を励まして参加した私でした。若い人について行かれぬ気おくれは確かにあり、リラックスできない部分がたくさんあったにも拘らず、やっぱり参加してよかった、という思いが今、私の胸を占めています。宝永山登山の教訓は、今後の学習に大きな指針を与えてくれました。

途中で投げ出すことは、いとも簡単だけれど、最後まで目的を達することは本当に大変なこと。友人の力、先生の励ましがあってこそ、あせらなくていい、一歩一歩の積み重ねが大事なんだと心に言い聞かせ、身に泌みて感じた御殿場合宿でした。合宿の持つ意義がここにあることを、今、痛切に感じている私です。

資料

PTA役員（47年～56年）

年度	会長	副会長	年度	会長
47	下向利雄	根本貫修 友野光弘 畠山一郎	52	柴田孝明
48	根本貫修	友野光弘 武本吉浩 畠山一郎	53	木村輝武
49	友野光弘	武本吉浩 柴田孝明 畠山一郎	54	笹本功
50	武本吉浩	柴田孝明 菊池雄三 畠山一郎	55	笹本功
51	柴田孝明	菊池雄三 山崎英男 畠山一郎	56	坂井進一郎

年度	副会長
52	菊池雄三 山崎英男 畠山一郎
53	山崎英雄 佐竹道昌 相川勝衛
54	小林成朗 宇田川しのぶ 相川勝衛
55	小林成朗 宇田川しのぶ 相川勝衛
56	小林成朗 宇田川しのぶ 須田義男

同窓会役員名簿

年度	会長	副会長	書記	会計
47～54	小西一三(29)	小林美代子(21) 高橋一郎(32) 長谷川直和(通37)	富田一美(47) 石橋まつ子(42)	石井洋子(27) 大木進(通35)
55～56	小西一三	小林美代子 高橋一郎 長谷川直和	小塚興作(34) 木村行幸(41)	細川悦子(31) 大木進

※（　）は卒業年

卒業生の推移

卒業年度	卒業年月	普通科 卒業回数	普通科 男	普通科 女	普通科 計	衛生看護科 卒業回数	衛生看護科 女	通信制 卒業回数	通信制 男	通信制 女	通信制 計	備考

<千葉市立千葉高等女学校>

19年度	20.3	高女 1	／	214	214
20	21.3	2	／	186	186
21	22.3	3	／	19	19
22	23.3	4	／	191	191
23	24.3	5	／	153	153
市立高女卒業生小計				763	763

<千葉市立千葉女子高等学校>

23	24.3	1	／	5	5
24	25.3	2	／	32	32
市立女子高校卒業生小計				37	37

<千葉県立千葉第三高等学校>

25	26.3	3	／	153	153
26	27.3	4	／	195	195
27	28.3	5	68	179	247
28	29.3	6	56	223	279
29	30.3	7	99	171	270
30	31.3	8	119	207	326
31	32.3	9	132	185	317
32	33.3	10	129	173	302
33	34.3	11	178	135	313
34	35.3	12	189	141	330
35	36.3	13	154	174	328
県立千葉三高卒業生小計			1,124	1,936	3,060

通信制 卒業回数	男	女	計
1	2	1	3
2	4	5	9
3	8	5	13
4	8	3	11
5	8	14	22
	30	28	58

<千葉県立千葉東高等学校>

36	37.3	14	155	190	345
37	38.3	15	141	200	341
38	39.3	16	160	188	348
39	40.3	17	199	212	411
40	41.3	18	265	223	488
41	42.3	19	301	170	471
42	43.3	20	278	187	465
43	44.3	21	298	153	451
44	45.3	22	291	114	405
45	46.3	23	275	115	390
46	47.3	24	295	90	385

衛生看護科 卒業回数	女
1	31
2	31
3	38
4	37
6	12
7	14
8	17
9	41
10	40
11	26
12	46
13	17
14	57
15	16
16	35

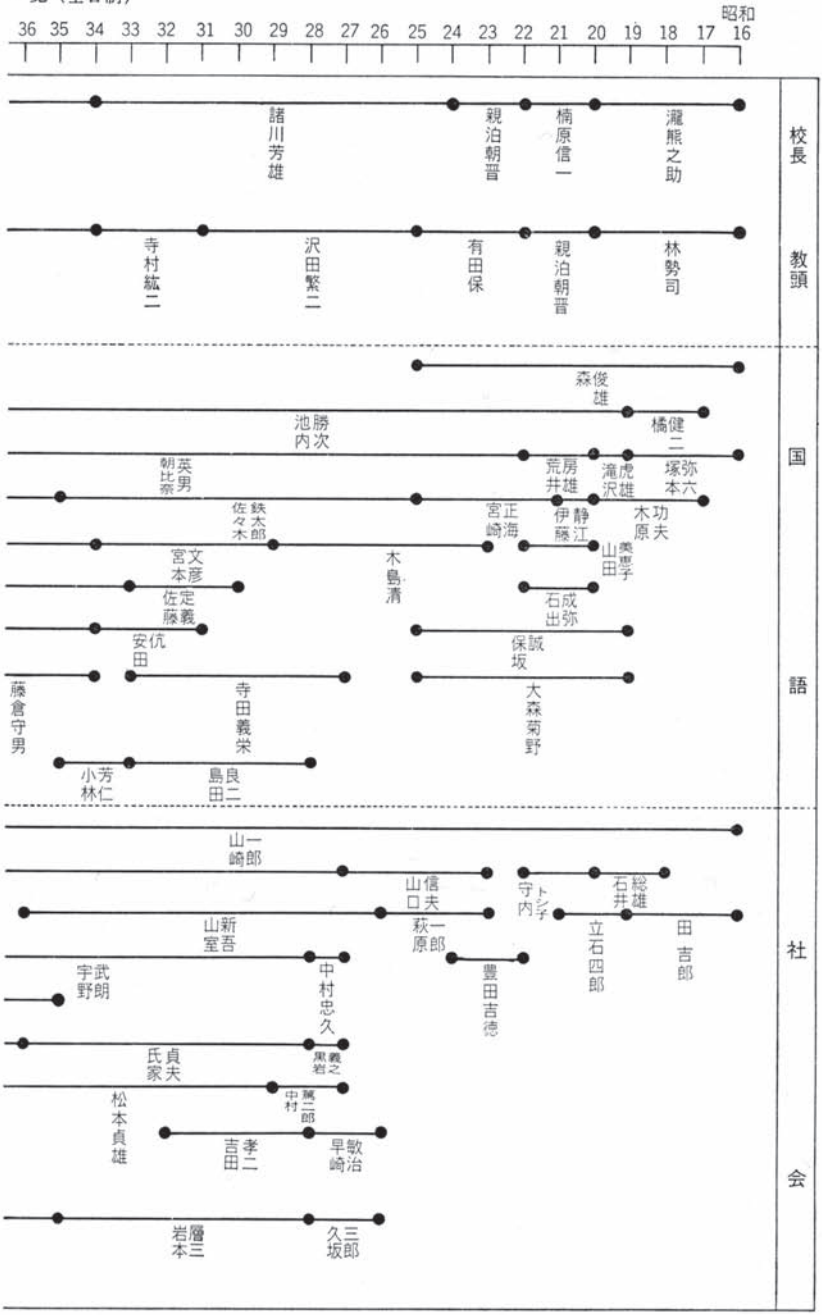
通信制 卒業回数	男	女	計
6	12	13	25
7	14	12	26
8	17	23	40
9	41	34	75
10	40	40	80
11	26	33	59
12	46	88	134
13	17	70	87
14	57	104	161
15	16	96	112
16	35	146	181

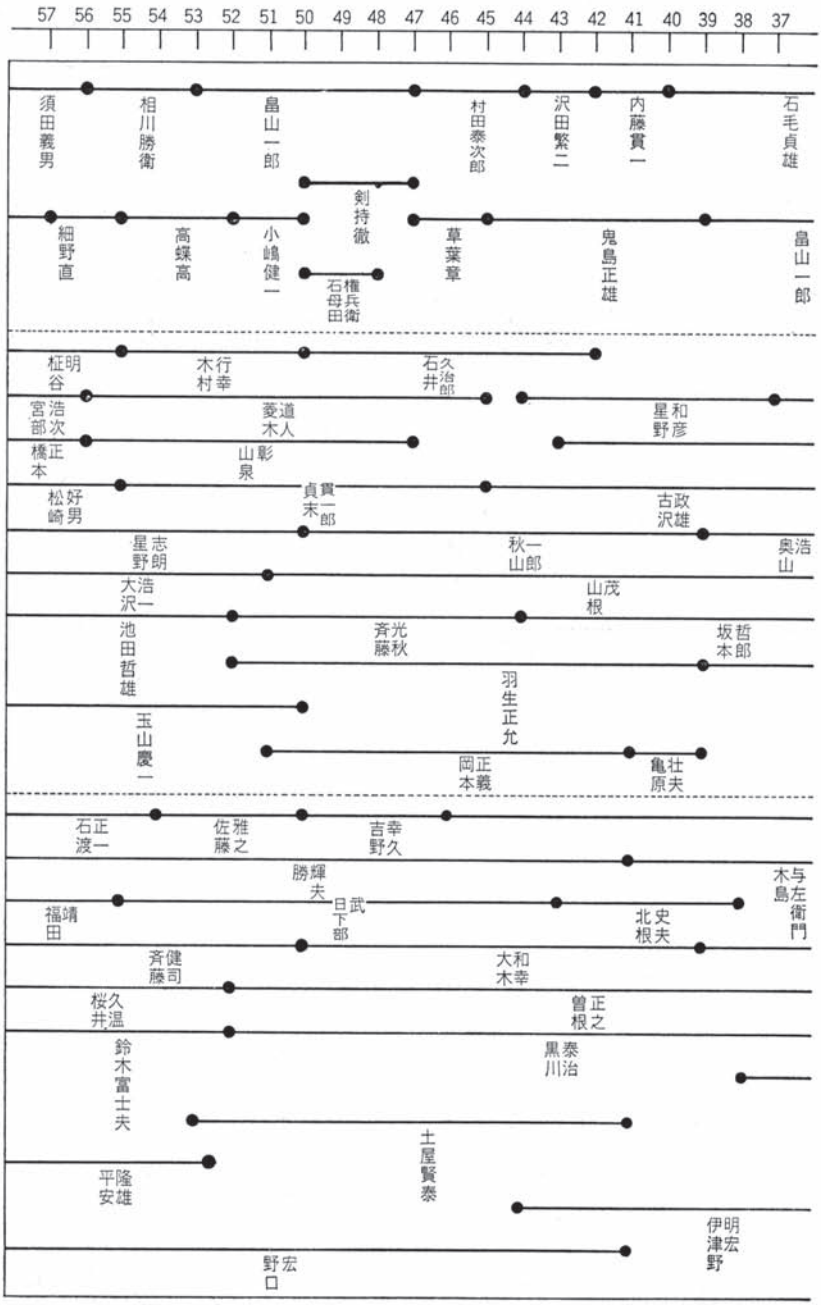
47	48.3	25	268	102	370	5	35	17	25	152	177	普通科総合選抜制度
48	49.3	26	261	102	363	6	40	18	22	121	143	〃
49	50.3	27	246	115	361	7	40	19	41	150	191	〃
50	51.3	28	257	105	362	8	39	20	38	176	214	
51	52.3	29	231	129	360	9	34	21	33	142	175	
52	53.3	30	237	122	359	10	39	22	32	170	202	
53	54.3	31	251	112	363	11	38	23	36	324	360	
54	55.3	32	247	114	361	12	38	24	25	247	272	
55	56.3	33	236	124	360	13	41	25	30	226	256	
56	57.3	34	244	122	366	14	40	26	37	152	189	
県立千葉東高卒業生小計			5,136	2,989	8,125	小計	521	小計	640	2,519	3,159	

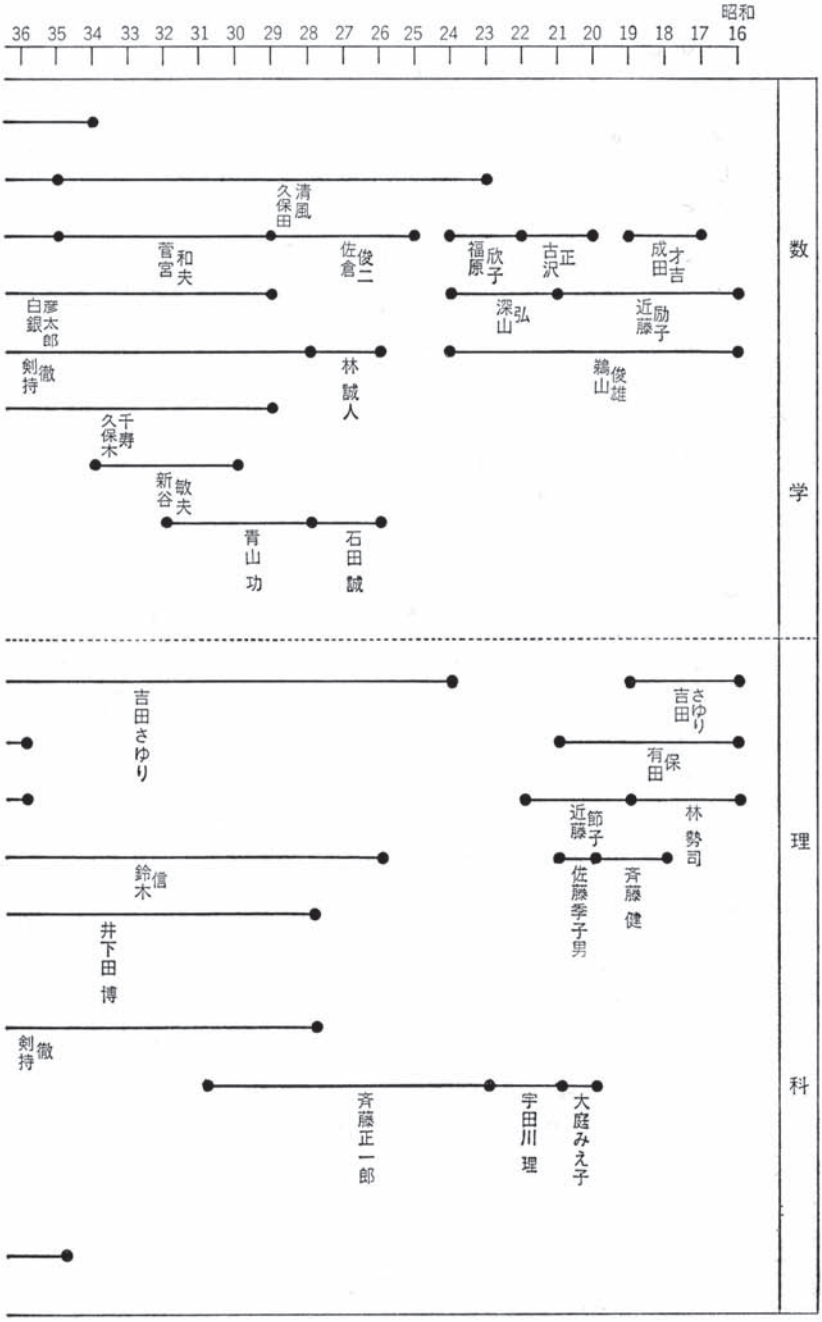
	全日制					通信制			合計
	市立高女	市立女子高	千葉三高	千葉東高	小計	千葉三高	千葉東高	小計	
男	0	0	1,124	5,136	6,260	30	640	670	6,930
女	763	37	1,936	※3,510	※6,246	28	2,519	2,547	8,793
計	763	37	3,060	※8,646	※12,506	58	3,159	3,217	15,723

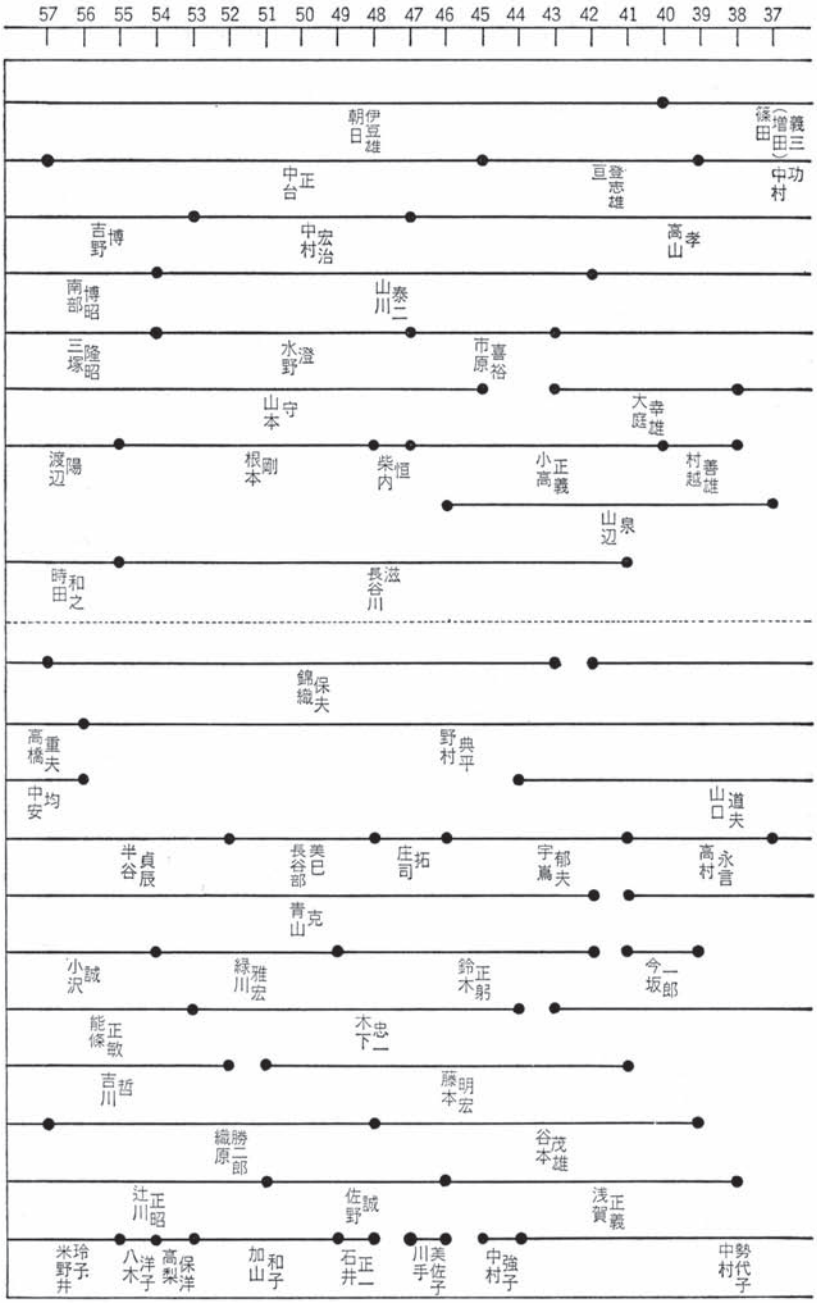
※は衛生看護科 521 名を含む。

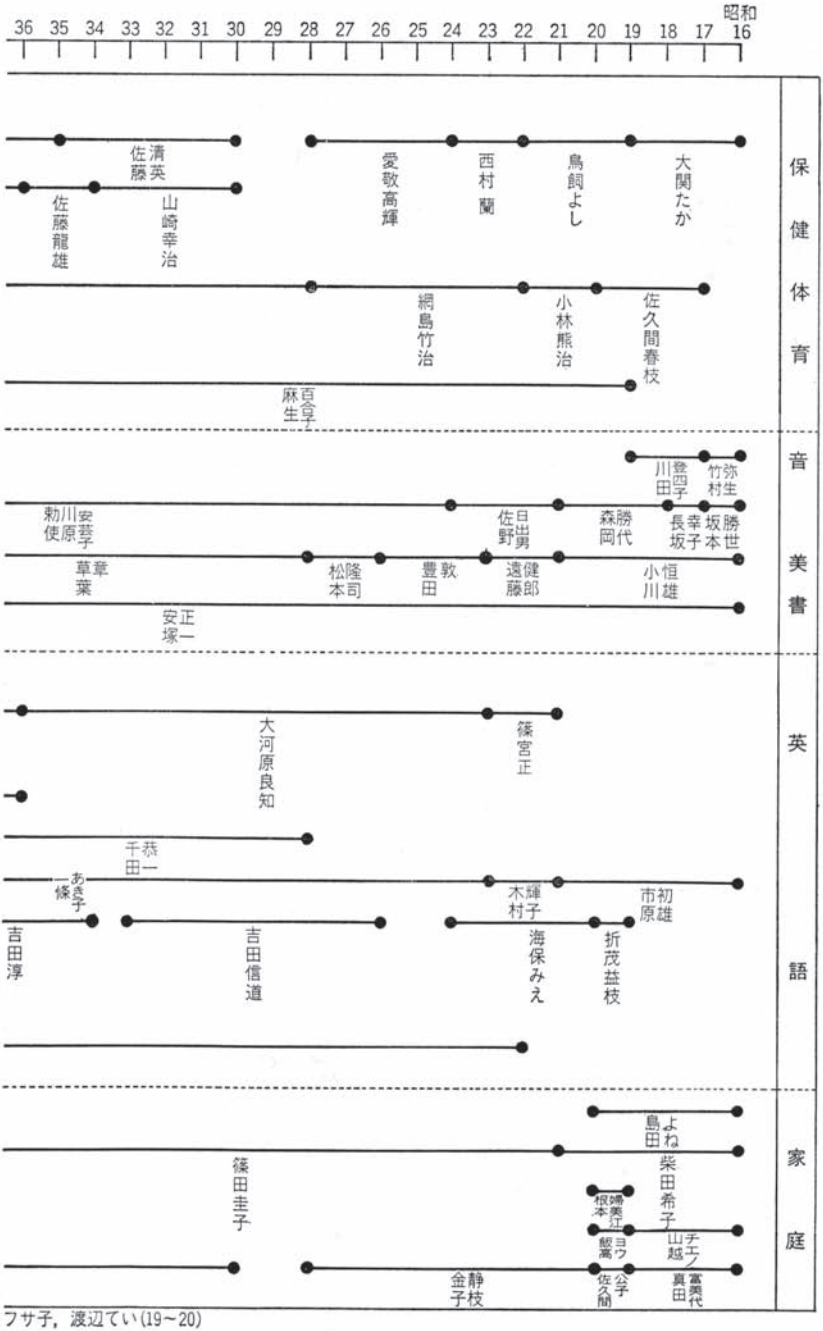
一覧（全日制）


昭和
36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16
校長
諸川芳雄
親泊朝晋
楠原信一
瀧熊之助
教頭
寺村紘二
沢田繁二
有田保
親泊朝晋
林勢司
国語
森俊雄
池内勝次
橋健二
朝比奈英男
荒井房雄
滝沢虎雄
塚本弥六
佐々木鉄太郎
宮崎正海
伊藤静江
木原功夫
宮本文彦
木島清
山田美恵子
佐藤定義
石出成弥
安田伉
保坂誠
藤倉守男
寺田義栄
大森菊野
小林芳仁
島田良二
社会
山崎一郎
山口信夫
守内トシヲ
石井総雄
山室新吾
萩原一郎
立石四郎
田吉郎
宇野武朗
中村忠久
豊田吉徳
氏家貞夫
黒岩義之
松本貞雄
中村萬二郎
吉田孝二
早崎敏治
岩本層三
久坂三郎

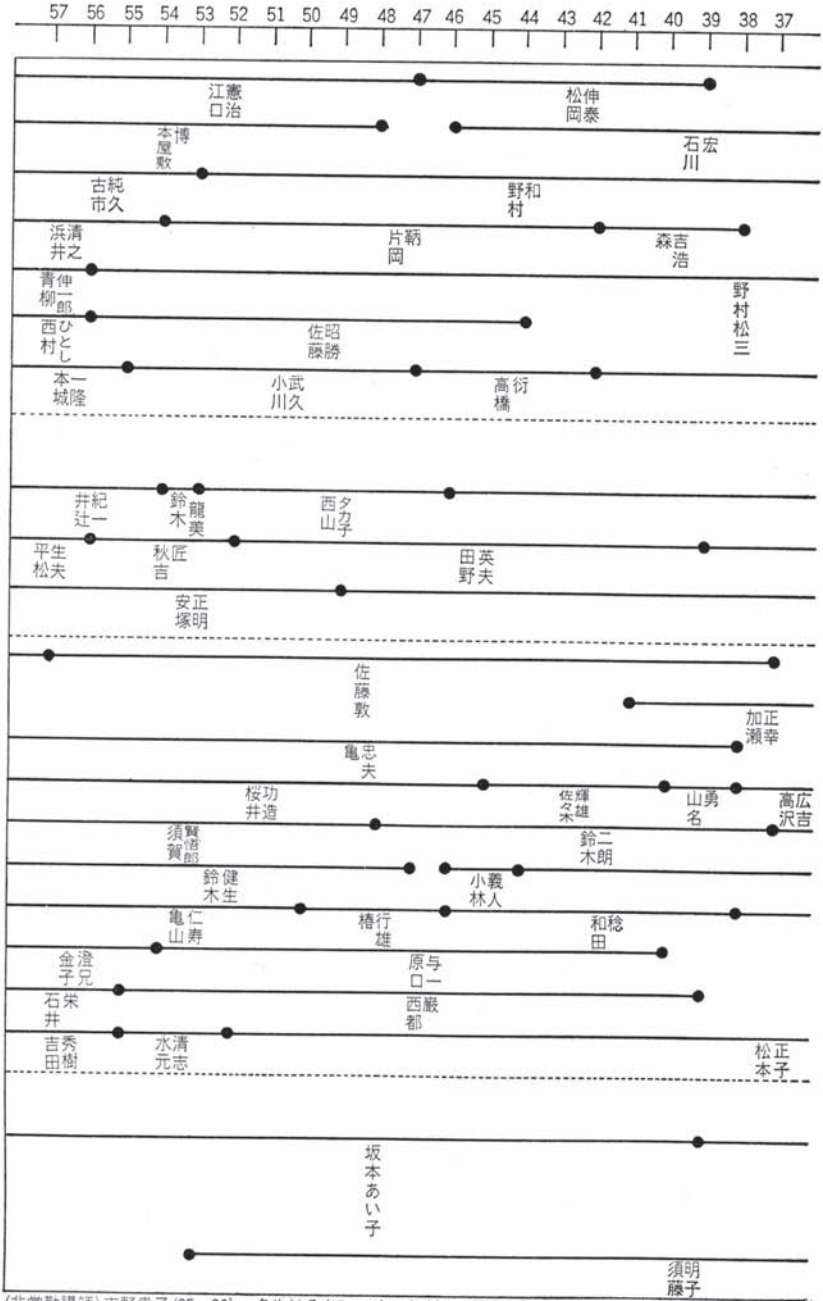

57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37
須田義男
相川勝衛
畠山一郎
村田泰次郎
沢田繁二
内藤貫一
石毛貞雄
剣持徹
細野直
高蝶高
小嶋健一
草葉章
鬼島正雄
畠山一郎
権兵衛
石母田
柾明谷
木村行幸
石井久治郎
宮部浩次
菱木道人
星野和彦
橋本正
山泉彰
松崎好男
貞末貫一郎
古沢政雄
星野志朗
秋山一郎
奥山浩
大沢浩一
山根茂
池田哲雄
斉藤光秋
坂本哲郎
羽生正允
玉山慶一
岡本正義
亀原壮夫
石渡正一
佐藤雅之
吉野幸久
勝田輝夫
福田靖
日下部武
北根史夫
木島与左衛門
斉藤健司
大木和幸
桜井久温
曽根正之
鈴木富士夫
黒川泰治
平安隆雄
土屋賢泰
野口宏
伊津野明宏


昭和
36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16
数
学
理
科
清風 久保田
菅宮 和夫
佐倉 俊二
福原 欣子
古沢 正
成田 才吉
白銀 彦太郎
深山 弘
近藤 励子
剣持 徹
林 誠人
鵜山 俊雄
久保木 千尋
新谷 敬夫
青山 功
石田 誠
吉田さゆり
吉田 さゆり
有田 保
近藤 節子
林 勢司
鈴木 信
佐藤季子男
斉藤 健
井下田 博
剣持 徹
斉藤正一郎
宇田川 理
大庭みえ子

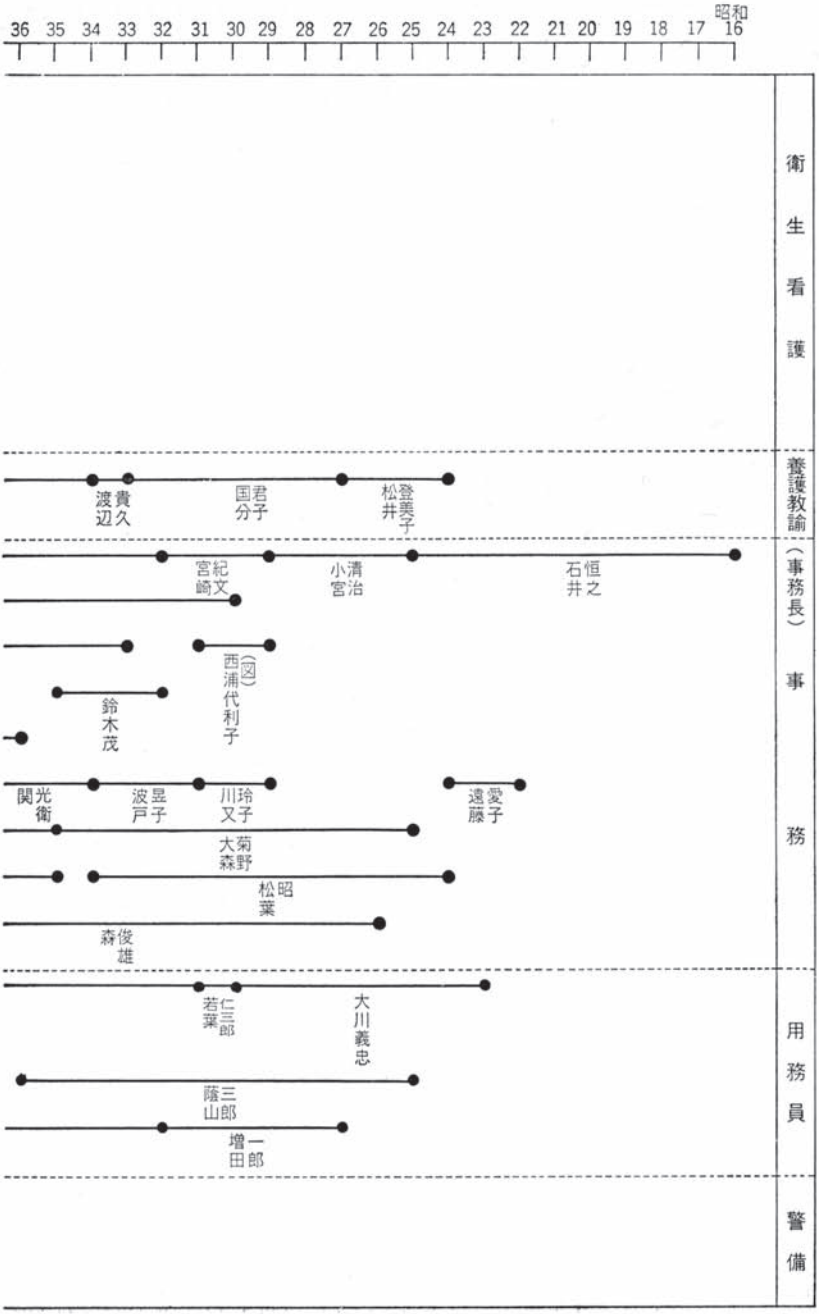

57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37
朝日 伊豆雄
篠田(増田) 義三
中台 正
亘 登志雄
中村 功
吉野 博
中村 宏治
高山 孝
南部 博昭
山川 泰二
三塚 隆昭
水野 澄
市原 喜裕
山本 守
大庭 寿雄
渡辺 陽
根本 剛
柴内 恒
小高 正義
村越 善雄
山辺 泉
時田 和之
長谷川 滋
錦織 保夫
高橋 重夫
野村 典平
中安 均
山口 道夫
半谷 貞辰
長谷部 美巳
庄司 拓
宇嶌 郁夫
高村 永言
青山 克
小沢 誠
緑川 雅宏
鈴木 正躬
今坂 一郎
能條 正敬
木下 忠一
吉川 哲
藤本 明宏
織原 勝二郎
谷本 茂雄
辻川 正昭
佐野 誠
浅賀 正義
米野井 玲子
八木 洋子
高梨 保洋
加山 和子
石井 正一
川手 美佐子
中村 強子
中村 勢代子

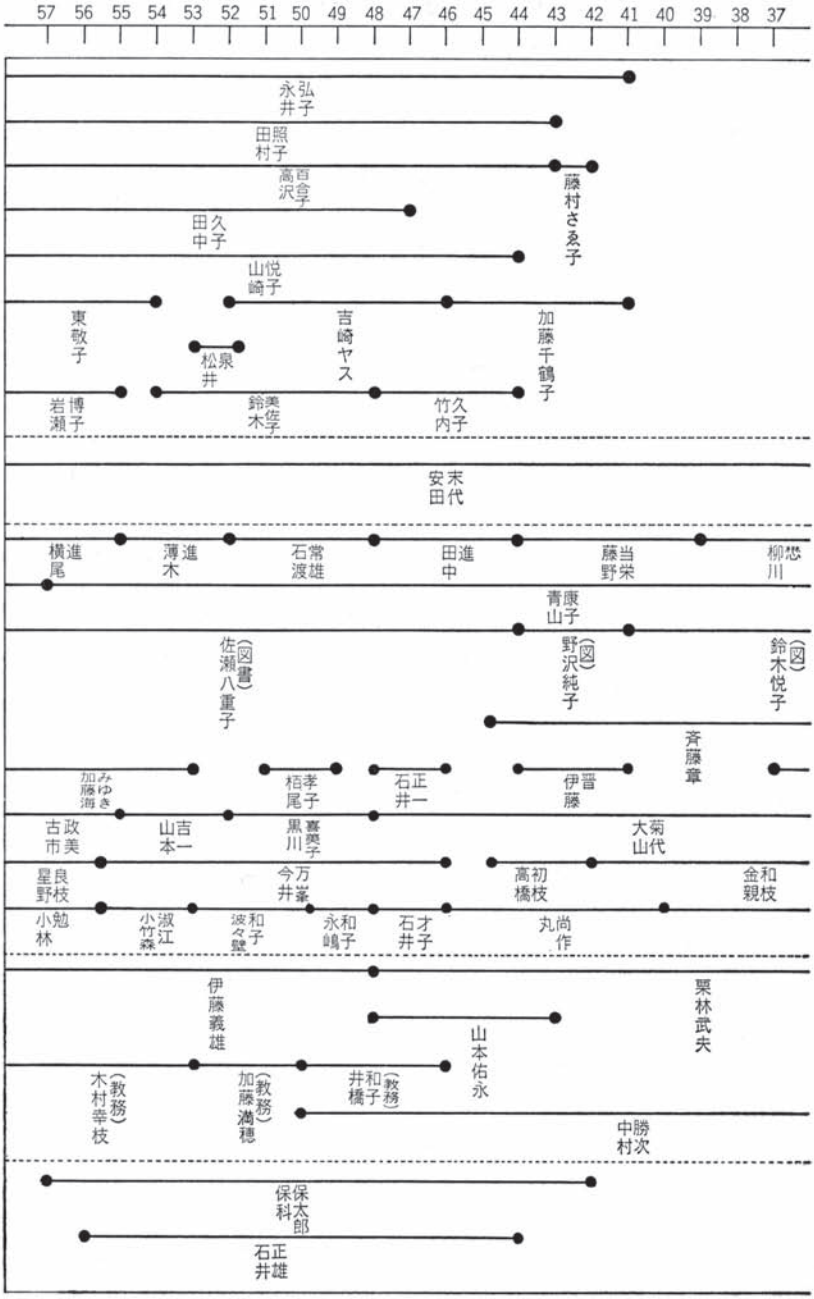


フサ子，渡辺てい(19～20)

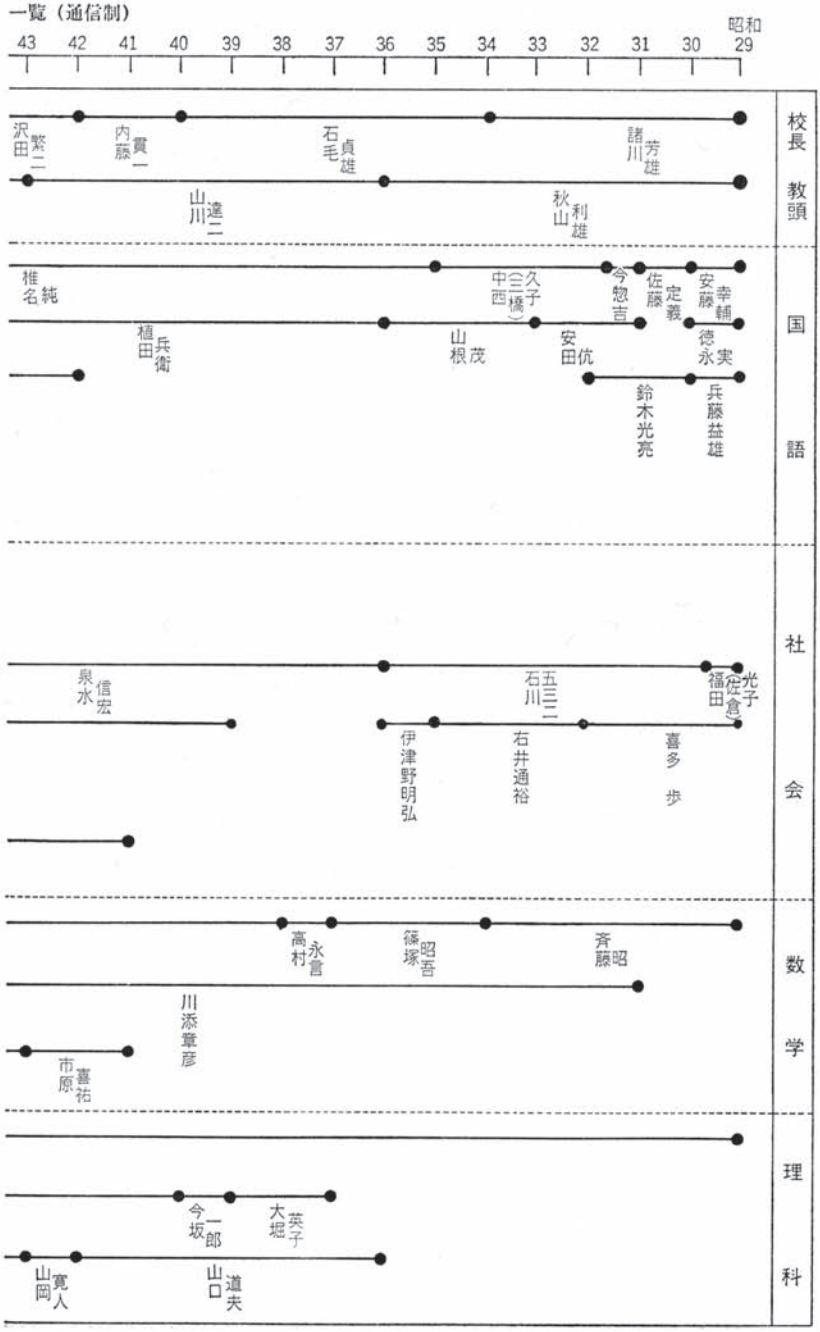


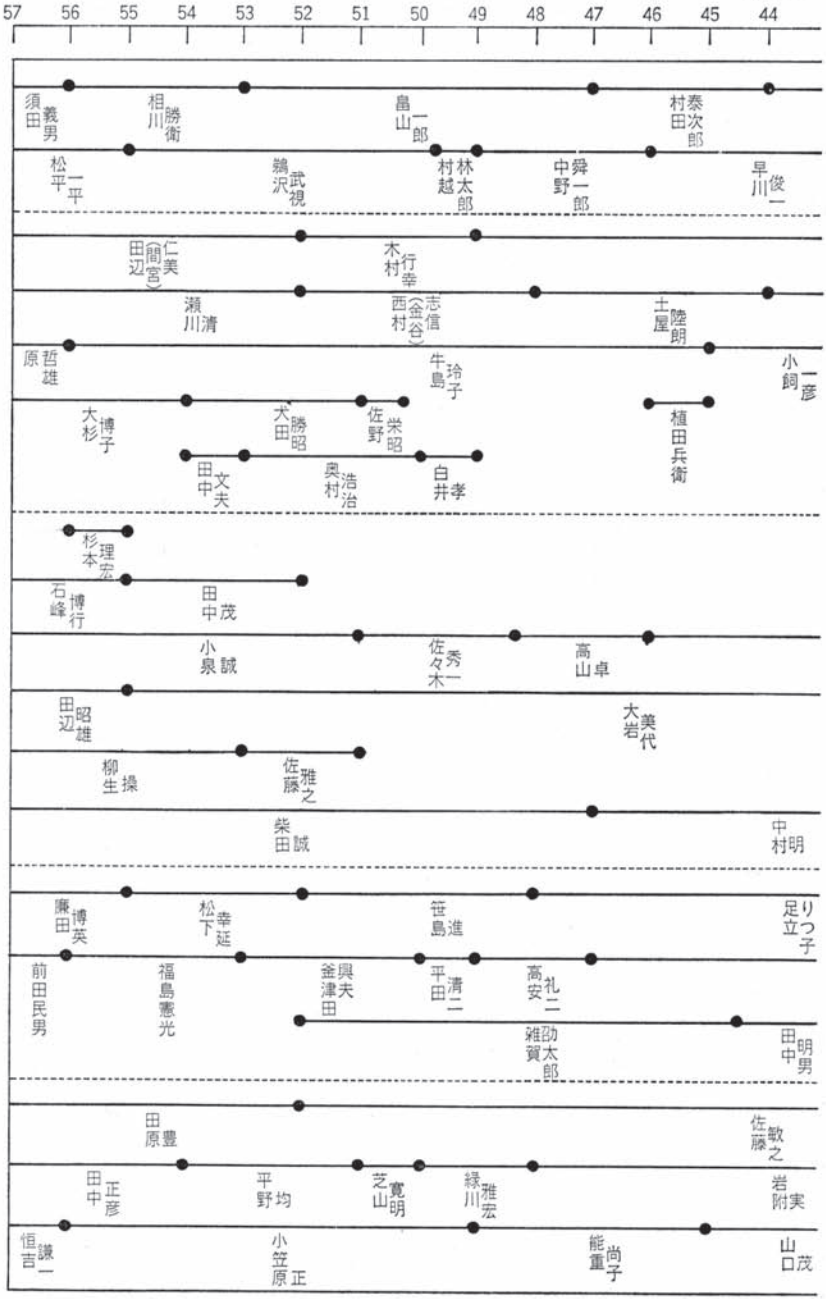
(非常勤講師) 吉野幸子(25～26), 名生はる(17～20), 守山キヌ子(18～20), 山本貴美代, 秋元あさ子, 浜田

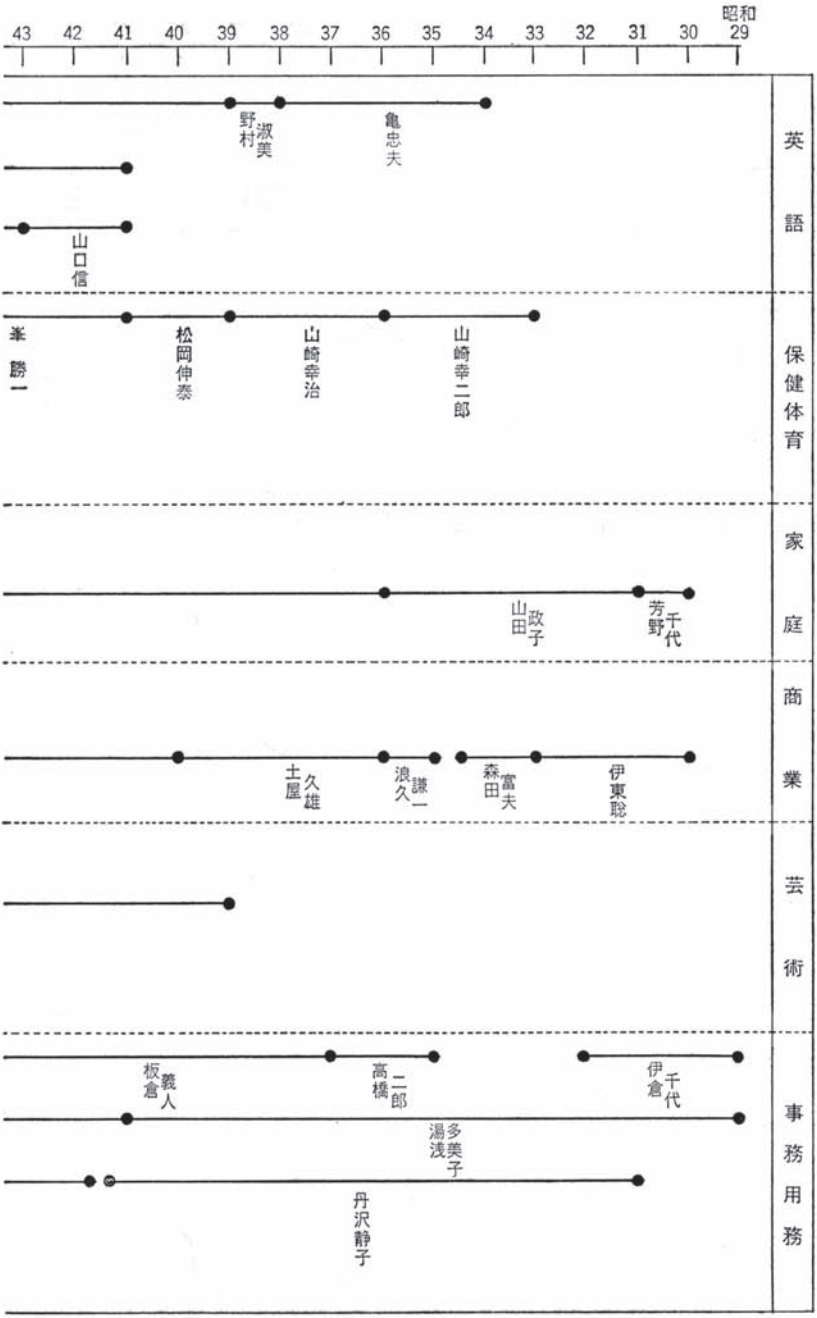

昭和
36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16
衛生看護
養護教諭
（事務長）事務
用務員
警備
渡辺 貴久
国分 君子
松井 登美子
宮崎 紀文
小宮 清治
石井 恒之
西浦 代利子（図）
鈴木 茂
関 光衛
波戸 昱子
川又 玲子
遠藤 愛子
大森 菊野
松葉 昭
森 俊雄
若葉 仁三郎
大川 義忠
陸山 三郎
増田 一郎

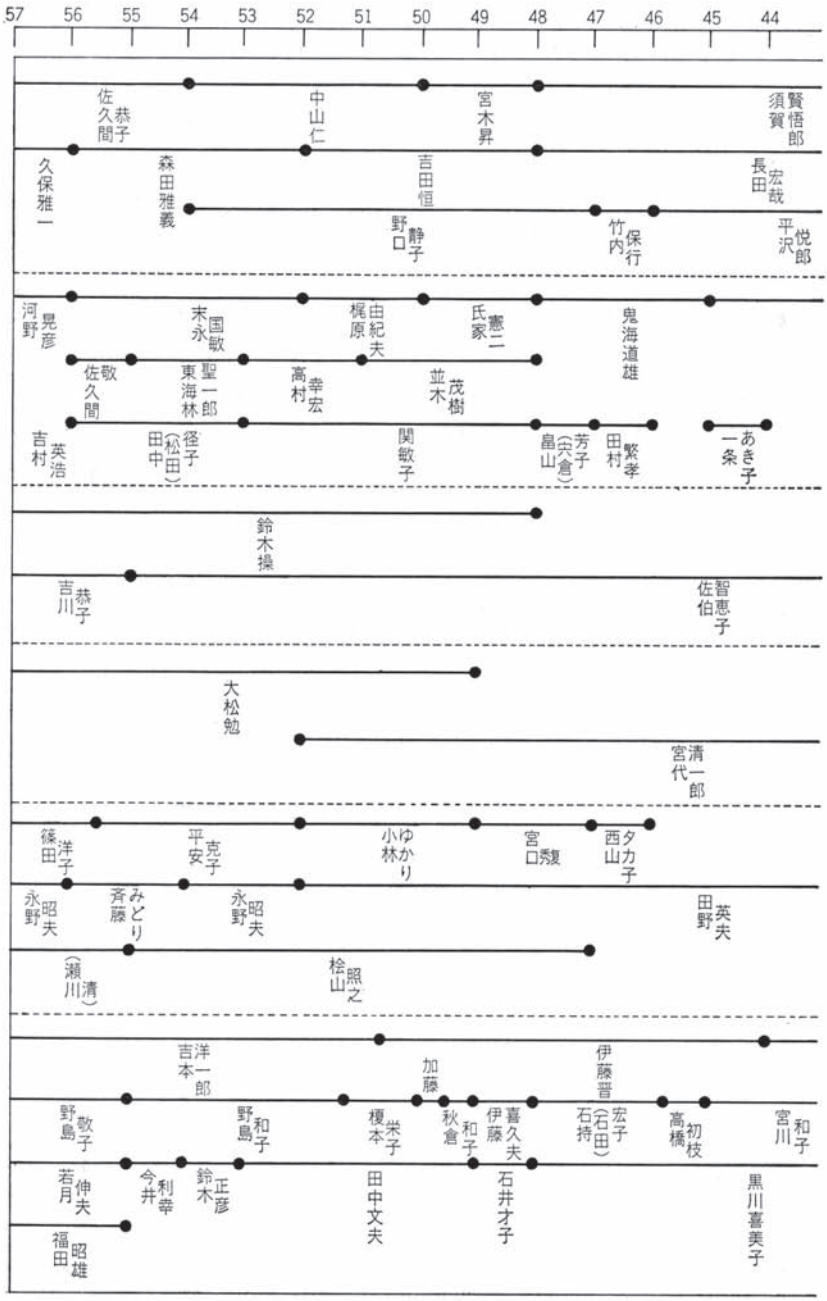

57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37
永井 弘子
田村 照子
高沢 百合子
藤村さゑ子
田中 久子
山崎 悦子
東 敬子
松井 泉
吉崎ヤス
加藤千鶴子
岩瀬 博子
鈴木 美佐子
竹内 久子
安田 末代
横尾 進
薄木 進
石渡 常雄
田中 進
藤野 当栄
柳川 恐
青山 康子
佐瀬八重子 (図書)
野沢純子 (図)
鈴木悦子 (図)
斉藤章
加藤海 みゆき
梧尾 孝子
石井 正一
伊藤 晋
古市 政美
山本 吉一
黒川 喜美子
大山 菊代
星野 良枝
今井 万峯
高橋 初枝
金親 和枝
小林 勉
小竹森 淑江
波々 和子
永嶋 和子
石井 才子
丸作 尚
伊藤義雄
栗林武夫
山本佑永
木村幸枝 (教務)
加藤満穂 (教務)
井橋 和子 (教務)
中村 勝次
保科 保太郎
石井 正雄

一覧（通信制）


昭和
43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29
校長 教頭
沢田繁二
内藤貫一
石毛貞雄
諸川芳雄
山川達二
秋山利雄
国語
椎名純
植田兵衛
中西(三橋)久子
今惣吉
佐藤定義
安藤幸輔
山根茂
安田伉
徳永実
鈴木光亮
兵藤益雄
社会
泉水信宏
石川五三二
福田佐倉光子
伊津野明弘
石井通裕
喜多歩
数学
高村永言
篠塚昭吾
斉藤昭
川添章彦
市原喜祐
理科
今坂一郎
大堀英子
山岡寛人
山口道夫

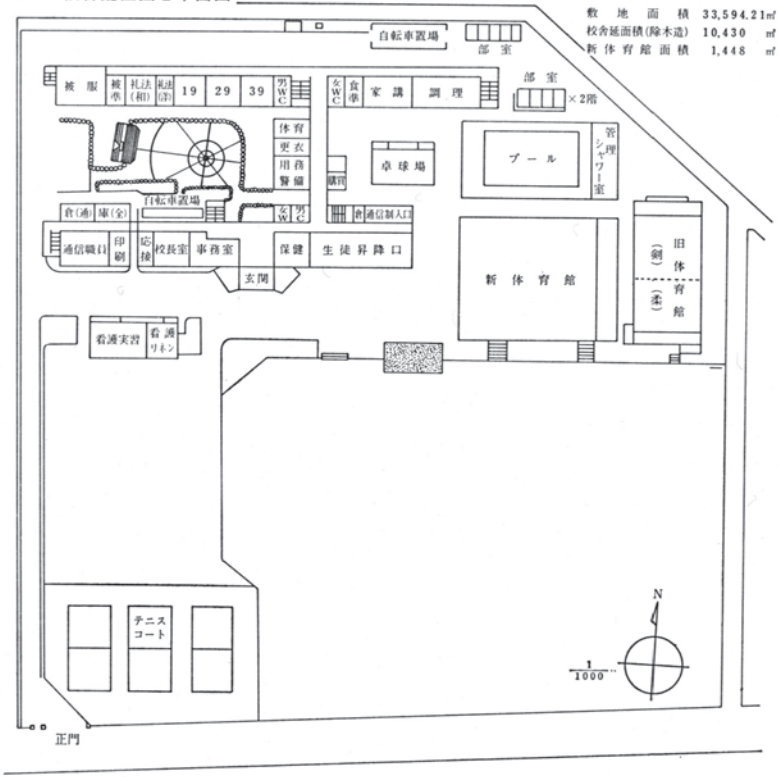

57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44
須田義男
相川勝衛
畠山一郎
泰村田次郎
松平一平
鵜沢武視
村越林太郎
中野舜一郎
早川俊一
田辺(間宮)仁美
木村行幸
瀬川清
西村(金谷)志信
土屋陸朗
原哲雄
牛島玲子
小飼一彦
大杉博子
犬田勝昭
佐野栄昭
植田兵衛
田中文夫
奥村浩治
白井孝
杉本理宏
石峰博行
田中茂
小泉誠
佐々木秀一
高山卓
田辺昭雄
大岩美代
柳生操
佐藤雅之
柴田誠
中村明
廉田博英
松下幸延
笹島進
足立りつ子
前田民男
福島憲光
釜津田興夫
平田清二
高安礼二
雑賀劭太郎
田中明男
田原豊
佐藤敏之
田中正彦
平野均
芝山寛明
緑川雅宏
岩附実
恒吉謙一
小笠原正
能重尚子
山口茂

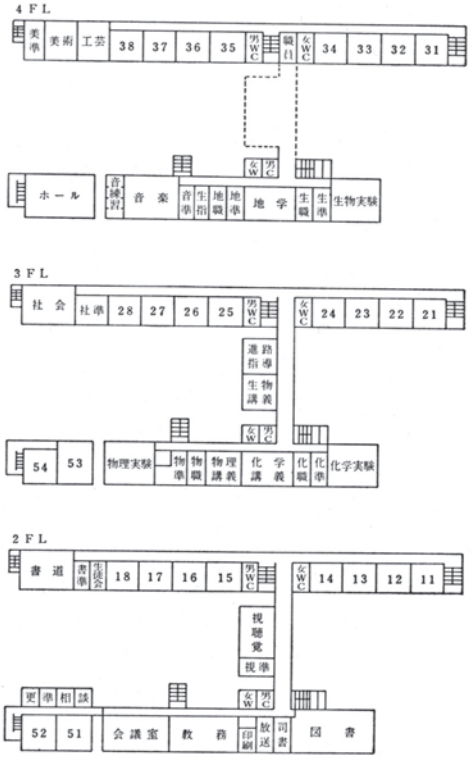

昭和
43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29
英語
野村淑美
亀忠夫
山口信
保健体育
峯勝一
松岡伸泰
山崎幸治
山崎幸二郎
家庭
山田政子
芳野千代
商業
土屋久雄
浪久謙一
森田富夫
伊東聡
芸術
事務用務
板倉義人
高橋一郎
伊倉千代
湯浅多美子
丹沢静子


57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44
賢悟郎 須賀
宮木昇
中山仁
恭子 佐久間
森田雅義
吉田恒
久保雅一
宏哉 長田
悦郎 平沢
保行 竹内
静子 野口
晃彦 河野
国敏 末永
由紀夫 梶原
憲二 氏家
鬼海道雄
敬 佐久間
聖一郎 東海林
幸宏 高村
茂樹 並木
英浩 吉村
径子 田中 (松田)
関敏子
芳子 畠山 (宍倉)
繁孝 田村
あき子 一条
鈴木操
恭子 吉川
智恵子 佐伯
大松勉
清一郎 宮代
洋子 篠田
克子 平安
ゆかり 小林
宮口馥
夕カ子 西山
昭夫 永野
みどり 斉藤
昭夫 永野
英夫 田野
清 (瀬川)
照之 桧山
洋一郎 吉本
加藤
伊藤晋
敬子 野島
和子 野島
栄子 榎本
和子 秋倉
喜久夫 伊藤
宏子 石持 (石田)
初枝 高橋
和子 宮川
伸夫 若月
利幸 今井
正彦 鈴木
田中文夫
石井才子
黒川喜美子
昭雄 福田

校舎配置図と平面図

敷地面積 33,594.21㎡
校舎延面積(除木造) 10,430 ㎡
新体育館面積 1,448 ㎡





編集後記

昭和五十六年、本校創立四十周年を迎えるに当たり、「記念誌」を、という構想は比較的早くから出されました。第十代相川勝衛校長の積極的な史料収集と意欲的なご指示に加えて、現校長須田義男先生の適切なご助言によって、昭和五十六年度早々に本誌刊行の基本的方向は決まりました。

この種の記念誌発行には多くの困難と作業が伴うのが常ですが、本校も例外ではありませんでした。首都圏の中心部周辺にあって、刻々と膨張拡大を続けながら急変する地域社会の影響をまともに受けて、本校の歩みも瞬時の停滞をも許されませんでした。校舎の新改築や移転、施設設備の諸整備、数度にわたる教育内容の改編と改訂、生徒の実態の逐年的変容、地域の教育要望の変化など、どれ一つとっても「変化」を軸に再構築しなければならない態のものでした。したがって学校沿革の諸事象や内容も多岐にわたり、加えて諸史料や諸記録の散逸埋没も多種にのぼり、その集大成は、四十年という、人生の時間の中では決して長くはない年月の間のものでさえ、容易ではありませんでした。幸い本校では、創立十周年（昭和二十六年）、二十周年（三十六年）、三十周年（四十六年）の各時期に、それぞれの時代の記録が残されていましたので、これら諸先輩の孜々営々のご努力を軸として、私たちの年輪を重ねることができました。ありがたいことであります。

以上の経過から、この「四十周年記念誌」の幹は「この十年」に限らせていただきました。やがて迎える五十周年、七十周年、さらには百周年に向けて、その先史として一つの時代区分を担当することができたなら望外の喜びと言わざるをえません。史料収集や取材の運びの不手際や脱稿の遅延などから、創立四十周年記念式典（五十六年十一月四日）には間に合いませんでしたが、年度を越えてどうにか発刊までこぎつけることができました。玉稿を寄せられました歴代校長、ＰＴＡ・期成会長、旧職員、卒業生諸兄姉のご協力に対し、繁忙の勤務の傍ら諸史料収集、執筆、編集、校正等を分担されました現職員生徒のご努力に対し、各種写真を快く撮影提供されたイトウ写真館と、シャロンの花の貴重な現地写真の使用を許可された写真家善養寺康之氏に対し、更に編集印刷発行の煩瑣な仕事を一手にお引受けくださった株式会社ぎょうせいのご配慮に対

し、中でも同社の南関東支社長久保田昌夫氏と片桐務氏のご労苦に対し、心からお礼申しあげます。こうした方々の、ひたむきで献身的なご援助がなかったら、これら数々の貴重な学校史料も日の目を見ることなく死蔵散逸したにちがいありません。

最後に、本誌中の各年月計算や職務名などが、入稿の関係上昭和五十六年度末現在のものであることをおことわりいたします。

昭和五十七年二月

（教頭・細野　直）

記念誌編集委員（写真右から）

平安　隆雄　　朝日　伊豆雄
鈴木　健生　　細野　直
亀　忠夫　　坂本　あい子
大松　勉（通）　田村　照子
恒吉　謙一（通）　永井　弘子
原　哲雄（通）

野口　宏　　古市　純久
石井　栄　　鈴木　操（通）

創立四十周年記念誌

昭和五十七年五月十五日発行

編集
発行　千葉県立千葉東高等学校

〒260　千葉県千葉市蘇町一の一八の五二

電話　〇四七二―五一―九二二一

印刷　株式会社　ぎょうせい

本社営業所　東京都新宿区西五軒町五二
南関東支社　東京都新宿区東五軒町一
電話（〇三）二六八―二二四一（代）